

夜明け前

第二部下

島崎藤村

青空文庫

第八章

一

母刀自の枕屏風に

いやしきもたかきもなべて夢の世をうら安くこそ過ぐべかりけれ

花紅葉あはれと見つはるあきを心のどけくたちかさねませ

おやのよもわがよも老をさそへども待たるものは春にぞありける

新しく造つた小屏風がある。娘お糸がいる。長男の宗太がいる。継母おまんは屏風の出
来をほめながら、半蔵の書いたものにながめ入っている。そこいらには、いたずらざかり
な三男の森夫までが物めずらしそうにのぞきに來ている。

そこは馬籠の半蔵の家だ。ただの住宅としてはもはや彼の家も広過ぎて、いたずらに修
繕にのみ手がかかるところから、古い屋敷の一部は妻籠本陣同様取り崩して桑畠にし
たが、その際にも亡き父吉左衛門の隠居所だけはそっくり残して置いてある。おまんはそ

の裏二階から桑畠のわきの細道を歩いて、食事のたびごとに母屋もやの方へと通かよつて来ている。その年、明治六年の春はおまんもすでに六十五歳の老婦人であるが、吉左衛門を見送つてからは髪も切つて、さびしい日を隠居所じいしやうに送っているのだ、この継母を慰めるために半蔵は自作の歌を紙に書きつけ、それを自意匠じいしやうの屏風に造らせたのであつた。高さ二尺あまりほどのものである。杉すぎ柎まぎの緑と白い紙の色との調和も、簡素を愛する彼の好みをあらわしていた。これを裏二階のすみにでも置いて戸障子のすきまから来る風のふせぎとしてもよし、風邪かぜにでも冒された日の枕もとに置いて訪う人おとなもない時の友としてもよし、こんな彼の言葉も継母をよろこばせるのであつた。

ちやうど、お民も妻籠つまごの生家さとの方へ出かけてまだ帰つて来ない時である。半蔵のそばへ来て祖母たちと一緒に屏風の出来をいろいろに言つて見るお衆も、もはや物に感じやすい娘ざかりの年ごろに達している。彼女は、母よりも父を多くうけついで方で、その風俗なまりなぞも嫁入り前の若さとしてはひどく地味づくりであるが、襟えりのところには娘らしい紅梅の色をのぞかせ、それがまた彼女によく似合つて見えた。彼女はまた、こうした父の意匠いしやうしたもののなぞにことのほかのおもしろみを見つける娘で、これを父が書く時にも、そのそばに来て墨をすろうと言ひ、紙にむかつて筆を持った父の手から彼女の目を放さなかつた。

らいだ。もともとこの娘の幼い時分から親の取りきめて置いた許嫁いいなづけを破約に導いたのも、一切のものを根から覆すくつがえような時節の到来したためであり、これまでどおりの家と家との交際もおぼつかないからというのであつて、旧い約束事なぞは大小となく皆押し流された。小さな彼女の生命いのちが言いあらわしがたい打撃をこうむつたのも、その時であつた。でも、彼女はそうしておればかりいるわけでもない。祖母のためにと父の造つた屏風なぞができて見ると、彼女はその深傷ふかでの底からたち直ろうとして努めるもののごとく平素の調子に歸つて、娘らしい笑い声で父の心までも軽くさせる。

実に久しぶりで、半蔵は家のものと一緒にこんな時を送つた。かねて長いこと心がけたあげくにできた隠居所向きの小屏風のそばなぞにわずかの休息の時を見つけずら、彼にはめずらしいことであつた。二月のはじめ以来、彼がその懐ふところに筑摩県庁あての嘆願書の草稿を入れた時から、あちこちの奔走をつづけていて、ほとんど家をかえりみる暇いとまもなかつたような人である。この奔走が半蔵にとつて容易でなかつたというは、戸長（旧庄屋しやうやの改称）としての彼が遠からずやつて来る地租改正を眼前に見て、助役相手にとかくはかの行かない地券調べのようなめんどろな仕事を控えているからであつた。一方にはまた、学事掛りとしても、村の万福寺の横手に仮校舎の普請の落成するまで、さしあたり寺内を仮

教場にあて、従来寺小屋を開いていた松雲和尚を相手にして、できるだけ村の子供の世話もしなければならぬからであつた。子弟の教育は年来の彼のころざしであつたが、まだ設備万端整わなかつた。そういう彼は事を好んでこんな奔走をはじめたわけではない。これまで庄屋で本陣問屋を兼ねるくらいのところは荒蕪を切り開いた先祖からの歴史のある旧家に相違なく、三百年の宿村の世話と街道の維持とに任じて来たのも、そういう彼らである。いよいよ従来の旧習を葬り去るような大きな革新の波が上にも下にも押し寄せて来た時、彼らもまた父祖伝来の家業から離れねばならなかつたが、その際、報いらるることの少ない彼らの中には、もつと強く出てもいいと言ひ出したものがあり、この改革に不平を抱いて、謹慎閉門の嚴罰に処せられた庄屋問屋も少なくなかつたくらいであるが、しかし半蔵なぞはそういう古い事に拘泥すべき場合でないとして、いさぎよく自分らをあと回しにしたというのも、決して他ではない。あの東征軍が江戸城に達する前日を期して、陛下が全国人民に五つのお言葉を誓われたことは、まだ半蔵らの記憶に新しい。あの言葉こそすべてであつた。ところが、地方の官吏にその人を得ないため、せつかくの御誓文の趣旨にも添いがたいようなことが、こんな山の中に住むものの目の前にまで起こつて来た。それは木曾川上流の沿岸から奥筋へかけての多数の住民の死活にもかかわり、

ただ一地方の問題としてのみ片づけてしまえないことであつた。それが山林事件だ。

二

「海辺の住民は今日漁業と採塩とによつて衣食すると同じように、山間居住の小民にもまた樹木鳥獸の利をもつて渡世を営ませたい。いずこの海辺にも漁業と採塩とに御停止と申すことはない。もつとも、海辺に殺生禁断の場処があるように、山中にも留山とめやまというものは立て置かれてある。しかし、それ以外の明山あきやまにも、この山中には御停止木おとめぎとなえて、伐採を禁じられて来た無数の樹木のあるのは、恐れながら庶民を子とする御政道にもあるまじき儀と察したてまつる。」

これは木曾谷三十三か村の総代十五名のものが連署して、過ぐる明治四年の十二月に名古屋県の福島出張所に差し出した最初の嘆願書の中の一節の意味である。山林事件とは、この海辺との比較にも言つて見せてあるように、最初は割合に単純な性質のものであつた。従来尾州領びしゅうであつたこの地方では、すべてにわたり同藩保護の下に発達して来たようなもので、各村とも榑木御切替えくれきおきりかとなえて、年々の補助金を同藩より受け、なお、補助の

目的で隣国^{みの}美濃の大井村その他の尾州藩管下の村々から輸入されて来る米の代価も、金壹両につき年貢^{ねんぐきんのう}金納値段よりも五升安の割合で、それも翌年の十二月中に代金を返済すればいいほどの格別な取り扱いを受けて来た。いよいよ廃藩置県が実現され、一藩かぎりを立てて置いた制度もすべて改革される日が来て見ると、明治四年を最後としてこれらの補助を廃止する旨の名古屋県からの通知があり、おまけに簡易省略の西洋流儀に移った交通事情の深い影響をうけて、木曾路を往来する旅人からも以前のように土地を潤してもらえなくなつた。この事情を当局者にくんでもらつて、今度の改革を機会に享^{きやう}保^{ほう}以前の古^{いにしえ}に復し、木曾谷中の御停止^{おとめぎ}木を解き、山林なしには生きられないこの地方の人民を救い出してほしい。これが最初の嘆願書の趣意であつた。その起草にも半蔵が当たつた。彼らがこれを持ち出したのは、木曾地方もまさに名古屋県の手を離れようとしたところで、当時は民政権^{ごんはんし}判事としての土屋総蔵もまだ在職したが、ちやうど名古屋へ出かけた留守の時であつた。そこでこの願書は磯部^{いそべ}弥五^{やごろう}六が取り次ぎ、岩田市^{いわたし}右衛門^{うちもん}お預かりということになつた。いずれ土屋権^{ごん}大属^{だいちぞく}帰庁の上で評議にも及ぶであらう、それまではまずまず預かり置く、そんな話で、王滝^{おうたき}、贅^え川^{がわ}、藪^{やぶ}原^{はら}の三か村から出た総代と共に、半蔵は福島出張所から引き取つて来た。もし土屋総蔵のような理解のある人に今すこしその職にとど

まる時を与えたらと、谷中の戸長仲間でそれを言わないものはなかった。不幸にも、総蔵は筑摩県の官吏らに一切を引き渡し、前途百年の計をあとから来るものに託して置いて、多くの村民に惜しまれながらこの谷を去った。

木曾地方が筑摩県の管轄に移されたのは、それから間もなくであった。明治五年の二月には松本を所在地とする新しい県庁からの申し渡し、ならびに布令書ふれがきなるものが、早くもこの谷中へ伝達されるようになった。とりあえず半蔵らはその請書うけしよを認め、ついでにこの地方の人民が松本辺の豊饒ほうじょうな地とも異なり深山幽谷の間に居住するもののみであることを断わり、宿場しゆくば全盛の時代を過ぎた今日となつては、茶屋、旅籠屋はたごやをはじめ、小商人こあきんど、近在の炭薪等すすぎを賄うものまでが必至の困窮に陥るから、この上は山林の利をもつて渡世を営む助けとしたいものであると、その請書を出す時には御停止木のことに触れ置いてあつた。当時の信濃しなのの国は長野県と筑摩県との二つに分かれ、筑摩県の管轄区域は伊那いなの谷から飛騨地方ひだにまで及んでいた。本庁所在地松本以外の支庁も飯田いいたと高山たかやまとにしか取り設けてなかったほどの草創の時で、てんで木曾福島あたりにはまだ支庁も置かれなかった。遠い村々から松本までは二十里、三十里である。何事を本庁に届けるにもその道を踏まねばならぬ。それだけでも人民疾苦の種である。半蔵らの請書はその事にも言い及

んであつた。東北戦争以来、すでにそのころは四年の月日を過ぎ、一藩かぎりの制度も改革されて、徳川旧幕府の人たちですら心あるものは皆待ち受けていた新たな郡県の時代が来た。これは山間居住の民にとつても見のがせない機会であつたのだ。

もともとこの山林事件は明治初年にはじまつた問題でもなく、実は旧領主と人民との間に続いた長い紛争の種で、御停止木のことは木曾谷第一の苦痛であるとされてきた。こんなに明治になつてまた活いき返つて来たというのも決して偶然ではない。それは宿村の行き詰まりによることはもちろんであるが、一つには明治もまだその早いころで、あらゆるものに復古の機運が動いていたからであつた。当時、深い草くさ叢むらの中にあるものまでが時節の到来を感じ、よりよい世の中を約束するような新しい政治を待ち受けた。従来ろうしゆの陋習ろうしゆを破つて天地の公道に基づくべしと仰せ出された御誓文の深さは、どれほどの希望を多くの民に抱いだかせたことか。半蔵らが山林に目をつけ、今さらのように豊富な檜木ひのき、樅さくら、明檜あすひ、高野槇こうやまき、それから※ねすこなどの繁茂する森林地帯の深さに驚き、それらのみずみずしい五木がみな享保年代からの御停止木であるにも驚き、そこに疲弊した宿村の救いを見いだそうとしたことは無理だつたらうか。彼らが復古のできると思つた証拠には、最初の嘆願書にも御誓文の中の言葉を引いて、厚い慈悲を請う意味のことを書き出したのでもわか

る。やがて、筑摩県の支庁も木曾福島の方に設けられ、ごんちゅうぞく権中属の本山盛徳が主任の官吏として木曾の村々へ派出される日を迎えて見ると、この人はまた以前の土屋総蔵などとは打って変わった態度をとった。もしも人民の請いをいれ、木曾山を解き放ち、制度を享保以前の古に復し、これまであきやま明山となえて来た分は諸木何品に限らず百姓どもの必要に応じて伐り採ることを許したなら、せつかく尾州藩で保護して来たうっそう鬱蒼とした森林はたちまちはげやま禿山に変わるであろうとの先入主となった疑念にでも囚われたものか、本山盛徳は御停止木の解禁などではもつてのほかであるとなし、木曾谷諸村の山地はもとより、五種の禁止木のあるところは官木のあるところだとの理由の下に、それらの土地をもあわせすべて官有地と心得よとの旨を口達した。むねこの福島支庁の主任が言うようにすれば、五木という五木の生長するところはことごとく官有地なりとされ、従来の慣例いかにかわらず、官有林に編入せられることになる。これには人民一同ろうばい狼狽してしまった。

過ぐる月日の間、半蔵はあちこちの村々から腰縄こしなわ付きで引き立てられて行く不幸な百姓どもを見て暮らした。人民入るべからずの官有林にはいつて、盗伐の厳禁を犯すものが

続出した。これをその筋の人に言わせたら、規則の何たるをわきまえない無知と魯鈍（ろどん）とか、村民自ら犯したことであつて、さらに寛恕（かんじょ）すべきでないと言われたであろう。

それにつけても、まだ半蔵には忘れることのできないずっと年若な時分の一つの記憶がある。馬籠村じゅうのものが吟味のかどで、かつて福島から来た役人に調べられたことがある。それは彼の本陣の家の門内で行なわれた。広い玄関の上段には、役人の年寄（としより）、用人（ういん）、書役（かきやく）などが居並び、式台のそばには足輕（あしがら）が四人も控えた。村じゅうのものがそこへ呼び出された。六十一人も村民が腰縄手錠で宿役人へ預けられることになったのも、その時だ。七十歳以上の老年は手錠を免ぜられ、すでに死亡したものは遺族の「お叱（しか）り」ということにとどめられたが、それも特別の憐憫（れんぴん）をもって言われたのも、またその時だ。そのころの半蔵はまだ十八歳の若さで、庭のすみの梨（なし）の木のかげに隠れながらのぞき見をしていたために、父吉左衛門からしかられたことがある。そんなにくさんなげが人を出したことも、村の歴史としてはかつて聞かなかったことだと父も言っていた。彼はあの役人たちが吟味のために村に入り込むというわきでも伝わると、あわてて不用の材木を焼き捨てた村の人のあつたことを想（おも）い起こすことができる。「昔はこの木曾山（おと）の木一本伐（き）ると、首一つなかったものだぞ」なぞと言つて、陣屋の役人から威（おど）されたのもあの時代

だ。それほど暗いと言わるる過去ですら、明山^{あきやま}は五木の伐採を禁じられていたにとどまる。その嚴禁を犯さないかぎり、村民は意のままに山中を跋渉^{ばつしょう}して、雜木を伐採したり薪炭^{しんたん}の材料を集めたりすることができた。今になって見ると、御停止木の解禁はおろか、尾州藩時代に許されたほどの自由もない。家を出ればすぐ官有林のあるような村もある。寒い地方に必要な薪炭ややせた土を培^{つちか}うための芝草を得たいにも、近傍付近は皆官有地であるような場所もある。木曾谷の人民は最初からの嘆願を中止したわけでは、もとよりのない。いかに本山盛徳の鼻息が荒くとも、こんな過酷な山林規則のお請けはできかねるというのが人民一同の言い分であった。耕地も少なく、農業も難渋^{もとで}で、生活の資本を森林に仰ぎ、檜木^{ひのきがさ}笠、めんば^{（割籠）}、お六櫛^{ろくくし}の類を造って渡世とするよりほかに今日暮らしようのない山村なぞでは、ほとんど毎戸かわるがわる腰縄付きで引き立てられて行くけが人を出すようなありさまになって来た。半蔵らが今一度嘆願書の提出を思い立ち、十三か村の総代として直接に本県へところざすようになったのも、この郷里のありさまを見かねたからである。

この再度の奔走をはじめめる前、半蔵のしたくはいろいろなことに費やされた。明治五年の二月に、彼は早くも筑摩県庁あて嘆願書の下書きを用意したが、いかに言っても郡県の

政治は始まったばかりの時で、種々さまざまな事情から差し出すことを果たさなかつた。それからちようど一年待った。明治六年の二月まで、彼は古来の沿革をたずねることや、古書類をさがすことに自分のしたくを向けた。ある村の惣そうひやくしやう百姓中から他村の衆にあてた証文とか、ある村の庄屋組くみがしら頭から御奉行所に出した一札とか、あるいは四か村の五人組総代から隣村の百姓衆に与えた取り替え証文とかいうふうに。さがせばさがすほど、彼の手に入る材料は、この古い木曾山が自由林であつたことを裏書きしないものはなかつた。言つて見れば、この地方の遠い古いにしへは山にたよつて樵務きこりを業とする杣人そまびと、切り畑焼き畑を開いて稗蕎麦ひえそ等の雑穀を植える山賤やまがつ、あるいは馬を山林に放牧する人たちなぞが、あちこちの谷間たにあいに煙を立てて住む世界であつたろう。追ひ追いと人口も繁殖する中古のころになつて、犬山の石川備前守いしかわびぜんのかみがこの地方の管領であつた時に、谷中村むらかた方の宅地と開墾地とは定見取米じやうみとりまい、山地には木租ぼくそというものを課せられた。もとより米麦に乏しい土地だから、その定見取米も大豆や蕎麦や稗ひえなどで納めさせられたが、年々おびただしい木租を運搬したり、川出ししたりする費用として、貢納の雑穀も春秋二度に人民へ給与せられたものである。さて、徳川治世のはじめになつて、この谷では幕府直轄の代官を新しい主人公に迎えて見ると、それが山村氏の祖先であつたが、諸事石川備前守の旧例による

ことには変わりはなかった。慶^{けい}長^{ちよう}年代のころには定見取米を御物^{おももの}成^{なり}といい、木租を御役^{おやく}樽^くという。名はどうあろうとも、その実は同じだ。この貢納の旧例こそは、何よりも雄弁に木曾谷山地の歴史を語り、一般人民が伐木と開墾とに制限のなかったことを証拠立てるものであった。もつとも、幕府では木租の中を割^さいて、白木^{しろき}六千駄^だを木曾の人民に与え、白木五千駄を山村氏に与え、別に山村氏には東美濃地方に領地をも与えて、幕府に代わつて東山道中要害の地たる木曾谷と福島^{ふくしま}の関所とを護^{まも}らせた。それより後、この谷はさらに尾州の大領主の手に移り、山村氏が幕府直轄を離れて名古屋の代官を承るようになって、尾州藩では山中の区域を定める方針を立てた。巢山^{すやま}、留山^{とめやま}、明山^{あきやま}の区別は初めてその時にできた。巢山と留山とは絶対に人民のはいることを許さない。しかし明山は慶長年間より享保八年まで連綿として人民が木租を納め来たった場所であるからと言って、自由に入^{いりやま}山伐木を許し、なお、木租の上納を免ずる代償として、許可なしに五木を伐採することを禁じたのである。

こんな動かせない歴史がある。半蔵はそれらの事実から、さらにこの地方の真相を探り求めて、いわゆる木曾谷中の御免^{ごめんひのきものにもつ}檜物荷物なるものに突き当たった。父吉左衛門が彼に残して行つた青山家の古帳にも、そのことは出ている。それは尾州藩でも幕府直轄時代

からの意志を重んじ、年々山から伐り出す檜類のうち白木六千駄を谷中の百姓どもに与えるのをさす。それを御免荷物という。そのうちの三千駄はひのきものおてがた檜物御手形となえて人民の用材に与え、残る三千駄は御切替えおきりかとなえて、この分は追い追いと金に替えて与えた。彼が先祖の一人の筆で、材木通用の跡を記しつけた御免荷物の明細書によると、毎年二百駄ずつの檜、さわら榎の類は馬籠村民にも許されて来たことが、その古帳の中に明記してある。尾州藩ですらこのとおり、山間居住の容易でないことを察し、人民にわかち与えることを忘れなかった。郡県とも言われる時代の上に立つものが改革の実をあげようとするなら、深くこの谷を注目し、もっと地方の事情にも通じて、生民の期待に添わねばなるまいと彼には思われた。

嘆願書はできた。二月ははじめから四月まで、半蔵はあちこちの村を訪ね回って、戸長らの意見をまとめることに砕心した。草稿の修正を求める。清書する。手を分けて十五人の総代の署名と調印とを求めに回る。いよいよ来たる五月十二日を期して、おんたき王滝、まじめ馬籠の四か村から出るものが一同に代わって本庁の方へ出頭するまでの大体の手はずをきめる。彼も心から汗が出た。この上は、御嶽山麓おんたけさんろくの奥にある王滝村を訪ねさえすれば、それで一切の打ち合わせを終わるまでにこぎつけた。彼はそれを早く済まして

来るつもりで、自分の村方の用事を取りかたづけ、学校の子供の世話は松雲和尚に頼み、今は妻の帰りを待つて王滝の方へ出かけられるばかりになった。

こういう中で、彼は自分のそばへ来る娘の口から、ちよつと思いがけないことを聞きつけないでもなかった。

「お父さん、おねがいですから、わたしもお供させて。」

そのころは、父の行く寂しい奥山の方へ娘の足でもついて行かれないことはあるまいというにあるらしい。

これには半蔵も返事にこまった。いろいろにお糸を言いなだめた。娘も妙なことを言うと思つたが、あれもこれもと昼夜心を砕いた山林の問題が胸に繰り返されていて、お糸の方で言い出したことはあまり気にも留めなかった。

三

お民は妻籠の生家の話を持つて、和助やお徳を連れながらそこへ歸つて来た。

「お民、寿平次さんはなんと言つていたい。」

「木曾山のことですか。兄さんはなんですとき、支庁のお役人がかわりでもしないうちはずだめですとき。」

「へえ、寿平次さんはそんなことを言っていたかい。」

半蔵夫婦はこんな言葉をかわしたぎり、ゆつくり話し合う時も持たない。妻籠土産の風呂敷包みが解かれ、これは宗太に、これは森夫にと、留守居していた子供たちをよろこばせるような物が取り出されると、一時家じゅうのものは妻籠の方のうわさで持ち切る。妻籠のおばあさんからお糸にと言つて、お民は紙に包んだ美しい染め糸などを娘の前にも取り出す。お徳の背中からおろされた四男の和助はその皆の間をはい回った。

半蔵はすでに村の髪結い直次を呼び寄せ、伸びた髭まで剃らせて妻を待ち受けているところであつた。鈴の屋の翁以来、ゆかりの色の古代紫は平田派の国学者の間にもはやされ、先師の著書もすべてその色の糸で綴じられてあるくらいだが、彼半蔵もまたその色を愛して、直次の梳いてくれたのを総髪にゆわせ、好きな色の紐を後ろの方に結びさげていた。吉左衛門の時代から出入りする直次は下女のお徳の父親に当たる。

「お民、おれは王滝の方へ出かけるんだぜ。」

それをみんなまで言わせないうちに、お民は夫の様子をみて取った。妻籠の兄を見て来

た目で、まったく気質のちがった夫の顔をながめるのも彼女だ。その時、半蔵は店座敷の方へ行きかけて、

「おれは、いつでも出かけられるばかりにして、お前の帰りを待っていたところさ。お前の留守に、お母さんつかの枕屏風まくらびようぶもできた。」

そういう彼とても、娘の縁談のこととでわざわざ妻籠まで相談に行つて来たお民と同じ心配を分けないではない。年ごろの娘を持つ母親の苦勞はだれだって同じだと言いたげなお民の顔色を読まないでもない。まだお糸にあわない人は、うわさにだけ聞いて、どんなやせぎすな、きやしやな子かと想像するが、あつて見て色白な肥ふとったからだつきの娘であるには、思ひのほかだとよく人に言われる。そのからだにも似合わないような傷いたみやすい小さなたましいが彼女の内部なかには宿つていた。お糸はそういう子だ。父祖伝来の問屋役廃止以来、本陣役廃止、庄屋役廃止と、あの三役の廃止がしきりに青山の家へ襲つて来る時を迎えて見ると、女一生の大事ともいふべき親のさだめた許嫁いいなずけまでが消えてゆくのを見た彼女は、年取つた祖母たちのように平気でこの破壊の中にすわつてはいられなかった子だ。伊那の南殿村、稲葉の家との今度の縁談がおまんの世話であるだけに、その祖母に対しても、お糸は一言口出したこともない。半蔵らの目に映るお糸はただただひとり物

思いに沈んでいる娘である。

ふと、半蔵は歩きながら思い出したように、店座敷の方へ通う廊下の板を蹴^けった。机の上にも、床の間にも、古書類が積み重ねてある自分の部屋^{へや}へ行ってから、また彼は山林の問題を考えた。

「あれはああと、これはこうと。」

半蔵のひとり言だ。

隣家からは陰ながら今度の嘆願書提出のことを心配して訪^{たず}ねて来る伏見屋の伊之助があり、妻籠までお民が相談に行った話の様子も聞きたくて、その日の午後のうちには半蔵も馬籠を立てそうもなかった。伊之助は福島支庁の主任のやり口がどうも腑^ふに落ちないと言^いって、いろいろな質問を半蔵に出して見せた。たとえば、この村々に檜^{ひのき}類のあるところは人民の私有地たりともことごとく官有地に編み入れるとは。また、たとえば、しいてそれを人民が言い立てるなら山林から税を取るが、官有地にして置けばその税も出さずに済むとはの類^{たぐい}だ。

廃藩置県以来、一村一人ずつの山守やまもり、および留山とめやま見回りも廃されてから、伊之助もその役から離れて帯刀と雑用金とを返上し、今では自家の商業に隠れている。この人は支庁主任の処置を苦々にがにがしく思うと言い、木曾谷三十三か村の人民が命脈にもかかわることを黙って見ていられるはずもないが、自分一個としてはまずまず忍耐していたいと言って帰って行く。やがて、夕飯にはまだすこし間のあるころに、半蔵は妻と二人ふたりぎりで店座敷に話すことのできる時を見つけた。

「いや、お糸のやつが妙なことを言い出した。」

とその時、半蔵は娘のことをお民の前に持ち出した。彼はその言葉をついで、

「何さ。おれが王滝へ行くなら、あれも一緒に供をさせてくれと言うんさ。」

「まあ。」

「御嶽里宮おんたけさとみやのことはあれも聞いて知ってるからね、何かお参りでもしたいようなあれの口ぶりさ。」

「そんな話はわたしにはしませんよ。」

「あれも思い直したんだろう。なんと言ってもお糸もまだ若いなあ。おれがあのお父さんとつの病気を禱いのりに行った時にも、勝重かつしげさんが一緒について行くと言って困った。あの時も

おれは清助さんに止められて、あんな若い人を一緒に参籠さんろうに連れて行かれますかッて言われた。それでも勝重さんは行きたいと言うもんだから、しかたなしに連れて行つた。懲りた。今度はおれ一人だ。それに娘なぞを連れて行く場合じゃない。ごらん、十八やそこいらで、しかも女の足で、あんなお宮の方へ行かれるものかね。ばかなッて、おれはしかッて置いたが。」

「まあ、嫁入り前のからだで、どうしてそんな氣になるんでしょう。」

夫婦の間にはこんな話が出る。お民はわざわざ妻籠まで行つて来た娘の縁談のことをそこへ言い出そうとして、幾度となく口ごもつた。相談らしい相談もまとまらずじまいに歸つて来たからであつた。半蔵の方で聞きたいと思つていたことも、それについての妻籠の人たちの意見であるが、お民はまず生家さとに着いた時のことから、あの妻籠旧本陣の表庭に手造りの染め糸を乾ほしていたおばあさんやお里を久しぶりに見た時のことからその話を始める。着いた日の晩に、和助を早く寝かしつけて置いて、それからおばあさんや兄あにや嫂よめと集まつたが、お糸のようすを生家さとの人たちの耳に入れただけで、その晩はまだ何も言い出せなかつたという話になる。「フム、フム。」と言つて聞いていた半蔵は話の途中でお民の言葉をさえぎつた。

「つまり、おばあさんたちはどう言うのかい。」

「まあ、兄さんの意見じゃ、この縁談はすこし時がかり過ぎたと言うんですよ。もつとずんずん運んでしまふとよかつたと言うんですよ。」

「いや、おれは今、そんなことを聞いてるんじゃない。つまり、どうすればいいかッて聞
いてるんさ。」

「ですから、お里さんの言うには、まだ御祝言ごしゅうげんには間もあることだし、そのうちにはお
糸の気も変わるだろうから、もうすこし様子を見るがいいと言うんですよ。そうはつきり
した考えがお糸の年ごろにあるもんじゃない。お里さんはその意見です。気に入った小袖こそで
でも造つてくれてごらん、それが娘には何よりだッて、おばあさんも言っていました。」

そんな話から、お民は娘のためにどんな着物を選ぶうかの相談に移って行つた。幸い京
都麩屋町ふやまちの伊勢久いせきゆうは年来懇意にする染め物屋であり、あそこの養子も注文取りに美濃路みのじ
を上つて来るころであるから、それまでにあつらえる品をそろえて置きたいと言つた。ど
んな染め模様を選んだら、娘にも似合つて、すでに結納ゆいのうの品々まで送つて来ている南殿
村の人たちによろこんでもらえるだろうか。その相談も出た。

「そういうこまかいことは、お母さんつかやお前まへによろしく頼む。」

「あなたはそれだもの。なんにもあなたは相談してくださらない。」

「そんなお前のようなことを言つたつて、おれだつて、今——」

「そりや、あなたのないそがしいぐらい、知つてますよ。あなたのように一つ事に夢中になる人を責めたつてしかたない。まあ、する事をしてください。お糸のしたくはお母さんと二人でよく相談します。あなたはいつたい、わたしの話すことを聞いているんですか……」

それぎりお民は口をつぐんでしまつて、半蔵のそばに畳を見つめたぎり、身動きもしなかつた。長いこと夫婦は沈黙のままで相對していた。奥の部屋へやの方に森夫らのけんかする声を聞きつけて、やつとお民はその座を立ち、自分の子供を見に行つた。いつものように夕飯の時が来ると、家のもの一同広い囲炉裏かまどばたに集まつたが、旧陣時代からの習慣としてその囲炉裏かまどばたには家長から下男までの定められた席がある。子供らの食事する席にも年齢としの順がある。やがて隠居所から通つて来るおまんをはじめ、一日の小屋仕事を終わみそつた下男の佐吉までがめいめいの箱膳はこぜんを前に控えると、あちらからもこちらからも味噌汁みそ汁の椀わんなどを給仕するお徳の方へ差し出す。お民は和助をそばに置いて、黙つて食つた。半蔵は継母の顔をながめ、姉娘のお糸が弟たちと並んでゐる顔をながめ、それからお民の顔をながめて、これも黙つて食つた。その晩、彼は店座敷の方について、翌朝王滝へ出かけ

るしたくなぞしたが、ろくろく口もきかないでいるお民をどうすることもできなかった。実に些細なことが人を傷ませる。彼に言わせると、享保以前までの彼の先祖はみな無給で庄屋を勤めて来たくらいで、村の肝煎とも百姓の親方とも呼ばれたものである。その家に生まれた甲斐には、せめてこういう時の役に立ちたいものだとは、日ごろの彼の願いであつて、あえておろそかにするつもりで妻子を顧みないではないのにと、彼はこれまで用意した嘆願書を筑摩県本庁の方へ持ち出しうる日のことを考えて、わずかに心を慰めようとした。木曾谷中に留山と明山との区別もなかった時分の木租のことを万一本庁の官吏から尋ねられた場合にはと、自分で自分に問うて見る。それに答えることは、そう困難でもなかった。ずっと以前の山地に檜 榑 二十六万八千余挺、土居四千三百余駄の木租を課せられた昔もあるが、しかもその木租のおびただしい運搬川出し等の費用として、人民の宅地その他の課税は差し引かれたも同様に給与せられたと答えることができた。その晩は、彼は香蔵からもらった手紙をも枕もとに取り出し、あの同門の友人が書いてよこした東京の便りを繰り返し読んで見たりなぞして、きげんの悪い妻のそばに寝た。

王滝行きの日には半蔵は早く起きて、活きかえるような四月の朝の空気を吸った。お民もまたきげんを直しながら夫が出発のしたくを手伝うので、半蔵はそれに力を得た。彼は好

きで読む歌書などを自分の懐中へねじ込んだ。というは、戸長の勤めの身にもわずかの閑を盗み、風雅に事寄せ、歌の友だちを訪ねながら、この総代仲間の打ち合わせを果たそうとしたからであつた。

「どうだ、お民。だれかに途中であつて、どちらへなんて聞かれたら、おれはこの懐中をたたいて見せる。」

と彼は妻に言つて見せた。そういう彼は袴を着け、筆を携え、腰に笛もさしていた。

「まあ、おもしろい格好なこと。」とお民は言つて、そこへ飛んで来た娘にも軽々とした夫のみなりをさして見せて、「お衆、御覧な、お父さんは笛を腰にさしてお出かけだよ。」

「はッ、はッ、はッ、はッ。」

半蔵は妻の手から笠を受け取りながら笑つた。

「お衆、王滝のお宮の方へ行つたら、お前の分もお参りして来てやるよ。」

との言葉を彼は娘にも残した。

したくはできた。そこで半蔵は飄然と出かけた。戸長の旅費、一日十三銭の定めとは、ちよつと後世から見当もつかない諸物価のかけ離れていた時代だ。それも戸敷割でなしに、今度は彼が自分賄いの小さな旅だった。馬籠から妻籠まで行つて、彼はお民の生家

へ顔を出し、王滝行きの用件を寿平次にも含んで置いてもらって、さらに踏み慣れた街道を奥筋へと取った。妻籠あたりで見る木曾谷は山から伐り出す材木を筏いかだに組んで流す冬の作業のための大切な場所の一つにも当たる。その辺まで行くと、薄濁りのした日も緑色にうつくしい木曾川の水が白い花崗みかげの岩に激したり、石を越えたりして、大森林の多い川上の方から瀬の音を立てながら渦巻うずまき流れて来ている。

四

「老先生へも久しくお便りたよしない。」

野尻泊まりでまた街道を進んで行くうちに、半蔵はそんなことを胸に浮かべた。馬籠を立ててから二日目の午後のこと、街道を通る旅人もすくなくない。猿さるを背中にのせた旅の芸人などは彼のそばを歩き過ぎつつある。あくせくとしたその奔走の途中にふと彼は同門の人たちの方へ思いを馳せは、師平田鉄胤かねたねの周囲にある先輩らをも振り返って見た。木と木と重なり合う対岸の森の深さが、こちらの街道から見られるようなところだ。

「及ばずながら、自分も復古のために働いている。」

その考えが彼を励ました。彼も、師を忘れてはいなかった。

家に置いて来た娘お糸のことも心にかかりながら、半蔵はその足で木曾の棧かけはし近くまで行った。そこは妻籠あたりのような河原かわらの広い地勢から見ると、ずっと谷の狭せまったところである。木曾路での水に近いところである。西よりする旅人は道路に迫った崖がけに添い、湿っぽい坂を降りて行つて、めずらしい草や苔こけなどのはえている岩壁の下の位置に一軒の休み茶屋を見いだす。半蔵もそこまで行つて汗をふいた。偶然にも、通弁の男を連れ、荷物をつけた馬を茶屋の前に停とめて、半蔵のそばへ来て足を休める一人の旅の西洋人があつた。それ異人が来たと言つて、そこいらに腰掛けながら休んでいた旅人までが目を円まるくする。前からも後ろからもどきに行くものがある。もはや、以前のような外人殺傷されたもあり聞こえなくなつたが、まだそれでも西洋人を扱いつけないものはどんな間違いを引き起こさないものでもないと言われ、外人が旅行する際の内地人の心得書なるものが土屋総蔵時代に馬籠の村へも回つて来ている。それを半蔵も読んで見たことはある。しかし彼の覚えているところでは、この木曾路にまだ外人の通行者のあつたためしを聞かない。試みに彼は通弁の方へ行つて、自分がこの地方の戸長の一人であることを告げ、初めて見る西洋人の国籍、出発地、それから行く先などを尋ねた。生まれはイギリスの人で、香港ホンコンから

横浜の方に渡来したが、十月には名古屋の方に開かれるはずの愛知県英語学校の準備をするため、教師として雇われて行く途中にあるという。東海道回りで赴任しないのは、日本内地の旅が試みたいためであるという。そのイギリス人は何を思ったか、いきなり上衣のかくしにいれている日本政府の旅行免状を出して示そうとするから、彼はその必要のないことを告げた。そのイギリス人はまた、彼の職業を通弁から聞いて、この先の村は馬を停とめるステーションのあるところかと尋ねる。彼は言葉も通じないから、先方で言おうとすることをどう解していいかわからなかったが、人馬継立つぎたての駅ならこの山間に十一か所あると答え、かつては彼もその駅長の一人であったことを告げた。

通弁を勤める男も慣れたものだ。異人の言葉を取り次ぐことも、旅の案内をすることも、すべて通弁がした。その男は外国人を連れて内地を旅することのまだまだ困難な時であることを半蔵に話し、人家の並んだ宿場風の町を通ることに多勢ぞろぞろついて来るそのわずらわしさを訴えた。

「へえ、名物あんころ餅もちでございます。」

と言つて休み茶屋の婆ばあさんが手造りにしたやつを客の間へ配りに来た。唾おしの旅行者のよ
うな異人は通弁からその説明を聞いたぎり、試食しようとしなかった。

間もなく半蔵はこの御休憩^{おやすみどころ}処とした看板のかかったところを出た。その日の泊まりと定めた福島にはいつて懇意な旅籠屋^{はたごや}に草鞋^{わらじ}をぬいでからも、棧^{かけはし}の方で初めて近く行つて見た思いがけない旅の西洋人の印象は容易に彼から離れなかった。過ぐる嘉永^{かえい}六年の夏に、東海道浦賀の宿、久里^{くり}が浜^{はま}の沖合いにあらわれたもの——その黒船の形を変えたものは、下田^{しもだ}へも着き、横浜へも着き、三百年の鎖国の事情も顧みないで進み来るような侮りがたい力でもつて、今は早瀬を上る鮎^{あゆ}のようにこんな深い山間までも入り込んで来た。昨日の黒船は、今日の愛知県の教師だ。これには彼も驚かされた。

福島から王滝まで、翌日もまた半蔵は道をつづけ、行人橋^{ぎょうにんばし}から御嶽山道について常磐^{きわ}の渡しへと取り、三沢というところで登山者のために備えてある筏^{いかだ}を待ち、その渡しをも渡つて、以前にも泊めてもらつた王滝の禰宜^{ねぎ}の家の人たちの声を久しぶりで聞いた。

「お客さまだぞい。馬籠の本陣からおいでたげな。」

「おゝ、青山さんか。これはおめずらしい。」

王滝の戸長遠山五平は禰宜の家からそう遠くない住居^{すまい}の方で、この半蔵が自分の村に到

着するのを今日か明日かと心待ちに待ちうけているところであつた。山林事件の嘆願書提出については、五平は最初から半蔵の協力者で、谷中総代十五名の中でも賛^{にえがわ}川、藪^{やぶ}原^{はら}二か村の戸長を語らい合わせ、半蔵と共に名古屋県時代の福島出張所へも訴え出た仲間である。今度二度目の嘆願がこれまでにしたくの整つたというのも、上^{あげ}松^{まつ}から奥筋の方を受け持った五平の奔走の力によるが多かつた。それもいわれのないことではない。この人は先祖代々御嶽^{じかく}の山麓^{さんろく}に住み、王滝川のほとりに散在するあちこちの山村から御嶽裏山へかけての地方の世話を一手に引き受けて、木曾山の大部分を失いかけた人民の苦痛を最も直接に感ずるものの一人もこの旧^{ふる}い庄屋だからであつた。王滝は馬籠あたりのように木曾街道に添う位置にないから、五平の家も本陣問屋は兼ねず、したがって諸街道の交通輸送の事業には参加しなかつたが、人民と土地とのことを扱う庄屋としては尾州代官の山村氏から絶えず気兼ねをされて来たほどの旧い家柄でもある。

半蔵が禰^ね宜^ぎの家に笠^{かさ}や草鞋^{わらじ}をぬいで置いて、それから訪^{たず}ねて行つた時、五平の言葉には、「青山さん、わたしのように毎日山に對^{むか}ひ合つてゐるものは、見ちやいられませんな。これじゃ、木曾の人民も全くひどい。まるで水に離れた魚のようなものです。」

という、いかにもこの人は適切なたとえを言い当てたように聞こえるが、その実、魚

にはあまり縁がない。水に住むと言え、この人に親しみのあるのは、池に飼う鯉か、王滝川まで上つて来る河魚ぐらゐに限られている。たまにこの山里へかつがれて来る塩辛青串魚などは骨まで捨てることを惜しみ、炬の火にこんがりとおぶつたやつを味わって見るほど魚に縁が遠い。そのかわり、谷へ来る野鳥の類なら、そのなき声をきいただけでもすぐに言い当てるほど多くの鳥の名を諳記じていて、山林の枯れ痛み、風折れ、雪折れ、あるいは枝卸しなどのことには精通していた。

いったい、こんな山林事件を引き起こした木曾谷に、これまで尾州藩で置いた上松の陣屋があり、白木番所があり、山奉行があり、山守があり、留山見回りなどがあつて、これほど森林の保護されて来たというのはなんのためか。そこまで話を持って行くと、五平にも半蔵にもそう一口には物が言えなかった。尾州藩にして見ると、年々木曾山から切り出す良い材木はおびただしい数に上り、同藩の財源としてもこの森林地帯を重くみていたように世間から思われがちであるが、その実、河水を利用する檜材の輸送には莫大な人手と費用とを要し、小谷狩、大谷狩から美濃の綱場を経て遠い市場に送り出されるまで、これが十露盤づくでできる仕事ではないという。それでもなおかつ尾州藩が多くの努力を惜しまなかったというは、山林保護の精神から出たことは明らかであるが、一つには木曾

川下流の氾濫^{はんらん}に備えるため、同藩が治水事業に苦しんで来た長い歴史は何よりもその辺の消息を語っているとも言われる。もつとも、これは川下の事情にくわしい人の側から言えることで、遠く川上の方の山の中に住み慣れた地方^{じかた}の人民の多くはそこまでは気づかなかつた。ただ、この深い木曾谷が昼でも暗いような森林におおわれた天然^{けんそ}の嶮^{けん}岨^そな難場^{なんば}であり、木曾福島に関所を置いた昔は鉄砲を改め女を改めるまでに一切の通行者の監視を必要としたほどの封建組織のためにも、徳川直属の代官によって護^{まも}られ、尾州大藩によつても護られて来た東山道中の特別な要害地域であつたろうとは、半蔵らにも考えられることであつた。

五平は半蔵の方を見て、

「さあ、これが尾州の方へ聞こえたら、旧藩の人たちもどう言いますかさ。支庁のやり口が本場で、木曾の人民の方が無理だと言いますかさ。なんでもわたしの聞いたところじゃ、版籍奉還ということはだいい話が違ふ。版地民籍の奉還と言いましたら、土地も人民も朝廷へ返上することだと、わたしは承知してます。万民を王化に浴させたい。あの尾州あたりが他藩に率先して朝廷へ返上したのも、その趣意から出たことじゃありませんか。こんなにけが人を出してもかまわないつもりで、旧領の山地を返上したわけじゃありませんまい

に。」

こんな話の出た後、五平は半蔵の方から預かって置いた山林事件用の書類をそこへ取り出した。半蔵の起草した筑摩県庁あての嘆願書は十五人の総代の手を回って、五平の手もとまで返って来ている。藪原村の戸長を筆頭にして、一同の署名と調印とを済ましたものがそこにある。嘆願書とした文字の上には、うやうやしく「上」と記し「恐れながら書付をもつて願ひ上げ奉り候御事」の書き出しが読まれる。従来木曾谷山地の処置については享保年度からの名古屋一藩かぎりの御制度であるから、今般の御改革で郡県の政治を行なわれるについては本県の管下も他郷一般の処置を下し置かれたいと述べてある。別に年来の情実を本庁の官吏によく知つてもらうため、谷中の人民から旧領主に訴えたことのある古い三通の願書の写しをも添えることにしてある。

「この古い願書の写しを添えて出すことが大切です。」

「さようだ。今日にはじまつた問題でもないことがわかりますで。」

ふたり

二人はこんな言葉をかわした。いよいよ来たる五月の十二日を期して再度の嘆願書を差し出すことから、その前日までに賛にえがわ川に集まって、四人の総代だけが一同に代わり松本へ出頭するまでの手はずも定きまつた。もし本庁の官吏から今日人民の難渋する事情を問い

ただされたら、四人のもの各自に口頭をもつて答えよう、支庁主任のさしずによる山林規則には谷中の苦情が百出して、総代においても今もつてお請けのできかねる事情を述べようと申し合わせた。

五平は言つた。

「この嘆願書の趣意は、官有林を立て置かれることに異存はない。御用材伐り出し等の備え場も置かねばなるまいから、それらの官有林にはきびしくお取り締まりの制度を立てて、申し渡されるなら、きつと相守る。そのかわり明山^{あきやま}は人民に任せてくれ。新規則以来、人民私有の山地まで官有に併せ^{あわ}せられた場処も多くあるが、これも元々どおりに解かれない。大体にこういうことになりましょう。つまり——一般公平の御処置を仰ぎたい。今のうちに官民協力して、前途百年の方針を打ち建てて置きたい。享保以前の古^{いにしえ}に復したいということですね。」

ここへ来るまで、半蔵は野尻^{のじり}の旅籠屋^{はたごや}でよく眠らず、福島でもよく眠らずで、遠山五平方から引き返して禰宜^{ねぎ}の家に一晚泊まった翌朝になって、ひどく疲れが出た。禰宜宮下の

主人が里宮の社殿のあるところまで朝勤めに通^{かよ}つて行つて、大太鼓を打ち鳴らしてからまた数町ほどの山道を帰るころでも、彼はゆつくり休んでいた。家の人の雨戸を繰りに来る音を聞くようになって、ようやく彼は寢床からはい出した。

「だいぶごゆつくりでございますな。」

と言つて、宮下の細君が熱い茶に塩漬^{しおづ}けの小梅を添えて置いて行つてくれるころが、彼には朝だった。

里宮の神職と講^{こう}中の宿とを兼ねたこの禰宜の古い家は、木曾福島から四里半も奥へはいつた山麓^{さんろく}の位置にある。木曾山のことを相談する必要があるから、過ぐる年も半蔵は王滝へ足を運び、遠山の家を訪^とうおりには必ずこの禰宜のところへ来て泊まったが、来て見るたびに変わつて行く行^ぎ者宿の光景が目につく。ここはもはや両部神道の支配するところでもない。部屋^{へや}の壁の上に昔ながらの注連縄^{しめなわ}などは飾つてあるが、御嶽^{おんたけ}山座^{さんざ}王大権現^{おうだいこんげん}とした床の間の軸は取り除かれて、御嶽三社^{まつ}を祀^{まつ}つたものがそれに掛けかわつてゐる。

「青山さん、まあきょうは一日ゆつくりなすつてください。お宮の方へ御案内すると言つて、悴^{せがれ}のやつもしたくしています。」

と禰宜も彼を見に来て言った。過ぐる文^{ぶん}久^{きゅう}三年、旧曆四月に、彼が父の病^いを瘳^いるためここへ参籠^{さんろう}にやつて来た日のことは、山里の梅が香と共にまた彼の胸に帰つて来た。あの時同伴した落合の勝重なぞはまだ前髪をとつて、浅黄色^{あさぎいろ}の襦袢^{じゆばん}の襟^{えり}のよく似合うほどの少年だった。

「あれからもう十一年にもなりますか。そうでしょうな、あの時青山さんにお清書なぞを見ていただいた忤^わがことし十八になりますもの。」

こんな話も出た。

やがて半蔵は身を淨め^{きよ}、笠草鞋^{かやわらじ}などを宿に預けて置いて、禰宜の子息^{むすこ}と連れだちながら里宮参詣^{さんけい}の山道を踏んだ。

「これで春先の雉子^{きし}の飛び出す時分、あの時分はこのお山もわるくありませんよ。」

十年の月日を置いて来て見ると、ほんの子供のように思われていた禰宜の子息が、もはやこんなことを半蔵に言つて見せる若者だ。

宗教改革の機運が動いた跡はここにも深いものがある。半蔵らが登って行く細道は石の大鳥居の前へ続いているが、路傍に両部時代の遺物で、全く神仏を混淆^{こんこう}してしまつたような、いかがわしい仏体銅像なぞのすでに打ち倒されてあるのを見る。その辺の石碑^{ほこら}や祠

の多くは、あるものは嘉永、あるものは弘化^{こうか}、あるものは文久年代の諸国講社の名の彫り刻まれてあるものだ。さすがに多くの門弟を引き連れて来て峻^{しゅん}峻^{けん}を平らげ、山道を開き、各国に信徒を募ったり、講中を組織したりして、この山のために心血をささげた普寛、神山、一徳の行者らの石碑銅像には手も触れてない。そこに立つ両部時代の遺物の中にはまた、十二権現とか、不動尊とか、三面六臂^びを有^いし猪^{いのしし}の上に踊る三宝荒神とかのわずかに破壊を免れたもののあるのも目につく。

さらに二人は石の大鳥居から、十六階、二十階より成る二町ほどの石段を登った。左右に杉や橡^{すぎ}の林のもれ日^ひを見て、その長い石段を登って行くだけでも、なんとなく訪^{おと}うもの心を澄ませる。何十丈からの大岩石をめぐつて、高山の植物の間から清水^{しみず}のしたたり落ちるあたりは、古い社殿のあるところだ。大己貴^{おおなむち}、少彦名^{すくなび}の二柱^{ふたはしら}の神の住居^{すまい}がそこにあった。

里宮の内部に行なわれた革新は一層半蔵を驚かす。この社殿を今見る形に改めた造営者であり木曾福島の名君としても知られた山村蘇門^{そもん}の寄進にかかる記念の額でも、例の二つの天狗^{てんぐ}の面でも、ことに口は耳まで裂け延びた鼻は獣のそれのようで、金胎^{こんたい}両部の信仰のいかに神秘であるかを語って見せているようなその天狗の女性の方の白^{しろい}粉^{もの}をほどこ

した面でも、そこに残存するものはや過去の形見だ。一切の殻が今はかなぐり捨てられた。護摩の儀式も廃されて、白膠木の皮の燃える香氣もしない。本殿の奥の厨子の中に長いこと光った大日如来の仏像もない。神前の御簾のかけに置いてあつた経机もない。高山をその中心にし、難行苦行をその修業地にして、あらゆる寒さ饑じさに耐えるための中世的な道場であつたようなところも、全く面目を一新した。過去何百年の山王を誇つた御嶽大権現の山座は覆されて、二柱の神の古に帰つて行つた。杉と檜の枝葉を通して望まれる周囲の森と山の空氣、岩づたいに落ちる細い清水の音なぞは、社殿の奥を物靜かにする。しばらく半蔵はそこに時を送つて、自分の娘のためにも禱つた。

禰宜のもとに戻つてから、半蔵は山でもながめながらその日一日王滝の宿に寝ころんで行くことにきめた。宮下の主人は馳走ぶりに、風呂でも沸かそうから、寒詣でや山開きの季節の客のために昔から用意してある行者宿の湯槽にも身を浸して、疲れを忘れて行けと言つてくれた。

午後には五平の方から半蔵を訪ねて来て、短冊を取り寄せたり、互いに歌をよみかわしたりするような、ささやかな席が開けた。そこへ紅い毛氈を持ち込み、半折の画箋紙なぞをひろげ、たまにしか見えない半蔵に何か山へ来た形見を残して置いて行けと言ひ

出すのは禰宜だ。子息も来て、そのそばで墨を磨^すった。そこいらには半蔵が馬籠から持ってきた歌書なども取り散らしてある。簀^す巻^まきにして携えて来た筆も置いてある。求めらるるままに、彼は自作の旧^{ふる}い歌の一つをその紙の上に書きつけた。

おもふどちあそぶ春^{はる}日は青柳^{あおやぎ}の千条^{ちすじ}の糸の長くとぞおもふ

半蔵

五平はそのそばにいて、

「これはおもしろく書けた。」

「でも、この下の句がわたしはすこし気に入らん。」と半蔵は自分で自分の書いたものをながめながら、「思うという言葉が二つ重なって、どうも落ちつかない。」

「そんなことはない。」

と五平は言っていた。

時には、半蔵は席を離れて、ながめを自由にするためにその座敷の廊下のところへ出た。山里の中の山里ともいうべき御嶽のすその谷がその位置から望まれる。そこへも五平が立つて来て、谷の下の方に遠く光る王滝川を半蔵と一緒にながめた。木と木の梢^{こずえ}の重なり合った原生林の感じも深く目につくところで、今はほとんど自由に入^{いり}山^{やま}伐木の許さるる場処もない。しかし、半蔵は、他に客のあるけはいもするこの禰宜の家で五平と一緒になっ

てからは、総代仲間の話などを一切口にしなかった。五平はまた五平で、その山、この谷を半蔵にさして見せ、ただ風景としてのみ、生まれ故郷を語るだけであつた。

もはや、温暖あたたかい雨は幾たびとなく木曾の奥地をも通り過ぎて行つたところである。山やまう

鶯ぐいすもしきりになく。五平が贄にえ川がわでの再会を約して別れて行つた後、半蔵はひとり歌書

などを読みちらした。夕方からはことに春先のような陽気で、川の流れを中心にわき立つ

靄もやが谷をこめた。そろそろ燈火あかりのつく遠い農家をながめながら、馬籠を出しな腰にさし

て来た笛などを取り出した時は、しばらく彼もさみしく楽しい徒つれづれ然ぜんに身をまかせていた。

翌朝は早く山をたつ人もある。遠い国からの参詣さんけい者しやの中には、薄暗いうちから起きて

歸りじたくをはじめる講中仲間もある。着物も白、帯も白、鉢はちまき巻も白、すべて白づくめ

な山の巡礼者と前後して、やがて半蔵も禰宜の家の人たちに別れを告げて出た。彼が歸つ

て行く山道の行く先には、手にする金剛杖こんごうづえもめずらしそんな人々の腰に着けた鈴の音が

起こつた。王政第六の春もその四月ころには、御嶽のふもとから王滝川について木曾福島

の町まで出ると、おそらく地方の発行としては先駆と言つてよい名古屋本町通りの文明社

から出る木版彫刻半紙六枚の名古屋新聞が週報ながらに到着するころである。時事の報道

を主とする伝聞雑誌のごとき体裁しかそなえていないものではあるが、それらの週報は欧

米教育事業の視察の途に上った旧名古屋藩士、田中不二麿^{ふじまろ}が消息を伝えるところである。過ぐる四年の十一月十日、特命全権の重大な任務を帯びて日本を出発した岩倉大使の一行がどんな土産^{みやげ}をもたらし、欧米から帰朝するかは、これまた多く人の注意^ま的^ととなっていた時だ。その一行、随員従者留学生等総員百七名の中に、佐賀県人の久米邦武^{くめくにたけ}がある。この人は、ただ文書のことを受け持つために大使の随行を命ぜられたばかりでなく、特に政府の神祇省^{じんぎしょう}から選抜されて一行に加わった一人の国学者としても、よろしくその立場から欧米の文明を観察せよとの内意を受け、新興日本の基礎を作る上に国学をもつてする意気込みであるとのうわさは、ことに平田一門の人たちに強い衝動を与えずにはおかなかった。地方一戸長としての半蔵^{くさむら}なぞが隠れた草叢^{もとお}の間に奔走をつづけていて、西をさして木曾路を帰って行くころは、あの本居平田諸大人の流れをくむもののおそかれ早かれ直面しなければならぬようなある時が彼のような後輩をも待っていたのである。

五

五月十二日も近づいたころ、福島支庁からの召喚状が馬籠にある戸長役場の方に届いた。

戸長青山半蔵あてで。

半蔵は役場で一通り読んで見た。それには、五月十二日の午前十時までに当支庁に出頭せよとある。ただし代人を許さない。言い渡すべき件があるから、この召喚状持参の上、自身出頭のこととある。彼は自宅の方に持ち帰って、さらによく読んで見た。この呼び出しに応ずると、遠山五平らに約束して置いたことが果たせない。その日を期し、総代四人のものが勢ぞろいして本庁の方へ同行することもおぼつかない。のみならず、彼はこの召喚状を手にして、ある予感に打たれずにはいられなかった。

とりあえず、彼は福島へ呼び出されて行くことを隣家の伊之助に告げ、王滝の方へも使いを出して置いて、戸長らしい袴はかまを着けるのもそこそこに、また西のはずれから木曾路をたどった。この福島行きには、彼は心も進まなかった。

筑摩県支庁。そこは名古屋県時代の出張所にあてであった本営のまま、まだ福島興禅寺に置いてある。街道について福島の町にはいると、大手橋から向かって右に当たる。指定の刻限までに半蔵はその仮の役所に着いた。待つこと三十分ばかりで、彼は支庁の官吏や下役などの前に呼び出された。やがて、掛りの役人が一通の書付を取り出し、左の意味のものを半蔵に読み聞かせた。

「今日限り、戸長免職と心得よ。」

とある。

はたして、半蔵の呼び出されたのは他の用事でもなかった。もつとも、免職は戸長にとどまり、学事掛りは従前のおりとあつたが、彼は支庁の人たちを相手にするのは到底むだだと知っていた。実に瞬間に、彼も物を見定めねばならなかった。一礼して、そのまま引き下がった。

興禅寺の門を出て、支庁から引き取って行こうとした時、半蔵はその辺の屋敷町に住む旧士族に行きあい、わずかの挨拶あいさつの言葉をかわした。その人は、福島にある彼の歌の友だちで、香川景樹かがわかげきの流れをくむものの一人ひとりで、何か用達ようたしに町を出歩いているところであつたが、彼の顔色の青ざめていることが先方を驚かした。歩けば歩くほど彼は支庁の役人から戸長免職を言い渡された時のぐつと徹こたえたところもちを引き出された。言うまでもなく、村方むらかた総代仲間が山林規則を過酷であるとして、まさに筑摩県庁あての嘆願書を提出するばかりにしたくをととのえたことが、支庁の人たちの探るところとなつたのだ。彼はその主唱者にとらまれたのだ。たとえようのないころもちで、彼は山村氏が代官屋敷の跡に出た。瓦解がかいの跡にはもう新しい草が見られる。ここが三棟むねの高い鱗こけらぶ葺きの建物の跡

か、そこが広間や書院の跡かと歩き回った。その足で彼は大手橋を渡った。橋の上から見る木曾川の早い流れ、光る瀬、その河底かわぞこの石までが妙に彼の目に映った。

笠草鞋かさわらじのしたくもそこそこに帰路につこうとしたところの彼は、福島での知人の家などを訪ねる心も持たなかった人である。街道へは、ぽつぽつ五月の雨が来る。行く先に残った花やさわやかな若葉に来る雨は彼の頬ほおにも耳にも来たが、彼はそれを意にも留めずに、季節がら吹き降りの中をすたすた上松あげまつまで歩いた。さらに野尻のじりまで歩いた。その晩の野尻泊まりの旅籠屋はたしやでも、彼はよく眠らなかつた。

翌日の帰り道には、朝から晴れた。青々とした空の下へ出て行って、ようやく彼も心の憤りを沈めることができた。いろいろ思い出すことがまとまって彼の胸に帰って来た。

「御一新がこんなことでいいのか。」

とひとり言つて見た。時には彼は路傍の石の上に笠を敷き、枝も細く緑も柔らかな棗なつめの木の陰から木曾川の光つて見えるところに腰掛けながら考えた。

消えうせべくもない感銘の忘れがたから、彼はあの新時代の先駆のような東山道軍が岩倉公子を総督にして西からこの木曾街道を進んで来た時の方に思いを馳はせた。当時は新政府の信用もまだ一般に薄かつた。沿道諸藩の向背こうはいのほども測りがたかつた。何よりも

まず人民の厚い信頼に待たねばならないとして、あの東山道総督執事が地方人民に応援を求める意味の布告を発したことは一度や二度にとどまらなかった。このたび進発の勅命をこうむったのは、一方に諸国の情実を問い、万民塗炭の苦しみを救わせられたき叡旨^{えいし}であるぞと触れ出されたのもあの時であった。徳川支配地はもちろん、諸藩の領分に至るまで、年来苛政^{かせい}に苦しめられて来たもの、その他子細あるものなどは、遠慮なくその旨^{むね}を本陣に届けいでよと言われ、彼も本陣役の一人として直接その衝に当たったことはまだ彼には昨日のこともうでもある。彼半蔵のような愚直なものが忘れようとして忘れられないのは、民意の尊重を約束して出発したあの新政府の意気込みであった。彼が多くの街道仲間の不平を排しても、本陣を捨て、問屋を捨て、庄屋を捨てたというのは、新政府の代理人ともいうべき官吏にこの約束を行なつてもらいたいからであつた。

小松の影を落とした川の中^{なかぶち}淵を右手に望みながら、また彼は歩き出した。彼の心は、日ごろから嘆願書提出のことに同意してくれているが、しかし福島支庁の権判事^{ごんはんじ}がかわりでもないうちはだめだというらしいあの寿平次の方へ行つた。

彼は言つて見た。

「相変わらず、寿平次さんは高見の見物だろうか。」

彼の心は隣家伏見屋の伊之助の方へも行った。

「伊之助さんか。あの人は目をつぶっておれと言う。このおれにも——見るなど言う。」
彼の心はまた、村の万福寺の松雲和尚の方へも行った。

「和尚さまと来たら、用はないと言うそうな。」

しかし、彼はあの松雲たりとも禅僧らしく戦おうとはしていることを知っていた。

五月の森の光景は行く先にひらけた。^{ひのやき}檜樺にまじる雑木のさわやかな緑がまたよみがえつて、その間には木曾路らしいむらさきいろの山つつじが咲き乱れていた。全山の面積およそ三十八万町歩あまりのうち、その十分の九にわたるほどの大部分が官有地に編入され、民有地としての耕地、宅地、山林、それに原野をあわせてわずかにその十分の一に過ぎなくなつた。新しい木曾谷の統治者が旧尾州領の山地を没取するのに不思議はないというような理屈からこれは来ているのか、郡県政治の当局者が人民を信じないことにかけては封建時代からまだ一步も踏み出していない証拠であるのか、いずれとも言えないことであつた。ともあれ、いかに支庁の役人が督促しようとも、このまま山林規則のお請けをして、泣き寝入りにすべきこととは彼には思われなかつた。父にできなければ子に伝えても、旧領主時代から紛争の絶えないようなこの長い山林事件をなんらかの良い解決に導かないの

はうそだとも思われた。須原^{すはら}から三留野^{みどの}、三留野から妻籠へと近づくにつれて、山にもたよることのできないこの地方の前途のことがいろいろに考えられて来た。家をさして帰って行くころの彼はもはや戸長でもなかった。

第九章

一

八月の来るころには、娘お糸くめが結婚の日取りも近づきつつあった。例の木曾谷きそだにの山林事件もそのころになれば一段落を告げるであろうし、半蔵のからだもいくらかひまになるうとは、春以来おまんやお民の言い合わせていたことである。かねてこの縁談の仲にはいつてくれた人が伊那いなの谷から見えて、吉辰良日きつしんりょうじつのことにつき前もって相談のあつたおりに、青山の家としては来たる九月のうちを選んだのもそのためであつた。さて、その日取りも次第に近づいて見ると、三十三か村の人民総代として半蔵らが寝食も忘れるばかりに周旋奔走した山林事件は意外にもつれた形のものとなつて行つた。

もとより、福島支庁から言い渡された半蔵の戸長免職はきびしい督責を意味する。彼が旧庄屋しやうや（戸長はその改称）としての生涯しやうがいのもその時を終わりとする。彼も御一新の成就ようじゆということを心がけて、せめてこういう時の役に立ちたいと願つたばかりに、そ

の職を失わねばならなかった。親代々から一村の長として、百姓どもへ伝達の事件をはじめ、平生種々さまざまな村方の世話駈引かけひき等を励んで来たその役目もすでに過去のものとなった。今は学事掛りとしての仕事だけが彼の手に残った。彼の継母や妻にとつても、これは思いがけない山林事件の結果である。娘お糸が結婚の日取りの近づいて来たのは、この青山一家に旧い背景ふるの消えて行く際だ。

仲人なこうど 人参上の節は供一人、右へ御料理がましいことは御無用に願いたし。もつとも、神酒き、二汁にじゅう、三菜、それに一泊を願いたし。これはその年の二月に伊那南殿村の稲葉家から届いた吉辰申し合わせの書付の中の文句である。お民はそれを先方から望まれるとおりにした上、すでに結納ゆいのうのしるしまでも受け取つてある。それは帯地一卷持参したいところであるが、間に合いかねるからと言つて、白無垢しろむく一反、それに酒の差樽さしたる一荷かを祝つて来である。これまでにお糸の縁談をまとめてくれたのもほかならぬ姑おまんであり、その人は半蔵にとつても義理ある母であるのに、かんじんのお糸はとかく結婚に心も進まなかった。のみならず、この娘を懇望する稲葉家の人たちに、半蔵の戸長免職がどう響くかと

いうことすら、お民には気づかわれた。そういうお民の目に映る娘は、ますます父半蔵に似て行くような子である。弟の宗太^{そうた}なぞ、明治四年のころはまだ十四歳のうら若さに当時名古屋県の福島出張所から名主^{なぬし}見習いを申し付けられたほどで、この子にこそ父の倅^{おもかけ}の伝わりそんなものであるが、そのことがなく、かえって姉娘の方にそれがあらわれた。お民は、成長したお糸の後ろ姿を見るたびに、ほんとに父親にそっくりなような娘ができたと思わずにいられない。半蔵は熱心な子女の教育者だから、いつのまにかお糸も父の深い感化を受け、日ごろ父の尊信する本居^{もとおり}、平田^{ひらた}諸大人をありがたい人たちに思うような心を養われて来ている。お糸は性来の感じやすさから、父が戸長の職を禰^はがれ青ざめた顔をして木曾福島から家に帰って来た時なぞも、彼女の小さな胸を傷^{いた}めたことは一通りでなかった。彼女は、かずかずの数奇^{すき}な運命に娘心を打たれたというふうで、

「わたしはこうしちゃいられないような気がする。」

と言つて、母のそばによく眠らなかつたほどの娘だ。

しかし、お民はお民なりに、この娘を励まし、一方には強い個性をもった姑との間にも立って、戸長免職後の半蔵を助けながら精いっぱい働こうと思ひ立っていた。以前にお民が妻籠^{つまご}旧本陣を訪^{たず}ねたおり、おばあさんや兄夫婦のいるあの生家^{さと}の方で見て来たことは、

自給自足の生活がそこにも始まっていることであつた。お民はそれを夫の家にも応用しようとした。彼女は周囲を見回した。もつと養蚕を励もうとさえ思えば、広い玄関の次の間から、仲の間、奥の間まで、そこには蚕の棚たなを置くこともできるような旧本陣の部屋へやが彼女を待つていた。髪につける油を自分で絞ろうとさえ思えば、毎年表庭の片すみに実を結ぶ古い椿つばきを役に立てることもできた。四人の子を控えた母親として、ことにまだ幼いふたり二人のものを無事に育てたいとの心願から、お民もその決心に至つたのである。彼女はまた持つて生まれた快活さで、からだもよく動く。頬ほおの色なぞはつやつやと熟した林檎りんごのようあかに紅い。

ある日、お民は娘が嫁入りしたくのために注文して置いた染め物の中にまだ間に合わないもののあるのをもどかしく思いながら、取り出す器物の用があつて裏の土蔵の方へ行つた。入り口の石段の上には夫の履物はきものが脱いである。赤く錆びた金網張りの重い戸にも大きな錠がはずしてある。ごとごと二階の方で音がするので、何げなくお民は梯子はしご段を登つて行つて見た。青山の家に伝わる古刀、古い書画の軸、そのほか吉左衛門が生前しゆうに蒐集しゆしゆして置いたような古い茶器の類なぞを取り出して思案顔でいる半蔵をそこに見つけた。そこは板敷きになつた階上で、おまんの古い長持ながもちや、お民が妻籠から持つて来た長持な

ぞの中央に置き並べてあるところだ。何十年もかかって半蔵の集めた和漢の蔵書も壁によせて積み重ねてあるところだ。その時、お民は諸方の旧家に始まっている売り立てのうわさに結びつけて、そんな隠れたところに夫が弱味をのぞいて見た時は、胸が迫った。

二

土蔵の建物と裏二階の隠居所とは井戸の方へ通う細道一つへだてて、目と鼻の間にある。お民はその足で裏二階の方に姑を見に行つた。娘を伊那へ送り出すまで、何かにつけてお民が相談相手と頼んでいるのは、おまんのほかになかったからで。

「お母さん。」

と声をかけると、ちようどおまんは小用でも達しに立つて行つた時と見えて、日ごろ姑がかわいがつている毛並みの白い猫だけが麻の座蒲団の上に背を円くして、うずくまつていた。二間を仕切る二階の部屋へやの襖ふすまも取りはずしてあるところで、すべて吉左衛門が隠居時代の形見らしく、そっくり形も崩さずくずに住みなしてある。そこいらには、針仕事の好きな姑が孫娘のために縫いかけた長襦袢ながじゆばんのきれなでも取りちらしてあつて、そこにもお衆が

結婚の日取りの近づいたことを語っている。古い針箱のそばによせて、小さな味醂みりんの瓶かめの片づけずに置いてあるのもお民をほほえませた。姑のような年取った女の飲む甘いお酒が押入れの中に隠してあることをお民も知っているからであつた。

そのうちに、おまんはお民のいるところへ戻もどつて来て、

「お民か。お前はちようどよいところへ来てくれた。稲葉のおそのさん（おまんが里方の夫人）へはわたしから返事を出して置いたよ。あのおそのさんもお前、いろいろ心配していてくれると見えてね、馬籠まごめから上伊那の南殿村まで女の足では三日路というくらいのことだから、わざわざ諸道具なぞ持ち運ぶには及ばん、お糸の箆たんす、長持、針箱の類はこちらで取りそろえて置くと言つてよこしたさ。手洗い桶おけ、足洗い桶なぞもね。ごらんな、なんとかこちらからも言つてやらなけりや悪いから、御承知のとおりな遠路とおみちなことじやあるし、お民も不調法者で、したくも行き届かないが、まあ万事よろしく頼む——そうわたしは返事を書いてやつたよ。」

「どうでしょう、お母つかさん、今度の山林事件が稲葉へは響きますまいか。うちじや、もう庄屋でも、戸長でもありませんよ。」とお民が言つて見る。

「そんな稲葉の家じゃあらかい。いったん結納の品まで取りかわして、改めて親類さかづきの盃

でもかわそうと約束したものが、家の事情でそれを反古ほんごにするような水臭い人たちなら、最初からわたしはお条の世話なんぞしないよ。あのおそのさんはじめ、それは義理堅い、正しい人だからね。」

おまんはその調子だ。

ここですこしこの半蔵が継母のことを語って置くのも、山国の婦人というものを知る上にむだなわざではないだろう。おまんも年は取って、切り上げた髪はもはや半ば白かったが、あの水戸浪士みとの同勢がおのおの手にして来た鋭い抜き身の鎗やりや拔刀をも恐れずにひとりで本陣の玄関のところへ応接に出たような、その気象はまだ失わずにある。そういうおまんの教養は、まったく彼女の母から来ている。母は、高遠たかとおの内藤大和守ないとうやまのかみの藩中で、坂本流砲術の創始者として知られた坂本孫四郎の娘にあたる。ゆえあって母は初婚の夫の家を去り、その母と共に南殿村の稲葉の家に養われたのがおまんだ。婦人ながらに漢籍にも通じ、読み書きの道をお条に教え、時には『古今集』の序を誦あんしやう誦しやうさせたり、『源氏物語』を読ませたりして、箴おやを持つことや庖丁ほうちやうを持つことを教えるお民とは別の意味

で孫娘を導いて来たのもまたおまんだ。年をとればとるほど、彼女は祖父孫四郎の武士気^か質^{たぎ}をなつかしむような人である。

このおまんは継母として、もう長いこと義理ある半蔵をみまもって来た。半蔵があの中津川の景蔵や同じ町の香蔵などの学友と共に、若い時分から勤王家の運動に心を寄せていることを家中のだれよりも先に看破^{みやぶ}つたくらいのおまんだから、今さら半蔵がなすべきことをなして、そのために福島支庁からきびしい督責をこうむったと聞かされても、そんなことには驚かない。ただただおまんは、吉左衛門や金兵衛が生前によく語り合ったことを思い出して、半蔵にこの青山の家がやりとおせるか、どうかと危ぶんでいる。

お民を前に置いて、おまんは縫いかけた長襦袢^{ながじゆばん}のきれを取り上げながら、また話しつづけた。目のさめるような京染めの紅絹^{もみ}の色は、これから嫁^{とつ}いで行こうとする子に着せるものにふさわしい。

「そう言えば、お民、半蔵が吾家^{うち}の地所や竹藪^{たけやぶ}を伏見屋へ譲ったげなが、お前もお聞きかい。」

おまんの言う地所の譲り渡しとは、旧本陣屋敷裏の地続きにあたる竹藪の一部と、青山家所有のある屋敷地二畝^せ六歩^ぶとを隣家の伊之助に売却したのをさす。藪五両、地所二十五

両である。その時の親戚請人しんせきうけにんには榮吉、保証人は峠の旧組頭くみがしら平兵衛である。相変わらず半蔵のもとへ手伝いに通つて来る清助からおまんはくわしいことを聞き知った。それがお糸の嫁入りじたくの料に当てられるであろうことは、おまんにもお民にも想像がつく。

「たぶん、こんなことになるだろうとは、わたしも思っていたよ。」とまたおまんは言葉をついで、「そりや、本陣から娘を送り出すのに、七通りの晴衣はれぎもそろえてやれないようなことじや、お糸だつて肩身が狭かろうからね。七通りと言へば、地白、地赤、地黒、総模様、腰模様、裾模様すそ、それに紋付ときまつたものさ。古式の御祝言ごしゅうげんでは、そのたびにお吸物も変わるからね。しかし、今度のような場合は特別さ。今度だけはお前、しかたがないとしても、旦那だんな（吉左衛門）が半蔵にのこして置いて行つた先祖代々からの山や田地はまだ相応にあるはずだ。あれが舵かじの取りよう一つで、この家がやれないことはないわたしは思うよ。無器用に生まれついて来たのは性分しょうぶんでしかたがないとしても、もうすこし半蔵には経済の才をくれたいッて、旦那だんなが達者たつしやでいる時分にはよくそのお話しさ。」

そういうおまんは何かにつけて自分の旦那の時代を恋しく思い出している。この宿場の全盛なころには街道を通る大名という大名、公役という公役、その他、世に時めく人たち

で、青山の家の上段の間に寝泊まりしたり休息したりして行かないものはなかった。過ぐる年月の間の意味ある通行を数えて見ても、彦根ひこねよりする井伊掃部頭かものかみ、名古屋よりするなるせはやとのしょう成瀬隼人之正、江戸よりする長崎奉行水野筑後守ちくごのかみ、老中間部まなべしもうさのかみ下総守だいがくのかみ、林大学頭み、監察岩瀬肥後守ひごのかみから、水戸の武田耕雲斎たけだこうんさい、旧幕府の大目付おおめつけで外国奉行を兼ねた山口駿河守するがのかみなぞまで——御一新以前だけでも、それらの歴史の上の人物はいずれもこの旧本陣に時を送って行つた。それを記念する意味からも、おまんは自分の忘れがたい旦那しやうがいと生涯しやうがいを共にしたこの青山の家をそう粗末には考えられないとしていた。たとい、城まくらを枕まくらに討うち死じにするような日がやって来ても、旧本陣の格式は崩くずしたくないというのがおまんであつた。

お民は母屋もやの方もとへ戻りかける時に言つた。

「お母さんつか、あなたのようにそう心配したらきりが無い。見ていてくださいよ。わたしもこれから精いっぱい働きますからね。そう言えば、稲葉の家の方からは、来月の二十二日か、二十三日が、日が良いと言つて来てありますよ。まあ、わたしもぐずぐずしちやいられない。」

三

その月の末、平田同門の先輩の中でもことに半蔵には親しみの深い暮田正香くれたまさかの東京方面から木曾路きそじを下つて来るといふ通知が彼のもとへ届いた。

半蔵は久しぶりであるの先輩を見うるよろこびを妻に分け、お民と共にその日を待ち受けた。今は半蔵も村方一同の希望をいれ、自ら進んで教師の職につき、万福寺を仮教場にあつた学校の名も自ら「敬義学校」といふのを選んで、毎日子供たちを教えに行く村夫子そんぷうしの身に甘んじている。彼も教えて倦むうことを知らないような人だ。正香の着くという日の午後、彼は寺の方から引き返して来て、早速家さつそくの店座敷に珍客を待つ用意をはじめた。お民が来て見るたびに、彼は部屋へやを片づけていた。

旧宿場三役の廃止以来、青山の家もはや以前のような本陣ではなかったが、それでも新たに布しかれた徴兵令の初めての検査を受けに福島まで行くといふ村の若者などは改まつた顔つきで、一人ひとりの村方惣代むらかたそうだいに付き添われながらわざわざ門口まで挨拶あいさつに来る。街道には八月の日のあたたつたところである。その草いきれのする道を踏んで遠くやって来る旅人を親切にもてなそうとすることは、半蔵夫婦のような古い街道筋に住むものが長い間に

養い得た氣風だ。

お民は待ち受ける客人のために乾^ほして置いた唐^{からくき}草模様の蒲団^{ふとん}を取り込みに、西側の廊下の方へ行つた。その廊下は母屋^{もや}の西北にめぐらしてあつて、客でも泊める時のほかは使わない奥の間、今は神殿にして産土神^{うぶすな}さまを祭つてある上段の間の方まで続いて行つてゐる。北の坪庭も静かな時だ。何げなくお民はその庭の見える廊下のところへ出てながめる。と人^{ひと}氣のないのをよいことにして近所の猫^{ねこ}がそこに入り込んで来ている。ひところは姑^{しゅうとめ}おまんの手飼いの白でも慕つて来るかして、人の赤兒^{あかご}のように啼^なく近所の三毛や黒のなき声がうるさいほどお民の耳についたが、今はそんな声もしないかわりに、庭の梨^{なし}の葉の深い陰を落としているあたりは小さな獣の集まる場所になつてゐる。思わずお民は時を送つた。生まれて半歳^{はんとし}ばかりにしかないような若い猫の愛らしさに氣を取られて、しばらく彼女も客人のことなぞを忘れていた。彼女の目に映るは、一息に延びて行くものの若々しさであつた。その動作にはなんのこだわりもなく、その毛並みにはすこしの汚れもない。生長あるのみ。しかも、小さな獣としてはまれに見る美しさだ。目にある幾匹かの若い猫はまた食うことも忘れてゐるかのうちに、そこに軽やかな空氣をつくる。走る。ころげ回る。その一つ一つが示すしなやかな姿態は、まるで、草と花のことだけしか思わない

娘たちか何かを見るように。

その辺は龍の髯なぞの深い草叢をなして、青い中に点々とした濃い緑が一層あたりを憂鬱なくらいに見せているところである。あちこちに集まる猫はこの苔蒸してひっそりとした坪庭の内を彼らが戯れ場所と化した。一方の草の茂みに隠れて、寄り添う二匹の見慣れない猫もあった。ふと、お民が気がついた時は、下女のお徳まで台所の方から来た。その庭にばかり近所の猫が入り込むを見ると、お徳は縁先にある手洗鉢の水でもぶっかけてやりたいほど、「うるさい、うるさい。」と言っているながら、やっぱり猫のような動物の世界にも好いた同志というものはあると知った時は、廊下の柱のそばに立って動かなかった。ちょうど、お糸も表玄関に近い板敷きの方で織りかけていた機を早じまいにして、その廊下つづきの方へ通って来た。そこはお民やお糸が髪をとかす時に使う小さな座敷である。その時、お民は廊下の離れた位置から娘の様子をよく見ようとしたが、それはかなわなかった。というのは、お糸は見るまじきものをその納戸の窓の下に見たというふうで、また急いで西側の廊下の方へ行つて隠れたからで。

「あなた、ようやくわたしにはお糸の見通しがつきましたよ。」

と言つて、お民が店座敷へ顔を出した時は、半蔵は客の待ちどおしさに部屋へやのなかを静かに歩き回つていた。お民に言わせると、女の男にあう路みちは教えられるまでもないのに、あれほど家のおばあさんから女は嫁とつぐべきものと言ひ聞かせられながら、とかくお糸が心の進まないらしいのは、全くその方の知恵があの子に遅れているのであらうというのであつた。もつとも、その他の事にかけては、お糸は年寄りのようによく氣のつく娘で、母親の彼女よりも弟たちの世話を焼くくらいであるが、とも付け添えた。

「何を言い出すやら。」

半蔵は笑つて取り合なかつた。

どうして半蔵がこんなに先輩の正香を待ったかというに、過ぐる版籍奉還のころを一期とし、また廃藩置県のころを一期とする地方の空氣のあわただしさに妨げられて、心ならずも同門の人たちとの往来から遠ざかつていたからで。そればかりではない。復古の道、平田一門の前途——彼にはかずかずの心にかかることがあるからであつた。

正香は一人の供を連れて、その日の夕方に馬で着いた。明荷あきに葛籠つづらの蒲団ふとんの上なぞよりも、馬の尻しりの軽い方を選び、小付荷物こつけと共に馬からおりて、檜ひのき笠がさの紐ひもを解いたところは、

いかにもこの人の旅姿にふさわしい。

「やあ。」

正香と半蔵とが久々の顔を合わせた時は、どっちが先とも言えないようなその「やあ」が二人の口をついて出た。客を迎えるお民のうしろについて、いそいそと茶道具など店座敷の方へ持ち運ぶ娘までが、日ごろ沈みがちなお糸とは別人のようである。子供本位のお民はうれしさのあまり、勝手のいそがしさの中にもなおよく注意して見ると、娘はすぐ下の十六歳になる弟に、

「宗太、きょうのお客さまは平田先生の御門人だよ。」

と言つて見せるばかりでなく、五歳になる弟まで呼んで、

「森夫もりおもおいで。さあ、おべべを着かえましょうね。」

と、よろこぶ様子である。まるで、父の先輩が彼女のところへでも訪れて来てくれたかのように。これにはお民も驚いて、さっぱりとした涼しそうなものに着かえている自分の娘を見直したくらいだ。そこへ下男の佐吉も、山家らしい風呂ふろの用意がすでにできていることを店座敷の方へ告げに行く。

半蔵は正香に言つた。

「暮田さん、お風呂が沸いてます。まず汗でもお流しになったら。」

「じゃ、一ぱいごちそうになるかな。木曾まで来ると、なんとなく旅の気分がちがいますね。ここは山郭公やまほととぎすの声でも聞かれそうなところですね」

四

やがて半蔵の前に来てくつろいだ先輩は、明治二年に皇学所監察に進み、同じく三年には学制取調御用掛り、同じく四年にはさらに大学出仕を仰せ付けられたほどの閱歴をもつ人であるが、あまりに昇進の早いのを嫉む同輩のために讒ざんせられて、山口藩和歌山藩等にお預けの身となったような境涯きやうがいをも踏んで来ている。今度、賀茂神社かもの少宮司しょうぐうじに任ぜられて、これから西の方へ下る旅の途中にあるという。

半蔵は日ごろの無沙汰ぶさたのわびから始めて、多事な街道と村方の世話に今日まであくせくとした月日を送って来たことを正香に語った。木曾福島の廃関に。本陣、脇本陣わき、問屋、庄屋、組頭の廃止に。一切の宿場の改変に。引きつづく木曾谷の山林事件に。彼は一日も忘れることのない師鉄胤かねたねのもとにすら久しいこと便りたよもしないくらいであったと語った。

彼はまた、師のあとを追つて東京に出た中津川の友人香蔵のことを正香の前に言い出し、師が参与と神祇官判事とを兼ねて後には内国局判事と侍講との重い位置にあつたころは、（ちなみに、鉄胤は大学大博士でもあつた）、あの友人も神祇権少史にまで進んだが、今は客舎に病むと聞くと語つた。彼らは互いに執る道こそ異なれ、同じ御一新の成就を期待して来たとも語つた。香蔵からは、いつぞやも便りがあつて、「同門の人たちは皆祭葬の事にまで復古を實行しているのに、君の家ではまだ神葬祭にもしないのか」と言つてよこしたが、木曾山のために当時奔走最中の彼が暗い行燈のかげにその手紙を読んだ時は、思わず涙をそそつた。そんな話も出た。

「暮田さん、あなたにお目にかけるものがある。」

と言つて、半蔵は一幅の軸を袋戸棚から取り出した。それを部屋の壁に掛けて正香に見せた。

鈴の屋すずや翁おきな画詠、柿本大人像、師岡正胤主恵贈としたものがそこにあつた。

それはやはり同門の人たちの動静を語るもので、今は松尾大宮司として京都と東京の間をよく往復するという先輩師岡正胤を中津川の方に迎え、その人を中心に東濃地方同門の四、五人の旧知のものが小集を催した時の記念である。その時の正胤から半蔵に贈られた

ものである。本居宣長の筆になつた人麿の画像もなつかしいものではあつたが、それにもまして正香をよろこばせたのは、画像の上に書きつけてある柿本大人の賛だ。宣長と署名した書体にも特色があつた。あだかも、三十五年にわたる古事記の研究をのこした大先輩がその部屋に語り合う正香と半蔵との前にいて、古代の万葉人をさし示し、和魂^ま荒魂^{あらみたま}兼ねそなわる健全な人の姿を今の正眼^{まさめ}に視^みよとも言い、あの歌に耳を傾けよとも言つて、そこにいる弟子^{でし}の弟子たちを励ますかのようにも見えた。

半蔵の継母が孫たちを連れてそこへ挨拶^{あいさつ}に来たので、しばらく二人の話は途切れた。これは半蔵の長男、これは三男とおまんに言われて、宗太や森夫も改まった顔つきをしなから客の前へお辞儀に出る。

「暮田さんは信州岩村田の御出身でいらつしやるそうですね。そういえば、どっか山国のおかたらしい。」とおまんは客に言つて、勝手の方から膳^{ぜん}を運ぶお糸を顧みながら、「こんな山家で何もおかまいはできませんが、まあ、ごゆっくりなすってください。」お糸が持つて来て客と父との前に置いた膳の上には、季節がらの胡瓜^{きゅうり}もみ、青紫蘇^{あおじそ}、

枝豆、それにきざみずるめなぞを酒のさかなに、猪口^{ちよく}、割箸^{わりばし}もそろった。おまんがそれを見て部屋から退くころには、正香はもうあぐらにやる。

「どれ、あの記念の扇子を暮田さんにお目にかけるか。」

と半蔵は言つて、師岡正胤らと共に中津川の方で書いたものを正香の前にひろげて見せた。平田篤胤^{あつたね}没後の門人らの思い思いに記^{しる}しつけた述懐の歌がその扇子の両面にある。辛い、甘い、限り知られない味わいをふくみ持った世のありさまではあるぞとした意味のものもある。こうして互いにつつがなくめぐりあつて見ると、八年は夢のような気がするとした意味のものもある。おくれまいと思つたことは昔であつて、今は人のあとにも立ち得ないというような、そんな思いを寄せてあるのは師岡正胤だ。

「へえ、師岡がこんな歌を置いて行きましたかい。」

と言いながら、正香はその扇面に見入った。過ぐる文久三年、例の等持院にある足利^{あしかが}將軍らの木像の首を抜き取つて京都三条河原^{がわら}に晒^{さら}し物にした血氣さかなころの正香の相手は、この正胤だ。その後、正香が伊那^{いな}の谷へ来て隠れていた時代は、正胤は上田藩の方に六年お預けの身で、最初の一年間は紋付を着ることも許されず、ただ白無垢^{しろむく}のみを許され、日のめも見ることでできない北向きの一室にすわらせられ、わずかに食事ごとの箸先

を食い削つてそれを筆に代えながら、襦袢じゆばんの袖口そでぐちから絞る藍あいのしずくで鼻紙しるに記しつ
ける歌日記を幽閉中唯一の慰めとしていたという。先帝崩御ほうぎよのおりの大赦がなかったら、
正胤もどうなつていたかわからなかった。この人のことは正香もくわしい。

その時、半蔵は先輩に酒をすすめながら、旧庄屋の職を失うまでの自分の苦い経験にがを、
山林事件のあらましを語り出した。彼に言わせると、もしこの木曾谷が今しばらく尾州藩
の手を離れずにあつて、年来の情実にも明るい人が名古屋県出張所の官吏として在職して
いてくれたら、もつと良い解決も望めたであろう。今のうちに官民一致して前途百年の方
針を打ち建てて置きたいという村民総代一同の訴えもきかれたであろう。この谷が山間の
一僻地へきちで、舟楫しゅうしゅう運輸の便があるでもなく、田野耕作の得があるでもなく、村々の大部
分が高い米や塩を他の地方に仰ぎながらも、今日までに人口の繁殖するに至つたというの
は山林あるがためであつたのに、この山地を官有にして人民一切入るべからずとしたら、
どうして多くのものが生きられる地方でないぐらいのことは、あの尾州藩の人たちには認
められたであろう。いかんせん、筑摩県ちくまの派出官は土地の事情に暗い。廃藩置県以来、諸
国の多額な藩債も政府においてそれを肩がわりする以上、旧藩諸財産の没収は当然である
との考えにでも支配されたものか、木曾谷山地従来 of 慣例いかなどは、てんで福島支庁

官吏が問うところでない。言うところは、官有林規則のお請けをせよとの一点張りである。その過酷を嘆いて、ひたすら寛大な処分を嘆願しようとすれば、半蔵ごときは戸長を免職せられ、それにも屈しないで進み出る他の総代のものがあつても、さらに御採用がない。しいて懇願すれば官吏の怒りに触れ、鞭で打たるに至つたものがあり、それでも服従しないようなものは本県聴訟課へ引き渡しきつと吟味に及ぶであろうとの嚴重な口達をうけて引き下がつて来る。その権威に恐怖するあまり、人民一同前後を熟考するいとまもなく、いったんは心ならずも官有林のお請けをしたのであつた。

「一の山林事件は、百の山林事件さ。」

と正香は半蔵の語ることを聞いたあとで、嘆息するように言つた。

「暮田さん、せっかくおいでくださつても、ほんとに、何もございませんよ。」

と言いながら、お民も客のいるところへ酒をすすめに来た。彼女は客や主人の膳ぜんの上にある箸休めの皿はしをささらげて、娘お糸が順に勝手の方から運んで来るものをそのかわりに載せた。遠来の客にもめずらしく思つてもらえそうなものといえ、木曾川の方でとれた「た

なびら」ぐらいのもの。それを彼女は魚田ぎよでんにして出した。でも、こんな山家料理がかえって正香をよろこばせる。

「奥さんの前ですが、」と正香は一口飲みかけた盃を膳の上に置いて、「いづぞや、お宅の土蔵のなかに隠していただいた時、青山君が瓢箪ひくべに酒を入れて持って来て、わたしに飲ませてくれました。あの時の酒の味はよほど身にしみたと見えて、伊那の方でも思い出し、京都や東京の方に行つてゐる時もありました。おそらく、わたしは一生あの酒の味を忘れますまい。」

「あれから、十年にもなりますものね。」と半蔵も言った。

お糸がその時、吸い物の向こう付けになるようなものを盆にのせて持って来た。お民はそれを客にすすめながら、

「蕨わらびでございますよ。」

「今時分、蕨とはめずらしい。」正香が言う。

「これは春先の若い蕨を塩漬しおづけけにして置いたものですが、塩をもどして、薄味で煮て見ました。御酒の好きな方には、お口に合うかもしれません。一つ召し上がって見てください。」

「奥さん、この前もわたしは中津川の連中と一緒に一度お訪ねたずしましたが、しかしお宅の皆さんにしみじみお目にかかるのは、今度初めてです。よいお嬢さんもありなさる。」

正香の口から聞けば、木曾のような水の清いところに生おい育つものは違うというようなことも、そうわざとらしくない。お民は自分の娘のことを客の方から言い出されたうれしさに、

「おかげさまで、あれも近いうちに伊那の方へ縁づくことになりました。」
と言つて見せた。

正香も伊那の放浪時代と違い、もはや御一新の大きな波にもまれぬいて来たような人である。お民が店座敷から出て行くのを見送った後、半蔵は日ごろ心にかかる平田一門の前途のことなどをこの先輩の前に持ち出した。

「青山君、あれで老先生（平田鉄胤かねたねのこと）も、もう十年若くして置きたかったね。」と正香は盃を重ねながら言った。「明治御一新の声を聞いた時に、先生は六十七歳の老年だからね。先生を中心にした時代は——まあ、実際の話が、明治の三年までだね。」

「あの年の六月には、先生も大学の方をお辞めやになったように聞いていますが。」と半蔵も言つて見る。

「見たまえ。」という正香の目はかがやいて来た。「われわれはお互いに十年の後を期した。こんなに早く国学者の認められる時が来ようとも思わなかった。そりや、この大政の復古が建武中興の昔に帰るようなことであつちやならない、神武じんむの創業にまで帰って行くことでなくちやならない——ああいうことを唱え出したのも、あの玉松あたりさ。復古はお互いの信条だからね。しかし君、復古が復古であるというのは、その達成せられないところにあるのさ。そう無造作にできるものが、復古じゃない。ところが世間の人はそうは思いませんね。あの明治三年あたりまでの勢いと来たら、本居平田の学説も知らないものは人間じゃないようなことまで言い出した。それこそ、猫ねこも、杓しゃくし子もですよ。篤胤先生の著述などはずいぶん広く行なわれましたね。ところが君、その結果は、というと、何が『古事記伝』や『古史伝』を著わした人たちの真意かもよくわからないうちに、みんな素通りだ。いくら、昨日の新作は今日の旧だというような、こんな潮流の急な時勢でも、これじゃ——まったく、ひどい。」

「暮田さん、」と半蔵はほんのりいい色になって来た正香の顔をながめながら、さらに話しつづけた。「わたしなぞは、これからだと思つていますよ。」

「それさ。」

「われわれはまだ、踏み出したばかりじゃありませんかね。」

「君の言うとおりさ。今になってよく考えて見ると、何十年かかったらこの御一新がほんとうに成就されるものか、ちよいと見当がつかない。あれで鉄胤先生なぞの意志も、政治を高めるところにあつたろうし、同門には越前えちぜんの中根雪江なかねゆきえのような人もあつて、ずいぶん先生を助けもしたろうがね、いかな先生も年には勝てない。この御一新の序幕の中で、先生も老いて行かれたようなものさね。まだそれでも、明治四年あたりまではよかった。版籍を奉還した諸侯が知事でいて、その下に立つ旧藩の人たちが民政をやった時分には、すくなくも御一新の成就するまではと言つたものだし、また実際それを心がけた藩もあつた。いよいよ廃藩の實行となると、こいつがやかましい。江戸大城の明け渡しには異議なしでも、自分らの城まで明け渡せとなると、中には考えてしまった藩もあるからね。一方には郡県の政治が始まる。官吏の就職運動が激しくなる。成り上がり者の官吏の中にはむやみといばりたがるような乱暴なやつが出て来る。さつきも君の話のように、なかなか地方の官吏にはその人も得られないのさ。国家の事業は窮屈な官業に混同されてしまつて、この調子で行つたらますます官僚万能の世の中さ。まあ、青山君、君だって、こんなはずじゃなかつたと思うでしょう。見たまえ、この際、力をかつぎ出そうとする連中なぞ

が士族仲間から頭を持ち上げて来ましたぜ。征韓、征韓——あの声はどうです。もとより膺懲ようちやうのことは忘れてはならない。たとい外国と和親を結んでも、曲直は明らかにせねばならない。国内の不正もまたたさねばならない。それはもう当然なことです。しかし全国人民の後ろ楯だてなしに、そんな力がかつぎ出せるものか、どうか。なるほど、不平のやりどころのない士族はそれで納まるかもしれないが、百姓や町人はどうなろう。御一新の成就もまだおぼつかないところへ持つて来て、また中世を造るようなことがあつちやならない。早く中世をのがれよというのが、あの本居先生なぞの教えたことじやなかったですか……」

酒の酔いが回るにつれて、正香は日ごろ愛誦あいしやうする杜詩としでも読んで見たいと言い出し、半蔵がそこへ取り出して来た幾冊かの和本の集注を手につけて見た。正香はそれを半蔵に聞かせようとして、何か自身に気に入ったものというふうに、浣花溪かんかけいの草堂の詩を読もうか、秋興八首を読もうかと言いながら、しきりにあれかこれかと繰りひろげていた。

「ある。ある。」

その時、正香は行燈あんどんの方へすこし身を寄せ、一語一句にもゆつくりと心をこめて、杜詩の一つを静かに声を出して読んだ。

紈袴不餓死、儒冠多誤身

丈人試靜聽、賤子請具陳

甫昔少年日、早充觀國賓

讀書破萬卷、下筆如有神

賦料楊雄敵、詩看子建親

李邕求識面、王翰願卜隣

自謂頗挺出、立登要路津

致君堯舜上、再使風俗淳

此意竟蕭条、……………

そこまで読みかけると、正香はその先を読めなかった。「この意、^{こころ}竟^{つい}に蕭^{しょう}条^{じょう}」というくだりを繰り返し半蔵に読み聞かせるうちに、熱い涙がその男らしい頬^ほを伝^{ほお}つて止め度もなく流れ落ちた。

五

正香は一晩しか半蔵の家に逗留しなかった。

「青山君、わたしも賀茂の方へ行つて、深いため息でもついて来ますよ。」

との言葉を残して、翌朝早く正香は馬籠を立とうとしていた。頼んで置いた軽尻馬も来た。馬の口をとる村の男はそれを半蔵の家の門内まで引き入れ、表玄関の式台の前で小付け荷物などを鞍に結びつけた。

「お母さん、暮田さんのお立ちですよ。」

と娘に呼ばれて、お民も和助（半蔵の四男）を抱きながらそこへ飛んで出て来る。

「オヤ、もうお立ちでございますか。中津川へお寄りでしたら、浅見の奥さん（景蔵の妻）へもよろしくおっしゃってください。」

とお民は言つた。

半蔵はじめ、お民、お糸から下男の佐吉まで門の外に出て馬上の正香を見送つた。動いて行く檜が坂になった馬籠の町の下の方に隠れるまで見送つた。旧本陣の習慣として、青山の家のものがこんなに門の前に集まることもめつたになつたのである。その時、半蔵は正香の仕えに行く賀茂両社の方のことを娘に語り聞かせた。その神社が伊勢神宮に次ぐ高い格式のものと聞くことなどを語り聞かせた。平安朝と言つた昔は、歴代の内親

王のうが一人は伊勢ひとりの齋いつきみやの宮となられ、一人は賀茂の齋の宮となられる風習となっていたと聞くことなぞをも語り聞かせた。

正香も行ってしまった。例のように半蔵はその日も万福寺内の敬義学校の方へ村の子供たちを教えに出かけて、相手と頼む松雲しょううんおしろう和尚にも前夜の客のことを話したが、午後そこから引き返して見ると、正香の立つて行つたあとには名状しがたい空虚が残った。半蔵はそこにいない先輩の前へ復古の道を持つて行つて考えて見た。彼の旧ふるい学友、中津川の景蔵や香蔵などが寝食も忘れるばかりに競い合つて、互いに突き入つたのもその道だ。そこには四つの像がある。彼は自分の心も柔らかく物にも感じやすい年ごろに受けた影響がこんなにも深く自分の半生を支配するかと思つて見て、心ひそかに驚くことさえある。彼はまた平田一門の前途についても考えて見た。

その時になつて見ると、先師没後の門人が全国で四千人にも達した明治元年あたりを平田派全盛時代の頂上とする。伊那の谷あたりの最も篤胤研究のさかんであつた地方では、あの年の平田入門者なるものは一年間百二十人の多くに上つたが、明治三年には十九人がタ落ちがして、同四年にはわずかに四人の入門者を数える。北には倉沢義髓くらさわよしゆきを出し、南には片桐春一かたぎりしゅんいち、北原稲雄、原信好のぶよしを出し、先師遺著『古史伝』三十一巻の上木じようぼ

頒布^{くはんぷ}に、山吹社中発起の条^{じょうぎん} 山神社の創設に、ほとんど平田研究者の苗床ともいふべき谷間^{たにあい}であつた伊那ですらそれだ。これを中央に見ても、正香のいわゆる「政治を高めようとする」祭政一致の理想は、やがて太政官^{たじょうかん}中の神祇官を生み、鉄胤先生を中心にする神祇官はほとんど一代の文教を指導する位置にすらあつた。大政復古の当時^{みかど}、帝には国是の確定を列祖神靈に告ぐるため、わざわざ神祇官へ行幸したもうたほどであつたが、やがて明治四年八月には神祇官も神祇省と改められ、同五年三月にはその神祇省も廃せられて教部省の設置を見、同じ年の十月にはついに教部文部兩省の合併を見るほどに推し移つて来る。今は師も老い、正香のような先輩ですら余生を賀茂の方に送ろうとしている。そういう半蔵が同門の友人仲間でも、香蔵は病み、景蔵は隠れた。これには彼も腕を組んでしまった。

六

王政第六の秋立つころを迎えながら、山里へは新時代の来ることもおそい。いよいよ享^き保^{ようほう}以前への復古もむなしく、木曾川上流の沿岸から奥地へかけての多数の住民は山に

もたよれなかった。山林規則の何たるをわきまえないものが窮迫のあまり、官有林にはいつて、盗伐の罪を犯し処刑をこうむるものは増すばかり。そのたびに徴せらるる贖罪しよくざいの金だけでも谷中ではすくなくからぬ高に上ろうとのうわささえある。

世は革新の声で満たされている中で、半蔵が踏み出して見た世界の実際すらこのとおり薄暗い。まして娘お糸なぞの住んでいるところは、長いこと彼女らのこもり暮らして来た深い窓の下だ。そこにある空気はまだ重かった。

こころみに、十五代将軍としての徳川慶喜とくがわよしのぶが置き土産みやげとも言うべき改革の結果がこの街道にもあらわれて来る前までは、女は手形なしに関所も通れなかった時代のあったことを想像して見るがいい。従来、「出女でおんな、入り鉄砲」などと言われ、女の旅は関所関所で食い留められ、髪長かみなが、尼びく、比丘尼びくに、髪切かみきり、少女など一々その風俗を区別され、乳まで探られなければ通行することも許されなかったほどの封建時代が過去に長く続いたことを想像して見るがいい。高山霊場の女人禁制は言うまでもなく、普通民家の造り酒屋にある酒蔵のようなところにまで女は遠ざけられていたことを想像して見るがいい。幾時代かの伝習はその抗しがたい手枷足枷てかせあしかせで女をとらえた。そして、この国の女を変えた。遠い日本古代の婦人に見るような、あの幸福で自己を恃むたのことが厚い、種々さまざまな美しい性質

の多くは隠れてしまった。こころみにまた、それらの不自由さの中にも生きなければならぬ当時の娘たちが、全く家に閉じこめられ、すべての外界から絶縁されていたことを想像して見るがいい。しかもこの外界との無交渉ということは、彼女らが一生涯の定めとされ、齒を染め眉を落としてかしく彼女らが配偶者となる人の以外にはほとんど何の交渉をも持てなかったことを想像して見るがいい。こんなに深くこもり暮らしして来た窓の下にいて、長い鎖国にもたとえて見たいようなその境涯から当時の若い娘たちが養い得た気風とは、いったい、どんなものか。言つて見れば、早熟だ。

馬籠旧本陣の娘とてもこの例にはもれない。祖母おまんのような厳格な監督者からお糸のやかましく言われて来たことは、夜の枕にまで及んでいた。それは砧ともいい御守殿ともいう木造りの形のものに限られ、その上でも守らねばならない教訓があつた。固い小枕の紙の上で髪をこわさないように眠ることはもとより、目をつぶったまま寝返りは打つまいぞとさえ戒められて来たほどである。この娘が早く知恵のついた証拠には、「おゝ、耳がかゆい」と母親のそばに寄つて、何かよい事を母親にきかせてくれと言つたのは、まだ彼女が十四、五の年ごろのことであつた。この早熟は、ひとりお糸のような娘のみにかぎらない。彼女の周囲にある娘たちは十六ぐらいでも皆おとなだった。

しかし、こんな娘たちの深い窓のところへも、この国全体としての覚醒かくせいを促すような御一新がいつのまにかこっそり戸をたたきに來た。あだかも燃ゆるがごとき熱望にみち、温かい情感にあふれ、あの昂然こうぜんとした独立独歩の足どりで、早くこの戸を明け放てと告げに來る人のように。過ぐる明治四年の十一月、岩倉大使一行に随したがつて洋学修業のためはるばる米國へ旅立つた五名の女子があるなぞはその一つだ。それは北海道開拓使から送られた日本最初の女子留学生であると言われ、十五歳の吉益亮子嬢よしますあきこ、十二歳の山川捨松やまかわすてまつ嬢なぞのいたけな年ごろの娘たちで、中にはようやく八歳になる津田梅子嬢つだうめこのような娘もまじっていたとか。大変な評判で、いずれも前もって渡された洋行心得書を懷中ふところにし、成業帰朝の上は婦女の模範ともなれとの声に励まされ、稚児髻ちごまげに紋付振袖ふりそでの風俗で踏み出したとのことであるが、横浜港の方にある第一の美麗な飛脚船、太平洋汽船会社のアメリカ号、四千五百トンからの大船がこの娘たちを乗せて動いて行つたという夢のような光景は、街道筋にいて伝え聞くものにすら、新世界の舞台に向かつてかけ出そうとするこの国のあがきを感じさせずには置かなかつた。追ひ追いと女学もお取り建ての時勢に向かつて、欧米教育事業の視察の旅から歸つて來た尾州藩出身の田中不二麿ふじまろが中部地方最初の女学校を近く名古屋に打ち建てるとのうわさもある。一方には文明開化の波が押し寄

せ、一方には朝鮮征伐の聲が激し、旧い物と新しい物とが入れまじって、何がこの先見え
て来るやかもわからないような暗い動揺の空氣の中で、どうして娘たちの心ばかりそう静
かにしていられよう。

九月にはいると、お糸が結婚のしたくのことについて、南殿村の稲葉の方からはすでに
いろいろと打ち合わせがある。嫁女道中も三日がかりとして、飯田泊まりの日は伝馬
町屋。二日目には飯島扇屋泊まり。三日目に南殿村着。もつとも、馬籠から飯田ま
で宿継ぎの送り人足を出してくれるなら、そこへ迎えの人足を差し出そうというようなこ
とまで、先方からは打ち合わせが来ている。

「お糸、よい晴れ着ができましたよ。どれ、お父さんにもお目にかけて。」

お民は娘のために新調した結婚の衣裳を家の女衆に見せて、よろこんでもらおうとし
たばかりでなく、それを店座敷にまで抱きかかえて行って、夫のいる部屋へやの襖ふすまに掛けて見
せた。

男の目にも好ましい純白な晴れ着がその襖にかかった。二尺あまりの振袖からは、紅梅

のような裏地の色がこぼれて、白と紅とのうつりも悪くなかったが、それにもまして半蔵の心を引いたのは衣裳全体の長さから受ける娘らしい感じであつた。亅くずしの紗綾形模様のついた白綾子なぞに比べると、彼の目にあるものはそれほど特色がきわだたないかわりに、いかにも旧庄屋風情の娘にふさわしい。色は清楚に、情は青春をしのばせる。

不幸にも、これほどお民の母親らしい心づかいからできた新調の晴れ着も、さほど娘を楽しませなかつた。余すところはもはや二十日ばかり、結婚の日取りが近づけば近づくほど、ほとほとお糸は「笑い」を失つた。

七

青山の家の表玄関に近いところでは箴の音もしない。弟宗太のためにお糸が織りかけていた帯は仕上げに近かつたが、機はたの道具だけが板敷きのところに休ませてある。お糸も織ることに倦うんだかして、そこに姿を見せない時だ。

お民は囲炉裏いろり裏うらばたからこの機のそばを通つて、廊下つづきの店座敷の方に夫を見に來た。ちようど半蔵は部屋へやにいないで、前庭の牡丹ぼたんの下あたりを余念もなく掃いているところだ。

あつた。

「お民、お糸の吾家うちにいるのも、もうわずかになったね。」

と半蔵が竹箒たけぼうしを手にしながら言った。

なんと言つても、人一人ひとりの動きだ。娘を無事に送り出すまでの親たちの心づかいも、容易ではなかった。ことに半蔵としては眼前の事にばかり心を奪われている場合でもなく、同門の先輩正香ですらややもすれば押し流されそうに見えるほど、進むに難いかた時勢に際会している。この半蔵は庭下駄げたのまま店座敷の縁先に來て腰掛けながら、

「おれもまあ、考えてばかりいたところでしかたがない。あの暮田さんを見送ってからというもの、毎日毎日学校から帰ると腕ばかり組んでいたぞ。」

と妻に言つて見せる。

お民の方でもそれはみて取つた。彼女は山林事件当時の夫に懲りている。娘の嫁入りじたくもここまで来た上は、男に相談してもしかたのないようなことまでそう話しかけようとはしていない。それよりも、どんな着物を造つてくれても楽しそうな顔も見せないお糸の様子を話しに來ている。

「でも、あの稲葉の家も、行き届いたものじゃありませんか。」とお民が言い出した。

「ごらんなさい、お糸が嫁かたづいて行く当日に、鉄漿かねおや親へ出す土産みやげの事まで先方から気をつけてよこして、反物たんもので一円くらいのことにしたと言つて来ましたよ。お糸に付き添いの女中もなるべくは省いてもらいたいが、もし付けてよこすなら、その人だけ四日前によこしてもらいたい、そんなことまで言つて来ましたよ。」

「四日前とはどういうつもりだい。」

「そりや、あなた、式の当日となつてまごつかないように、部屋に慣れて置くことでしょに。よほどの親切がなけりや、そんなことまで先方から気をつけてよこすもんじやありません。ありがたいと思つていい。あなたからもそのことをお糸によく言つてください。」

「待つてくれ。そりやおれからも言つて置こうがね、いったい、この縁談はお糸だつていやじゃないんだろう。ただ娘ごころに決心がつきかねているだけのことなんだろう。おれの家じやお前、お母つかさん（おまんのこと）は神聖な人さ。その人があれならばと言つて、見立ててくださったお婿さんだもの、悪かろうはずもなかうじやないか。」

「何にしても、ああ、お糸のように黙つてしまつたんじや、どうしようもありませんよ。何を造つてくれても、よろこびもしない。わたしも一つあの子に言つて聞かせるつもりで、このお嫁入りのしたくが少しぐらいのお金でできると思つたら、それこそ大違いだよ。こ

んなに皆が心配してあげる。お前だつてよつぽど本気になつてもらわにやならないツて、ね。その時のあれの返事に、そうお母^{つか}さんのように心配してくださるな、わたしもお父^{とつ}さんの娘です、そう言うんです。」

「……」

「そうかと思うと、神靈^{みたま}さまと一緒にいれば寂しくない、どうぞ神靈さま、わたしをお守りくださいなんて、そんなことを言い出すんです。」

「……」

「まあ、あれでお糸も、お父さん思いだ。あなたの言うことならよく聞きますね。あなたからもよく言つて聞かせてください。」

「そうお民のように、心配したものでなかつたらおれは思うよ。いざとなつてごらん、お糸だつて決心がつこうじゃないか。」

半蔵は下駄^{げた}を脱ぎ捨てて、その時、店座敷の畳の上を歩き回った。庭の牡丹^{ぼたん}へ来る風の音までがなんとなく秋めいて、娘が家のものと一緒に暮らす日の残りすくなになったことを思わせる。とかく物言いのたどたどしいあのお糸とても、彼女をこの世に育ててくれた周囲の人々に対する感謝を忘れるような娘でないことは、半蔵にもそれが感じられていた。

それらの人々に対する彼女の愛情は平素のことがよくそれを語っていた。十八歳のその日まで、ただただ慈しきをもつて繞つてくれる周囲の人々の心を落胆させてころよしとするような、そんな娘でないことは半蔵もよく知つて、その点にかけては彼も娘に心を許していたのである。

今さら、朝鮮あたりの娘のことをここに引き合いに出すのもすこし突然ではあるが、両班という階級の娘の嫁に行く夜を見たという人の話にはこんなことがある。赤、青、黄の原色美しい綾衣に、人形のように飾り立てられた彼女は、そこに生けるものとは思われなかつたとか。飽くまで厚く塗り込められた白粉は、夜の光にむしろ青く、その目は固く眠つて、その睫毛がいたずらに長いように思われたとか。彼女は全く歩行する能力をも失つたかのようにして人々の肩にかつがれ、輿に乗せられて生贄を送るというふうに、親たちに泣かれて嫁いだのであつた。きけば、彼女はその夜から三日の間は昼夜をわかつた、その目を開くことができないのであるという。それは開こうとしても開き得ないのであつた。彼女の目は、上下の睫毛を全く糊に塗り固められ（またある地方ではきわめて濃

い、固い鬢びんつけ油を用う）、閉じられているのであったという。これは何を意味するかなら、要するに「見るな」だ。風俗も異なり習慣も異なる朝鮮の両班ヤンバンと、木曾の古い本陣ふるとは一緒にはならないが、しかし青山の家でもやはりその「見るな」で、娘お糸に白無垢しろむくをまとわせ、白の綿帽子をかぶらせることにして、その一生に一度の晴れの儀式に臨ませる日待った。すでに隣家伏見屋の伊之助夫婦からは、お糸のために心をこめた贈り物がある。梼田屋ますだやからは何を祝ってくれ、蓬萊屋ほうらいやからも何を祝ってくれたというたびに、めずらしいものの好きの弟たちまで大はしやぎだ。しかし、かんじんのお糸はどうかすると寝たりなぞする。彼女は、北の上段の間に人まを避け、産土神うぶすなさまの祭つてある神殿に隠れて、うす暗くなるまでひとりですこにすわっていることもある。行くものはさっさと行け。それを半蔵はいろいろなことで娘に教えて見せていたし、お民はまたお民で、土蔵のなかにしまつてある古い雛ひなまで娘に持たせてやりたいと言って、早くお糸の身を堅めさせ、自分も安心したいというよりほかの念慮も持たないのであった。

こういう時の半蔵夫婦の相談相手は、栄吉（半蔵の従兄いとこ）と清助とであった。例の囲炉裏くつろばたに続いた寛ぎの間まにはそれらの人たちが集まつて、嫁女の同伴人はだれとだれ、供の男はだれにするかなぞとの前もつての相談があつた。妻籠の寿平次の言い草ではないが、

娘が泣いてもなんでも皆で寄つて祝つてしまえ、したく万端手落ちのないように取りはからえというのが、栄吉らの意見だつた。

「半蔵さま、お糸さまの荷物はどうなさるなし。」

そんなことを言つて、峠村の平兵衛も半蔵を見にやつて来る。周旋奔走を得意にするこの平兵衛は、旧組頭の廃止になつた今でも、峠のお頭かしらで通る。

「荷物か。荷物は式のある四、五日前に送り届ければいい。当日は混雑しないようにツて、先方から言つて来た。荷回し人はおぼしめし次第だ、そんなことも言つて来たが、ちゆうぎ中牛ゆうば馬うま会社に頼んで、飯田まで継立つぎたてにするのが便利かもしれないな。」

半蔵の挨拶あいさつだ。

九月四日は西が吹いて、風当たりの強いこの峠の上を通り過ぎた。払あけ曉がたはことに強く当たつた。青山の家の裏にある稲荷いなりのそばの栗くりもだいぶ落した。お糸は一日機はたに取りついで、ただただ表情のない器械のような箴おさの音を響かせていたが、弟宗太のためにと丹精たんせいした帯地をその夕方までに織り終わつた。そこへお民が見に来た。お糸も織ることは好きで、こういうことはかなり巧者にやつてのける娘だ。まだ藍あいの香のするようなその帯地の出来をお民もほめて、やがて勝手の方へ行つたあとでも、お糸はそこを動かずにいた。仕上げ

た機のそばに立つ彼女の娘らしい額つきは父半蔵そのままである。黒目がちな大きな目は何を見るでもない。じつとそこに立ったまましばらく動かずにいるこの娘の容貌には、一日織った疲れに抵抗しようとする表情のほかに浮かぶものもない。涙一滴流れるでもない。しかもその自分で自分の袂をつかむ手は堅く握りしめて、震えるほど力を入れていた。無言の悲しみを制えるかのように。

その晩はもはや宵から月のあるころではなかった。店座敷の障子にあの松の影の映って見えたころは、毎晩のようにお糸もよく裏庭の方へ歩きに出て、月の光のさし入った木の下などをあちこちあちこちとさまよった。それは四、五日前のことでお民も別に気にもとめずにいた。その晩のように月の上るのもおそいころになって、また娘が勝手口の木戸から屋外へ歩きに出るのを見ると、お民は嫁入り前のからだに風でも引かせてはとの心配から、土間にある庭下駄もそこに娘を呼び戻しに出た。底青く光る夜の空よりほかにお民の目に映るものもない。勝手の流しもとの外あたりでは、しきりに虫がなく。

「お糸。」

その母親の呼び声を聞きつけて、娘は暗い土蔵の前の柿の木の下あたりから引き返して来た。

その翌日も青山の家のものは事のない一日を送った。夕飯後のことであつた。下男の佐吉は裏の木小屋に忘れ物をしたと言つて、それを取りに囲炉裏ばたを離れたがり容易に帰つて来ない。そのうちに引き返して来て、彼が閉めて置いたはずの土蔵の戸が閉まつていないことを半蔵にもお民にも告げた。その時は裏の隠居所から食事に通うおまんもまだ囲炉裏ばたに話し込んでいた。見ると、お糸がいな^しい。それから家のものが騒ぎ出して、半蔵と佐吉とは提^{ちようちん}灯^{ちん}つけながら土蔵の方へ急いだ。おまんも、お民もそのあとに続いた。暗い土蔵の二階、二つ並べた古い長持のそばに倒れていたのは他のものでもなかつた。自害を企てた娘お糸がそこに見いだされた。

第十章

一

青山の家に起こった悲劇は狭い馬籠まこめの町内へ知れ渡らずにはいなかった。馬籠は飲用水に乏しい土地柄であるが、そのかわり、奥山の方にはこうした山地でなければ得られないような、たまやかな水がわく。樋とを通して呼んである水は共同の水槽すいそうのところにくめるところにあふれる山の泉のすずしさ。深い掘り井戸でも家に持たないかぎりのものは、女でも天秤棒てんびんぼうを肩にかけ、手桶ておけをかついで、そこから水を運ばねばならぬ。南側の町裏に当たる崖下がけしたの位置に、静かな細道に添い、杉や榎すぎえのきの木影を落としているあたりは、水くみの女どもが集まる場所で、町内の出来事はその隠れた位置で手に取るようにわかった。うわさは実にとりどりであった。あるものは旧本陣の娘のことをその夜のうちに知ったと言ひ、あるものは翌朝になって知ったと言ふ。寄るとさわると、そこへ水くみに集まるもののうわさはお糸のことで持ち切った。あの娘が絶命するまでに至らなかつたのは、全

く家のものが早く見つけて手当てのよかつたためであるが、何しろ重態で、助かる生命いのちであるかどうかはだれも知らない。変事を聞いて夜中に駕籠かごでかけつけて来た山口村の医者杏庵きやうあん老人ですら、それは知らないとのこと。この山里に住むものの中には、青山の家の昔を知っていて、先代吉左衛門の祖父に当たる七郎兵衛のことを引き合いに出し、その人は二、三の同僚と共に木曾川へ魚を捕とりに行つて、隣村山口の八重島やえしま、字龍あざたつというところで、ついに河の水かわにおぼれたことを言つて、今度の悲劇もそれを何かの祟たたりに結びつけるものもあつた。

門外のものうわさがこんなに娘お糸の身に集まつたのも不思議はない。青山の家のもにすら、お糸が企てた自害の謎なぞは解けなかつた。ともあれ、この出来事があつてからの四、五日というものは、家のものにはそれが四十日にも五十日にも当たつた。その間、お糸が生死の境をさまよつていて、飲食するものも喉のどに下りかねるからであつた。

にわかには半蔵も年取つた。一晚の心配は彼を十年も老けふさした。父としての彼がいろいろな人の見舞いを受けるたびに答えうることは、このとおり自分はまだ取り乱している

言うのほかはなかつたのである。その彼が言うことには、この際、自分はまだ何もよく考えられない。しかし、治療のかいあつて、追ひ追いと娘も快い方に向かつて来ているから、どうやら一命を取りとめそうに見える。娘のことから皆にこんな心配をかけて済まなかつた。これを機会に、自分としても過去を清算し、もつと新しい生涯にはいりたいと思ひ立つようになった。そんなふうには彼は見舞いの人々に言つて見せた。時には彼は村の子供たちを教えることから歸つて来て、袴も着けたままお糸の様子を見に行くことがある。母屋の奥座敷には屏風をかこい、土蔵の方から移された娘のからだに安静にさせてある。娘はまだ顔も腫れ、短刀で刺した喉の傷口に巻いてある白い布も目について、見るからに胸もふさがるばかり。変わり果てたこの娘の相貌には、お民が驚きも一通りではない。彼女は悲しがつて、娘を助けたさの母の一心から、裏の稲荷へお百度などを踏みはじめている。

木曾谷でも最も古い家族の一つと言わるる青山のような家に生まれながら、しかもはやかな結婚の日を前に控えて、どうしてお糸がそんな了簡違ひをしたろうということ、彼女の周囲にある親しい人たちの間にもいろいろと問題になつた。寿平次の妻お里は妻籠から、半蔵が旧い弟子の勝重は落合から、いずれも驚き顔に半蔵のところへ見舞

いに来て、隣家の主人伊之助と落ち合った時にも、その話が出る。娘心に、この世をはかなんだものだろうか、と言つて見るのは勝重だ。もつと学問の道にでも進みたかったものか、と言つて見るのはお里だ。十八やそこいらのうら若さで、そうはつきりした考えから動いたことでもないのであらう、おそらく当人もそこまで行くつもりはなかったのであらう、それにしてもだれかあの利発な娘を導く良い案内者をほしかった、と言つて見るのは伊之助だ。いや、たまたまこれはお糸の生娘きむすめであつた証拠で、おとおんなの契りを一大事のように思い込み、その一生に一度の晴れの儀式の前に目がくらんだものであらう、と言つて見るものもある。お糸の平常を考えても、あの生先おいさき籠る望み多いからだで、そんな悪い鬼にさいなまれていようとは思いがけなかつたと言つて、感じやすいもののみが知るようなさみしいところのありさまにまでお糸の行為おこないを持って行つて見るものもある。

その時になると、半蔵は伊那南殿村の稲葉家へあててありのままにこの出来事を書き送り、結婚の約束を解いてもらうよりほかに娘を救う方法も見当たらなかつた。しかし、すでに結納ゆいのうの品を取りかわし、筆筒たんす、長持から、針箱たぐいの類まで取りそろえてお糸を待つていくくれるという先方の厚意に対しても、いったん親として約諾したことを破るという手紙は容易に書けなかつた。せめて仲人なこうどのもとまでと思ひながら、かねて吉辰良日きつしんとし

て申し合わせのあった日に当たる九月二十二日が来ても、彼にはその手紙が書けない。月の末にも書けない。とうとう十月の半ばまで延引して、彼は書くべき断わり手紙の下書きまで用意しながら、いざとなると筆が進まなかった。

「拝啓。冷気相増し候ところ、皆々様おそろいますます御清適に渡らせられ、敬寿たてまつり候。陳れば、昨冬以来だんだん御懇情なし下されし娘衆儀、南殿村稲葉氏へ縁談御約諾申し上げ置き候ところ、図らずも心得違いにて去月五日土蔵二階にて自刃に及び、母妻ら早速見つけて押しとどめ、親類うち寄り種々申し諭し、医療を加え候ところ、四、五日は飲食も喉に下りかねよほどの難治に相見え申し候。幸い療養の効ありて、追い追いと快方におもむき、この節は食事も障りなく、疵は日に増し癒え候方に向かいたれども、気分いまだ平靜に相成らざる容体にて、心配の至りに御座候。実もって、家内一同へすこしもその様子は見せ申さず、皆々心付け申さず、かかる挙動に及び候儀、言語に絶し、女心とは申しながら遺憾すくなく、定めし稲葉氏には御用意等も追い追い遊ばされ候儀と推察たてまつり、南殿村へ対しなんとも申し上げようも御座なく候。

右につき、御契約の儀は縁なきこととおあきらめ下され、お解き下され候よう、尊公様より厚く御詫おんわびを願いたく候。氣随の娘、首切つて御渡し申すべきか、いかようとも謝罪の儀は貴命に従い申すべく候。かねて御引き取りの御約束にこれあり候ことゆえ、定めて諸事御支度したくあらせられ候ことと推察たてまつり、早速にもこの儀、人をもつて申し上げべきはずに候えども、種々取り込みまかりあり、不本意ながらも今日まで延引相成り申し候。縁談の儀は旧好を続つぎ、親しんを厚うし候ことにて、双方よかれと存じ候事に候えども、当人種々娘ごころを案じめぐらせし上にもこれあり候か、了りようけん簡かん違ちがいつかまつり、いかんとも両親の心底にも任せがたく候間、この段厚く御海ごかい恕じよなし下され候よう願ひ上げたてまつり候。遠からず人をもつて御詫び申し上げべく候えども、まずまず尊公様までこの段申し上げ候。何卒なにとぞ、南殿村へはくれぐれも厚く御詫び下さるよう、小生よりは申し上ぐべき言葉も御座なく候。まずは右、御願ひまで、かくのごとくに御座候。

よかれとて契りしことも今ははたうらみらるべきはしとなりなき

尚々なおなお、老母はじめ、家内のものどもよりも、本文の次第厚く御詫び申し上げ候よう、申しいで候。」

ようやく十月の二十三日に、半蔵は仲人あてのこの書きにくい手紙を書いた。書いて見ると、最初からこの縁談を取りまとめるためにすくなくらず骨折ってくれた継母おまんのことがそこへ浮かんで来る。目上のもの言うことは実に絶対で、親子たりとも主従の關係に近く、ほとほと個人の自由の認めらるべくもない封建道徳の世の中に鍛えられて来たおまんのような婦人が、はたしてほんとうに不幸な孫娘を許すか、どうかも彼には気づかわれる。

「お民。」

半蔵は妻を呼んで、当時にはまだ目新しい一銭の郵便切手を二枚貼^はつて出す前に、この手紙を彼女にも読み聞かせた。

「あなたが、もつと自分の娘のことを考えてくれたら、こんなことにはならなかった。」
お民はそれを言い出しながら、夫のそばにいてすすり泣いた。

これには半蔵も返す言葉がない。山林事件の当時、彼は木曾山を失おうとする地方人民のために日夜の奔走を続けていて、その方に心を奪われ、ほとんど家をも妻子をも顧みないまがなかった。彼は義理堅い継母からも、すすり泣く妻からも、傷ついた娘からも、自分で自分のしたことをつらい復讐^{ふくしゅう}を受けねばならなかった。

ある日、彼は奥座敷に娘を見に行つた。お糸が顔の腫れも次第に引いて来たころだ。彼はうれしさのあまり、そこに眠っている娘の額や頬ほおに自分の掌てのひらを当てたりなぞして、めつきり回復したそのようすを見直した。その時、お糸は例の大きな黒目がちな目を見開きながら、

「お父さんとつ、申しわけがありません。わたしが悪うございました。もう一度——もう一度わたしも生まれかわつたつもりになってやりますから、今度のことは堪かん忍にんしてください。」

「おゝ、お糸もそこへ気がついたか。」

と彼は言つて見せた。

十一月にはいつて、峠のお頭かしら平兵衛は伊那南殿村への訪問先から引き返して来た。その用向きは、半蔵の意をうけて稲葉家の人々にあい、ありのままにお糸の様子を伝え、縁談解約のことを申し入れるためであつた。平兵衛が先方の返事を持ち帰って見ると、稲葉の主人をはじめ先方では非常に残念がり、そういう娘こそ見どころがあると言つて、改めて

この縁談をまとめたいと言つて来た。

この稲葉家の厚意は一層事をめんどうにした。そこには、どこまでも生家きとと青山の家との旧好を続けたいという継母おまんが強い意志も働き、それほどの先方の厚意を押し切るということは、半蔵としても容易でなかったからである。

武士としてもすぐれた坂本孫四郎（号天山）のような人を祖父に持つおまんの心底をたたくなら、半蔵などはほとんど彼女の眼中にない。彼女に言わせると、これというのも実は半蔵が行き届かないからだ。彼半蔵が平常も人並みではなくて、おかしい事ばかり。そのため彼女まで人でなしにされて、全く生家さとの人たちには合わせる顔がない。彼女はあの調子だ。このおまんは傷口の直つたばかりのような孫娘を自分の前に置いて、まだ顔色も青ざめているお糸に、いろいろとありがたい稲葉家の厚意を言い聞かせた。なお、あまりに義理が重なるからとおまんは言つて、栄吉その他のものまで頼み、それらの親戚しんせきの口からも、さまざまに理解するよう娘に言いさとした。お糸はそこへ手について、ただただ恥ずかしいまま、お許しくだされたいとばかり。別に委細を語らない。これにはおまんも嘆息してしまった。

半蔵は、血と血の苦しい抗争が沈黙の形であらわれているのをそこに見た。いろいろと

生家きやに掛けた費用のことを思い、世間の評議をも懸念けねんして、これがもし実の孫子まごであつたら、いかようにも分別があると言いたげな飽くまで義理堅い継母の様子は、ありありとその顔色にあらわれていた。お糸は、と見ると、これはわずかに活いき返つたばかりの娘だ。せつかく立て直ろうとしている小さな胸に同じ事を苦しませるとしたら、またまた何をしでかすやも測りがたかつた。この際、彼の取るべき方法は、妻のお民と共に継母をなだめて、目に見えない手枷てかせ足枷あしかせから娘を救い出すのほかはなかつた。

「ますます単純に。」

その声を彼は耳の底にききつけた。そして、あとからあとから彼の身边にまといついて来る幾多の情実を払いのけて、新たな路みちを開きたいとの心を深くした。今は躊躇ちゆうちよ躊躇ちよすべき時でもなかつた。彼としては、事を単純にするの一手だ。

そこで彼は稲葉氏あてに、さらに手紙を書いた。それを南殿村への最後の断わりの言葉にかえようとした。

「尊翰そんかん拝見つかまつ仕り候。小春の節に御座候ところ、御渾家御揃ごこんか そろい遊ばされ、ますます御機嫌ごきげんよく渡らせられ、恭賀たてまつり候。降くだつて弊宅異儀なく罷まかりあり候間、憚はばかりながら御放念下されたく候。陳のぶれば、愚娘儀につき、先ごろ峠村の平兵衛参上いたさせ候とこ

ろ、重々ありがたき御厚情のほど、同人よりうけたまわり、まことにもって申すべき謝辞も御座なき次第、小生ら夫妻は申すに及ばず、老母ならびに近親のものまでも御懇情のほど数度説諭に及び候ところ、当人においても段々御慈悲をもつて万端御配慮なし下され候儀、浅からず存じ入り、参上を否み候儀は毛頭これなく候えども、不了簡ふりようけんの挙動、自業自悔じごうじかい、親類のほかは町内にも他人への面会は憚り多く、今もって隣家へ浴湯にも至り申さざるほどに御座候。右の次第、そのもとへ参り候儀、おおかた恥ずかしく、御家族様方を初め御親類衆様方へ対し奉り、女心の慚愧耐えざんきがたき儀につき、なにぶんにも参上つかまつりかね候よし申しいで候。小生らにおいても御厚意を奉体つかまつらざる場合に落ち行き、苦慮ひとかた一方ならず、この段御宥恕ごゆうじよなし下されたく、尊君様より皆々様へ厚く御詫び申し上げ候よう幾重いくえにも願いたてまつり候。右貴答早速申し上ぐべきところ、愚娘説諭方数度に及び、存外の遅延、かさねがさねの多罪、ひたすら御海怒下されたく候。尚々なおなお、老母はじめ、家内のものどもよりも、本文の次第厚く御詫び申し上げます候よう、申しいで候。」

とうとう、半蔵もこんな風雨をしのいで一生の旅の峠にさしかかった。人が四十三歳にもなれば、この世に経験することの多くがあこがれることと失望することとで満たされているの知らないものもまれである。平田門人としての彼は、復古の夢の成りがたさにも、同門の人たちの蹉つまずき跌ふにも、つくづくそれを知って来た。ただほんとうに心配する人たちのみがこの世に残して行くような誠実の感じられるものがあつて、それを何ものにも換えがたく思う心から、彼のような人間でも行き倒れずにどうやらその年まで諸先輩の足跡をたどりつづけて来た。過去を振り返ると、彼が父吉左衛門の許しを得て、最初の江戸の旅に平田鉄胤かねたねの門をたたき、誓詞、酒魚料、それに扇子せんす壺箱こを持参し、平田門人の台帳に彼の名を書き入れてもらったのは安政三年の昔であつて、浅い師弟の契りとも彼には思われなかった。その師にすら、「ここまではお前たちを案内して来たが、ここから先の旅はお前たち各自に思い思いの道をたどれ」と言われるような時節が到来した。これは全く自然の暇いとまご乞いで、その年、明治六年には師ももはや七十二歳の老齡を迎えられたからである。この心ぼそさに加えて、前年の正月には彼は平田延胤のぶたね若先生の死をも見送った。平田派中心の人物として一門の人たちから前途に多くの望みをかけられたあの延胤が四十

五歳で没したことは、なんと言つても国学者仲間にとつての大きな損失である。追ひ追ひの冷たい風は半蔵の身にもしみて来た。そこへ彼の娘まで深傷ふかでを負った。感じられはしても、説き明かせないこの世の深さ。あの稲妻いなずまのひらめきさえもが、時としては人に徹する。生きることはかなさ、苦しさ、あるいは恐ろしさが人に徹するのは、こういう時かと疑われるほど、彼も取り乱した日を送つて来た。この彼が過去を清算し、もつと彼自身を新しくしたいとの願いから、ようやく起こし得た心というは、ほかでもない。それは平田篤胤没後の門人として、どこまでも国学者諸先輩を見失うまいとする心であつた。

半蔵も動いて来た。時にはこのまま村夫子そんふうしの身に甘んじて無学な百姓の子供たちを教えたいと思い、時にはこんな山の中に引き込んでいて旧い宿場の運命をのみ見まもるべき世の中ではないと思い、是非胸中にたたかつて、精神の動揺はやまない。多くの悲哀かなしみが神に仕える人を起こすように、この世にはまだ古いにしえをあらわす道が残っていると感づくのも、その彼であつた。復古につまずいた平田篤胤没後の門人らがいずれも言い合わせたように古い神社へとところざし、そこに進路を開拓しようとしていることも、いわれのあることのように彼には考えられて来た。松尾の大宮司となつた師岡正胤もろおかまさたね、賀茂の少宮司となつた暮田正香くれたまさかなぞを引き合いに出すまでもなく、伊那の谷にある同門の人たちの中にもそ

の方向を取ろうとする有志のものはすくなくない。

山窓^{やまど}にねぎめの夜はの明けやらで風に吹かるる雨の音かな

祖^{おや}の祖^{おや}のそのいにしへは神なれば人は神にぞ齋^{いつき}くべらなる

この述懐の歌は、半蔵が齋^{いつき}の道を踏みみたいと思ひ立つ心から生まれた。すくなくも、その心を起こすことは、先師^{おほ}の思し召しにもかなうことであらうと考えられたからで。

新しい路^{みち}をひらく手始めに、まず半蔵は自家の祭葬^{さいそう}のことから改めてかかろうと思ひ立つた。元来神葬祭^{しんそうさい}のことは中世否定の氣運と共に生まれた復古運動のあらわれの一つで、最も早くその根本問題に目を着け、またその許^{おおよ}しを公に得たものは、土籍^{どせき}にあつては豊^{ぶん}後岡藩^{おかはん}の小川弥右衛門^{やえもん}、地下人^{じげにん}（平民）にあつては伊那小野村の庄屋倉沢義^{よし}髓^{ゆき}をはじめとする。ことに、義髓は一日も人身の大札を仏門に委ねるの不可なるを唱え、中世以来宗門仏葬等のことを菩提^{ぼだい}寺任^じせにしているのはこの国の風俗として恐れ入るとなし、信州全国^{そうつしゅう}曹洞宗^{そうとうしゅう}四百三か寺に対抗して宗門^{しんもん}人別帳^{にんべつちよう}離脱^{りだつ}の運動を開始したのは慶応元年のころに当たる。義髓はそのために庄屋の職を辞し、京都寺社奉行所と飯田千村役所との間を往復し、初志を貫徹するために前後四年を費やして、その資産を蕩^{とう}尽^{じん}してもなお屈しないほどの熱心さであつた。徳川幕府より僧侶^{そうりよ}に与えた宗門権の破棄と、神葬復礼と

の奥には、こんな人の動きがある。しかし世の中は変わった。その年、明治六年の十一月には、筑摩ちくま県ぐん権令ぐんれい永山盛輝ながやまもりてるの名で、神葬仏葬共に人民の信仰に任せて聞き届ける旨むねはかねて触れ置いたとおりであるが、今後はその願ひ出にも及ばない、各自の望み次第、葬儀改典勝手たるべしの布告が出るほどの時節が到来した。木曾福島取締所の意をうけて三大区の区長らからそれを人民に通達するほどの世の中になって来た。これは半蔵にとつても見のがせない機会である。彼は改典の事を共にするため、何かにつけての日ごろの相談相手なる隣家の主人、伊之助を誘った。

菩提寺任せにしてあつた父祖の位牌いはいを持ち帰る。その塵埃ほこりを払って家に迎え入れる。墓地の掃除も寺任せにしないで家のものの手でそれをする。今の寺院の境内はもと青山家の寄付にかかる土地であるから、神葬の儀式でも行なう必要のあるおりは当分寺の広庭を借り用いる。まったく神仏を混こん淆こうしてしまったような、いかがわしい仏像などの家にあるものはこの際焼き捨てる——この半蔵の考えが伊之助を驚かした。しかし、伊之助は平素の慎み深さにも似ず、これは自分らの子供たちを教育する上からもゆるがせにすべき問題でないと言ひ、これまで親しいものの死後をあまり人任せにし過ぎたと言ひ、旧宿役人時代から彼は彼なりに在家ざいけと寺方との關係を考えて来たとも言つて、もし旧本陣でこの事を

断行するなら、伏見屋でもこれを機会に祭葬の礼を改めて、古式に復したいと同意した。
半蔵は言つて見た。

「やっぱ伊之助さんは、わたしのよい友だちだ。」

今は彼も意を決した。この上は、伊之助と連れだって、今度の布告の趣意を万福寺住職に告げ断わるため、馬籠の北側の位置にある田圃たんぼの間の寺道を踏むばかりになった。

万福寺の松雲和尚おしょうはもとの名を智現ちげんという。行脚あんぎや六年の修業の旅を終わり、京都本山の許しを得て名も松雲と改め、新住職として馬籠の寺に落ちついたのは、もはや足掛け二十年の前に当たる。

あれは安政元年のことで、半蔵が父吉左衛門も、伊之助が養父金兵衛も、共にまだ現役の宿役人としてこの駅路一切の世話に任じていたころだ。旧暦二月末の雨の来る日、美濃みの路じよりする松雲の一行が中津川宗泉寺老和尚の付き添いで、国境くにぎかいの十曲じつきよく峠とうげを上つて来た時、父の名代として百姓総代らと共に峠の上の新茶屋まで新住職の一行を出迎えたのもまだ若いころの半蔵だった。旅姿の松雲はそのまま山門をくぐらずに、まず本陣の

玄関に着き、半蔵が家の一室で法衣装束しやうぞくに着かえ、それから乗り物、先箱さきはこ、台傘たいがさで万福寺にはいったのであった。

二十年の月日は半蔵を変えたばかりでなく、松雲をも変え、その周囲をも変えた。和尚もすでに五十の坂を越した。過ぐる月日の間、どんなさかなな行列が木曾街道に続こうと、どんな血眼ちまなこになった人たちが馬籠峠の上を往復しようと、日々の雲が変わるか、あるいは陰陽の移りかわるかぐらいにながめ暮らして、ただただ古い方丈の壁にかかる達磨だるまの画像を友として来たような人が松雲だ。毎朝早くの洗面さえもが、この人には道を修めることで、法鼓ほうこ、諷經ふうぎん等の朝課の勤めも、払曉ふつきように自ら鐘楼に上って大鐘をつき鳴らすことも、その日その日をみたして行こうとする修道の心からであった。一日成さなければ一日食うまい、とは百丈禪師のような古大徳がこの人に教えた言葉だ。仏餉ぶつしょう、献鉢けんぱち、献燈、献花いはいどう、位牌堂えいはいどうの回向えこう、大般若だいはんにかやの修行、徒弟僧の養成、墓掃除そうちじ、皆そのとおり、長い経験から、ずいぶんこまかいところまでこの人も氣を配って来た。たとえば、毎年正月の八日には馬籠仲町にある檀家だんかの姉様あねさまたちが仏参を兼ねての年玉に来る、その時寺では十人あまりへ胡桃餅くるみもちを出す、早朝から風呂ふろを焚くた、あとで出す茶漬ちやつけの菜さいには煮豆に冬菜のひたしぐらいでよろしの類だたぐい。寺は精舎しょうじやとも、清浄地とも言われるところから思いつ

いて、明治二年のころよりぼつぼつ万福寺の裏山を庭に取り入れ、そこに石を運んだり、躑躅つづじを植えたりして、本堂や客殿からのながめをよくしたのもまた和尚だ。奥山の方から導いた清水しみずがこの庭に落ちる音は、一層寺の境内を街道筋の混雑から遠くした。

こんな静かな禅僧の生活も、よく見れば動いていないではない。大は将軍家、諸侯から、小は本陣、問屋といや、庄屋、組頭くみがしらの末に至るまでことごとく廃された中で、僧侶そうりよのみ従前どおりであるのは、むしろ不思議なくらいの時である。御一新以前からやかましい廃仏の声と共に、神道葬祭が復興することとなると、寺院は徳川幕府の初期以来保証されて来た戸籍公証の権利を侵さるのみならず、宗門人別離脱者の増加は寺院の死活問題にも関する。これには各宗の僧籍に身を置くものもとより、全国何百万からの寺院に寄宿するものまで、いずれも皆強い衝動を受けた。この趨勢すうせいに鑑みかんが、中年から皇国古典の道を聞いて、大いに松雲も省みるところがあつた。和尚がことに心をひかれたのは、人皇三十一代用明天皇第二の皇子、すなわち厩戸皇子うまやどのおうじののこした言葉と言ひ伝えられるものであつた。この国未曾有みぞうの仏法を興隆した聖徳太子とは、厩戸皇子の諡号しごうにほかならない。その言葉に、神道はわが国の根本である、儒仏はその枝葉である、根本昌さかんなる時は枝葉も従つて繁茂する、故に根本をゆるかせにしてはならないぞとある。これだ。この根本に帰

入するのが、いくらかでも仏法の守られる秘訣ひけつだと松雲は考えた。ところがこれには反対があつて、仏徒が神道を基とするのは狭い偏した説だとの意見が出た。その声は隣村同宗の僧侶仲間からも聞こえ、隣国美濃にある寺々からも聞こえて来た。そしてしきりにその片手落ちを攻撃する手紙が松雲のもとへ舞い込んで来たのは十通や十三、四通にとどまらない。そのたびに松雲は自己の立ち場を弁解する意見書を作つて置いて、それを同宗の人々に示した。かく根本に帰入するのは、すなわち枝葉を繁茂せしめる一つではなからうか。その根本が堅固であつても、霜雪時に従つて葉の枯れ落ちることはある。枝の朽ちることもある。また、新芽を生ずるがある。新しい枝を延ばすもある。皆、天然自然おのねのしからしめるところであつて、その根本たりとも衰えることはないと言えない。大根おおねの枯れさえなければ、また蔓延まんえんの時もある。この大根を切断する時は、枝葉もまた従つて朽ちることとは言葉を待たない。根本を根本とし、枝葉を枝葉とするに、どうしてこれが片手落ちであらう。そもそも仏法がこの国土に弘きんめいていまつたのは欽明帝十三年仏僧入朝の時であつて、以来、大寺の諸国に充満し、王公貴人の信仰したことは言葉に尽くせない。過去数百年間、仏徒の横肆おうしもまた言葉には尽くせない。その徒も一樣ではない。よいものもあれば、害のあつたものもある。一得あれば一失を生ずる。ほまれそしりはそこから起こつて来るが、

仏徒たりとも神国の神民である以上、神孫の義務を尽くして根本を保全しなければならぬ。その義務を尽くすために神道教導職の一端に加わるのは、だれがこれを片手落ちと言えよう。今や御一新と言ひ、社会の大変革と言つて、自分らごときはあだかも旧習を脱せざるもののように見なさるるのもやむを得ない。ただ仏祖の旧恩を守つて、道を道とするに、どうして片手落ちの異見を受くべきであらうぞ。朝旨にもと戻らず、三条の教憲をしか確と踏まえ、正を行ない、邪をしりぞけ、けんこう権衡の狂わないところに心底を落着せしめるなら、しいて天理に戻るといふこともあるまい。自分らごときは他人の異見を待たずに、ふき不羈独立して大和魂やまとだましを堅め、善悪邪正と是非得失とおのが狭い胸中に弁別し、根本の衰えないのを護念して、なお枝葉の隆盛にけねん懸念する。もとより神仏を敬する法は、みな報恩と謝徳とをもつてする。これを信心と言う。自分の身に利得を求めようとするのは、皆欲情である。報恩謝徳の厚志があらば、神明の加護もあらう。仏といえども、道理にたご違ふことのあるべきはずがない。自分らには現世げんせを安穩にする欲情もなければ、後生ごせに善処する欲情もない。天賦の身は天に任せ、正を行ない邪に組せず、現世後生は敵なく、神理を常として真心を尽くすを楽しみとするのみだから、すこしも片手落ちなどの欲念邪意があることはない。これが松雲和尚の包み隠しのないところであつた。

禅僧としての松雲は動かないように見えて、その実、こんなに静かに動いていた。この人にして見ると、時が移り世態が革まるあらたのは春夏秋冬のごとくであつて、雲起こる時は日月も蔵れかく、その収まる時は輝くように、聖賢たりとも世の乱れる時には隠れ、世の治まる時には道を行なうというふうに考えた。というのは、遠い昔にあの葦あしを折る江上の客となつて遠く西より東方に渡つて来た祖師の遺訓というものがあるからであつた。大意（理想）は人おのおのにある、しかもむなしくこれ徒勞の心でないものはないと教えてあるのだ。さてこそ、明治の御一新も、この人には必ずしも驚くべきことではなかつた。たといその態度をあまりに高踏であるとし、他から齒がゆいように言われても、松雲としては日常刻々の修道に思いを潜め、遠く長い目で世界の変革に対するの一手があるのみであつた。

半蔵と伊之助の二人ふたりが連れだつて万福寺を訪ねた時は、ちょうど村の髪結い直次が和尚の頭を剃そりに来ていて、間もなく剃り終わるであろうところへ行き合わせた。髪長そうぼうくして僧貌醜そうぼうしと日ごろ言っている松雲のことだから、剃髪ていはつも怠らない。そこで半蔵らは勝手を知つた寺の囲炉裏かみそりばたに回つて、直次が剃刀をしまふまで待った。

十二、三年も寺に暮らして和尚の身のまわりの世話をしていた人が亡くなつてからは、
 なんとなく広い囲炉裏ばたもさびしかった。生まれは三留野^{みどの}で、お島というのがその女の
 名だった。宿役人一同承知の上で寺にいたくらいだから、その人として肩身の狭かろうは
 ずもなかったが、それでも周囲との不調和を思ひかして、生前は本堂へも出なかった。世
 をいといながら三時の勤行^{ごんぎょう}を怠らない和尚を助けて、お島は檀家^{だんか}のものの受けもよく、
 台所から襷^{たすき}をはずして来てはその囲炉裏で茶をもてなしてくれたことを半蔵からも覚えてい
 る。亡^ない人の数に入つたその女のために、和尚が形見の品を旧本陣や伏見屋にまで配つた
 ことは、まだ半蔵らの記憶に新しい。

髪結い直次のような老練な職人の腕にも、和尚の頭は剃りにくいかして、半蔵らはかな
 り待たされた。それを待つ間、彼は伊之助と共にその囲炉裏ばたを離れて、和尚の造つた
 庭を歩き回りに出た。やがて十三、四ばかりになる齒の黄色い徒弟僧の案内で、半蔵は和
 尚の方丈に導かれた。

「これは。これは。」

相変わらずの調子で半蔵らを迎えるのは松雲だ。客に親疎を問わず、好悪^{こうお}を選ばずとは
 この人のことだ。ことに頭は剃りたてで、僧貌も一層柔和に見える。本堂の一部を仮の教

場にあててから、半蔵を助けて村の子供たちを教えているのもこの和尚だが、そういう仕事の上でかつていやな顔を彼に見せたこともない。しばらく半蔵はその日の来意を告げることを躊躇した。というの、対坐する和尚の沈着な様子が容易にそれを切り出させないからであつた。それに、彼はこの人が仏弟子ながら氏神をも粗末にしないで毎月朔日十五日には荒町にある村社への参詣を怠らないことを知っていたし、とても憎むことのできないような善良な感じのする心の持ち主であることをも知っていたからで。

しかし、半蔵の思い立つて来たことは種々な情実やこれまでの行きがかりにのみ拘泥すべきことではなかつた。彼は伊之助と共に、筑摩県からの布告の趣意を和尚に告げ、青山小竹両家の改典のことを断わつた。なお、これまで青山の家では忌日供物の料として年々齋米二斗ずつを寺に納め来たつたもので、それもこの際、廃止すべきところであるが、旧義を存して明年からは米一斗ずつを贈るとも付け添えた。この改典は廃仏を意味する。これはさすがの松雲をも驚かした。なぜかなら、この万福寺を建立したそもその人は、そういう半蔵が祖先の青山道齋だからである。また、かつて松雲がまだ僧智現と言つたところから一方ならぬ世話になり、六年行脚の旅の途中で京都に煩つた時にも着物や路銀を送つてもらつたことがあり、本堂の屋根の葺き替えから大太鼓の寄付まで何く

れとめんどろを見てくれたことのあるのも、伊之助の養父金兵衛だからである。

「いや、御趣意のほどはわかりました。よくわかりました。わたしは他の僧家とも違ひまして、神道を基とするのが自分の本意ですから、すこしもこれに異存はありません。これと申すも皆、前世の悪報です。やむを得ないことです。まあ、お話はお話として、お茶を一つ差し上げたい。」

そう言いながら、松雲は座を立つた。ぐらぐら煮立つた鉄瓶てつびんのふたを取って水をさすことも、煎茶せんちゃ茶碗ちやわんなどをそこへ取り出すことも、寺で製した古茶を入れて慇懃いんぎんに客をもてなすことも、和尚はそれを細心な注意でやった。娑婆しやばに生涯しょうがいを寄せる和尚はその方丈を幻の住居すまいともしているので、必ずしもひとりをのみ楽しもうとばかりしている人ではない。でも、冷たく無関心になったこの世の人の心をどうかして揺り起こしたいと考えるような平田門人なぞの気分とはあまりにも掛け離れていた。

「どれ、位牌いはいどう堂の方へ御案内しましょう。おそかれ早かれ、こういう日の来ることはわたしも思っておりまして。神葬祭のことは、あれは和宮かずのみやさまが御通行のころからの問題ですからな。」

という和尚は珠数じゆずを手にしながら、先に立つて、廊下づたいに本堂の裏手へと半蔵らを

導いた。靈膳^{れいぜん}、茶、香花^{こうげ}、それに燭台^{しよくだい}のそなえにも和尚の注意の行き届いた薄暗い部屋^{へや}がそこにあつた。

青山家代々の位牌は皆そこに集まっている。恵那山^{えなさん}のふもとに馬籠の村を開拓したり、万福寺を建立したりしたという青山の先祖は、その生涯にふさわしい万福寺^{まんぶくじ}殿昌屋^{ぢやうおくぢ}常久^{ようきう}禪定^{ぜんじやう}門^{もん}の戒名で、位牌堂の中央に高く光っているのも目につく。黒くうるしを塗った大小の古い位牌には、丸に三つ引きの定紋を配したのがあり、あるいはその省いたのもある。その面^{おもて}に刻した戒名にも、皆それぞれの性格がある。これは僧侶の賦与したものであるが、一面には故人らが人となりをも語っている。鉄巖^{てつがん}宗寿^{そうじゆ}庵主^{あんしゆ}のいかめしいのもあれば、默翁^{もくおう}宗樹^{そうじゆ}居士^{こじ}のやさしげなのもある。その中にまじつて、明真^{みやうしん}慈徳^{じとく}居士^{こじ}、行年七十二歳とあるは半蔵の父だ。清心^{せいしん}妙浄^{みやうじやう}大姉^{だいし}、行年三十二歳とは、それが彼の実母だ。彼は伊之助と共に、それらの位牌の並んでいる前を往つたり来たりした。松雲は言つた。

「時に、青山さん、わたしは折り入つてあなたにお願いがあります。御先祖の万福寺殿、それに徳翁^{とくおう}了寿^{りやうじゆ}居士^{こじ}御夫婦——お一人^{ひとり}は万福寺の開基、お一人は中興の開基でもありますから、この二本の位牌だけはぜひとも寺にお残しを願いたい。」

これには半蔵もうなずいた。

三

明治七年は半蔵が松本から東京へかけての旅を思い立った年である。いよいよ継母おまんも例の生家^{さと}へ世話しようとしたお糸^{くめ}の縁談を断念し、残念ながら結納品^{ゆいのうひん}をお返し申すとの手紙を添え、染め物も人に持たせてやって、稲葉家との交渉を打ち切った。お糸はもとより、文字どおりの復活を期待さる身だ。彼が暮田正香の言葉なぞを娘の前に持ち出して見せ、多くの国学諸先輩が求めようとしたのも「再び生きる」ということだと語り聞かせた時、お糸は目にいっぱい涙をためながら父の励ましに耳を傾けるほどで、一日は一日よりその氣力を回復して来ている。妻のお民は、と見ると、泣いたあとでもすぐ心の空の晴れるようなのがこの人の持ち前だ。あれほど不幸な娘の出来事からも、母としてのお民は父としての彼が受けたほどの深い打撃を受けていない。それに長男の宗太も十七歳の春を迎えていて、もはやこれも子供ではない。今は留守中のことを家のものに頼んで置いて、自己の進路を開拓するために、しばらく郷里を離れてもいい時が来たように彼には思

われた。

半蔵が旅に出る前のこと。ある易者が来て馬籠まごめの旅籠屋はたごやに逗留とうりゆうしていた。めずらしく半蔵は隣家の伊之助にそそのかされて、その旅やつれのした易者を見に行つた。古い袋から筮ぜいちく竹を取り出して押し頂くこと、法のごとくにそれを数えること、残つた数から陰陽を割り出して算木さんぎをならべること、すべて型どおりに行なつたあとで、易者はまず伊之助のためにその年の運勢を占つたが、卦けにあらわれたところは至極しごく良い。碎いて言えば、願う事の成就じようじゆするかたちである。商売をすれば当たるし、尋ね物が出るし、待ち人は来るし、縁談はまとまるという。ところが、半蔵の順番になつて、易者はまた彼のためにも占つたが、好運な隣人のような卦は出なかつた。

その時の半蔵を前に置いて、首をひねりながらの易者の挨拶あいさつに、

「どうも、あなたが顔色の艶つやから言つても、こんなはずはないと思われるのですが。易のおもてで言いますと、この卦に当たつた人は運勢いまだ開けずとあきらめて、年回りを畏れおそ、随分身をつつしみ、時節の到来を待てとありますな。これはよいと申し上げたいが、どうもそう行きません。まあ、本年いっぱいはお動きにならない方がよろしい。」とある。

半蔵はこの易者を笑えなかった。家に戻^{もど}つて旅のしたくを心がける間にも、彼は易者に言われたことから名状しがたい不安を引き出された。そういう彼が踏んで行くところは、歩けば歩くほど路^{みち}も狭く細かったが、なお、先師没後の門人に残されたものは古い神社の方角にあると考えて、一步たりともその方に近づく手がかりの与えらるることを念じた。神社に至るの道はまず階段を踏まねばならないと同じ道理で、彼とてもその手段を尽くさねばならなかった。これは万福寺の住職なぞが言うところの出家の道に似て、非なるものである。彼の願いは神から守られることばかりでなく、神を守りに行くことであつた。しかし、この事はまだ家のものにも話さずにある。彼は見ず知らずの易者なぞに自分の運勢を占つてもらつたことを悔いた。

五月中旬のはじめに彼は郷里を出発したが、親しい人たちの見送りも断わり、供も連れずであつた。過ぐる年、彼が木曾十一宿総代の一人として江戸の道中奉行所から呼び出されたのは、あれは元治^{げんじ}元年六月のことであつたが、今度はあの時のような庄屋仲間の連れもない。新しい郡県の政治もまだようやく端緒についたばかりのような時で、木曾谷は三大区にわかれ、大小の区長のほかに学区取り締まりなるものもでき、谷中村々の併合もそこそこに行なわれていた。その後の山林事件の成り行きも心にかかつて、鳥居峠まで行

つた時、彼はあの御嶽遙拜所おんたけようはいじよの立つ峠の上の高い位置から木曾谷の方を振り返って見た。松本まで彼が動いた時は、ちょうどこの時勢に応ずる教育者のための講習会が筑摩県ちくま主催のもとに開かれているおりからであつた。松本宮村町瑞昌寺ずいしょうじ、それが師範学科の講習所にあてられたところで、いずれも相応な年配の人たちが県庁の募集に応じて集まつて来ていた。半蔵が自分の村の敬義学校のために一人の訓導を見つけたのも、その松本であつた。早速さつそく彼はその人を推薦することにした。今こそ馬籠でも万福寺を仮教場にあてているが、寺の付近に普請中の仮校舎も近く落成の運びであることなぞをもその人に告げた。小倉啓助がその人の名で、もと禰宜ねぎの出身であるという。至極ちよく直な人物である。このよきような教師を村に得ただけでも、彼は安心して東京の方に向かうことができるわけだ。もともと彼は年若な時分から独学の苦心を積み、山里に生まれて良師のないのを悲しみ、未熟な自分を育てようとしたばかりでなく、同時に無知な村の子供を教えることから出発したような男で、子弟教育のことにかけては人一倍の関心いだを抱いているのである。

新時代の教育はこの半蔵の前にひらけつつあつた。松本までやって来て見て、彼は一層その事を確かめた。それは全く在来の寺小屋式を改め、欧米の学風を取りいれようとしたもので、師範の講習もその趣意のもとに行なわれていた。その教育法によると、小学は上

下二等にわかれたる。高等を上とし、尋常を下とする。上下共に在学四か年である。下等
 小学生徒の学齡は六歳に始まり九歳に終わる。その課程を八級にわかし、毎級六か月の修
 業と定め、初めて学に入るものは第八級生とするの順序である。教師の心得べきことは何
 よりもまず世界の知識を兒童に与えることで、啓蒙けいもうということに重きを置き、その教則
 まで従来の寺小屋にはないものであつた。単語図を教えよ。石盤を用いてまず片仮名の字
 形を教え、それより習字本を授けよ。地図を示せ。地球儀を示せ。日本史略および万国地
 誌略を問答せよの類たぐいだ。試みに半蔵は新刊の小学読本を開いて見ると、世界人種のことか
 ら始めてある。そこに書かれてあることの多くはまだ不消化な新知識であつた。なお、和
 算と洋算とを学校に併あわせ用いたいと彼の意見にひきかえ、筑摩県の当局者は洋算一点張
 りの鼻息の荒さだ。いろいろ彼はおもしろくなく思い、長居は無用と知つて、そこそこに
 松本を去ることにした。ただ小倉啓助のような人を自分の村に得ただけにも満足しようと
 した。彼も心身の過労には苦しんでいた。しばらく休暇を与えられたいとの言葉をそこに
 残し、東京の新しい都を見うる日のことを想像して、やがて彼は塩尻しおじり、下諏訪しもすわから追
 分け、軽井沢かるいざわへと取り、遠く郷里の方まで続いて行っている同じ街道を踏んで碓氷峠うすいとうげ
 を下つた。

半蔵が多くの望みをかけてこの旅に出たころは、あだかも前年十月に全国を震い動かし、大臣参議連が大争いに引き続き、戊辰ぼしん以来の政府内部に分裂の行なわれた後に当たる。場合によつては武力に訴えても朝鮮問題を解決しようとする西郷さいこう隆盛たかもりら、欧米の大に屈して朝鮮の小を討うとうとするのは何事ぞとする岩倉大使および大久保利通おおくぼとしみちらの帰朝者仲間、かつては共に手を携えて徳川幕府打倒の運動に進み、共同の敵たる慶喜よしのぶを倒し、新国家建設の大業に向かった人たちも、六年の後にはやかましい征韓論せいかんろんをめぐつて、互いにその正反対をかつての朋友ほうゆうに見いだしたのであった。

明治御一新の理想と現実——この二つのものの複雑微妙な展ひらきは決してそう順調に成し就とげられて行つたものではなかった。その理想のみを見て現実を見ないものの多くはつまずいた。その現実のみを見て理想を見ないものの多くもまたつまずいた。ともあれ、千八百六十六年以来諸外国政府の代表者と日本国委員との間に取り結ばれた条約の改正も、朝鮮問題も、共にこの国発展の途上に横たわる難関であつたことは争われない。岩倉大使が欧米歴訪の目的は、朝廷御新政以来の最初の使節として諸外国との修好にあつたらしく、

条約改正のことはその期するところでなかったとも言われる。むしろ大使はその問題に触れないことを約して国を出発せられたともいう。その方針が遠い旅の途中で変更せられなかったら、この国のものもつと早く大使一行の帰朝を迎え得たであろう。明治五年の五月には、大使らは条約改正の日本全権でもあつて、ついに前後三年にまたがる月日を海の外に費やされた。外国交渉の不結果、随員の不和、言語の困難——これを一行総員百七名からの従者留学生を挙げて国を離れたことに思い比べ、品川の沖には花火まで揚げて見送るものもあつた出発時の花やかさに思い比べると、おそらく旅の末はさびしく、しかも苦い経験であつたろう。たとい大使らの欧米訪問が、近代国家の形態を視察することに役立ち、諸外国に対する新政府の位置を強固にすることに役立ち、率先奮励して開明の域に突進する海外留学の気象を誘導することにも役立ったとしても、その長い月日の間、岩倉、大久保、木戸らのごとき柱石たる人々が廃藩置県直後のこの国を留守にしたことは、容易ならぬ結果を招いた。郡県の政治は多くの人民の期待にそむき、高松、敦賀、大分、名東、北条、その他福岡、鳥取、島根諸県には新政をよろこばない土民が蜂起して、斬罪、絞首、懲役等の刑に処せられた不幸なものが万をもって数うるほどの驚くべき多数に上つたのも、それらは皆大使一行が留守中にあらわれて来た現象であつた。

のみならず、時局の不安に刺激され、大使らの留守中を好機として、武力による改革を企つるものが生まれた。

いつたい、薩長土三藩が朝廷に献じた兵は皆、東北戦争当時の輝かしい戦功の兵である。

彼らが位置よりすれば、それらの兵をもつて朝廷の基礎を固め、廃藩を断行し、長く徳川氏の旗本八万騎のごときものとなつて、すこぶる優待さるるもののように考えた者が多かつたのである。高知藩の谷干城たにたてきのような正直な人はそのことを言つて、飛鳥尽きて良弓収まるのたとえを引き、彼ら戦功の兵も少々厄介やっかいし視せらるる姿になつて行つたと評した。当時軍隊統御の困難は後世から想像も及ばないほどで、時事を慨し、種々さまざまな議論を起こし、陸軍省に迫り、山県近衛都督やまがたこのえとくですらそのためしばしば辞職を申しいで、後には山県もその職を辞して西郷隆盛が都督になつたほどであつたとか。近衛兵の年限も定まつて一般徴兵の制による事と決してからは、長州以外の二藩の兵は非常に不快の念を抱いたいだ。ことに徴兵主義に最も不満なものは桐野利秋きりのとしあきであつたという。西の勝利者、ないし征服者の不平不満は、朝鮮問題を待つまでもなく、早くも東北戦争以後の社会に胚は胎いたしていた。

そこへ外国交渉のたどたどしさと、当時の朝鮮方面よりする東洋の不安だ。いわゆる壮

兵主義を抱く豪傑連の中には、あわただしい世態風俗の移り変わりを見て、追い追いの文明開化の風の吹き回しから人心うたた浮薄に流れて来たとの慨なげきを抱き、はなはだしきは楠公なんこうを権助ごんすけに比するほどの偶像破壊者があらわれるに至つたと考え、かかる天下柔弱けいじよう軽佻の氣風を一変して、国勢の衰えを回復し諸外国の覬覦きぐゆを絶たねばならないとの意見を持つものがあるようになった。古今内外の歴史を見渡して、外は外国に侮られ、内は敵愾てきがの氣を失い、人心は懦弱に風俗は日々頹廢たいはいしつつあるような危殆きたいきわまる国家は、これを救うに武の道をもつてするのほか、決して他の術がないとは、それらの人たちが抱いて来た社会改革の意見であつた。それには文武共に今日改造の途上にあることを一応考慮しないではないが、ひとまず文教をあと回しにする、この際は断然武政を布しいて国家の独立を全まうするためには外国と一戦するの覺悟を取る、それが国を興すの早道だといふのである。そして事は早い方がいい、今のうちにこの大計を定め国家の進路を改める方がいい、これを決行する時機は大使帰朝前にあるといふのである。なぜかなら、大使帰朝の後はおのずから大使一行の意見があつて、必ずこの反対に出づるであらうと予測せられたからであつた。その武政を立つる方案によると、全国の租税を三分して、その二分を陸海軍に費やす事、すでに士族の常職を解いた者は従前に引き戻もどす事、全国の士族を配してことごと

く六管鎮台の直轄とする事、丁年以上四十五歳までの男子は残らず常備予備の両軍に編成する事、平民たりとも武事を好む者はその才芸器量に応じすべて士族となす事、全国男子の風教はいわゆる武士道をもつて陶冶する事、左右大臣中の一人は必ず大將をもつてこれに任じ親しく陛下の命を受けて海陸の大権を収める事、これを約めて言えば武政をもつて全国を統一する事である。この意見を懷にして西郷に迫るものがあつたが、隆盛は容易に動かなかつた。彼は大使出発の際に大臣参議のおのおのが誓つた言葉をそこへ持ち出して見せ、大使帰朝に至るまではやむを得ない事件のほかは決して改革しないとの誓言のあることを言い、今この誓言にそむいて、かかる大事を執行するの不可なるを説き、大使帰朝の後を待てと言いさとした。隆盛は寡言の人である。彼は利秋のように言い争わなかつた。しかしもともとの彼の武人氣質は戊辰当時の京都において慶喜の処分問題につき勤王諸藩の代表者の間に激しい意見の衝突を見た時にも、剣あるのみの英断に出、徳川氏に対する最後の解決をそこに求めて行つた人である。その彼は容易ならぬ周囲の形勢を見、部下の要求の制えがたいことを知り、後には自ら進んで遣韓大使ともなり朝鮮問題の解決者たることを志すようになった。岩倉大使一行の帰朝、征韓論の破裂、政府の分裂、西郷以下多くの薩人の帰国、参議副島、後藤、板垣、江藤らの辞表奉呈はその結果であつた。上書

してすこぶる政府を威嚇いかくするの意を含めたものもある。旗勢をさかんにし風靡ふうびするの徒が辞表を奉呈するものは続きに続いた。近衛兵はほとんど瓦解がかいし、三藩の兵のうちで動かないものは長州兵のみであつた。明治七年一月には、ついに征韓派たる高知県士族武市たけちく熊吉まきち以下八人のものの手によつて東京赤坂あかさかの途上に右大臣岩倉具視いともみを要撃し、その身を傷つくるまでに及んで行つた。そればかりではない。この勢いの激するところは翌二月における佐賀県愛国党の暴動と化し、公然と反旗をひるがえす第一の烽火のうしが同地方に揚がった。やがてそれは元参議江藤新平らの位階褫奪ちだつとなり、百三十六人の処刑ともなつて、闇やみの空を貫く光のように消えて行つたが、この内争の影響がどこまで及んで行くとも測り知られなかつた。

時には馬、時には徒歩の旅人姿で、半蔵が東京への道をたどった木曾街道の五月は、この騒ぎのうわさがややしずまって、さながら中央の舞台は大荒れに荒れた風雨のあとのようだと言わるるころである。

四

「塩、まいて、おくれ。」

塩、まいて、おくれ。」

木曾街道の終点とも言うべき板橋から、半蔵が巢鴨、本郷通りへと取って、やがて神田明神の横手にさしかかった時、まず彼の聞きつけたのもその子供らの声であつた。町々へは祭りの季節が来ているところに、彼も東京にはいったのだ。

時節がら、人気を引き立てようとする市民が意気込みのあらわれか、町の空に響く太鼓、軒並みに連なり続く祭礼の提灯などは思いのほかのにぎわいであつた。時には肩に掛けた櫛の鈴を鳴らし、黄色い団扇を額のところに差して、後ろ鉢巻姿で佯天王を押して行く子供の群れが彼の行く手をさえぎつた。時には鼻の先の金色に光る獅子の後ろへ同じそろいの衣裳を着けた人たちが幾十人となくしたがって、手に手に扇を動かしながら町を通り過ぎる列が彼の行く手を埋めた。彼は右を見、左を見して、新規にかかった石造りの目鏡橋を渡つた。筋違見附ももうない。その辺は広小路に変わって、柳原の土手につづく青々とした柳の色が往時を語り顔に彼の目に映つた。この彼が落ち着く先は例の両国の十一屋でもなかつた。両国広小路は変わらずにあつても、十一屋はなかつた。そこでは彼の懇意にした隠居も亡くなつたあとで、年のちがったかみさんは旅人宿

を畳み、浅草あさくさの方に甲子飯きのえねめしの小料理屋を出しているとのことである。足のついでに、かねて世話になった多吉夫婦の住む本所相生町ほんじよあいおいちようの家まで訪ねて行って見た。その家族はまた、浅草左衛門町さへもんちようの方へ引き移っている。そうこうするうちに日暮れに近かったので、浪花講なにわこうの看板を出した旅人宿を両国に見つけ、ひとまず彼はそこに草鞋わらじの紐ひもを解いた。

東京はまず無事。その考えに半蔵はやや心を安んじて、翌日はとりあえず、京都以来の平田鉄胤かねたね老先生をその隠棲いんせいに訪ねた。彼が亡き延胤のぶたね若先生くやの弔くやみを言い入れると、師もひどく力を落としていた。その日は尾州藩出身の田中不二麿ふじまろを文部省に訪ねることなぞの用事を済まし、上京三日目の午後によく彼は多吉夫婦が新しい住居すまいを左衛門橋の近くに見つけることができた。

多吉、かみさんのお隅すみ、共に半蔵には久しぶりにあう人たちである。よくそれでも昔を忘れずに訪ねて来てくれたと夫婦は言つて、早速荷物と共に両国の宿屋を引き揚げて来るよう勧めてくれたことは、何よりも彼をよろこばせた。

「お隅、青山さんは十年ぶりで出ていらしたとよ。」

そういう多吉も変われば、お隅も変わった。以前半蔵が木曾下四宿きそしもししゆく総代の庄屋として

江戸の道中奉行から呼び出されたおり、五か月も共に暮らして見たのもこの夫婦だ。その江戸を去る時、紺木綿こんもめんの切れの編みまぜである二足の草鞋わらじをわざわざ餞別せんべつとして彼に贈ってくれたのもこの夫婦だ。

もとより今度の半蔵が上京はただの東京見物ではない。彼が田中不二麿を訪ねた用事というもほかではない。不二麿は尾州藩士の田中寅三郎とらさぶろうと言ったところからの知り合いの間がらで、この人に彼は自己の志望を打ちあけ、その力添えを依頼した。旧領主慶勝公よしかつ時代から半蔵父子とは縁故の深い尾州家と、名古屋藩の人々とは、なんと言っても彼にとつて一番親しみが深いからであつた。名古屋の藩はん費こうめい明倫堂めいりんどうに学んだ人たちの中から、不二麿のような教育の方面に心を砕く人物を出したことも、彼には偶然とは思われない。今は文部教部両省合併で、不二麿も文部大丞だいじようの位置にあるから、この省務一切を管理する人に引き受けてもらつたことは、半蔵としても心強い。もつとも、不二麿は民知の開発ということに重きを置き、欧米の教育事業を視察して帰つてからはアメリカ風の自由な教育法をこの国に採り入れようとしていて、すべてがまだ端緒についたばかりの試みの時代だとする考え方の人であつたが。

多吉はまた半蔵を見に来て言つた。

「どうです、青山さん。江戸のころから見ると、町の様子も変わりましたろう。去年の春から、敵打かたきうちちの厳禁——そうです、敵打ちの厳禁でさ。政府も大きな仕事をやったもんさね。親兄きょうだい弟あだの讐あだを勝手に復すかえようなことは、講釈師の昔話になってしまいました。それだけでも世の中は変わって来ましたね。でも、江戸に長く住み慣れたものから見ると、徳川さまは実にかあいそうです。徳川さまの御恩を忘れちゃならない、皆それを言ってます。お隅のやつなぞもね、葵あおいの御紋を見ると涙がこぼれるなんて、そう言ってますよ。」

東京まで半蔵が動いて見ると、昔気質かたぎの多吉の家ではまだ行燈あんどんだが、近所ではすでにランプを使っているところがある。夕方になると、その明るい光が町へもれる。あそこでも、ここでもというふうに。燈火ともしびすらこんなに変わりつつあった。

今さら、極東への道をあけるために進んで来た黒船の力が神戸大坂の開港開市を促した慶応三、四年度のことを引き合いに出すまでもなく、また、日本紀元二千五百余年来、未曾有みぞうの珍事であるとされたあの外国公使らが京都参内当時のことを引き合いに出すまでもなく、世界に向かつてこの国を開いた影響はいよいよ日本人各自の生活にまであらわれて

来るようになった。ことに、東京のようなところがそうだ。半蔵はそれを都会の人たちの風俗の好みにも、衣裳いしやうの色の移り変わりにもみて取ることができた。うす暗い行燈や蠟燭ろうそくをつけて夜を送る世界には、それによく映る衣裳の色もあるのに、その行燈や蠟燭にかわる明るいランプの時が来て見ると、今までうす暗いところで美しく見えたものも、もはや見られない。多吉の女房お隅はそういうことによく気のつく女で、近ごろの婦人が夜の席に着る衣裳の色の変わって来たことなぞを半蔵に言ってみせ、世の中の流行が変わる前に、すでに燈火が変わって来ていると言ってみせる。

多吉夫婦は久しぶりで上京した半蔵をつかまえて、いろいろと東京の話をして聞かせるが、寄席よせの芸人が口に上る都々逸とどいゝたぐいの類まで、英語まじりのものが流行して来たと云って半蔵を笑わせた。お隅は、一鵬いちほう斎さい芳藤よしふじ画えがくとした浮世絵なぞをそこへ取り出して来る。舶来と和物との道具くらべがそれぞれの人物になぞらえて、時代の相すがたを描き出してある。その時になって見ると、遠い昔に漢土の文物を採り入れようとした初めのころのこの国の社会もこんなであつたろうかと疑わるばかり。海を渡って来るものは皆文明開化と言われて、散切り頭さんぎぎをたたいて見ただけでも開化した音がすると唄うたわれるほどの世の中に変わって来た。夏は素裸ふんどし、褌一つ、冬はどてら一枚で、客があると、どんな寒中でも丸裸にな

つて、ホイ籠^{かご}ホイ籠とかけ出す駕籠屋^{かごや}なぞはもはや顔色がな^い。年じゅう素股^{すまた}の魚屋から、裸商売^{つくだ}の佃^{つくだ}から来るあさり売りまで、異国の人に対しては、おのれらの風俗を赤面するかに見える。

旅の身の半蔵は、用達^{ようた}しのついで、あるいは同門の旧知なぞを訪ね^{たず}るためあちこちと出歩くおりごとに、町々の深さにはいつて見る機会を持った。東京は、どれほどの広さに伸びている大きな都会とも、ちよつと見当のつけられないことは、以前の彼が江戸出府のおりに得た最初の印象とそう変わりがなくらいであつた。ここに住む老若男女の数も、彼にはおよそどれほどと言つて見ることもできない。あるいは江戸時代よりはずつと減少していると言ふものもあるし、あるいはこの新しい都の人口の増加は将来測り知りがたいものがあると言ふものもある。元治年度の江戸を見た目で、東京を見ると、今は町々の角^{かど}に自身番もなく、番太郎小屋もない。わずかに封建時代の形見のような木戸のみの残つたところもある。旧城郭の関門とも言ふべき十五、六の見附^{みつけ}、その外郭にめぐらしてあつた十か所の関門も多く破壊された。彼は多吉夫婦と共に以前の本所相生町の方^{ひび}にいて、日比谷^やにある長州屋敷の打ち壊^{こわ}しに出あつたことを覚えてゐるが、今度上京して見ると、その辺は一面の原だ。大小の武家屋敷の跡は桑園茶園に変わったところもある。彼が行く先に

見つけるものは、かつて武家六分町人四分と言われたこの都会に大きな破壊の動いた跡を語って見せていないものはなかった。

でも、東京は発展の最中だ。日本陣屋時代に宿場と街道の世話をした経験のある半蔵は、評判な銀座の方まで歩いて行つて見て、そこに広げられた道路をおよそ何間なんげんと数え、めずらしい煉瓦建築れんがの並んだ二階建ての家々の窓と丸柱とがいずれも同じ意匠から成るのをながめた。そこは明治五年の大火以来、木造の建物を建てることを禁じられてからできた新市街で、最初はだれ一人ひとりその煉瓦の家屋にはいる市民もなく、もし住めば必ず青ぶくれにふくれて、死ぬと言いはやされたという話も残っている。言つて見れば、そのころの銀座は香具師やしの巣である。二丁目の熊くまの相撲すもう、竹川町の犬の踊り、四丁目の角の貝細工、その他、砂書き、阿呆陀羅あほうだら、活惚かつぼれ、軽業かるわざなどいろいろな興行で東京見物の客を引きつけているところは、浅草六区のにぎわいに近い。目ざましい繁はんじょう昌しょうを約束するようなその界限かいがいは新しいものと古いものとの入れまじりで雑然紛然としていた。

今は旅そのものが半蔵の身にしてみても、見るもの聞くものの感じが深い。もはや駕籠かごもすたれかけて、一人乗り、二人乗りの人力車じんりきしゃ、ないし乗合馬車がそれにかわりつつある。行き過ぎる人の中には洋服姿のものを見かけるが、多くはまだ身についていない。中には

洋服の上に羽織はおりを着るものがあり、切り下げ髪に洋服で下駄げたをはくものもある。長髪に月さ代かやきをのばして仕合い道具を携えるもの、和服に白い兵児帯へこおびを巻きつけて靴くつをはくもの、散髪で書生羽織を着るもの、思い思いだ。うわさに聞く婦人の断髪こそやや下火になったが、深い窓から出て来たような少女の袴はかまを着け、洋書と洋傘ようがさとを携えるのも目につく。まったく、十人十色の風俗をした人たちが彼の右をも左をも往いったり来たりしていた。

不思議な縁故から、上京後の半蔵は、教部省御雇いとして一時奉職する身となった。ちように教部省は、文部省と一緒に、馬場先ばばさきの地から常磐橋内ときわばしへ引き移ったばかりで、いろいろな役所の仕事に、国学の畑の人を求めている時であった。この思いがけない奉職は、田中不二麿の勧めによる。彼半蔵の本意はそういうところにあるのではなく、どこか古い神社へ行つて仕えたい、そこに新生涯を開きたいとの願いから、その手がかりを得たいばかりに、わざわざ今度の上京となつたのであるが、しばらく教部省に奉職して時機を待てとの不二麿の言葉もあり、それにむなしい旅りよしょく食くも心苦しいからであつた。教部省は神じんぎ祇局きよくの後身である。平田一派の仕事は、そこに残っている。そんな関係からも、半蔵の

心は動いて、師鉄胤をはじめ、同門諸先輩が残した仕事のあとをも見たいと考え、彼も不二磨の勧めに従った。

とりあえず、彼はこのことを国もとの妻子に知らせ、多吉方を飯の寓居ぐうきよとするよしを書き送り、旅の心もやや定まったことを告げてやった。そういう彼はまだ齋いつきの道の途上にはあったが、しかしあの碓氷峠うすいとうげを越して来て、両国りようこくの旅人宿に草鞋わらじを脱いだ晩から、さらに神田川かんだがわに近い町中の空氣の濃いところに身を置き得て、町人多吉夫婦のような氣の置けない人たちのそばに自分を見つけた日から、ほとんど別の人のような心を起こした。彼はうす暗い中に起きて、台所の裏手にある井戸のそばで、すがすがしい朝の空氣を胸いっばいに吸い、まず自分の身を淨きよめることを始めた。そして毎朝水垢離みずごりを取る習慣をつけはじめた。

今は親しいもののだれからも遠い。一、六と定められた役所の休日に、半蔵は多吉方の二階の部屋へやにいて、そろそろ梅雨の季節に近づいて行く六月の町の空をながめながら、家を思い、妻を思い、子を思った。その時になると、外には台湾生たいわんせいばん蕃征討の事が起こり、内には西南地方の結社組織のうわさなぞがしきりに伝わって来て、息苦しい時代の雲行きはどうしてそうたやすく言えるわけのものでもなかったが、しかしなんとなく彼の胸にま

とまつて浮かんで来るものはある。うっかりすると御一新の改革も逆に流れそうで、心あるものの多くが期待したこの世の建て直しも、四民平等の新機運も、実際どうなるうかとさえ危ぶまれた。

いったん時代から沈んで行つた水戸みとのことが、またしきりに彼の胸に浮かぶ。彼はあの水戸の苦しい党派争いがほとんど宗教戦争に似ていて、成敗利害の外にあったことを思い出した。あの水戸人の持つたくましい攻撃力は敵としてその前にあらわれたすべてのものに向けられ、井伊大老もしくは安藤あんどうろうじゅう老中のような要路の大官にまで向けられたことを思い出した。彼はそれを眼前に生起する幾多の現象に結びつけて見て、かつて水戸から起こつたものが筑波つくばの旗上げとなり、尊攘そんじょうの意志の表示ともなつて、活きた歴史を流れたように、今またその形を変えたものが佐賀にも、土佐にも、薩摩さつまにも活き返りつつあるのかと疑つた。

彼は自分で自分に尋ねて見た。

「それでも復古と言えるのか。」

その彼の眼前にひらけつつあつたものは、帰り来る古代でもなくて、実に思いがけない近ちかつ代よであつた。

第十一章

一

東京の町々はやがてその年の十月末を迎えた。常磐橋内にある教部省では役所のひける時刻である。短い羽織に袴はかまをつけ、それに白足袋しろたび、雪駄せったばきで、懐中にはいっぱいに書物をねじ込みながら橋を渡って行く人は、一日の勤めを終わった役所帰りの半蔵である。

その日かぎり、半蔵は再び役所の門を潜くぐるまい、そこに集まる同僚の人たちをも見まいと思うほどのいらいらした心持ちで、鎌倉河岸かまくらがしのところに黄ばみ落ちている柳の葉を踏みながら、大股おおまたに歩いて行つた。もともと今度の上京を思い立って国を出た時から、都会での流浪生活るろうを覚悟して来た彼である。半年の奉職はまことに短かつたとは言え、とにかくにも彼は神祇局の後身ともいふべき教部省に身を置いて見て、平田一派の諸先輩がそこに残した仕事のあとを見ただけでも満足しようとした。例の浅草左衛門町さえもんちようにある多吉の家をさして帰って行くと、上京以来のことが彼の胸に浮かんで来た。ふと、ある町の角かど

で、彼は足をとめて、ホッと深いため息をついた。その路は半年ばかり彼が役所へ往復した路である。柄がらにもない教部省御雇いとしての位置なぞについたのは、そもそも自分のあやまりであつたか、そんな考えがしきりに彼の胸を往いつたり来たりした。

「これはおれの来くべき路ではなかつたのかしらん。」

そう考えて、また彼は歩き出した。

仮へうきよの寓居と定めている多吉の家に近づけば近づくほど、名のつけようのない寂しさが彼の胸にわいた。彼は泣いていいか笑っていいかわからないような心持ちで、教部省の門を出て来たのである。

左衛門橋に近い多吉夫婦が家に戻もどつて二階の部屋へやに袴をぬいでからも、まだ半蔵はあの常磐橋内の方に身を置くような気がしている。役所がひける前の室内の光景はまだ彼の目にある。そこには担当する課事を終わつて、机の上を片づけるものがある。風呂敷包ふろしきづつみを小脇こわきにかかえながら雑談にふけるものもある。そのそばには手で頤おとがをささえて同僚の話に耳を傾けるのもある。さかんな笑い声も起こっている。日ごろ半蔵が尊信する本居宣もとりのりな

長翁ながおきなのことについて、又聴またききにした話を語り出した一人ひとりの同僚がそこにある。それは本
 居翁でしさいとうひこまろの弟子斎藤彦磨いさみの日記の中に見いだされたことだというのである。ある日、彦磨
 はじめ二、三の内弟子が翁の家に集まって、「先生は実に活神様いきがみさまだ」と話しながら食事
 していると、給仕の下女がにわかに泣き出したというのである。子細をたずねると、その
 女の答えるには、実はその活神様が毎晩のように自分の寝部屋へ見える、うるささのあま
 り、昨夜は足で蹴けつてやったが、そんな立派な活神様では罰が当たって、この足が曲がり
 はしないかと、それで泣いたのだと言われて、彦磨もあいた口がふさがらなかったという
 のである。それを聞くと、そこにいたものは皆笑った。その話をはじめた同僚はますます
 得意になって、「いったい、下女の寝部屋へはいり込むようなものにかぎって、人格者だ」
 とやり出す。この「人格者」がまた一同を笑わせた。半蔵は顔色も青ざめて、その同僚の
 口から出たような話がどこまで本当であるやもわからなかったし、また、斎藤彦磨の日記
 なるものがどこまで信用のできるものかもわからなかったから、それをくどく言い争う気
 にはならなかったが、しかしそこに集まる人たちが鬼の首でも取ったようにそんな話をし
 て楽しむということに愛想あいそをつかした。前に本居宣長がなかったら、平田篤胤あつたねでも古人
 の糟粕そうはくをなめて終わったかもしれない。平田篤胤あつたねがなければ、平田鉄胤かねたねもない。平田

鉄胤がなければ、結局今の教部省というものもなかったかもしれない。そのことがとつきの間に彼の胸へ来た。思わず彼はその同僚の背中を目のさめるほど一つどやしつけて置いて、それぎり役所を出て来てしまった。それほど彼もいらいらとしていた。

十月末のことで、一日は一日より深くなつて行く秋が旅にある半蔵の身にひしひしと感じられた。神田川はその二階の位置から隠れて見えないまでも、ごちやごちやとした建物の屋根の向こうに沈んだ町の空が障子の開いたところから彼の目に映る。長いこと彼はひとりですわつていて、あたりの町のすべてが湿った空氣に包まれて行くのをながめながら、自分で自分のしたことを考えた。

「いくら人の欠点を知つたところで、そんなことが何になろう。」

と考へて、彼はそれを役所の同僚の話に結びつけて見た。

彼はある人の所蔵にかかる本居翁の肖像というものを見たことがある。それは翁が名古屋の吉川義信という画工にえがかせ、その上に和歌など自書して門人に与えたものの一つである。その清い眉にも涼しい目もとにも老いの迫つたという痕跡がなく、まだみずみずしい髪もとりの髻むすを古代紫の緒ひもで茶筌風ちやせんふうに結び、その先を前額の方になでつけたところは、これが六十一歳の翁かと思われるほどの人がその画像の中にいた。翁は自意匠よりなる服

を造り、紗綾形さやがたの地紋のある黒縮緬くろちりめんでそれを製し、鈴屋衣すずのやころもとなえて歌会あるいは
 講書の席上などの式服に着用した人であるが、その袖口そでぐちには紫縮緬の裏を付けて、それ
 がまたおかしくなかったと言わるほどの若々しさだ。早く老けやすいこの国の人たちの
 中であつて、どうしてそれほど若さを持ち続け得たろうかと疑われるばかり。こんな人
 が誤解されやすいとしたら、それこそ翁の短所からでなくて、むしろ晩年に至るまでも衰
 え若葉してやまなかつたような、その長い春にこもる翁の長所からであつたらうと彼に
 は思われる。彼の心に描く本居宣長とは、あの先師平田篤胤に想像するような凜々りりしい容
 貌うぼうの人ともちがつて、多分に女性的なところを持つていた心深い感じのする大先輩であ
 った。そして、いかにもゆつたりとその生涯しょうがいを発展させ、天明てんめいの昔を歩いて行つた
 近つ代ちかよの人の中でも、最も高く見、最も遠く見たものの一人ひとりであつた。そのかわり、先師
 篤胤は万事明け放しで、丸裸になつて物を言つた。そこが多くの平田門人らにとって親し
 みやすくもあつたところだ。本居翁にはそれはない。寛いふところに、ありあまるほどの
 情意を包みながら、言説以外にはそれも打ち出さずに、終生つましく暮らして行かれた
 ようなその人柄は、内弟子にすら近づきがたく思われたふしもあつたであらう。ともあれ、
 日ごろ彼なぞが力と頼む本居翁も口さがない人たちにかかつては、滑稽こっけいな戯画の中の人

物と化した。先輩を活神様にして祭り上げる人たちは、また道化役者にして笑いたがる人たちである。そんな態度が頼みがいなく思われる上に、又聞きにしたくらの人の秘密をおもしろ半分に振り回し、下世話にいう肘鉄を食わせたはしたない女の話なぞに興がつて、さも活神様の裏面に隠れた陰性な放蕩をそこへさけ出したという顔つきでいる。そういう同僚を彼は片腹痛く思った。きく人もまたすこぶる満足したもののごとく、それを笑い楽しむような空気の中で、国学の権威もあつたものではない。そのことがすでに彼には堪え忍べなかつた。

二

「なんだか、ぼんやりした。あのお糸のことがあつてから、おれもどうかしてしまった。はて、おれも路に迷つたかしらん……」

新生涯を開拓するために郷里の家を離れ、どうかして齋の道を踏みみたいと思い立つて来た半蔵は、またその途上にあつて、早くもこんな考えを起こすようになった。

すこしく感ずるところがあつて、常磐橋の役所も退くつもりだ。そのことを彼は多吉夫

婦に話し、わびしい旅の日を左衛門町に送っていた。彼は神田明神の境内へ出かけて行つて、その社殿の片すみにすわり、静肅な時を送つて来ることを何よりの心やりとする。

時に亭主多吉に誘われれば、名高い講釈師のかかるといふ両国の席亭の方へ一緒に足を

向けることもある。そこへ新乗物町に住む医師の金丸恭順が訪ねて来た。恭順はや

はり平田門人の一人である。同門の好みから、この人はなにくれとなく彼の相談相手にな

つてくれる。その時、彼は過ぐる日のいきさつを恭順の前に持ち出し、実はこれこれでお

もしろくなくて、役所へも出ずに引きこもっているが、本居翁の門人で斎藤彦磨のことを

聞いたことがあるかと尋ねた。恭順はその話を聞くと腹をかかえて笑い出した。江戸の人

斎藤彦磨は本居大平翁の教え子である、藤垣内社中の一人である、宣長翁とは時代が

違うというのである。

「して見ると、人違いですかい。」

「まずそんなところだろうね。」

「これは、どうも。」

「そりや君、本居と言つたつて、宣長翁ばかりじゃない、大平翁も本居だし、春庭先生だつても本居だ。」

ふたり
二人はこんな言葉をかわしながら、互いに顔を見合わせた。

恭順に言わせると、宣長の高弟で後に本居姓を継いだ大平翁は早く細君を失われた人であったと聞く。そこからあの篤学な大平翁も他の^{ひと}知らないさびしい思いを経験されたかもしれない。それにしても、内弟子として朝夕その人に親しんで見た彦磨がそんな調子で日記をつけるかどうかも疑わしい上に、もしあの弟子の驚きが今さらのように好色の心を自分の師翁に見つけたということであつたら、それこそ彦磨もにぶい人のそしりをまぬかれまい。まこと国学に心を寄せるほどのものは恋をとがめないはずである。よい人は恋を許すが、そうでない人は恋をとがめるとは、あの宣長翁の書きのこしたものにも見える。

こんな話をしたあとで、

「いやはや、宣長翁も飛んだ濡^{ぬれぎぬ}衣を着たものさね。」

恭順は大笑いして帰って行つた。そのあとにはいくらか心の軽くなった半蔵が残つた。

「よい人は恋を許すが、そうでない人は恋をとがめる」とは恭順もよい言葉を彼のところに残して置いて行つた。彼はそう思った。もし先輩が道化役者なら、それをおもしろがつて見物する後輩の同僚は一層の道化役者ではなからうかと。まったく、男の女にあう路は思ひのほかの路で、へたな理屈にあてはまらない。この路ばかりは、どんな先輩にも過^{あやま}ち

のないとは言えないことであつた。あながちに深く思いかえしても、なおしずめがたく、
 みずからの心にもしたがわれない力に誘われて、よくない事とは知りながらなお忍ぶに忍ば
 れない場合は世に多い。あの彦麿が日記の中にあるというように、大平翁ほどの人がそん
 な情熱に身を任せたろうとは、彼には信じられもしなかったが、仮にそんな時代があつて、
 蒸し暑く光の多い夏の夜などは眠られずに、幾度か寢所を替えられたようなことがあつた
 としても、あれほど他^{ひと}におもねることをしなかつた宣長翁の後継者としては、おのれにお
 もねることをもされなかつたであらう。おそらく、自分はこのとおり愚かしいと言われた
 であらうと彼には思われた。それにしても、本居父子の本領は別にある。宣長翁にあつて
 は、深い精神にみちたものから単なる動物的なものに至るまで——さては、源氏物語の中
 にあるあの薄^{うす}雲^{ぐも}女^{によう}院^{いん}に見るような不義に至るまでも、あらゆる相^{すがた}において好色はあわ
 れ深いものであつた。いわゆる善悪の観念でそれを律することはできないと力説したので
 宣長翁だ。彼なぞの最も知りたく思うことは、いかにしてあの大先輩がそれほどの彼岸^{ひがん}に
 達することができたろうかということにある。その心から彼はあの『玉の小櫛^{たまのおぐし}』を書い
 た翁を想像し、歴代の歌集に多い恋歌、または好色のことを書いた伊勢^{いせ}、源氏などの物語
 に対する翁が読みの深さを想像し、その古代探求の深さをも想像して、あれほど儒者の教

えのやかましく男女は七歳で席を同じくするなど嚴重に戒めたような封建社会の空気の中に立ちながら、実に大胆に恋というものを肯定した本居宣長その人の生涯に隠れている婦人にまでその想像を持って行つて見た。

しかし、半蔵が教部省を去ろうとしたのは、こんな同僚とのいきさつによるばかりではない。なんと言つても、以前の神祇局は師平田鉄胤をはじめ、樹下茂国、六人部雅樂、福羽美静らの平田派の諸先輩が御一新の文教あるいは神社行政の上に重要な役割をつとめた中心の舞台である。師の周囲には平田延胤、師岡正胤、権田直助、丸山作樂、矢野玄道、それから半蔵にはことに親しみの深い暮田正香らの人たちが集まつて、直接に間接に復古のために働いた。半蔵の学友、蜂谷香蔵、今こそあの同門の道づれも郷里中津川の旧廬に帰臥しているが、これも神祇局時代には権少史として師の仕事を助けたものである。田中不二麿の世話で、半蔵がこんな縁故の深いところに来て見たところは、追いつ追いつと役所も改まり、人もかわりしていたが、それでも鉄胤老先生が神祇官判事として在職した当時の記録は、いろいろと役所に残っていた。ちやうど草の香でいっぱいな故

園を訪う心は、半蔵が教部省内の一隅に身を置いた時の心であつた。彼はそれらの諸記録をくりひろげるたびに、あそこにだれの名があつた、ここにだれの名があつたと言つて見て、平田一門の諸先輩によつて代表された中世否定の運動をそこに見渡すことができるように思つた。別当社僧の復飾に、仏像を神体とするものの取り除きに、大菩薩の称号の廃止に、神職にして仏葬を執り行なうものの禁止に——それらはすべて神仏分離の運動にまであふれて行つた国学者の情熱を語らないものはない。ある人も言つたように、従来僧侶でさえあれば善男善女に随喜渴仰されて、一生食うに困らず、葬礼、法事、会式に専念して、作善の道を講ずるでもなく、転迷開悟を勧めるでもなく、真宗以外におおぴらで肉食妻帯する者はなかつたが、だいこく、般若湯、天がい等の何をさす名か、知らない者はなかつたのが一般のありさまであつた。「されば由緒もなき無格の小寺も、本山への献金によつて寺格を進めらるることのあれば、昨日にび色の法衣着たる身の今日は緋色を飾るも、また黄金の力たり。堂塔の新築改造には、勧進、奉化、奉加とて、淨財の寄進を俗界に求むれども、実は強請に異ならず。その堂内に通夜する輩も風俗壊乱の媒たり。」とはすでに元禄の昔からである。全国寺院の過多なること、寺院の富用無益のこゝと、僧侶の驕奢淫逸乱行懶惰なること、罪人の多く出ること、田地境界訴訟の多き

こと等は、第三者の声を待つまでもなく、仏徒自身ですら心あるものはそれを認めるほどの過去の世相であつたのだ。

大きな破壊の動いた跡はそこにも驚かれるほどのものがある。利にさとい寺方が宮公卿みやくげの名目で民間に金を貸し付け、百姓どもから利息を取り立てる行為などはまづ先に鎗玉やりだまにあげられた。仁和寺にんなじ、大覺寺をはじめ、諸門跡もんぜき、比丘尼御所びくにごしよ、院家、院室等の名称は廃され、諸家の執奏おさすりもの、御撫物きとうかんじゆ、祈禱卷数ならびに諸献上物もことごとく廃されて、自今僧尼となるものは地方官庁の免許を受けなければならないこととなつた。虚無僧こむそうの廃止、天社神道の廃止、修験宗しゆげんしゆうの廃止に続いて、神社仏閣の地における女人結界の場処も廃止された。この勢いのおもむくところは社寺領上地の命令となり、表面ばかりの禁欲生活から僧侶は解放され、比丘尼の蓄髪と縁付きと肉食と還俗げんぞくもまた勝手たるべしということになつた。従来、祇園ぎおんの社も牛頭天王ごずと呼ばれ、八幡宮はちまんぐうも大菩薩と称され、大社小祠しょうしは事実上仏教の一付属たるに過ぎなかつたが、天海僧正てんかいそうじよう以来の僧侶の勢力も神仏混淆こんこう禁止令によつて根から覆くつがえされたのである。

半蔵が教部省に出て仕えたのは、こんな一大変革のあとをうけて神社寺院の整理もやや端緒についたばかりのころであつた。かねて神祇官時代には最も重要な地位に置かれてあ

った祭祀さいしの式典すら、彼の来て見たところにはすでに式部寮の所管に移されて、その一事だけでも役所の仕事が平田派諸先輩によつて創めはじられた出発当時の意気込みを失ったことを語っていた。すべてが試みの時であつたとは言え、各自に信仰を異にし意見を異にし氣質を異にする神官僧侶を合同し、これを教導職に補任して、広く国民の教化を行なおうと企てたことは、言わば教部省第一の使命ではあつたが、この企ての失敗に終わるべきことは教部省内の役人たちですら次第にそれを感じていた。初めから一致しがたいものに一致を求め、協和しがたいものに協和を求めたことも、おそらく新政府当局者の弱点の一つであつたろう。ともかくもその国民的教化組織の輪郭だけは大きい。中央に神仏合同の大教院があり、地方にはその分院とも見るべき中教院、小教院、あるいは教導職を中心にする無数の教会と講社とがあつた。いわゆる三条の教則なるものを定めて国民教導の規準を示したのも教部省である。けれども全国の神官と共に各宗の僧侶をして布教に従事せしめるようなことは長く続かなかつた。専断偏頗へんぱの訴えはそこから起つて来て、教義の紛乱も絶えることがない。外には布教の功もあがらないし、内には協和の実も立たない。真宗五派のごときは早くも合同大教院から分離して、独立して布教に従事したいと申し出るような状態にある。半蔵はこんな内部の動揺しているところへ飛び込んで行つたのであつた。

役所での彼の仕事は主として考証の方面で、大教院から回して来るたくさんな書類を整理したり、そこで編集された教書に目を通したり、地方の教会や講社から来るさまざまな質疑に答えたりなぞすることであつた。彼も幾度か躊躇したあとで、全く無経験な事に当たつた。いかんせん、役所の空気はもはや事を企つるという時代でなく、ただただ不平の多い各派の教導職を相手にして妥協に妥協を重ねるというふうであつた。同僚との交際にしても底に触れるものがない。今の教部省が神祇省と言つた一つの時代を中間に置いて、以前の神祇局に集まつた諸先輩の意気込みを想像するたびに、彼は自分の机を並べる同僚が互いの生い立ちや趣味を超えて、何一つ与えようとせず、また与えられようともしないと気がついた時に失望した。のみならず、地方の教会や講社から集まつて来る書類は机の上に堆高^{うずだか}いほどあつて、そこにも彼は無数のばかりしくくだらない質疑の矢面に立たせられた。たとえば、僧侶たりとも従前の服を脱いで文明開化の新服をまといたいが、仏事のほかは洋服を着用しても苦しくないか。神社仏寺とも古来所伝の什物^{じゅうもつ}、衆庶寄付の諸器物、並びに祠堂^{しどうきん}金等はこれまで自儘^{じま}に処分し来たつたが、これも一々教部省へ具状すべき筋のものであるか。従来あつた梓^{あずさみこ}巫^{いちこ}、市子^{きしう}、祈祷^{きつねさ}、狐^{きつねさ}下げなぞの玉占^{たまうら}、口よせ等は一切禁止せらるるか。寺住職の家族はその寺院に居住のまま商業を営んでも苦

しくないか。もし鬘かつらを着けるなら、寺住職者の伊勢参宮も許されるかの類たぐいだ。国学の権威、一代の先駆者、あの本居翁が滑稽こっけいな戯画中の人物と化したのも、この調子の低い空気から出たことだ。

「教部省のことはもはや言うに足りない。」

とは半蔵の嘆息だ。

今は彼も再び役所の同僚の方へ帰って行く気はないし、また帰れもしない。いよいよ役所の仕事からも離れて、辞職の手続きをする心に至って見ると、彼なぞのそう長く身を置くべき場所でないこともはつきりした。

三

半蔵が教部省御雇いとしての日はこんなふうに関わりを告げた。半年の奉職は短かったが、しかし彼はいろいろなことを学んで来た。平田派諸先輩の学者たちが祭政一致の企てに手を焼いたことをも、それに代わって組織された神仏合同大教院のような政府の教化事業が結局失敗に終わるべき運命のものであることを知って来たのも、その短い月日の間で

あつた。ここまで御一新に路みちを開けたあの本居翁のような人さえもが多くの俗吏によつてどんなふうに取り扱われているかを知つて来たのも、またその間であつた。

この彼も、行き疲れ、思い疲れた日なぞには、さすがに昨日のことを心細く思い出す。

十一月にはいつてからは旅寝の朝夕もめつきりと肌寒はだい。どうかすると彼は多吉夫婦が家の二階の仮住居かりずまいらしいところに長い夜を思い明かし、行燈あんどんも暗い枕まくらもとで、不思議な心地こころをたどることもある……いつのまにか彼はこの世の旅の半ばに正路を失つた人である。そして行つても行つても思うところへ出られないようないらした心地で町を歩いてゐる……ふと、途中で、文部大輔たいふに昇進したという田中不二麿に行きあう。そうかと思うと、同門の医者、金丸恭順も歩いている。彼は自分で自分の歩いてゐるところすらわからないような気がして来る。途方に暮れているうちに、ある町の角かどなぞで、彼は平素それほど気にも留めないような見知らぬ人の目を見つける。その目は鋭く彼の方を見つつあるものように、

「あそこへ行くのは、あれはなんだ——うん、総髪そうがみか」とでも言うように彼には感じられる。彼はまだ散切りさんぎにもしないで、総髪うしろを後方にたれ、紫の紐ひもでそれを堅く結び束ねているからであつた。そういう彼はまた、しいてそんな風俗を固守しているでもないが、日

ごろの願いとする古い神社の方へ行かれる日でも来たら、総髪こそその神に仕える身にはふさわしいと思われるからでもあつた。不思議にも、鋭く光った目は彼の行く先にある。

どう見てもそれは恐ろしい目だ。こちらの肩をすくめたくなるような目だ。彼はそんな物言う目を洋服姿の諸官員なぞが通行の多い新市街の中に見つけるばかりでなく、半分まだ江戸の町を見るような唐物店、唐物店、荒物店、下駄店、針店、その他紺の暖簾のれんを掛けた大きな問屋が黒光りのする土蔵の軒を並べた商家の空氣の濃いところにすら見つける。どうかすると、そんな恐ろしい目はある橋の上を通う人力車の中にまで隠れている。こういうのが夢かしらん。そう思いながら、なおその心地をたどりつづけるうちに、大きな河かわの流れているところへ出た。そこは郷里の木曾川きそがわのようでもあるれば、東京の隅田川すみだがわのようでもある。水に棹さおさして流れを下つて来る人がある。だんだんこちらの岸に近づいたのを見ると、その小舟をあやつるのは他の人でもない。それが彼の父吉左衛門だ。父はしきりに彼をさし招く。舟の中には手ぬぐいで髪をつつんだ一人ひとりのうしろ向きの婦人もある。彼は岸から父に声をかけて見ると、その婦人こそ彼を生んだ実の母お袖そでと聞かされて驚く。その時は彼も一生懸命に母を呼ぼうとしたが、あいにく声が咽喉のどのところへ干ひからびついたようになって、どうしてもその「お母さんつか」が出て来ない。はるかに川上から橋の下の方へ渦巻うずま

き流れて来る薄濁りのした水の勢いは矢のような早さで、見るまに舟も遠ざかって行く。思わず彼は自分で自分の揚げたうなり声にびっくりして、目をさました。

こんなに父母が夢にはいったのは、半蔵としてはめずらしいことだった。半年の旅の末にはこんな夢を見ることもあるものか。そう彼は考えて、まだ寢床からはい出すべき時でもない早暁の枕の上で残った夢のころもちに浸っていた。いつでも寢返りの一つも打つと、からだを動かすたびにそんなころもちの消えて行くのは彼の癖であつたが、その明けがたにかぎって、何がなしに恐ろしかった夢の筋から、父母の面影までが、はつきりと彼の胸に残つた。これまで彼が亡き父を夢に見た覚えは、ただの一度しかない。青山の家に伝わる馬籠本陣、問屋、庄屋の三役がしきりに廃止になつた後、父吉左衛門の百か日を迎えたころに見たのがその夢の記憶だ。その時にできた歌もまだ彼には忘れられずにある。

亡き人に言問ひもしつ 幽界に通ふ夢路はうれしくもあるか

こんな自作の歌までも思い出しているうちに、耳に入る冷たい秋雨の音、それにまじつ

てどこからともなく聞こえて来る蟋蟀こおろぎの次第に弱って行くような鳴き声が、いつのまにか木曾の郷里の方へ彼の心を誘った。彼は枕の上で、恋しい親たちの葬つてある馬籠万福寺の墓地を思い出した。妻のお民や四人の子の留守居する家の囲炉裏ばたを思い出した。平田同門の先輩も多くある中で、彼にはことに親しみの深い暮田正香をめずらしく迎え入れたことのある家の店座敷を思い出した。木曾路通過の正香は賀茂の方へ赴任して行く旅の途中で、古い神社へとところざす手本を彼に示したのもあの先輩だが、彼と共にくみかわした酒の上で平田一門の前途を語り、御一新の成就のおぼつかないことを語り、復古が復古であるというのはその達成せられないところにあると語り、しまいには熱い暗い涙がああ先輩の男らしい顔を流れたことを思い出した。彼はまた、松尾大宮司だいぐうじとして京都と東京の間をよく往復するという先輩師岡正胤もろおかまさたねを美濃みのの中津川の方に迎えた時のことを思い出し、その小集の席上で同門の人たちが思い思いに歌を記しるしつけた扇を思い出し、あるものはこうして互いにつつがなくめぐりあつて見ると八年は夢のような気がするとして意味の歌を書いたことを思い出し、あるものは辛いからとも甘いとも言つて見ようのない無限の味わいをふくみ持った世のありさまではあるぞとした意味のものであったことを思い出した。その時の師岡正胤が扇面に書いて彼に与えたものは、この人にしてこの歌がある

かと思われるほどの述懐で、おくれまいと思ったことは昔であるが、今は人のあとにも立ち得ないというような、そんな思ひの寄せてあつたことをも思ひ出した。

やがて彼は床を離れて、自分で二階の雨戸をくつた。二つある西と北との小さな窓の戸をもあけて見たが、まだそこいらは薄暗いくらいだった。階下の台所に近い井戸のそばで水垢離みずごりを取り身を浄きよめることは、上京以来ずっと欠かさずに続けている彼が日課の一つである。その時が来ても、おそろしく路みちに迷つた夢の中のころもちが容易に彼から離れなかつた。そのくせ気分ははつきりとして来て、何を見ても次第に目がさめるような早い朝であつた。雨も通り過ぎて行つた。

「ゆうべは多吉さんもおそかつたようですね。」

「青山さん、さぞおやかましゆうございましたらう。吾夫うちじゃあんなにおそく帰つて来て、戸をたたきましたよ。」

問う人は半蔵、答える人は彼に二階の部屋へやを貸している多吉の妻だ。その時のお隅すみの挨拶あいさつに、

「まあ聞いてください。吾夫でも好きな道と見えましてね、運座でもありますとよくその方の選者に頼まれてまいりますよ。昨晚の催しは吉原の方でございました。御連中が御連中で、御弁当に酒さかななぞは重詰めにして出しましたそうですが、なんでも百韻とかの付合があつて、たいへんくたぶれたなんて、そんなことを言っておそく帰つてまいりました。でも、あなた、男の人のようでもない。吉原まで行つて、泊まりもしないで帰つて来る——意氣地がないねえ、なんて、そう言つて、わたしは笑つちまいりましたよ。」

「どうも、おかみさんのような人にあつちやかないません。」

「ところが、青山さん、吾夫の言い草がいいじゃありませんか。おそく夜道を帰つて来るところが、おれの俳諧ですとさ。」

多吉夫婦はそういう人たちだ。

十年一日のように、多吉は深川米問屋の帳付けとか、あるいは茶を海外に輸出する貿易商の書役とかに甘んじていて、町人の家に生まれながら全く物欲に執着を持たない。どこへ行くにも矢立てを腰にさして胸に浮かぶ発句を書き留めることを忘れないようなところは、風狂を生命とする奇人伝中の人である。その寡欲と、正直と、おまけに客を愛するかみさんの俠氣とから、半蔵のような旅の者でもこの家を離れる気にならない。

この亭主ていしゅに教えられて半蔵がおりおりあさりに行く古本屋が両国薬研堀やげんぼりの花屋敷という界限かいがいの方にある。そこにも変わり者の隠居がいて、江戸の時代から残った俳書、浮世草紙きよぞうしから古いあずま錦絵にしきえの類を店にそろえて置いている。半蔵は亭主多吉が蔵書の大部分もその隠居の店で求めたことを聞いて知っていた。そういう彼も旅で集めた書物はいろいろあって、その中の不用なものを売り払いたいと思い立ち、午後から薬研堀を訪うおとつもりで多吉の家を出た。

偶然にも半蔵の足は古本屋まで行かないうちに懇意な医者たずの金丸恭順がもとに向いた。例の新乗物町という方へ訪ねて行つて見ると、ちょうど恭順も病家の見回りから帰っている時で、よろこんで彼を迎えたばかりでなく、思いがけないことまでも彼の前に持ち出した。その時の恭順の話で、彼はあの田中不二麿が陰ながら自分のために心配してしてくれたことを知った。飛驒水無神社ひだみなしの宮司に半蔵を推薦する話の出ているということをも知った。これはすべて不二麿が斡旋あっせんによるという。

恭順は言った。

「どうです、青山君、君も役不足かもしれないが、一つ飛驒の山の中へ出かけて行くことにしては。」

どうして役不足どころではない。それこそ半蔵にとっては、願ったりかなったりの話のように聞こえた。この飛驒行きについては、恭順はただ不二麿の話を取り次ぐだけの人だと言っているが、それでも半蔵のために心配して、飛驒の水無神社は思ったより寂しく不便なところにあるが、これは決して左遷の意味ではないから、その辺も誤解のないように半蔵によく伝えくれとの不二麿の話であつたと語ったりした。

「いや、いろいろありがとうございました。」と半蔵は恭順の前に手について言った。

「わたしもよく考えて見ます。その上で田中さんの方へ御返事します。」

「そう君に言つてもらうと、わたしもうれしい。時に、青山君、君におめにかけるものがある。」

と恭順は言いながら、黒く塗つた艶消しつやけの色も好ましい大きな文箱ふばこを奥座敷の小櫥こぶすまから取り出して来た。その中にある半紙四つ折りの二冊の手帳を半蔵の前に置いて見せた。

「さあ、これだ。」

恭順がそこへ取り出したのは、半蔵の旧友蜂谷香蔵はちやがこの同門の医者のもとに残して置いて行つたものである。恭順は久しいことそれをしまい込んで置いて、どうしても見当たらなかったが、最近に本箱の抽斗ひきだしの中から出て来たと半蔵に語り、あの香蔵が老師鉄胤

のあとを追って上京したのは明治二年の五月であつたが、惜しいことに東京の客舎で煩^{わづら}ついたと語つた末に言つた。

「でも、青山君、世の中は広いようで狭い。君の友だちのからだをわたしが診^みてあげたなんて、まったく回り回っているもんですわい。」

こんな話も出た。

飛騨行きのことを勧めてくれたこの医者にも、恭順を通じてその話を伝えさせた不二磨にも、また、半蔵が平田篤胤没後の門人であり多年勤王のころざしも深かつた人と聞いてぜひ水無神社の宮司にと懇望するという飛騨地方の有志者にも、これらの人たちの厚意に対しては、よほど半蔵は感謝していいと思つた。やがて彼は旧友の日記を借り受けて、恭順が家の門を出たが、古い神社の方へ行つて仕えられる日の来たことは、それを考えたばかりでも彼には夢のような気さえした。

飛騨の山とは、遠い。しかし日ごろの願いとする齋^{いつき}の道が踏める。それに心を動かされて半蔵は多吉の家に引き返した。動揺して定まりのなかつた彼も大いに心を安んずる時がありそうにも思われて来た。とりあえず、その話を簡単に多吉の耳に入れて置いて、やがてその足で彼は二階の梯子^{はしご}段を上つて行つて見た。夕日は部屋^{へや}に満ちていた。何はとも

あれ、というふうに、彼は恭順から借りて来た友人の日記を机の上にひろげて、一通りざつと目を通した。「東行日記、巳^み五月、蜂谷香蔵」とある。鉄胤先生もまだ元気いっぱいであつた明治二年のことがその中に出て来た。同門の故人野城^{のしろひろすけ}広助のために霊祭をすると言つて、若菜^{わかなもとすけ}基助の主催で、二十余人のものが集まつた記事なども出て来た。その席に参列した先輩師岡正胤は当時^{だんじようだいじんさつ}弾正大巡察であり、権田直助は大学中^{ちゆうはかせ}博士であり、三輪^{みわたもとつな}田元綱は大学少^{しょうじよう}丞であつた。婦人ながらに国学者の運動に加わつて文久年代から王事に奔走した伊那伴^{いなとも}野村出身の松尾多勢^{まつおたせこ}子の名もその参列者の中に見いだされた。香蔵の筆はそうこまかくはないが、きのうはだれにあつた、きようはだれを訪ねたという記事なぞが、平田派全盛の往時を語らないものはない。

医者^{ふばこ}の文箱に入れてあつたせい^ふかして、なんとなく香蔵の日記に移つた薬のにおいまでが半蔵にはなつかしまれた。彼は友人と対坐^{たいざ}でもするように、香蔵の日記を繰り返してそこにいない友人の前へ自分を持つて行つて見た。今は伊勢^{いせ}宇治^{うじ}の今北山に眠る旧師から、生前よく戯れに三蔵と呼ばれた三人の学友のうち、その日記を書いた香蔵のように郷里中津川に病むものもある。同じ中津川に隠れたぎり、御一新後はずっと民間に沈黙^{しんもく}をまもる景蔵のようなものもある。これからさらに踏み出そうとして、人生^{きりよ}羈旅^{きりよ}の別れ路^{みち}に立つ彼

半蔵のようなものもある。

四

飛騨^{ひだ}国大野郡、国幣小社、水無神社^{みなし}、俗に一の宮はこの半蔵を待ち受けているところだ。東京から中仙道^{なかせんどう}を通り、木曾路^{きそじ}を経て、美濃^{みの}の中津川まで八十六里余。さらに中津川から二十三里も奥へはいらなければ、その水無神社に達することができない。旅行はまだまだ不便な当時にあつて、それだけでも容易でない上に、美濃^{みの}の加子母村^{かしもむら}あたりからはいる高^た山路^{かやまみち}と来ては、これがまた一通りの険しさではない。あの木曾谷^{かやまみち}から伊那の方^{ゆきき}へぬける山道ですら、昼でも暗い森に、木から落ちる山蛭^{やまびる}に、往来^{ゆきき}の人に取りつく蝸^{ぶよ}に、勁^{つよ}い風に鳴る熊笹^{くまざさ}に、旅するものの行き悩むのもあの山間^{やまあい}であるが、音に聞こえた高山路はそれ以上の険しさと知られている。

この飛騨行きは、これを伝えてくれた恭順を通して田中不二麿からも注意のあつたように、左遷なぞとは半蔵の思いもよらないことであつた。たとい教部省あたりの同僚から邪魔にされて、よろしくあんな男は敬して遠ざけろぐらいのことは言われるにしても、それ

を意こころにかける彼ではもとよりない。ただ、そんな山間に行つて身を埋うずめるか、埋めないかが彼には先決の問題で、容易に決心がつきかねていた。

その時になると、多くの国学者はみな進むに難い時勢に際会した。半蔵が同門の諸先輩ですら、ややもすれば激しい潮流のために押し流されそうに見えて来た。いったい、幕末から御一新のころにかけて、あれほどの新機運をよび起こしたというのも、その一つは大義名分の声の高まつたことであり、その声は水戸藩にも尾州藩にも京都儒者の間にも起こつて来た修史の事業に根ざしたことであつた。そういう中で、最も古いところに着眼して、しかも最も新しい路をあとから来るものに教えたのは国学者仲間の先せん達であつた。あの賀茂真淵かものまぶちあたりまでは、まだそれでもおもに万葉を探ることであつた。その遺志すがたをついだ本居宣長が終生の事業として古事記を探るようになって、はじめて古代の全き貌すがたを明るみへ持ち出すことができた。そこから、一つの精神が生まれた。この精神は多くの夢想の人の胸に宿つた。後の平田篤胤、および平田派諸門人が次第に実行を思う心はまずそこに胚はいた。胎いたした。なんと言つても「言葉」から歴史にはいったことは彼らの強味で、そこから彼らは懷古でなしに、復古いうことをつかんで来た。彼らは健全な国民性を遠い古代に発見することによつて、その可能を信じた。それにはまずこの世の虚偽を排することから始

めようとしたのも本居宣長であつた。情をも撓めず欲をもいとわれない生の肯定はこの先達があとから歩いて来るものにのこして置いて行つた宿題である。その意味から言つても、国学は近ちかつ代よの学問の一つで、何もそうにわかには時世おくれとされるわけではないのであつた。

もともと平田篤胤が後継者としての鉄胤は決して思いあがつた人ではない。故篤胤翁の祖述者をもつて任ずる鉄胤は、一切の門人をみな平田篤胤没後の門人として取り扱い、決しておのれの門人とは見なさなかつたのが、何よりの証拠だ。多くの門人らもまたこの師の氣風を受け継がないではない。ただ復古の夢を実顕するためには、まっしぐらに駆けり出そうとするような物を企つる心から、時には師の引いた線を超えて埒らちの外へ飛び出したものもあつた。けれども、その単純さから、門人同志の親しみも生まれ、団結も生まれることを知つたのであつた。あの王政復古の日が来ると同時に、同門の人たちの中には武器を執つて東征軍に従うものがあり、軍の嚮導きようどう者たることを志すものがあり、あるいは徳川幕府より僧侶そうりよに与えた宗門権の破棄と神葬復礼との方向に突き進むものがあつて、過去数百年にわたる武家と僧侶との二つの大きな勢力を覆くつがえすことに力を尽くしたというのも、みなその単純な、しかし偽りも飾りもない心から出たことであつた。ことに神仏分離

の運動を起こして、この国の根本と枝葉との関係を明らかにしたのは、国学者の力によることが多いのであり、宗教廓清かくせいの一新時代はそこから開けて来た。暗い寺院に肉食妻帯の嚴禁を廢し、多くの僧尼の生活から人間を解き放ったというのも、虚偽を捨てて自おのずか然らに帰れとの教えから出たことである。すくなくもこの国学者の運動はまことの仏教徒を刺激し、その覺醒かくせいと奮起とを促すようになった。いかんせん、多勢寄つてたかつてすることは勢いを生む。しまいには、地方官の中にすら廢仏の急先鋒きゅうせんぼうとなつたものがあり、従来の社人、復飾の僧侶から、一般の人民まで、それこそ猫も杓子ねこしゃくしもというふうはこの勢いを押し進めてしまつた。廢寺は毀たれ、垣は破られ、墳墓は移され、残つた礎いしづえや欠けた塊つつくれが人をしてさながら古戦場を過ぐるの思いを抱かしめた時は、やがて国学者諸先輩の真意も見失われて行つた時であつた。言つて見れば、国学全盛の時代を招いたのは廢仏運動のためであつた。しかも、廢仏が国学の全部と考えられるようになって、かえつて国学は衰えた。

いかに平田門人としての半蔵なぞがやきもきしても、この頽勢たいせいをどうすることもできない。大きな自おのずか然ふところの懷の中にあるもので、盛りがあつて衰えのないものはないように、一代の学問もまたこの例にはもれないのか。その考えが彼を悲しませた。彼には心にかか

るかずかずのことがあつて、このまま都を立ち去るには忍びなかつた。

まだ半蔵の飛驒行きは確定したわけではない。彼は東京にある知人の誰^{たれ}彼^{かれ}が意見をもそれとなく聞いて見るために町を出歩いた。何も飛驒の山まで行かなくとも他に働く道はあろうと言つて彼を引き止めようとしてくれる人もない。今はそんな時ではないぞと言つてくれるような人はなおさらない。久しく訪^{たず}ねない鉄胤^{てんいん}老先生の隠^{いん}栖^{せい}へも、御無沙汰^{ごぶさた}のおわびをかねてその相談に訪ねて行つて見ると、師には引き止められるかと思ひのほか、一生に一度はそういう旅をして来るのもよからうとの老先生らしい挨拶^{あいさつ}であつた。

その時になつても、まだ半蔵は右すべきか左すべきかの別れ路に迷つていた。彼は自分で自分に尋ねて見た。一筋の新しい進路は開けかかつて来た、神の住居^{すまい}も見えて来た、今は迷うところなくまっすぐにたどりさえすればいい、この期^ごに臨んで何を自分は躊躇^{ちゆうちよ}躊躇^{ちゆうちよ}するのか、と。それに答えることはたやすそうで、たやすすくない。彼が本陣問屋と庄屋を兼ねた時代には、とにかくにも京都と江戸の間をつなぐ木曾街道中央の位置に住んで、山の中ながらに東西交通の要路に立っていた。この世の動きは、否でも応でも馬籠駅長と

しての彼の目の前を通り過ぎた。どうして、新旧の激しい争いがさまざまの形をとつてあふれて来ている今の時に、そんなことは一切おかまいなしで、ただ神を守りにさえ行けばそれでいいというものではなかつた上に、いったん飛驒の山のような奥地に引ッ込んでしまえば容易に出て来られる境涯きやうがいとも思われなかつたからで。

こういう時に馬籠隣家の伊之助でもそばにいたら、とそう半蔵は思わないではなかつた。いかんせん、親しくあの隣人の意見をたたいて見ることもかなわない。この飛驒行きについては、多吉夫婦も実際どう思つていてくれるかと彼は考えた。男まさりな宿のかみさんは婦人としての教養もろくろく受ける機会のなかつたような名もない町人の妻ではあるが、だんだん彼も付き合つて見て、盤根錯節ばんこんさくせつを物ともしないそのまれな氣質を彼も知つていた。人は物を見定めることが大切で、捨つべきことは思い切りよく捨てねばならない、そののできないようなものは一生ウダツが揚がらないと、日ごろ口癖のように言つてゐるのもお隅すみだ。遠い親類より近い他人の言うこともよく聞いて見ようとして、やがて彼は町から引き返した。

多吉の家では、ちようど亭主も今の勤め先にあたる茅場町かやばちやうの店から戻つて来ている時であつた。そこへ半蔵が歸つて行くと、多吉は彼を下座敷に迎え入れて言つた。

「青山さん、いよいよ高山行きと定きまりましたかい。」

「いえ。」と半蔵は答えた。「わたしはまだお請けしたわけじゃありませんがね、まあ、行つて働いて来るなら、今のうちでしょう。ずっと年を取つてから、行かれるような山の中じゃありませんからね。なかなか。」

その時、多吉はお隅の方を見て言つた。「お隅、青山さんが今度いらつしやるところは、東京からだ、お前、百何里というから驚くね。お国からまだ二十里あまりもある。そうさ、二十里あまりさ。それがまた大変な山道で、馬も通わないところだそうさ。青山さんも、えらい奮発さね。」

そういう多吉はもう半蔵が行くことに定きめてしまつてゐる。お隅は、と見ると、このかみさんもまたしいて彼を止めようとはしなかつた。ちょうど師の鉄胤が彼に言つたと同じようなことを言つて、これから神職を奉じに行く彼のために、遠く不自由な旅のしたくのことなぞを心配してくれる。

「多吉さん夫婦だけはおれを止めるかと思つた。」

間もなく二階に上がつて行つてからの半蔵のひとり言だ。ごと

実のところ、彼はだれかに引き止めてもらいたかつた。そして一人ひとりでも引き止めるもの

があつたら、自分でも思い直して見ようと考えていたくらいだ。いかに言つても、これから彼が踏もうとする路は遠く寂しく険しい上に、そこいらはもはや見るもの聞くもの文明開化の風の吹き回しだ。何よりもまず中世の殻を脱ぎ捨てよと教えたあの本居翁あたりが開こうとしたものこそ、まことの近つ代であると思ふ彼なぞにとっては、このいわゆる文明開化がまことの文明開化であるかどうか疑問であつた。物学びする業に心を寄せ、神にも仕え、人をも導こうとするほどのものが、おのれを知らないではかなわないうことであつた。それにはヨーロッパからはいって来るものをも見定めねばならない。辺鄙な飛驒の山の方へ行つて、そののできるかどうか、これまたすこぶる疑問であつた。

五

長い鎖国の歴史をたどると、寛永年代以来世界交通の道も絶え果てていたことは二百二十年もの間にわたつたのである。奉書船以外の渡航禁止の高札が長崎に建てられ、五百石以上の大船を造ることをも許されなかつたのは徳川幕府の方針であつて、諸外国に対する一切の門戸は全く鎖されたようであるが、それでも一つの窓だけは開かれていた。

はじめに唐船からふねがあつたのは長崎の港に来たのは永禄年代えいりくのことであり、南蛮船の来たのは元亀元年げんきの昔にあたる。それから年々来るようになって、ある年は唐船三、四十艘そうを数え、ある年は蘭船らんせん四、五艘を数えたが、ついに貞享じょうきやう元禄年代げんろくの盛時に達した。元禄元年には、実に唐船百十七艘、高麗船こうらい三十三艘、蘭船三艘である。過去の徳川時代において、唐船が長崎に来たのは、貞享元禄のころを最も多い時とする。正保しょうほう元年、明みんちやう朝ちやうが亡びて清朝しんちやうとなつたところから、明末の志士、儒者なぞがこの国に来て隠れるものもすくなくはなく、その後のシナより長崎に渡来する僧侶そうりよで本国の方に名を知られたほどのものも年々絶えなくらいであつた。寛延年代かんえんには幕府は長崎入港の唐船を十五艘に制限し、さらに寛政三年よりは一か年十艘以上の入港を許さなかつた。これらは何を意味するかなら、海の外にあるものがさまざまな形でこの国に流れ込んで来たことを語るものであり、荷田かだのあずまろ春満あたりを先驅とする国学たりとも、言わば外来の刺激を受けて発展したにはかならない。あの本居宣長が儒仏や老荘の道までもその荒い砥石といしとして、あれほど日本的なものを磨きあげたのを見ても、思い半ばに過ぐるものがある。日本の国運循環して、昨日まで読むことを禁じられてあつた蕃書ばんしよも訳され、昨日まで遠ざけられた洋学者も世に出られることとなると、かつて儒仏の道の栄えたように、にわかに洋学の

ひろまつて行くようになったことも不思議はない。この国にはすでに蘭学というものを通して、あるいは漢訳の外国書を通して、長いしたくがあったのだ。天文、地理の学にも、数学、医学、農学、化学にも、また兵学にもというふうに。外国の歴史や語学のことは言うまでもない。まったく、新奇を好むこの国の人たちは、ヨーロッパ人が物の理を考え究めることのはなはだ賢いのに驚き、発明の新説を出すのに驚き、器械の巧みなのに驚き、医薬製煉の道のことにくわしいのにも驚いてしまった。

当時、外国の事情もまだ充分には究められなかったような社会に、西洋は実にすばらしいものだという人をそう遠いところに求めるまでもなく、率先して新しい風俗に移るくらいのものは半蔵が宿の亭主多吉のすぐそばにもいた。その人は多吉の主人筋に当たり、東京にも横浜にも店を持ち、海外へ東海道辺の茶、椎茸しいたけ、それから生糸等を輸出する貿易商であった。そのくせ、多吉は西洋のことなぞに一向無頓着で、主人が西洋人から手に入れて珍重するという寒暖計の性質も知らず、その氣候温度の昇り降りを毎日の日記につけ込むほどの主人が燃えるような好奇心をもよそに、暇さえあれば好きな俳諧はいかいの道に思いを潜めるような人ではあったが。実際、気の早い手合いの中には、今に日本の言葉もなくなつて、皆英語の世の中になると考えるものもある。皮膚の色も白く鼻筋もよくとおつ

た西洋人と結婚してこそ、より優秀な人種を生み出すことができるものもある。こうなると、芝居しばいの役者まで舞台の上から見物に呼びかけて、

「文明開化を知らないものは、愚かでござる。」

と言う。五代目音羽屋おとわやのごときは英語の勉強を始めたと言つて、俳優ながら気の鋭いものだと当時の新聞紙上に書き立てられるほどの世の中になって来ていた。

かくも大きな洪水こうずいが来たように、慶応四年開国以来のこの国のものは学問のしかたから風俗の末に至るまでも新規まき直しの必要に迫られた。日本の中世的な封建制度が内からも外からも崩れて行つて、新社会の構成を急ぐ混沌こんとんとした空気の中に立つものは、眼前に生まれ起る数多くの現象を目撃しつつも、そうはつきりした説を立てうるものはない。といったのは、いずれもその空気の中に動いていて、一切があまりに身に近いからであつた。半蔵にしてからが、そうだ。ただ馬籠駅長として実際その道に当たつて見た経験から、彼の争えないと想つておもいることは、一つある。交通の持ち来たす変革は水のように、あらゆる変革の中の最も弱く柔らかなもので、しかも最も根深く強いものと感ぜらるることだ。その力は貴賤きせん貧富を貫く。人間社会の盛衰を左右する。歴史を織り、地図をも変える。そこには勢い一切のものの交換ということが起こる。あの横浜開港の当時、彼は

馬籠本陣の方にて、幾多の小判こばん買いが木曾街道にまで入り込んだことを記憶する。国内に流通する小判、一分判ぶなぞがどんどん海の外へ流れ出して行き、そのかわりとして輸入せらるるものの多くは悪質な洋銀であつた。古二朱金、保字小判ほうじなぞの当時に残存した良質の古い金貨はあの時に地を払ってしまったことを覚えている。もしそれと同じようなことが東西文物の上に起こつて来て、自分らの持つ古い金貨が流れ出して行き、そのかわりにはいつて来る新しい文明開化が案外な洋銀のようなものであるとしたら、それこそ大變な話だと思われて来た。

月の中旬が来るころには、いよいよ半蔵が水無神社宮司の拝命もおもてむきの沙汰さたとなつた。もはや彼の東京にとどまるのも数日を余すのみとなつた。

朝が来た。例のように半蔵が薄暗い空気の中で水垢離みずごりを執り、からだを淨め終わるころは、まだ多吉方の下女も起き出さないで、井戸ばたに近い勝手口の戸障子も閉しまつていた。そこいらには、町中ながらに鶏の鳴き声が朝霧の中に聞こえていた。

その日、半蔵は帝みかどの行幸のあることを聞き、神田橋かんだばしまで行けばその御道筋に出られる

ことを知り、せめて都を去る前に御通輦ごつうれんを拝して行こうとしていた。彼はそのことを多吉夫婦に告げ、朝の食事をすますとすぐ羽織袴はおりはかまに改めて、茅場町かやばちようの店へ勤めに通う亭主より一歩ひとあし早く宿を出た。神田川について、朝じめりのした道路の土を踏んで行くと、次第に町々の空も晴れて、なんとなく改まった心持ちが彼の胸にわいた。今は彼も水無神社の宮司であるばかりでなく、中講義を兼ねていた。

神田橋見附跡の外には、ぽつぽつ奉拝の人々が集まりつつあった。待つこと二時間ばかり。そのうちに半蔵の周囲は、欄干の支柱にからかねの擬宝珠ぎぼしのついた古ぼけた橋の畔たもとから、当時「青い戸袋」と呼びなされた屋敷長屋のペンキ塗りの窓の下の方へかけて、いっぱいの人で、どうかすると先着の彼なぞはうしろにいるものから前の方へ押し出されるほどになった。そのたびに、棒を携えた巡查が前列にあるものを制しに来た。

明治七年十一月十七日のことで、過ぐる年の征韓論せいかんろん破裂の大声いの記憶が眼前に落ち尽くした霜葉と共にまた多くの人の胸に帰って来るころだ。半蔵はそう思った。かくも多勢のものが行幸を拝しようとして、御道筋に群がり集まるというのも、内には政府の分裂し外には諸外国に侮らるる国歩艱難かんなんの時に当たって、万民を統べすさせらるる帝に同情を寄せ奉るものの多い証拠であらうと。彼は自分の今お待ち受けする帝が日本紀元二千五百

余年来の慣習を破つてかつて異国人のために前例のない京都建春門を開かせたもうたことを思い、官武一途はもとより庶民に至るまでおのおのその志を遂げよとの誓いを立てて多くのものと共に出発したもうたことを思い、御東行以来侍講としての平田鉄胤にも師事したもうた日のあることを思い、その帝がようやく御歳二十二、三のうら若きであることを思つて、なんとなく涙が迫つた。彼の腰には、宿を出る時にさして来た一本の新しい扇子がある。その扇面には自作の歌一首書きつけてある。それは人に示すためにしるしたものでもなかったが、深い草叢くさむらの中にある名もない民の一人ひとりでも、この国の前途を憂うる小さなこころざしにかけては、あえて人に劣らないとの思いが寄せてある。東漸するヨーロッパ人の汜濫はんらんを自分らの子孫のためにもこのままに放任すべき時ではなからうとの意味のものである。その歌、

蟹かにの穴ふせぎとめずは 高堤たかつみやがてくゆべき時なからめや

半蔵

この扇子を手にして、彼は御通輦を待ち受けた。

さらに三十分ほど待った。もはや町々を警かために来る近衛騎兵このえの一隊が勇ましい馬蹄ばていの音

も聞こえようかというころになった。その鎗やり先にかぎす紅白の小旗を今か今かと待ち受け顔な人々は彼の右にも左にもあつた。その時、彼は実に強い衝動に駆られた。手にした粗末な扇子でも、それを献じたいと思うほどのやむにやまれない熱い情こころが一時に胸にさし迫つた。彼は近づいて来る第一の御馬車を御先乗おさきのりと心得、前後を顧みるいとまもなく群集の中から進み出て、そのお馬車の中に扇子を投進した。そして急ぎ引きさがつて、額ひたいを大地につけ、袴はかまのままそこにひざまずいた。

「訴人そにんだ、訴人だ。」

その声は混雑する多勢の中から起こる。何か不敬漢でもあらわれたかのように、互に呼びかわすものがある。その時の半蔵はいち早くかけ寄る巡査の一人に堅く腕をつかまれていた。大衆は争つてほとんど圧倒するように彼の方へ押し寄せて来た。

第十二章

一

五日も半蔵は多吉の家へ帰らない。飛驒ひだの水無神社みなし宮司ぐうじを拜命すると間もなく、十一月十七日の行幸の朝に神田橋外まで御通輦ごつうれんを拝しに行くと言つて、浅草左衛門町さえもんちようを出たぎりだ。

左衛門町の家のものは音沙汰おとさたのない半蔵の身の上を案じ暮らした。彼が猷扇事件は早くも町々の人の口の上つて、多吉夫婦の耳にもはいらないではない。それにつけてもうわさとりどりである。主人持ちの多吉は茅場町かやばちようの店からもいろいろなことを聞いて来て、ただただ妻のお隅すみと共に心配する。第一、あの半蔵がそんな行為に出たということすら、夫婦のものはまだ半信半疑でいた。

そこへ巡查だ。ちようど多吉は不在の時であつたので、お隅が出て挨拶あいさつすると、その巡查は区内の屯所とんしよのものであるが、東京裁判所からの通知を伝えに来たことを告げ、青

山半蔵がこの家の寄留人であるかどうかをまず確かめるような口ぶりである。さてはとばかり、お隅はそれを聞いただけでも人のうわさに思い当たった。巡査は格子戸口こうしどぐちに立つたまま、言葉をついで、入にゅうかん檻かん中の半蔵が帰宅を許されるからと言って、身柄を引き取りに来るようとの通知のあったことを告げた。

お隅はすこし息をはずませながら、

「まあ、どういうおとがめの筋かぞんじませんが、青山さんにかぎって悪い事をするような人じゃ決してございません。宅で本所ほんじよの相生町あいおいちやうの方におりました時分に、あの人は江戸の道中奉行のお呼び出しで国から出てまいりまして、しばらく宅に置いてくれと申されたこともございました。そんな縁故で、今度もたよってまいりまして、つい先ごろまでは教部省の考証課という方に宅から通かよつておりました。まあ、手前どもじや、あの人の平素ふだんの行ないもよくぞんじておりますが、それは正しい人でございます。」

突然巡査の訪ねて来たことすら気になるというふうで、お隅は二階の客のためにこんな言いわけをした。それを聞くと、巡査はかみさんの言葉をさえぎって、ただ職掌がらこの通知を伝えるために来ただけのことを断わり、多吉なりその代理人なりが認印持参の上で早く本人を引き取れと告げて置いて、立ち去った。

ともかくも半蔵が帰宅のかなうことを知って、さらに心配一つふえたように思うのはお隅である。というは、亭主多吉が町人の家に生まれた人のようでなく、世間に無頓着で、巡査の言い置いて行つたような実際の事を運ぶには全く不向きにできているからであつた。多吉の俳諧三昧と、その放心さと来たら、かつて注文して置いた道具の催促に日ごろ自分の家へ出入りする道具屋源兵衛を訪ねるため向島まで出向いた時、ふと途中の今戸の渡しでその源兵衛と同じ舟に乗り合わせながら、「旦那、どちらへ」と聞かれてもまだ目の前にその人がいるとは気づかなかつたというほどだ。「旦那、その源兵衛はおれのことじゃありませんか」と言われて、はじめて気がついたというほどの人だ。お隅はこの亭主の氣質をのみ込んでゐる。場合によっては、彼女自身に夫の代理として、半蔵が身柄を引き取りに行こうと決心し、帯なぞ締め直して亭主の帰りを待っていた。はたして、多吉が屋外から戻つて来た時は、お隅以上のあわてかたであつた。

「お前さん、いずれこれにはわけのあることですよ。あの青山さんのことですもの、何か考えがあつてしたことですよ。」

お隅はそれを多吉に言つて見せて、慣れない夫をそういう場所へ出してやるのを案じられると言う。背も高く体格も立派な多吉は首を振つて、自身出頭すると言う。幸い半蔵の

懇意にする医者、金丸恭順がちやうどそこへ訪ねて来た。この同門の医者も半蔵が身の上を案じながらやつて来たところであつたので、早速多吉と同行することになった。

「待つてくださいよ。」

と言いながら、お隅は半蔵が着がえのためと、自分の亭主の着物をそこへ取り出した。町人多吉の好んで着る唐^{とうざん}棧の羽織は箆^{たんす}笥の中にしまつてあつても、そんなものは半蔵には向きそうもなかつた。

そこでお隅は無地の羽織を選び、藍^{あいみじん}微塵の綿入れ、襦^{じゆばん}袢、それに晒^{さらし}の肌着までもそろえて手ばしこく風呂敷^{ふろしき}に包んだ。彼女は新しい紺足袋^{こんたび}をも添えてやることを忘れていなかった。

「いずれ先方には待合所がありましようからね、そつくりこれを着かえさせてくださいよ。青山さんの身につけたものは残らずこの風呂敷包みにして歸つて来てくださいよ。」

そういうお隅に送られて、多吉は恭順と一緒に左衛門町の門^{かど}を出た。お隅はまた、パツチ尻端折りの亭主の後ろ姿を見送りながら、飛驒行きの話の矢先にこんな事件の突発した半蔵が無事の帰宅を見るまでは安心しなかつた。

多吉と恭順とは半蔵に付き添いながら、午後の四時ごろには左衛門町へ引き取つて来た。お隅はこの三人を格子戸口に待たせて置き、下女に言いつけてひうち石とひうち鉄がねとを台所から取り寄せ、切り火を打ちかけるまでは半蔵らを家に入れなかった。

時ならぬきよ浄めの火花を浴びた後、ようやくの思いでこの屋根の下に帰り着いたのは半蔵である。青ざめもしよごれもしているその容貌ようぼう、すこし延びた髭ひげ、五日も櫛くしを入れない髪までが、いかにも暗いところから出て来た人で、多吉の着物を拝借という顔つきでいる彼がしょんぼりとした様子はお隅らの目にいたいたしく映る。彼は礼を言つても言い足りないというふうに、こんなに赤の他人のことを心配してくれるお隅の前にも手をついたまま、しばらく頭をあげ得なかったが、やがて入檻中肌身に着けていたよごれ物を風呂敷包みのままそこへ差し出した。この中は虱しらみだらけだからよろしく頼むとの意味を通わせた。「まずまあ、これで安心した。」と言つて下座敷の内を歩き回るのは多吉だ。「お隅、おれは青山さんを連れて風呂ふろに行つて来る。金丸先生には、ここにて待つていただく。」「それがいい。青山君も行つて、さつぱりとしていらつしやい。わたしは一服やつていますからね。」と恭順も言葉を添える。

半蔵はまだ借り着のままだ。彼は着物を改めに自分の柳行李やなぎごうりの置いてある二階の方へ行こうとしたが、お隅がそれをおしとどめて、そのままからだを洗いきよめて来てもらいたいと言うので、彼も言われるままにした。

「どれ、御一緒に行つて、一ぱいはいつて来ようか——お話はあとで伺うとして。」

そういう多吉は先に立つて、お隅から受け取った手ぬぐいを肩にかけ、格子戸口を出ようとした。

「お隅、番傘ばんがさを出してくんな。ぽつぽつ降つて来たぞ。」

多吉夫婦はその調子だ。半蔵も亭主と同じように傘をひろげ、二人ふたりそろつて、見るもの聞くもの彼には身にしみるような町の銭湯への道を踏んだ。

多吉が住む町のあたりは古くからある数軒の石屋で知られている。家の前は石切河岸いしきりがしと呼び来たつたところで、左衛門橋の通り一つへだてて鞍地河岸くらちがしにつづき、柳原の土手と向かい合つた位置にある。砂利じやり、土砂、海土などを扱う店の側について細い路地ろじをぬければ、神田川のすぐそばへも出られる。こんな倉庫と物揚げ場との多いごちやごちやした界隈かいわいではあるが、旧両国ひろこうし広小路辺へもそう遠くなく、割合に閑静で、しかも町の響きも聞こえて来るような土地柄は、多吉の性に適すると言っているところだ。

江戸の名ごりのような石榴口ざくろぐちの残った湯屋はこの町からほど遠くないところにある。朱塗りの漆戸うるしど、箔絵はくえを描いた欄間らんまなぞの目につくその石榴口ざくろぐちをくぐり、狭い足がかりの板を踏んで、暗くはあるが、しかし暖かい湯気のこもった浴槽よくそうの中に身を浸した時は、ようやく半蔵も活き返ったようになった。やがて、一風呂あびたあとのさっぱりした心持ちで、彼が多吉と共にまた同じ道を帰りかけるころは、そこいらはもう薄暗い。町ではチラチラ燈火あかりがつく。宿もとに戻って見ると、下座敷の行燈あんどんのかげに恭順が二人を待ちうけていた。

「金丸先生、今夜はお隅のやつが手打ち蕎麦そばをあげたいなんて、そんなことを申しえています。青山さんの御相伴ごしやうばんに、先生もごゆつくりなすってください。」

「手打ち蕎麦、結構。」

亭主と客とがこんな言葉をかわしているところへ、お隅も勝手の方から櫛たすきをはずして来て、下女に膳ぜんをはこばせ、半蔵が身祝いにと銚子ちやうしをつけて出した。

「まったく、こういう時はお酒にかぎりますな。どうもほかの物じや納まりがつかない。」と恭順が言う。

半蔵も着物を改めて来て簡素なのしめ膳ぜんの前にかしこまった。焼き海苔のり、柚味噌ゆずみそ、それ

に牡蠣かきの三杯酢さんぱいすぐらいの箸休はしめで、盃さかずきのやりとりもはじまった。さびしい時雨しぐれの音を聞きながら、酒にありついて、今度の事件のあらましを多吉の前に語り出したのもその半蔵だ。彼の猷扇ゆせんは、まったく第一のお車を御先乗おさきのりと心得たことであって、御輦ぎよれんに触れ奉ろうとは思ひもかけなかったという。あとになってそれを知った時は実に彼も恐縮した。彼の述懐はそこから始まる。何しろ民間有志のものの建白は当時そうめずらしいことでもなかったが、行幸の途中にお車をめがけて扇子を投進するようなことは例のない話で、そのために彼は供奉警衛くふの人々の手から巡查をもつて四大区十二小区の屯所とんしょへ送られ、さらに屯所から警視庁送りとなって、警視庁で一応の訊問じんもんを受けた。入檻にゆうかんを命ぜられたのはその夜のことであった。翌十八日は、彼はある医者の前に引き出された。その医者はまず彼の姓名、年齢、職業などを尋ねたが、その間には彼の精神状態を鑑定するというふうで、幾度か小首をかしげ、彼の挙動に注意することを怠らなかった。それから一応彼を診察したあとで、さて種々さまざまなことを問い試みた。神田橋前まで行幸を拝しに家を出たのは朝の何時で、その日の朝飯には何を食ったかの類たぐいだ。医者いしゃの診断がつくと彼は東京裁判所へ送られることとなって、同夜も入檻、十九日には裁判所において警視庁より差し送った書面を読み聞かせられ、逐一事実のお尋ねがあったから、彼はそれに相違ない旨むねを答

えた。入檻は二十二日の朝まで続いた。ようやくその時になって、寄留先の戸主をお呼び出しになり宿預けの身となったことを知ったという。

「でも、わたしもばかな男じゃありませんか。裁判所の方で事実を問い詰められた時、いくらも方法があるのに、どうしてその方はそんな行為おこないに出たかと言われても、わたしには自分の思うことの十が一も答えられませんでした。」

半蔵の嘆息だ。それを聞くと多吉は半蔵が無事な帰宅を何よりのよろこびにして、自分らはそんな野暮やぼは言わないという顔つきでいる。

多吉は言った。

「青山さん、あなただつて今度の事件は、御国のためと思つてしたことなんでしょう。まあ、その盃さかずきをお乾ほしなさるさ。」

今一度裁判所へ呼び出される日进行を待つということ、ともかくも半蔵は帰宅を許されて来た人である。彼にはすでに旧庄屋しやうやとしても、また、旧本陣問屋としても、あの郷里の街道に働いた人たちと共に長い武家の奉公を忍耐して来た過去の背景があつた。実際、あるものをめがけて、まっしぐらに駆けり出そうとするような熱い思いはありながら、家を捨て妻子を顧みるいとまもなしにかつて東奔西走した同門の友人らがすることをもじつと

ながめたまま、交通要路の激しい務めに一切を我慢して来た彼である。その彼の耐えに耐えた激情が一時に堰を切つて、日ごろ慕い奉る帝が行幸の御道筋にあふれてしまった。こうすればこうなるぞと考えてしたことなく、また、考えてできるような行ないではない。ほとぼしり出る自分がそこにあるのみだった。

二

身祝いにと多吉夫婦が勧めてくれた酒に入檻中の疲労を引き出されて、翌朝半蔵はおそくまで二階に休んでいた。上京以来早朝の水垢離を執ることを怠らなかつた彼も、その朝ばかりはぐつすり寝てしまつて、宿の亭主が茅場町の店へ勤めに通う時の来たことも知らなかつた。ゆうべの雨は揚がつて、町のほこりも洗われ、向かい側にある家々の戸袋もかわきかけるころに、下女が二階の雨戸を繰ろうとして階下から登つて来て見る時になつても、まだ彼は大きいびきだ。この彼がようやく寝床からはい出して、五日ばかりも留守にした部屋へやのなかを見回した時は、もはや日が暈の上までさして来ていた。

「お前の内部なかには、いったい、何事が起こつたのか。」

ある人はそう言つて半蔵に尋ねるかもしれない。入檻に、裁判所送りに、宿預けに、その日からの謹慎に——これらはみな彼の猷扇から生じて来た思いがけない光景である。あの行幸の当日、彼のささげた扇子があやまつて御輦ぎよれんに触れたとは、なんとしても恐縮するほかはない。慕い奉る帝の御道筋をさまたげたことに對しても、彼は甘んじてその罰を受けねばならない。

「まつたく、粗忽そこつな挙動ではあつた。」

彼の言いうることは、それだけだ。その時になつて見ると、彼は郷里の家の方に留守居する自分の娘お糸くめを笑えなかつた。過ぐる年の九月五日の夜、馬籠本陣の土蔵二階であの娘の自害を企てたことは、いまだに村のものの謎なぞとして残っている。父としての彼が今度のような事件を引き起こして見ると、おのれの内部なかにあふれて来た感動すら彼はそれを説き明かすことができない。

午後から、半蔵は宿のかみさんに自分の出先を断わつて置いて、柳原の方にある床屋をさして髭剃ひげそりに出かけた。そこは多吉がひいきにする床屋で、老練な職人のいることを半蔵にも教えてくれたところである。多吉が親しくする俳諧はいかい友だちのいずれもは皆その床屋の定連じようれんである。柳床やなぎどと言つて、わざわざ芝の増上寺ぞうじようじあたりから頭を剃らせに

来る和尚おしょうもあるというほど、剃刀かみそりを持たせてはまず名人だと曰ごろ多吉が半蔵にほめて聞かせるのも、そこに働いている亭主のことである。

「これは、いらつしやい。」

その柳床の亭主が声を聞いて、半蔵は二、三の先着の客のそばに腰掛けた。鬚まげのあるもの、散髪のもの、彼のように総髪そうがみにしているもの、そこに集まる客の頭も思い思いだ。一方にはそこに置いてある新出版物を見つけて当時評判な作者かながきろうぶん坂名垣魯文の著わしたものなぞに読みふける客もあれば、一方には将棋をさしかけて置いて床屋の弟子でしに顔をやらせる客もある。なんと言つても、まだまだ世の中には悠長ゆうちょうなところがあった。やがて半蔵の順番に回つて来ると、床屋の亭主が砥石と、いしの方へ行つてびったり剃刀をあてる音にも、力を入れてそれを磨ぐ音にも、彼は言いあらわしがたい快感を覚えた。むさくるしく延びた髭ひげが水にしめされながら剃られるたびに、それが亭主の手の甲の上にもあり、彼の方で受けている小さな板の上にも落ちた。

いつのまにか彼の心は、あとからはいつて来た客の話し声の方へ行つた。過ぐる日、帝の行幸のあつたおり、神田橋外で御通輦を待ち受けた話をはじめた客がそこにある。客は当日の御道筋に人の出たことから、一人の直訴ひとりじきそをしたもののあつたことを言い出し、自身

でその現場を目撃したわけではないが、往來ゆききの人のうわさにそれを聞いて気狂いと思つて逃げ歸つたという。思わず半蔵はハツとした。でも、彼は自分ながら不思議なくらいおちついたところもちに歸つて、まるで他人のここのように自分のうわさを聞きながら、床屋の亭主がするままに身を任せていた。親譲りの大きく肉厚にくあつな本陣鼻から、耳そうじの掃除までしてもらつた。

何げなく半蔵は床屋を出た。上手じようずな亭主が丁寧さかぞに逆剃りまでしてくれてほとんどその剃刀を感じなかつたほどの仕事を味わつたあとで、いささか頬ほおは冷たいというふうに。

その足で半蔵は左衛門町の二階へ引き返して行つた。静かな西向きの下窓がそこに彼を待っている。そこは彼が一夏の間、慣れない東京の暑さに苦しんで、よく涼しい風を入れに行つたところだ。部屋へやは南に開けて、その外が町の見える縁側になつているが、きれいな好きな宿のかみさんは彼の入檻中に障子を張り替えて置いてある。上京以来すでに半年あまりも寝起きをして見れば、亭主多吉の好みで壁の上に掛けて置く小額までが彼には親しみのあるものとなつてゐる。

過ぐる五日の暗さ。彼は部屋に戻つていろいろと片づけ物なぞしながら、檻房かんぼうの方に孤坐こざした時の自分のころもちを思いかえした。彼の行為が罪に問われようとして東京裁判所の役人の前に立たせられた時、彼のわずかに申し立てたのは、かねて耶蘇教ヤソキョウの蔓まんえ延んを憂い、そのための献言けんげんも仕りつかまつたい所存であつたところ、たまたま御通輦ごつうだんを拝して憂国の情が一時に胸に差し迫つたといふことであつた。ちやうど所持の扇子に自作の和歌一首しるしつけて罷りまか在あつたから、御先乗おさきのりとのみ心得た第一のお車をめがけて直ちにその扇子をささげたなら、自然と帝のお目にもとまり、国民教化の規準を打ち建てる上に一層の御英断も相立つべきかと心得たといふことであつた。

すくなくもこの国の前途をおのが狭い胸中に心配するところから、彼もこんな行為に出た。ただただそれが頑かたくな心なのあらわれのように見られることはいかにも残念であるとするのが、彼の包み隠しのないところである。開国以前のものは皆、一面に西洋を受けいれながら、一面には西洋と戦つた。不幸にも、この国のものがヨーロッパそのものを静かによく見うのような機会を失つたことは、二度や三度にとどまらない。かく内に動揺して、外を顧みるいとまもないような時に、歴史も異なり風土も異なり言葉も異なる西洋文明の皮相を模倣するのみで、それと戦うことをしなかつたら、末ははたしてどうなろう。そのこ

とがすでに彼には耐えられなかった。そういう彼とても、ただ漫然と異宗教の蔓延まんえんを憂うれいているというではない。もともと切支丹キリシタン宗取り扱いの困難は織田信長時代からのこの国のものの悩みであつて、元和年代げんなにおける宗門人別帳にんべつちようの作製も実はその結果にほかならない。長い鎖国が何のためかは、宗門のことをヌキにしては考えられないことであつた。いよいよこの国を開くに当たつて、新時代が到来した時、あの厩戸皇子うまやどのが遠い昔にのこした言葉と言ひ伝えらるるものは、また新時代に役立つことともなつた。すなわち、神道をわが国の根本とし、儒仏をその枝葉とすることは、神祇局じんぎきよく以来の一大方針で、耶蘇教徒ヤソたりともこの根本を保全するが道であるというふうに半蔵らは考えた。ところが外国宣教師は種々さまざまな異議を申し立て、容易にこの方針に従わない。それに力を得た真宗の僧侶そうりよまでが勝手を主張しはじめ、独立で布教に従事するものを生じて来た。半蔵は教部省に出仕して見てこのことを痛感した。外国宣教師の抗議に対して今日のような妥協に妥協をのみ重ねるとしたら、各派教導職の不平等おひも制えがたくなって、この国の教化事業はただただ荒れるに任せ、一切を建て直そうとする御一新の大きな気象もついには失われて行くであろう。神祇局は神祇省となり、神祇省は教部省となつた。結局、教部省というものも今に廃されるであろう。このことが彼を悲しませる。

二百余年前、この国において、ホルトガル人、イスパニア人を追放したころの昔と、明治七年の今とでは、もとより外国の風習も大いに異なっているかもしれない。今の西洋は昔ほど宗門のことを皆願っているというふうではないかもしれない。それはすでに最初の米國領事ハリスがこの国のものに教えたことである。あのハリスが言うように、今のアメリカあたりでは宗門なぞは皆、人々の望みに任せ、それこれを禁じまたは勧めるようなことはさらにないかもしれない。何を信仰しようとも人々の心次第であるかもしれない。今のヨーロッパで見いだした信仰の基本とは、人々銘々の心に任せるよりほかにいたし方もないと決着したとある。半蔵とても一応そのことを考慮しないうちはなかったが、しかし自分らの子孫のためにもこれはゆるがせにすべきでないと思つて来た。宗教の事ほどその源の清く、その末の濁りやすいものもすくない。わが国神仏混こんこう淆こうの歴史は何よりも雄弁にそれを語っている。この先、神耶しんや混淆こんこうのような事が起こつて来ないとは決して言えなかった。どんな耶蘇の宣教師が渡来して、根氣もあり智さとりも深くて、人をなづけ、新奇を好むこの国のものに根本と枝葉との區別をすら忘れさせるようなことが起こつて来ないとは、これまた決して言えなかった。御一新もまだ成就しない今のうちに、國民教化の基準をしつかりと打ち建てて置きたい。それが半蔵らの願ひであつた。

静かなところで想い起こして見ると、あだかも目に見えない細い糸筋のように、いろいろな思いがそれからそれと引き出される。郷里の方に留守居する継母や妻子のこともしきりに彼の胸に浮かんで来た。彼は今度の事件がどんなふうにか村の人たちのうわさに上るだろうかと思ひ、これがまた彼の飛驒行きにどう響くかということも心にかかった。

三

十一月二十九日に、半蔵は東京裁判所の^{おおしらす}大白洲へ呼び出された。その時、彼は掛りの役人から^{くちがき}口書を読み聞かせられたので、それに相違ない旨を^{むね}答えると、さらに判事庁において先刻の陳述は筆記書面のとおりに相違ないかと再応の^{しんもん}訊問があつた。彼が相違ない旨を答えると、それなら調印いたせとの言葉に、即刻調印を差し上げた。追つて裁断に及ぶべき旨を言い聞かせられて、彼はその場を退いて来た。

とりあえず半蔵はこのことを多吉夫婦の耳に入れ、郷里の留守宅あてにもありのままを書いて、自分の粗忽^{そこつ}から継母にまで心配をかけることはまことに申し訳がないと言ひ送つた。のみならず、このために帰国の日もおくれ、飛驒行きまで延び、いろいろな心にかかる

ことばかりであるがこれもやむを得ない、このまま帰国は許されないから裁断申し渡しの日が来るまでよろしく留守居を頼むとも言いつた。なお、彼は裁判所での模様を新乗物町の方へ手紙で知らせてやると、月を越してからわざわざ彼を見に来てくれたのも金丸恭順であつた。

「青山君、いくら御謹慎中だつて、そう引つ込んでばかりいなくてもいいでしょう。せめて両国辺まで出てごらんさい。台湾の征蕃兵^{せいばんへい}がぼつぼつ帰つて来るようになりますぜ。」

恭順はこんな話を持つて左衛門町の二階へ上がつて来た。征蕃兵が凱旋^{がいせん}を迎えようとする市内のにぎわいも、半蔵はそれを想像するにとどめて、わびしくこもり暮らしている時である。恭順の顔を見ると、半蔵は裁断申し渡しの日お待ちどおしいことを言い、その結果いかんではせつかく彼を懇望する飛驒地方の人たちが思惑^{おもわく}もどうあろうかと言ひ出す。その時、恭順は首を振つて、これが他の動機から出た行為なら格別、一点の私心もない憂国の過慮からであつて見れば、飛驒の方は心配するほどのことはあるまい、なお、田中不二麿からも飛驒有志あてに一筆書き送つてもらふことにしようと言つた末に、言つた。「どうです、青山君、君も新乗物町の方へ越して来ては。」

それを勧めるための恭順が来訪であつたのだ。この医者はおも言葉をついで、

「そうすれば、わたしも話し相手ができていい。まあ、君一人ぐらい居候に置いたつて、食わせるに困るようなことはありませんぜ。部屋も貸しますぜ。」

恭順は真実を顔にあらわして言った。その言葉のはしにまじる冗談もなかなか温かい。同門のよしみとは言え、よつぽど半蔵もこの人に感謝してよかった。しかし、謹慎中の身として寄留先を変えることもどうかと思うと言つて、彼は恭順のころぎしだけを受け、やはりこのままの仮寓かぐうを続けることにしたいと断わつた。むなしい旅食は彼とても心苦しかったが、この滞在が長引くようならばと郷里の伏見屋伊之助のもとへ頼んでやったこともあり、それに今になつて左衛門町の宿を去るには忍びなかった。

十二月中旬まで半蔵は裁判所からの沙汰さたを待った。そのころにでもなつたら裁断も言い渡されるだろうと心待ちに待つていたが、裁判所も繁務のためか、十二月下旬が来るころになつてもまだ何の沙汰もない。

東京の町々はすでに初雪を見る。もつとも、浅々と白く降り積もつた上へ、夜の雨でも

来ると、それが一晚のうちに溶けて行く。木曾路あたりとは比較にもならないこの都会の雪空は、遠く山の方へと半蔵の心を誘う。彼も飛驒行きのおくれるのを案じている矢先で、それが延びれば延びるほど、あの險阻で聞こえた山間の高山路が深い降雪のために埋められるのを恐れた。

ひとりい 独居のねぶり覚ますと松が枝にあまりて落つる雪の音かな

とやま さよしぐれ今は外山やこえつらむ軒端に残る音もまばらに

と 山里は日にけに雪のつもるかな踏みわけて訪ふ人もこなくに

しら雪のうづみ残せる煙こそ遠山里のしるしなりけれ

これらの冬の歌は、半蔵が郷里の方に残して来た旧作である。彼は左衛門町の二階にてこれらの旧作を思い出し、もはや雪道かと思われる木曾の方の旧い街道を想像し、そこを往来する旅人を想像し、革のむなび、麻の蠅はらい、紋のついた腹掛けから、鬘、尻尾まで雪にぬれて行く荷馬の姿を想像した。彼はまた、わずかに柵の実なぞの紅い珠のように枝に残った郷里の家の庭を想像し、木小屋の裏につづく竹藪を想像し、その想像を毎年の雪に隠れひそむ恵那山連峰の谿谷にまで持つて行つて見た。

とうとう、半蔵は東京で年を越した。一年に一度の餅つき、やれ福茶だ、小梅だ、ちよ

ろげだと、除夜からして町家は町家らしく、明けては屠蘇とそを祝え、雑煮ぞうにを祝え、かち栗ぐり、ごまめ、数の子を祝えと言う多吉夫婦と共に、明治八年の新しい正月を迎えた。

暮れのうちに出したらしい郷里の家のものからの便りたよがこの半蔵のもとに届いた。それは継母おまんと、娘お糸くめとからで。娘の方の手紙は父の身を案じ暮らしていることから、留守宅一同の変わりのないこと、母お民から末の弟和助まで毎日のように父の帰国を待ちわびていることなぞが、まだ若々しい女文字で認しためてある。継母から来た便りなまはそう生やさしいものでもない。それには半蔵の引き起こした今度の事件がいつのまにか国もとへも聞こえて来て、種々さまさまなうわさを生んでいるとある。その中にはお糸のようにすも伝えてあって、その後はめつきり元気を回復し、例の疵きずぐち口も日に増し目立たないほどに癒いえ、最近に木曾福島きそふくしまの植松家から懇望のある新しい縁談に耳を傾けるほどになったとある。継母の手紙は半蔵の酒癖のことにまで言い及んであって、近ごろは彼もことのほか大酒をするようになったと聞き伝えるが、朝夕継母の身として案じてやるとある。その手紙のつづきには、男の大厄たいやくと言わるる前後の年ごろに達した時は、とりわけその勘弁がなくては危あぶないとは、あの吉左衛門が生前の話にもよく出た。大事の吉左衛門を立てるなら、酒を飲むたびに亡なき父親のことを思い出して、かたかくたかくつしめとも言つてよこしてある。

「青山さん、まだ裁判所からはなんとも申しませんか。」

新しい正月もよそに、謹慎中の日を送っている半蔵のところへ、お隅は下座敷から茶を入れて来て勧めた。到来物の茶ではあるがと言つて、多吉の好きな物を客にも分けに階下から持つて来るところなぞ、このかみさんも届いたものだ。

旅の空で、半蔵もこんな情けのある人を知つた。彼の境涯きようがいとしては、とりわけ人の心の奥も知らるるというものであつた。お隅は凜りんとした犯しがたいようなところのある人で、うっかりすると一切女房任せな多吉の方がかえつて女房であり、むしろお隅はこの家の亭主である。

「お国から、お便りたよがございましたか。」

「ええ、皆無事で暮らしてゐるようです。こちらへも御厄介ごやっかいになつたらうツて、吾家うちのものからよろしくと言つて来ました。」

「さぞ、奥さんも御心配なすつて——」

「お隅さん、あなたの前ですが、国からの便りと言ういつでも娘が代筆です。あれも手はよく書きますからね。わたしの家内はまた、自分で手紙を書いたことがありますよ。」

こんな話も旅らしい。お隅の調子がいかにもさっぱりとしているので、半蔵は男とでも対い合つたように、継母から来た手紙のことをそこへ言い出して、彼の酒をとがめてよこしたと言つて見せる。彼が賢い継母を憚つて来たことは幼年時代からで、「お母さんほどこわいものはない」と思う心を人にも話したことがあるほどだが、成人して家督を継ぎ、旧宿場や街道の世話をするようになってからは、その継母にすら隠れて飲むことはやめられなかったと白状する。

「でも、青山さん。お酒ぐらい飲まなくて、やりきれるものですかね。」

お隅はお隅らしいことを言つた。

松の内のことで、このかみさんも改まつた顔つきではいるが、さすがに気のゆるみを見せながら、平素めつたに半蔵にはしない自分の女友だちのうわさなぞをも語り聞かせる。お寅と言つて清元お葉の高弟にあたり、たぐいまれな美音の持ち主で、柳橋辺の芸者衆に歌沢を教えているという。放縦ではあるが、おもしろい女で、かみさんとは正反對な性格でいながら、しかも一番仲よしだという。その人の芸人肌と来たら、米櫃に米がなくなつても、やわらか物は着通し、かりん胴の大切な三味線を質に入れて置いて、貸本屋の持つて来る草双紙を読みながら畳の上に寝ころんでいるという底の抜け方とか。

お隅は女の書く手紙というものをその女友だちのうわさに結びつけて、お寅もやはり手紙はむつかしいものと思い込んでいた女の一人であると半蔵に話した。何も、型のように、「一筆しめしあげ参らせ候」^{そう}から書きはじめなくとも、談話^{はなし}をするように書けば、それで手紙になると知った時のお寅の驚きと喜びとはなかったとか。早速^{さっそく}お寅は左衛門町へあてて書いてよこした。今だにそれはお隅の家のものの一つ話になっているという。その手紙、

「はい、お隅さん、今晚は。暑いねえ。その後、亭主あるやら、ないじややら——ですとさ。」

お隅はこんな話をも半蔵のところに置いて行つた。

騒がしく、楽しい町の空の物音は注連^{しめ}を引きわたした竹のそよぎにまじつて、二階の障子に伝わって来ていた。その中には、多吉夫婦の娘お三輪^{みわ}が下女を相手にしての追羽子^{おいはね}の音も起こる。お三輪は半蔵が郷里に残して置いて来たお糸を思い出させる年ごろで、以前の本所相生町の小娘時代に比べると、今は裏千家^{うらせんけ}として名高い茶の師匠松雨庵^{しょううあん}の内弟子^{うちでし}に住み込んでいるという変わり方だ。平素は左衛門町に姿を見せない娘が両親のもとへ帰って来ているだけでも、家の内の空気は違う。多吉夫婦は三人の子の親たちで、お三輪

の兄量一郎は横浜貿易商の店へ、弟利助は日本橋辺の穀問屋へ、共に年期奉公の身であるが、いずれこの二人の若者も喜び勇んで藪入やぶいりの日を送りに帰って来るだろうとのうわさで持ち切る騒ぎだ。

町へ来るにぎやかな三河万歳みかわまんざいまでが、めでたい正月の気分を置いて行く中で、半蔵は謹慎の意を表しながらひとり部屋にすわりつづけた。お三輪は結いたてのうつくしい島田で彼のところへも挨拶あいさつに来て、紅白の紙に載せた野村の村雨むらさめを置いて行つた。

七草過ぎになつても裁判所からは何の沙汰もない。毎日のように半蔵はそれを待ち暮らした。亭主多吉は風雅の嗜みたしなのある人だけに、所蔵の書画なぞを取り出して来ては、彼にも見よと言つて置いて行つてくれる。腰張りのしてある黄ばんだ部屋の壁も半蔵には慰みの一つであつた。

ふと、半蔵は町を呼んで来る物売りの声を聞きつけた。新版物の唄うたを売りに、深山の小鳥のような鋭くさびた声を出して、左衛門町の通りを読み読み歩いて来る。びっくりするほどよくとおるその読売りの声は町の空気に響き渡る。半蔵は聞くとともになしにそれを聞いた。

て、新しいものと旧いものふるとが入れまじるまッ最中を行つたようなその新作の唄の文句に心を誘われた。

洋服すがたに

ズボンとほれて、

そで袖ないおかたで苦勞する。

激しい移り変わりの時を告げ顔なものは、ひとりこんな俗謡にのみかぎらない。過ぐる七年の月日はすべてのものを変えつつあつた。燃えるような冒險心を抱いだいて江戸の征服を夢み、遠く西海の果てから進出して来た一騎当千の豪傑連ですら、追い追いの粹いきな風に吹かれては、都の女の俘虜とりことなるものも多かつた。一方には当時諷刺ふうしと諧かいぎとで聞こえた仮名垣魯文かながきろぶんのような作者があつて、すこぶるトボケた調子で、この世相をたくみな戯文に描き出して見せていた。多吉が半蔵にも読んで見よと言って、下座敷から持つて来て貸してくれた『阿愚楽鍋あぐらなべ』、一名牛店雑談にはこんな一節もある。

「方今の形勢では、洋学でなけりやア、夜は明けねえヨ。」

これは開化の魁さきがけたる牛店を背景に、作者が作中人物の一人をして言わせた会話の中の文句である。どんな人物の口からこんな文句が出るかというに、にわか散切りさんぎの西洋ごしら

え、フランスじこみのマンテルにイギリスのチョッキを着け、しかもそれは柳原あたりの朝市で買い集めた洋服であり、時計はくさりばかりぶらさげて、外見をつくろおうとする男とある。おのれ一人が文明人という顔つきで、『世界国^{くにづくし}尽』などをちよつと口元ばかりのぞいて見た知識を振り回し、西洋のことならなんでも来いと言い触らすこまりものだともある。おもて華^{はな}やかに、うらの貧しいこんな文明人はついそこいらの牛店にもすり込んで、肉鍋と冷^{ひや}酒^{ざけ}とを前に、気焰^{きえん}をあげているという時だ。寄席^{よせ}の高座で、芸人の口について出る流行^{はやり}唄^{うた}までが変わって、それがまた英語まじりでなければ納まらない世の中になって来た。「待つ夜の長き」では、もはや因循で旧弊な都々逸^{どといつ}の文句と言われる。どうしてもそれは「待つ夜のロング」と言わねばならない。「猫撫^{ねこな}で声」というような文句もはや眠たいとされるようになった。どうしてもそれは「キヤット撫で声」と言わねば人を驚かさない。すべてこのたぐいだ。

半蔵は腕を組んでしまつて、渦巻^{うずま}く世相を夢のようにながめながら、照りのつよい日のあつた南向きの障子のわきにすわりつづけた。まだ春も浅く心も柔らかな少女たちが、今にこの日本の国も英語でなければ通じなくなる時が来ると信じて、洋書と洋傘^{ようがさ}とを携え、いそいそと語学の教師のもとへ通うものもあるというような、そんな人のうわさを左

衛門町の家のものから聞くだけでも、彼は胸がいっぱいになった。

終日読書。

青年時代から半蔵が見まもって来たまぼろしは、また彼の胸に浮かぶ。そのまぼろしの正体を彼は容易に突きとめることができなかった。彼の心に描く「黒船」とは、およそ三つのものを載せて来る。耶蘇教はその一つ、格物究理の洋学はその一つ、交易による世界一統もまたその一つである。彼なぞの考えるところによると、西洋の学問するものも一様ではない、すくなくも開国以前と以後とでは、洋学者の態度にもかなりな相違がある。今さら、「東洋は道徳、西洋は芸術（技術の意）」と言ったあの佐久間象山さくましやうざんを引き合いに出すまでもなく、開港以前の洋学者はいずれもこの国に高い運命の潜むことを信じて行つたようである。前の高橋作左衛門はつげんせき、土生玄磧はぶげんせき、後の渡辺畢山わたなべかざん、高野長英、皆そういう人たちである。農園と経済学との知識をもつ洋学者で、同時に本居平田の学説を深く体得した秋田の佐藤信淵さとうのぶひろのごとき人すらある。六十歳の声を聞いて家督を弟に譲り、隠居して、それから洋学にこころぎしたような人は決してめずらしくない。その学問は藩おおやけの公に

許すところであらねばならぬ。洋学者としての重い責めをも果たさねばならぬ。彼らが境き涯ようがいの困難であればあるだけ、そのころぎしも堅く、学問も確かに、著述も残し、天文、地理、歴史、語学、数学、医学、農学、化学、または兵学のいずれにも後の時代のためにしたくをなし得たわけである。そこへ行くと開国以後の洋学者というものはその境涯からして変わって来た。今は洋学することも割合に困難でなくなった。わざわざ長崎まで遠く学びに行くものは、かえって名古屋あたりの方にもっとよい英語教師のあることを知るといふ世の中になって来た。彼の目の前にひらけているのは、実に浅く普及して来た洋学の洪水こうずいだ。

もとよりその中には、開国以前からの洋学者ののこしたころぎしを承うけ継ぐ少数の人たちもないではない。しかし、ここに本も読めば筆も立つ旧幕の人の一群というものがある。それらの人たちが西洋を求める態度はすこし違う。彼らは早く西洋の事情に通じる境涯にも置かれてあつて、幕府の洋書取調所（蕃書取調所の後身）に關係のあつたものもあり、横浜開港場の空氣に触れる機会の多かつたものもある。それらの人たちはまた、閱歴も同じくはないし、旧幕時代の役の位もちがい、禄ろくも多かつたものと寡すくなかつたものがあるが、大きな瓦解がかいの悲惨に直面したことは似ていた。江戸をなつかしむ心も似ていた。

幕末の遺臣として知られた山口泉^{せんしよ}処^む、向山^{むこうやま}黄村^{こうそん}、あの人たちもどうなつたろうと思
われる中で、瓦解以前に徳川政府の使命を帯びフランスに赴^{おもむ}いた喜多村瑞見^{きむらみ}などはその広
い見聞の知識を携え帰つて来て、本所北二葉町の旧^{きゆう}廬^{ろう}から身を起こし、民間に有力なあ
る新聞の創立者として言論と報道との舞台に上つて来た。もつとも、瑞見はその出発が幕
府奥^{おく}詰^{づめ}の医師であり、本草^{ほんぞう}学者であつて、かならずしも西洋をのみ鼓吹^{こすい}する人ではな
かつたが、後進で筆も立つ人たちが皆瑞見のような立場にあるのではない。中には、自国
に失望するあまりに、その心を見ぬヨーロッパの思慕へとかえるものがある。戯文に隠れ
て、一般の異国趣味をおおぎ立てるものもある。「なるほど、世の中は変わりもしよう。
しかし、よりよい世の中は——決して。」——とは、不平不満のやりどころのないような
それらの人たちより陰に陽に聞こえて来る強い非難の声だ。半蔵なぞにして見ると、今の
時はちやうど遠い昔に漢土の文物を受けいれはじめたその同じ大切な時にあたる。中世の
殻^{から}もまだ脱ぎ切らないうちに、かつてこの国のものが漢土に傾けたその同じ心で、今また
西洋にのみあこがれるとしたら。かつては漢意をもつてし、今は洋意をもつてする。模倣
の点にかけては同じことだ。どうしてもこれは一方に西洋を受けいれながら、一方には西
洋と戦わねばならぬ。その意味から言つても、平田篤胤没後の門人としてはこうした世の

風潮からも自分らの内にあるものを護^{まも}らねばならなかった。すくなくも、荷田^{かだうし}大人以来国学諸先輩の過去に開いた道が外来の学問に圧倒せられて、無用なものとなつて行こうとは、彼には考えられもしなかった。

四

裁断申し渡し番付の写し

信濃^{しなののくにちくま}国筑摩郡神坂村平民^{みさか}

当時^{みなし}水無神社宮司兼中講義

青山半蔵

その方儀、憂国の過慮より、自作の和歌一首録し置きたる扇面を行幸の途上において覧^{いらん}に備わらんことを欲し、みだりに供奉^{ぐぶ}の乗車と誤認し、投進せしに、御^{ぎよ}の車駕^{しゃが}に触^え

る。右は衝突儀ぎじょう仗の条をもつて論じ、情を酌しやくりよう量して五等を減じ、懲役五十日のところ、過誤につき贖罪金しよくざいきん三円七十五錢申し付くる。

明治八年一月十三日

東京裁判所

ここに半蔵の本籍地を神坂村とあるは、彼の郷里馬籠と隣村湯舟沢とを合わせて一か村とした新しい名称をさす。言いかえれば、筑摩県管下、筑摩郡、神坂村、字馬籠である。最も古い交通路として知られた木曾の御坂みさかは今では恵那山につづく深い山間やまあいの方に埋もうずれているが、それに因ちなんでこの神坂村の名がある。郡県政治のあらわれの一つとして、宿村の併合が彼の郷里にも行なわれていたのである。

待ちに待った日はようやく半蔵のところへ来た。この申し渡しの書付にあるように、いよいよ裁判も決定した。夕方から、彼は多吉夫婦と共に左衛門町の下座敷に集まった。思わず出るため息と共に、自由な身となったことを語り合おうとするためであつた。そこへ多吉を訪ねたずて門口からはいって来た客がある。多吉には川越時代からの旧いなじみにあたる青物問屋の大將だ。多吉が俳諧友はいかいだちだ。こちらは一段落ついた半蔵の事件で、宿

のものまで一同重荷をおろしたような心持ちでいるところであつたから、偶然にもその客がはいって来た時、玄関まで出迎える亭主を見るといきなり向こうから声をかけたが、まるでその声がわざわざ見舞いにでも来てくれたように多吉の耳には響いた。

「まずまあ、多吉さん。」

これは半蔵にも、時にとつてのよい見舞いの言葉であつた。ところが、この「まずまあ」は、実は客の口癖で、お隅は日ごろの心やすだてからそれをその人のあだ名にして、下女までそう呼び慣れていたほどだから、ちょうど客がその声をかけてはいって来たのは、自身であだ名を呼びながら来たようなものであつた。お隅はそれを聞くと座にもいたたまれない。下女などは裏口まで逃げ出して隠れた。

ともあれ、半蔵の引き起こした献扇事件は、暗い入にゆうかん檻かん中の五日と、五十日近い謹慎の日とを送つたあとで、こんなふうになその結末を告げた。五十日の懲役には行かずに済んだものの、贖しよくざい罪の金は科せられた。どうして、半蔵としては笑い事どころではない。

押し寄せて来る時代の大波を突き切ろうとして、かえって彼は身に深い打撃を受けた。前途には、幾度か躊躇ちゆうちよした飛驒ひだの山への一筋の道と、神の住居すまいとが見えているのみであつた。

夜が来た。左衛門町の二階の暗い行燈あんどんのかけで、めずらしくも先輩暮田正香くれたまさかがこの半蔵の夢に入った。多くの篤胤没後の門人中で彼にはことに親しみの深く忘れたいあの正香も、賀茂かもの少宮司から熱田あつたの少宮司に転じ、今は熱田の大宮司として働いている人である。その夜の旅寝の夢の中に、彼は正式の装束しょうぞくを着けた正香が来て、手にする白木しらぎの笏しゃくで自分を打つと見て、涙をそそぎ、すすり泣いて目をさました。

正月の末まで半蔵は東京に滞在して、飛驒行きをしたくをととのえた。齋いつきの道は遠く寂しく険しくとも、その踏めるということに彼は心を励まされて一日も早く東京を立ち、木曾街道經由の順路としてもいったんは国に帰り、それから美濃みのの中津川を経て飛驒へ向かいたいと願っていたが、種々さまざまな事情のためにこの出発はおくれた。みずから引き起こした献扇事件には彼もひどく恐縮して、その責めを負おうとする心から、教部省内の当局者あてに奏進始末を届け出て、進退を伺うということも起こって来た。彼の任地なる飛驒高山地方は当時筑摩県の管下にあつたが、水無神社は県社ともちがい、国幣小社の社格のある関係からも、一切は本省の指令を待たねばならなかった。一方にはまた、かく東京滞

在の日も長引き、費用もかさむばかりで、金子調達のことを郷里の伏見屋伊之助あてに依頼してあったから、その返事を待たねばならないということも起こって来た。幸い本省からはその儀に及ばないとの沙汰があり、郷里の方からは伊之助のさしずで、峠村の平兵衛に金子を持たせ、東京まで半蔵を迎えによすとの通知もあった。今は彼も心ぜわしい。再び東京を見うるの日は、どんなにこの都も変わっているだろう。そんなことを思いうかべながら、あちこちの暇乞いにも出歩いた。旧組頭廃止後も峠のお頭で通る平兵衛は二月にはいつて、寒い乾き切った日の夕方に左衛門町の宿へ着いた。

半蔵と平兵衛とは旧宿場時代以来、ほとんど主従にもひとしい関係にあった。どんなに時と場所とを変えても、この男が半蔵を「本陣の旦那」と考えることには変わりはなかった。慶応四年の五月から六月へかけて、伊勢路より京都への長道中を半蔵と共にしたその同じ思い出につながれているのも、この男である。平兵衛は伊之助から預かって来た金子ばかりでなく、半蔵が留守宅からの言伝、その後の山林事件の成り行き、半蔵の推薦にかかる訓導小倉啓助の評判など、いろいろな村の話を彼のところへ持って来た。東京から伝わる半蔵のうわさ——ことに例の神田橋外での出来事から入檻を申し付けられたとうわさの村に伝わった時は、意外な思いに打たれないものはなかった。中にも半蔵のために

最も心を痛めたものは伏見屋の主人であつたという話をも持って来た。

平兵衛は言つた。

「そりや、お前さま、何もわけを知らないものが聞いたら、たまげるわなし。」

「……」

「ほんとに、人のうわさにろくなことはあらずか。半蔵さまが気が違つたという評判よし。お民さまなどはそれを聞いた時は泣き出ささせる。皆のものが言うには、本陣の旦那はあんまり学問に凝らつせるで、まんざら世間の評判もうそではならず、なんて——村じや、そのうわささ。そんなばかなことがあるもんかッて、お前さまの肩を持つものは、伏見屋の旦那ぐらいのものだつた。まあ、おれも、今度出て来て見て、これで安心した。」

「……」

飛驒を知らない半蔵が音に聞く嶮岨けんそな加子母峠かしもとうげの雪を想像し、美濃と飛驒との国境くにぎかいの方にある深い山間の寂寞せきばくを想像して、冬期には行く人もないかと思つたほど途中の激寒を恐れたことは、平兵衛の上京でやや薄らぎもした。というのは、飛驒高山地方から美

濃の中津川まで用達^たしに出て来た人があつたとかで、伊之助は中津川でその人から聞き得たことをくわしい書付にして、それを平兵衛に託してよこしてくれたからであつた。その書付によると、水無神社は高山にあるのではなくて、高山から一里半ほどへだてた位置にある。水無川は神社の前を流れる川である。神通川^{じんずうがわ}の上流である。神社を中心に発達したところを宮村と言つて、四方から集まつて来る飛驒^{さんけいしや}の参詣者は常に絶えないという。大祭、九月二十五日。ことにめずらしいのは十二月三十一日の年越え詣^{もう}で、盛装した男女の群れが神前に新しい春を迎えようとする古い風俗はちよつと他の地方に見られないものであるとか。美濃方面から冬期にこの神社の位置に達するためには、藁沓^{わらぐつ}を用意し、その上に「かんじき」をあてて、難場中の難場と聞こえた国境の加子母峠^{かしもとうげ}を越えねばならない。それでも旅人の姿が全く絶えるほどの日はなく、雪もさほど深くはない。中津川より下呂^{げろ}まで十二里である。その間の道が困難で、峠にかかれば馬も通わないし、牛の背によるのほかはないが、下呂まで行けばよい温泉がわく。旅するものはそこ^{あた}にからだを温めることができる。下呂から先は歩行も困難でなく、萩原^{はぎわら}、小坂^{おさか}を経て、宮峠^{みやとうげ}にかかると、その山麓^{さんろく}に水無神社を望むこともできる。なお、高山地方は本居宣長の高弟として聞こえた田中大秀^{おおひで}のごとき早く目のさめた国学者を出したところだから、半蔵が任地^{おもむ}に赴い

たら、その道の話相手や歌の友だちなぞを見つけることもあろうと書き添えてある。

出発の前日には、平兵衛が荷ごしらえなどするそばで、半蔵は多吉と共に互いに記念の短冊^{たんざく}を書きかわした。多吉はそれを好める道の発句^{ほく}で書き、半蔵は和歌で書いた。左衛門町の夫婦は別れを惜しんで、餞別^{せんべつ}のしるしにと半蔵の前にさし出したのは、いずれも旅の荷物にならないような、しかも心をこめたものばかりであった。多吉からは黄色な紙に包みである唐墨^{からすみ}。お隅からは半蔵の妻へと云つて、木曾の山家では手に入りそうもない名物さくら香^かの油。それに、元結^{もとゆい}。

「まったく、不思議な御縁です。」

翌朝早く半蔵はその多吉夫婦の声を聞いて、別れを告げた。頼んで置いた馬も来た。以前彼が江戸を去る時と同じように、引きまとめた旅の荷物は琉球^{りゅうきゅう}の菰包^{こもづつみ}にして、平兵衛と共に馬荷に付き添いながら左衛門町の門^{かど}を離れた。

「どれ、そこまでわたしも御一緒に。」

という多吉はあわただしく履物^{はきもの}を突ツかけながら、左衛門橋の上まで半蔵らを追つて来た。上京以来、半蔵が教部省への勤め通いに、町への用達しに、よく往復したその橋のほとりも、左衛門町の二階と引き離しては彼には考えられないようなものであった。その

朝の河岸に近く舫^{もや}つてある船、黒ずんで流れない神田川の水、さては石垣^{いしがき}の上の倉庫の裏手に乾^ほしてある小さな鳥かごまでが妙に彼の目に映った。

王政復古以来、すでに足掛け八年にもなる。下から見上げる諸般の制度は追い追いつたやうであるが、一度大きく深い地滑り^{じすべ}が社会の底に起こつて見ると、何度^{なんど}も余りの震動が繰り返され、その影響は各自の生活に浸つて来ていた。こんな際に、西洋文物の輸入を機会として、種々雑多の外国人はその本国からも東洋植民地からも入り込みつた。それらのヨーロッパ人の中には先着の客の意見を受け継ぎ、日本人をして西洋文明を採用せしめるの途^{みち}は、強力によつて圧倒するか、さなくば説諭し勸奨するか、そのいずれかを出でないとの尊大な考えを抱^{いだ}いて来るものがある。衰余の国民が文明国の干渉によつて勃興^{ぼつこう}した例は少ないが、今は商業も著しく発達し、利益と人道とが手を取つて行く世の中となつて来たから、よろしく日本を良導して東洋諸衰殘国の師たる位置に達せしめるがいいというやうな、比較的同情と親愛とをもつて進んで来るものもある。ヨーロッパの文明はひとり日本の政治制度に限らず、国民性それ自身をも滅亡せしめ

る危険なくして、はたして日本の国内にひろめうるか、どうか。この問いに答えなければならなかったものが日本人のすべてであった。当時はすでに民選議院建白の声を聞き、一方には旧土族回復の主張も流れていた。目に見えない瓦解がかいはまだ続いて、失業した土族から、店の戸をおろした町人までが互いに必死の叫びを揚げていた。だれもが何かに取りすがらずにはいられなかったような時だ。半蔵は多くの思いをこの東京に残して、やがて板橋經由で木曾街道の空に向かった。

五

「お師匠さま。」

その呼び声は、雪道を凍らせてすべる子供らの間に起こっている。坂になった町の片側をたくみにすべって行くものがある。ころんで起き上がるものがある。子供らしい笑い声も起こっている。

山家やまが育ちの子供らは手に手に鳶とびぐち口を携え、その手のかじかむのも忘れ、降り積もった雪道の遊戯に余念がない。いずれも元の敬義学校の生徒だ。名も神坂みさかむら村小学校と改めら

れた新校舎の方へ通^{かよ}っている馬籠^{まこめ}の子供らだ。二月上旬の末に半蔵は平兵衛と連れだながら郷里に着いて、伏見屋の前あたりまで帰って行くと、自分と呼ぶその教え子らの声を聞いた。

「お父^{とつ}さん。」

と呼びながら、氷すべりの仲間から離れて半蔵の方へ走って来るのは、腕^{わん}白^{ぱく}ざかりな年ごろになった三男の森夫であつた。そこには四男の和助^{としようえ}までが、近所の年長^{としうえ}の子供らの仲間にはいりながら、ほつぺたを紅^{あか}くし、軽^{かる}衫^{さん}の裾^{すそ}のぬれるのも忘れて、雪の中を歩き回るほど大きくなっていた。

新しい春とは言つても山里はまだ冬ごもりのまつ最中である。半蔵の留守宅には、継母のおまんをはじめ、妻のお民、娘お糸^{くめ}、長男宗太から下男佐吉らまで、いずれも雪の間に石のあらわれた板屋根の下で主人の帰りを待ち受けていた。東京を立てからの半蔵はすでに八十余里の道を踏んで来て、凍えもし、くたぶれもしていたが、そう長く自分の家にとどまることもできない人であつた。三日ばかりの後にはまた馬籠を立て、任地の方へ向かわねばならなかつた。あまりに飛驒行きの遅れることは彼の事情が許さなかつたからで。馬につけて来た荷もおろされ、集まって来る子供の前に旅の土産^{みやげ}も取り出され、長い

留守中の話や東京の方のうわさがそこへ始まると、早くも予定の日取りを聞きつけた村の衆が無事で帰って来た半蔵を見にあとからあとからと詰めかけて来る。松本以来の訓導小倉啓助は神坂村小学校の報告を持って、馬籠町内の旧組頭笹屋庄助はその後の山林事件の成り行きと村方養蚕奨励の話などを持って、荒町の禰宜松下千里は村社諏訪社の祭礼復興の話を持ってというふうに。

わずか三日ばかりの半蔵が帰宅は家のものにとつても実にあわただしかった。炉の火を大きな十能に取って寛ぎの間へ運び、山家らしい炬燵に夫のからだをあたためさせながら、木曾福島の植松家からあつた娘お糸の縁談を語り出すのはお民だ。そこへ手のついた古風な煙草盆をさげて来て、ふるさにあるものがこのままの留守居を続けることはいかにも心もとないと言ひ出すのはおまんだ。宗太もまだ十八歳の若者ではあるが、村では評判の親孝行者であり、半蔵の従兄に当たる栄吉にその後見をさせ、旧本陣時代からの番頭格清助にも手伝わせたなら、青山の家がやれないことはあるまい、半蔵の水無神社宮司として赴任するのを機会にこの際よろしく家督を跡目相続の宗太に譲り、それから自分の思うところをなせ——そう言うおまんは髪こそ白さを加えたが、そこへ手について頭を上げ得ないでいる半蔵を前に置いて、この英断に出た。たとい城を枕に討死にするような日

が来ても旧本陣の格はくずしたくないと言いたげな継母の口から、日ごろの経済のうとさを一々指摘された時は、まったく半蔵も返す言葉がなかった。

今度の帰国の日は、半蔵が自分の生しょうがい涯がいの中でもおそろく忘れることのできなかりうと思つた日である。彼が四十四歳で隠居の身となることを決心したのもその間であつた。これは先代の吉左衛門が六十四歳まで馬籠の宿役人を勤め、それから家督を譲つて、隠居したのに比べると二十年早い。また、先々代半六が六十六歳のおりの引退に比べると二十年も早い。

このさみしき、あわただしさの中で、半蔵はすこしの暇でも見つけるごとに隣家の伏見屋へ走つて行つた。無事な伊之助の顔を見て、いろいろ世話になつた礼を述べ、東京浅草左衛門町までの旅先で届けてもらつた金子のことも言い、継母にはまたしかられるかもしれないが亡なき吉左衛門が彼にのこして行つた本陣林のうちを割さいてその返済方にあてたいと頼んだ。彼の長男があとの年齢としのうら若さで、はたしてやり切れるかどうかもおぼつかなくはあるが、お民も付いているし、それに自分ほもはや古い青山の家に用のないような人間であるから、継母の言葉に従つたとも告げた。そして彼が伊之助にその話をして家に引き返して来て見ると、長いこと独身で働いていた下男の佐吉があかぎれだらけの大きな手

をもみもみ彼の前へ来た。この男も、今度いよいよ長い暇いとまを告げ、隣村山口に帰り、嬬かかをもらつて竈かまどを持ちたいと言う。

「旦那、お前さまに折り入つてお願いがある。」

「なんだい、佐吉。言つて見ろ。」

「お前さまも知つてるとおり、おれには苗字みょうじがない。」

「おゝ、佐吉にはまだ苗字がなかったか。」

「見さつせれ。皆と同じように、おれもその苗字がほしいわなし。お前さまのような人にそれをつけてもらえたら、おれもこうして長く御奉公したかいがあるで。」

この男の言うようにすると、自分の姓はどんなものでもいい。半蔵の方で思つたようにつけてくれれば、それでいい。多くの無筆なものと同じように、この男の親も手の荒れる畠仕事はたけに追われ通して、何一つ書いたものがあとに残つていない。小使い帳一冊残つていない。家に伝わるはつきりした系図というようなものもない。黙つて働いて、黙つて死んで行つた仲間だ。ついては、格別やかましい姓を名乗りたいではないが、自分の代から始めることであるから、何か自分に縁故のあるものをほしい。日ごろ本陣の北に当たる松林で働いて来た縁故から、北林の苗字はどうあろうかと言ひ出したので、半蔵は求めらるる

ままに北林佐吉としてやった。山口へ帰つたら早速その旨を村役場へ届けいでよと勧めた。この男には半蔵は家に伝わる田地を分け、下男奉公のかたわら耕させ、それを給金の代わりに当ててあつた。女ぎらいかと言われたほどの変わり者で、夜遊びなどには目もくれず、昼は木小屋、夜は母屋の囲炉裏ばたをおのれの働く場所として、主人らの食膳に上る野菜という野菜は皆この男の手造りにして来たものであつた。

青山氏系図、木曾谷中御免荷物材木通用帳、御年貢皆済目録、馬籠宿駅印鑑、田畑家屋敷反別帳、その他、青山の家に伝わる古い書類から、遠い先祖の記念として残つた二本の鎗、相州三浦にある山上家から贈られた家宝の軸——一切それらのものの引き渡しの時も迫つた。ほとほと半蔵には席の暖まるいとまもない。彼は店座敷の障子のわきにある自分の古い桐の机の前にすわつて見る間もなく、またその座を立て、宗太へ譲るべき帳面の類なぞ取りまとめにかかった。何げなくお糸はその部屋をのぞきに來て、本陣、問屋、庄屋の三役がしきりに廃された当時のことを思い出し顔であつた。家の女衆の中で最も深く瓦解の淵をのぞいて見たものも、この早熟な娘だ。

「おゝ、お糸か。」

と半蔵は声をかけながら、いっばいに古い書類のちらかつた部屋の内を歩き回っていた。

お糸ももはや二十歳の春を迎えている。死をもつて自分の運命を争おうとしたほどの娘のところへも、新規な結婚話が、しかも思いがけない木曾福島 of 植松家の方から進められて来て、不思議な縁の、偶然の力に結ばれて行こうとしている。

「お父さん。やつとわたしも決心が付きました。」

お糸はそれを見て見せたぎり、堅く緋ぢりめんの半襟はんえりをかき合わせ、あだかも一昨おととし年の古疵ふるきずの痕あとをおおうかのようにして、店座敷から西の廊下へ通う薄暗い板敷きの方へ行つて隠れた。

三日過ぎには半蔵は中津川まで動いた。この飛驒行きに彼は妻を同伴したいと思わないではなく、今すぐにと言わないまでも、先へ行つて落ち着いたら妻を呼び迎えたいと思わないではなかったが、どうしてお民というものが宗太の背後うしろにいなかったら、馬籠の家は立ち行きそうもなかった。下男佐吉も今度は別れを惜しんで、せめて飛驒の宮村までは彼の供をしたいと言ひ出したが、それも連れずであつた。旅の荷物は馬につけ、出入りの百姓兼吉に引かせ、新茶屋の村はずれから馬籠の地にも別れて、信濃しなのと美濃みのの国境くにぎかいにあ

たる十曲峠じつぎよくとうげの雪道を下つて来た。

中津川では、半蔵は東京の平田鉄胤かねたね老先生や同門の医者金丸恭順などの話を持つて、その町に住む二人ふたりの旧友を訪ねたたず。長く病床にある香蔵は惜しいことにもはや再び起たててうもない。景蔵はずつと沈黙をまもる人であるが、しかしあつて見ると、相変わらずの景蔵であつた。

険しい前途の思ひは半蔵の胸に満ちて来た。彼は宮村まで供をするという兼吉を見て、ともかくも馬で行かれるところまで行き、それから先は牛の背に荷物をつけ替えようと語り合つた。というのは、岩石のそそり立つ山坂を平地と同じように踏めるのは、牛のような短く勁つよい脚あしをもつたものに限ると聞くからであつた。雪をついて飛驒の山の方へ落ちて行く前に、半蔵は中津川旧本陣にあたる景蔵の家の部屋を借り、馬籠の伏見屋あてに次ぎのような意味の手紙を残した。

「小竹伊之助君——しばらくのお別れにこれを書く。自分はこの飛驒行きを天の命とも考えて、高地の方に住む人々に、満足するような道を伝えたいため、馬籠をあとにして中津川まで来た。飛驒の人々が首を長くして自分の往いくのを待ちわびているような気がしてならない。二年、三年の後、自分はむなしく帰るかもしれない。あるいは骨となつて帰るか

もしれないが、ただただ天の命を果たしうればそれでいいと思う。東京の旅以来、格別お世話になったことは、心から感謝する。ただお糸のことは、今後なにとぞも何卒お力添えあるようお願いする。いよいよ娘の縁づいて行くまでに話が進んだら、そのおりは自分も一度帰村する心組みであるが、これが自分の残して行く唯一のお願いである。自分は今、すこぶる元気である。心も平素よりおちついているような気がする。君も御無事に。」

第十三章

一

四年あまり過ぎた。東京から東山道經由で木曾を西へ下って来て、馬籠まごめの旅籠屋はたごや三浦屋の前で馬を停とめた英国人がある。夫人同伴で、食料から簡単な寝具食器たぐいの類まで携えて来ている。一人ひとりの通弁と、そこへ来て大きなトランクの荷をおろす供の料理人をも連れている。

この英国人は明治六年に渡来したグレゴリー・ホルサムというもので、鉄道建築師として日本政府に雇われ、前の建築師長エングランドのあとを承うけて当時新橋横浜間の鉄道を主管する人である。明治の七年から十年あたりへかけてはこの国も多事で、佐賀の変に、征台の役に、西南戦争に、政府の支出もおびただしく、鉄道建築のごときはなかなか最初の意気込みどおりに進行しなかった。東京と京都の間をつなぐ幹線の計画すら、東海道を採るべきか、または東山道をえらぶべきかについても、政府の方針はまだ定まらなかった

時である。種々さまざまな事情に余儀なくされて、各地の測量も休止したままになっているところすらある。当時の鉄道と言えば、支線として早く完成せられた東京横浜間を除いては、神戸こうべ京都間、それに前年ようやく起工の緒についた京都大津間おおつを数えるに過ぎなかった。ホルサムはこの閑散な時を利用し、しばらくの休暇を請い、横浜方面の鉄道管理を分担する副役に自分の代理を頼んで置いて、西の神戸京都間を主管する同国人の建築師長たすを訪ねるために、内地を旅する機会をとらえたのであった。

木曾路きそじは明治十二年の初夏を迎えたところで、ホルサムのような内地の旅に慣れないものにとつても快い季節であった。ただこの旧い街道筋ふるを通過した西洋人もこれまでごくまれであつたために、異国の風俗はとかく山家の人たちの目をひきやすく、その点にかけては旅の煩わづらいとなることも多かった。これほど万国交際の時勢になつても、木曾あたりにはまだ婦人同伴の西洋人というものを初めて見るという人もある。それ異人の夫婦が来たと云つて、ぞろぞろついて来る村の子供らはホルサムが行く先にあつた。この彼が馬籠の旅籠屋の前で馬からおりて、ここは木曾路の西のはずれに当たると聞き、信濃と美濃の国境にも近いと聞き、眺めながをほしいままにするために双眼鏡なぞを取り出して、恵那山えなさんの裾野すそのの方にひらけた高原を望もうとした時は、顔をのぞきに来るもの、うわさし合うもの、異

国の風俗をめずらしがるもの、周囲は目をまる円くしたおとなや子供でとりまかれてしまった。あまりのうるささに、彼は街道風な出格子でこうしの二階の見える旅籠屋の入り口をさして逃げ込んだくらいだ。

ホルサムが思い立って来た内地の旅は、ただの観光のためばかりではなかった。彼が日本に渡来した時は、すでに先着の同国人ヴィカアス・ボイルがあつて、建築師首長として日本政府の依頼をうけ、この国鉄道の基礎計画を立てたことを知った。そのボイルが二回にもわたって東山道を踏査したのは、明治も七年五月と八年九月との早いころであつた。ホルサムが今度の思い立ちはその先着の英国人が測量した跡を視察して、他日の参考にそなえたためであつた。さてこそ、三留野泊みどのまり、妻籠つまご昼食、それからこの馬籠泊まりのゆつくりした旅となつたのである。

もともとこの国の鉄道敷設を勧誘したのは極東をめがけて来たヨーロッパ人仲間、彼らがそこに目をつけたのも早く開国以前に当たる。江戸横浜間の鉄道建築を請願し来たるもの、鉄道敷設の免許権を得ようとするもの、測量方や建築方の採用を求めたり材料器具

の売り込みに応じようとしたりするもの、いったん幕府時代に免許した敷設の権利を新政府において取り消すとは何事ぞと抗議し来たるもの、これらの外国人の続出はいかに彼ら自身が互いに激しい競争者であったかを語っている。そのうちに英国公使バアクスきんのような人があつて、明治二年の東北および九州地方の飢饉ききんの例を引き、これを救うためにも鉄道敷設の急務であることをのべたところから、政府もその勧告に力を得て鉄道起業の議を決したのであつた。たまたまわが政府のため鉄道に要する資金を提供しようという英国の有力者なぞがそこへあらわれて来て、いよいよこの機運を押し進めた。英国の鉄道建築師らが相前後してこの国に渡来するようになったのも不思議ではない。

当時、この国では初めて二隻の新艦を製し、清輝せいき、筑波つくばと名づけ、明治十二年の春にその処女航海を試みて大変な評判を取ったところである。なにしろ、大洋の航海術を伝習してからまだ二十年も出ないのに、自国人の手をもって船を造り、自国の航海者をもってこれを運用し、日本人のいまだかつて知らなかった地方を訪れ、これまで日本人を見たこともない者の目にこれを示し得たと言つて、この国のものはいずれも大いに意を強くしたほどの時である。海の方面すらこのとおりだ。まだ創業の際にある鉄道の計画などは一切の技術をヨーロッパから習得しなければならなかった。幸いこの国に傭聘ようへいせられて来た最初

の鉄道技術者にはエドモンド・モレルのような英国人があって、この人は組織の才をもつばかりでなく、言うことも時務に適し、日本は将来ヨーロッパ人の手を俵りないで事を執る準備がなければならぬ、それには教導局を置き俊秀な少年を養ひ百般の建築製造に要する技術者を造るに努めねばならないと言うような、遠い先のことまでも考える意見の持ち主であつたという。

その後に来たのがボイルだ。この建築師首長はまたモレルの仕事を幾倍にかひろげた。そして日本国内部を通過すべき鉄道線路を計画するのは経国の主眼であつて、おもしろい一大事業には相違ないが、また容易でないと云つて、その見地から国内に有利な鉄道を敷こうとするについては必ずまずその基本線の道筋を定むべきである、その後の支線は皆これを基として連合せしめることの肝要なのは万国一般の実況で、日本においてもそのとおりであるとの上申書を政府に差し出した。それには鉄道幹線は東山道を適當とするの意見を立てたのも、またこのボイルである。その理由とするところは、東海道は全国最良の地であつて、海浜に接近し、水運の便がある、これに反して東山道は道路も嶮悪けんあくに、運輸も不便であるから、ここに鉄道を敷設するなら産物運送と山国開拓の一端となるばかりでなく、東西両京および南北両海の交通を容易ならしめるであらうということであつた。ボ

イルが測量隊を率いて二回にもわたり東山道を踏査し、早くも東京と京都の間をつなぐ鉄道幹線の基礎計画を立て、その測量に関する結果を政府に報告し、東山道線および尾張線の径路、建築方法、建築用材および人夫、運輸、地質検査、運賃計算等を明細にあげ示したのも、この趣意にもとづく。

今度のホルサムが内地の旅は、大体においてこの先着の英国人が測量標杭を残したところであった。ボイルの計画した線は東京より高崎に至り、高崎より松本に至り、さらに松本より加納に至るので、松本加納間を百二十五マイルと算してある。それには松本から、洗馬、奈良井を経て、鳥居峠の南方に隧道を穿つの方針で、蘆原の裏側にあたる山麓のところで鉄道線は隧道より現われることになる。それから追い追いと木曾川の畔に近づき、蘆原と宮の越駅の間でその岸に移り、德音寺村に出、さらに岸に沿うて木曾福島、上松、須原、野尻、および三留野駅を通り、また田立村を過ぎて界の川で美濃の国の方にはいる方針である。

木曾路にはいつて見たホルサムはいたるところの谷の美しさに驚き、また、あのボイルがいかに冷静な意志と組織的な頭脳とをもつてこの大きな森林地帯をよく観察したかをも知った。ボイルの書き残したものとすると、奈良井と蘆原の間に存在する鳥居峠一帯の山

脈は日本の西北ならびに東南の両海浜に流出する流水を分界するものだと言つてある。またこの近傍において地質の急に変革したところもある、すなわちその北方犀川筋さいがわの地方はおもに破碎した翠増すいぞう岩石から成り立つていて、そしてその南方木曾川の谷は数マイルの間おもに大口火性石の谷側に連なるのを見るし、また、河底は一面に大きな塊かたまりの丸石でおおわれていると言つてある。木曾川は藪原辺ではただの小さな流れであるが、木曾福島おんたけさんの近くに至つて御嶽山から流れ出るいちじるしい水流とその他の支流とを合併して、急に水量を増し、東山道太田駅からおよそ九マイルを隔てた上流にある錦織村にしこうりむらに至つて、はじめて海浜往復の舟絡を開くと言つてある。御嶽山より流れ出る川（王滝川おうたきがわ）においては、冬の季節に当たつて数多あまたの材木を伐り出す作業というものがある、それはおもに檜ひのき杉すぎ、榎つが、および松の種類であるが、それらの材木を河中に投げ入れ、それから木曾川の岩石のとがり立つた河底を洪水こうずいの勢力によつて押し下し、これを錦織村において集合するそこで筏いかだに組んで、それから尾州湾に送り出すとも言つてある。ボイルの観察はそれだけにとどまらない。この川の上流においては槻材つきぎざいもまたたくさんに産出するが、それが重量であつて水運の便もきかず、また陸送するにはその費用の莫大ばくだいなために、かつてこれを輸出することがないと言つて、もし東山道幹線の計画が実現されるなら、この山国開発

の将来に驚くべきものがあることを暗示してある。

馬籠まで来て、ホルサムはこれらのことを胸にまとめて見た。隣村の妻籠からこの馬籠峠あたりはボイルが設計の内にははいっていない。それは山丘の多い地勢であるために、三留野駅から木曾川の対岸に鉄道線を移すがいいとのボイルの意見によるものであった。それにしてもこの計画は大きい。内部地方の開発をめぐり、都会と海浜との往復を便宜ならしめるの主意で、ことさら国内一般の利益を図ろうとするところから来ている。いずれは鉄道線通過のはじめにありがちな、頑固な反対説と、自然その築造を妨げようとする手合いの輩出することをも覚悟せねばならなかった。山家の旅籠屋らしい三浦屋の一室で、ホルサムはそんなことを考えて、来たるべき交通の一大変革がどんな盛衰をこの美しい谷々に持ち来たすであろうかと想像した。

二

翌朝ホルサムの一行は三浦屋を立つて、西の美濃路をさして視察に向かつて行つた。この旧い街道筋と運命を共にする土地の人たちはまだ何も知らない。将来の交通計画につい

て政府がどんな意向であるかも知らない。まして、開国の結果がここまで来たとは知りようもない。あの宿駕籠しゆくかご二十五挺ちよう、山駕籠五挺、駕籠桐油とうゆ二十五枚、馬桐油二十五枚、駕籠蒲団ぶたん小五十枚、中二十枚、提灯ちようちん十張はりと言ったはもはや宿場全盛の昔のことで、伝馬所にかわる中牛馬会社の事業も過渡期の現象たるにとどまり、将来この東山道を変えるものが各自の生活にまで浸つて来ようとはなおなお知りようもない。

伏見屋の伊之助は自宅の方に病んでいた。彼は、馬籠泊まりで通り過ぎて行つた英国人のうわさを聞きながら、二十余年の街道生活を床の上に思い出すような人であつた。馬籠の年寄役、兼問屋後見として、彼が街道の世話をしたのも一昔以前のことになった。彼の知っている狭い範圍から言つても、嘉永年代かえい以来、黒船の到着は海岸防備の必要となり、海岸防備の必要は徳川幕府および諸藩の経費節約となり、その経費節約は参覲交代制さんきんこうたい度の廃止となり、参覲交代制度の廃止はまたこれまでもすでに東山道を変えてしまった。

もはや明治のはじめをも御一新とは呼ばないで、多くのものがそれを明治維新と呼ぶようになった。ひとり馬籠峠の上にかぎらず、この街道筋に働いた人たちのことに想おもひいたると、彼伊之助には心に驚かれることばかりであつた。事実、町人と百姓とを兼ねたような街道人の心理は他から想像さるるほど単純なものではない。長い武家の奉公を忍び、腮あご

で使われる器械のような生活に屈伏して来たほどのものは、一人として新時代の楽しかれ

と願わぬはなからう。宿場の廃止、本陣の廃止、問屋の廃止、御伝馬の廃止、宿人足の廃

止、それから七里飛脚の廃止のあとにおいて、実際彼らが経験するものはたして何であ

つたろうか。激しい神経衰弱にかかるものがある。強度に精神の沮喪するものがある。種

々な病を煩うものがある。突然の死に襲われるものがある、驚かれることばかりであつ

た。これはそもそも、長い街道生活の結果か。内には崩れ行く封建制度があり、外には東

漸するヨーロッパ人の勢力があり、かくのごとき社会の大変態は、開闢以来いまだか

つてないことだと言わるるほどの急激な渦の中にあつた証拠なのか。張り詰めた神経と、

肉身との過労によるのか。いずれとも、彼には言つて見ることができない。過去を振り返

ると、まるで夢のような気がするとは、同じ馬籠の宿役人仲間の一人が彼に話したことだ。

彼は、その茫然自失したような人の言葉の意味を聞き流せなかったことを覚えている。

これらのことを伊之助がしみじみ語り合いたいと思う人は、なんと言つても青年時代か

ら同じ駅路の記憶につながれている半蔵のほかになかった。あの半蔵のような動揺した精

神とも違い、伊之助はなんとかして平常の心でこのむずかしい時を歩みたいと考えつづけ

て来たもので、それほど二人は正反對な氣質でいながら、しかも一番仲がよい。病苦はも

とより説くも詮なきことで、そんなことのために彼も半蔵を見たいとは願わなかったが、もしあの隣人が飛驒から帰っていたなら、気分のないおりにでも訪ねて来てもらって、先々代から伏見屋に残った美濃派の俳人らが寄せ書きの軸なりと壁にかけ、八人のものが集まって馬籠風景の八つのながめを思い思いの句と画の中に取り入れてある意匠を一緒にながめながら、この街道のうつりかわりを語り合いたいと思った。そうしたら彼は亡き養父金兵衛のことをもそこへ持ち出すであろう、七十四歳まで生きて三十一番の日記を残した金兵衛の筆は「明治三年九月四日、雨降り、本陣にて吉左衛門どの一周忌、御仏事御興行」のところで止めてあることをも持ち出すであろう、そして「このおれの目の黒いうちは」という顔つきで死ぬまで伊之助の世話を焼いて行つたほどのやかまし屋ではあるが、亡くなったあとになって、何かにつけてあの隠居のことを思い出すところを見ると、やはり人と異なつたところがあつたと見えると、言つて見るであろうと思つた。その半蔵は飛驒の水無神社宮司として赴任して行つてから、二度ほど馬籠へ顔を見せたぎりだ。一度は娘お桑が木曾福島の植松家へ嫁いで行つた時。一度は跡目相続の宗太のために飯田から姫女のお櫛を迎えた時。任期四年あまりにもなるが、半蔵が帰国のほどもまだ判然しない。

伊之助が長煩いの床の敷いてあるところは、先代金兵衛の晩年に持病の痰で寝たり起き

たりしたその同じ二階の部屋である。山家は柴刈りだ田植えだと聞く新緑のころで、たださえ季節に敏感な伊之助にはしきりに友恋しかった。彼は半蔵からもらったおりおりの便りまで大切にしていって、病床で読んで見てくれと言つて飛騨から送つてよこした旧作新作とりまぜの半蔵が歌稿なぞをも枕もとに取り出した。その認めてある生紙二つ折り横綴じの帳面からしていかにもその人らしく、紙の色のすこし黄ばんだ中に、どこか楮の青みを見つけるさえ彼にはうれしかった。

ふるさとの世にある人もなき人も夜な夜な夢に見ゆる頃かな

秋きぬと虫ぞなくなるふるさとの庭の真萩も今や咲くらむ

おもひやれ旅のやどりの独り寝の朝けの袖の露のふかさを

あはれとや月もとふらむ草枕さびしき秋の袖の上の露

独りある旅寝の床になくむしのねさへあはれをそへてけるかな

長き夜をひとりあらむと草枕かけてぞわぶる秋はきにけり

ありし世をかけて思へば夢なれや四十の秋も長くしもあらず

秋の歌。これは飛騨高山中教地にて詠めるとして、半蔵から寄せた歌稿の中にある。伊之助はこれを読みさして、水無川ともいい水無瀬川ともいう河原の方に思いをはせ、宮

峠のふもとから位^{くらい}山^{やま}を望む位置にあるという山里の深さにも思いをはせた。半蔵は水無神社から一町ほど隔てたところにある民家の別宅を借りうけ、食事や洗濯^{せんたく}の世話などしてくれる家族の隣りに住み、池を前に、違い棚^{だな}、床の間のついた部屋から、毎日宮司のつとめに通^{かよ}っているらしい。

「それにしても、この歌のさびしさはどうだ。」

と伊之助はひとり言つて見た。

春、夏、秋、冬、恋、雑というふうに分けてある半蔵の歌稿を読んで行くうちに、ことに伊之助が心をひかれたのはその恋歌であった。もともと、それは飛騨でできたものではないらしいが。

もろともに夢もむすばぬうき世にはふるもくるしき世にこそありけれ

おろかにもおもふ君かなもろともにむすべる夢の世とはしらずて

月をだにもらさぬ雲のおほほしく独りかもあらむ長きこの夜を

今ぞ知る世はうきものとおもひつつあひみぬなかの長き月日を

相おもふところのかよふ道もがなかたみにふかきほどもしるべく

年月をあひ見ぬはしに中たえておもひながらに遠ざかりぬる

霞かすみたつ春の日数をしのぶれば花さへ色にいでにけるかな

もろともにかざしてましを梅の花うつろふまでにあはぬ君かも

年月の塵ちりもつもりぬもろともに夢むすばむとまけし枕まくらに

うたたねの夢のあふせをあらたまの年月ながくこひわたるかな

年月のたえて久しき恋路こいじにはわすれ草のみしげりあふめり

この頃は夏野げんの草のうらぶれて風の音だにきかずもあるかな

たまさかの言の葉草もつまなくにたまるは袖そでの露にぞありける

しげりあふ夏山のまにゆく水のかくれてのみやこひわたりなむ

「あなた、そんなにつめていいんですか。」

階下したから箱梯子はこばしを登って、二間つづきの二階に寝ている伊之助を見に來たのは、妻の

お富とみだ。

「おれか、」と伊之助は答えた。「さつきからおれは半蔵さんの歌に凝ってしまった。こういうもので見ると、実にやさしい人がよく出ているね。」

「あの中津川のお友だちと、半蔵さんとは、どっちが歌はうまいんでしょう。」

「お前たちはすぐそういうことを言いたがるから困る。すぐに、どっちがうまいかなんて。」

「こりや、うっかり口もきけない。」

「だって、まるで行き方の違ったものだよ。別の物だよ。」

「そういうものですかねえ。」

「おれも好きな道だから言うが、半蔵さんの歌は出来不出来がある。そのかわり、どれを見ても真情は打ち出しているナ。言葉なぞは飾ろうとしない。あの拙^{つたな}いところが作者のよいところだね。こう一口にかじりついた梨^{なし}のような味が、半蔵さんのものだわい。」

伊之助に言わせると、それが半蔵だ。これらの歌にあらわれたものは、実は深い片思いの一語に尽きる。そしてこれまで長く付き合っただけで見た半蔵のしたこと、言ったこと、考えたことは、すべてその深い片思いでないものはない。あの献扇事件の場合にしても、半蔵の方で思うことはただただ多くの人に誤解された。土地のものなぞはそれを伝え聞いた時は氣^{きちが}狂いの沙汰^{さた}としてしまった。

「まあ、こちらでいくら思っても、人からそれほど思われなのが半蔵さんだね。ごらん

な、あれほどの百姓思いでも、百姓からはそう思われない。」

「半蔵さんは、そういう人ですかねえ。」

「ここに便り^{たよ}を待つ恋という歌があるよ。隠れてのみやこひわたりなむ、としてあるよ。」

「まあ。」

「あの人はすべてこの調子なんだね。」

伊之助夫婦はこんなふう^{いしがき}に語り合つた後、半蔵が馬籠に残して置いて行つた家族のうわさに移つた。石垣^{いしがき}一つ界^{さかい}にして隣家に留守居する人たちのことは絶えず伊之助の心にかかつていたからで。半蔵の妻お民が峠^{かしろ}のお頭^{かしら}を供に連れて一度飛騨まで訪ね^{たず}て行つたのは、あれは前年の秋九月の下旬あたりに当たる。しばらく飛騨からの便りも絶え、きつと半蔵は病氣でもしているに相違ないと言われたころのことだ。馬も通わないという嶮^{けんそ}岨^{かしも}な加子母峠^{とうげ}を越して、か弱い足で二十余里の深い山道を踏んで行つたことは、夫を思う女の一心なればこそそれができた。よくよくあの旅は骨が折れたと見えて、あとになってお民が風呂^ふでももらいに伏見屋^{かよ}へ通つて来るおりにはよくその話が出る。久津八幡^{くつはちまん}は飛騨の宮村から八里ほど手前にあるところだという。その辺までお民がたどり着いた時、向こうから益^ま田街道^{した}をやつて来る一人の若者にあつた。その若者が近づいて、ちよつとお尋ねしますが、

もしやあなたさまは水無神社の宮司さまのところへ行かれる奥さまではありませんか、と声をかけたという。いかにも、そうです、と答えた時のお民は、自分を待ち受けていくる夫の仮寓かぐうの遠くないことを知り、わざわざ彼女を迎えに来てくれた土地の若者であることをも知った。それはそれは御苦労さま、というお民の言葉をうけて、わしは宮司さまから頼まれて迎えにまいった近所のものでございます、空身からみですから荷物を持って行きましょう、とその若者が言ってくれる、お民の方ではそれを断わって、主人も待つて心配していようから、これからすぐ引き返して、「無事に来よるが」と伝えてください、と答えたとのことである。それからお民は八里ほど進んで、いかにも山深い宮峠みやとうげのふもとの位置に、東北には木曾の御嶽山の頂いただきも遠く望まれるようなところに、うわさにのみ聞く水無川の河原を見つけたという。お民はそう長くも夫のそばにいなかったが、ちょうど飛驒の宮祭りのころであつたことが一層彼女の旅を忘れたいものにしてゐるとか。

「なあ、お富。」とまた伊之助が枕の上で言い出した。「四年は長過ぎたなあ。」

「半蔵さんの飛驒がですか。」

「そうさ。」

「わたしに言わせると、はじめからあのお民さんを連れて行かなかつたのは、うそでした

よ。」

「うん、それもあるナ。まあいい加減に切り揚げて、早く馬籠へお帰りなさるがいい。あの半蔵さんが四十代で隠居して、青山の家を子に譲って、それから水無神社の宮司をこころざして行つたと思つてごらん。忘れもしない——あの人がおれのところへ暇いとま乞いに來て、自分はもう古い青山の家に用のないような人間だから、お袋（おまん）の言葉に従つたツて、そう言つたよ。あの時は、お糸さんもまだ植松のお嫁さんに行かない前で、あれほど物を思い詰めるくらい娘だから、こう顔を伏せて、目の縁ふちの紅あかく腫はれるほど泣きながら、飛驒行きのお父さんとつを見送つたツけが、お糸さんにはその同情があつたのだね。あれから半蔵さんが途中の中津川からおれのところへ手紙をよこした。自分はこの飛驒行きを天の命とも考えるなんて。ああいうところが半蔵さんらしい。二年、三年の後、自分はむなしく帰るかもしれない、あるいは骨となつて帰るかもしれないが、ただただ天の命を果たしうればそれでいいなんて書いてよこしたことを覚えてゐる。えらい意気込みさね。なんでも飛驒の方から出て來た人の話には、今度の水無神社の宮司さまのなさるものは、それは弘大な御説教で、この国の歴史のことや神さまのことを村の者に説いて聞かせるうちに、いつでもしまいには自分で泣いておしまいなさる。社殿の方で祝詞のりとなどをあげる時

にも、泣いておいでなさることがある。村の若い衆なぞはまた、そんな宮司さまの顔を見ると、子供のようにふき出したくなるそうだ。でも、あの半蔵さんのことを敬神の念につよい人だとは皆思うらしいね。そういう熱心で四年も神主かんぬしを勤めたと考えてごらん、とてもからだが続くもんじやない。もうお帰りなさるがいい、お帰りなさるがいい——そりや平田門人というものはこれまでですになすべきことはなしたのさ、この維新が来るまでにあの人たちが心配したり奔走したりしたことだけでもたくさんだ、だれがなんと言つてもあの骨折りが埋めうづめられるはずもないからナ。」

こんなうわさが尽きなかった。

山里も朴ほお、栃とち、すいかずらの花のころはすでに過ぎ去り、山百合やまゆりにはやや早く、今は藪や陰ぶかげなどに顔を見せる草くさや谷とくだみいっぱいに香氣をただよわす空木うつぎなどの季節になつて来ている。木の実で熟するものには青梅あずみ、杏あんずなどある中に、ことに伊之助に時を感じさせるのは、もはや畦塗あぜぬりのできたと聞く田圃道たんぼから幼い子供らの見つけて来る木いちごであつた。

お富や子供らのこと考えるたびに、伊之助の腋わきの下には冷たいねばりけのある汗がわく。その汗は病と戦おうとする彼の精神こころから出る。隣村山口から薬箱をさげて通かよつて来る医者

杏庵きようあん 老も多くを語らないから、病勢の進みについては彼は何も知らない。ただ、はつきりとした意識にすこしの変わりもなく、足ることを知り分に安んぜよとの教えを町人の信条とすることにも変わりなく、親しい半蔵と相見うるの日を心頼みにした。もはや日に日に日も長く、それだけまた夜は短い。どうして彼はその夏を越そうと考えて、枕もとに置く扇などを見るにつけても、明けやすい六月の夜を惜しんだ。

三

十月下旬になつて、半蔵は飛騨ひだから帰国の旅を急いで来た。彼は四年あまりの一の宮くわいや（水無神社）を辞し、神社でつかつていた小使いの倅せがれに当たる六三郎を供に連れ、位くらゐ山まをもあとに見て飛騨と美濃みのの国境くにぎかいを越して来た。供の男は二十三、四歳の屈強な若者で、飛騨風な背板せいた（背子せいこともいう）を背中に負い、その上に行李こうりと大風呂敷おおふろしきとを載せていたが、何しろ半蔵の荷物はほとんど書物ばかりで重かつたから、けわしい山坂にかかるとびに力を足に入れ、腰を曲めかが気味に道を踏んでは彼について来た。木曾きそあたりと同じように、加子母峠かしもとうげは小鳥で名高い。おりから、鶯つぐみのとれる季節で、半蔵は途中の加子母と

いうところでたくさんに鵜を買ひ、六三郎と共にそれを旅の中食に焼いてもらつて食つたが、余りの小鳥まで荷物になつて、六三郎の足はよけいに重かつた。

美濃と信濃しなのの国境に当たる十曲峠へかかるまでに、半蔵らは三晩泊まりもかかつた。そこまで歸つて来れば、松の並み木の続いた木曾街道を踏んで行くことができる。東美濃の盆地を流れる青い木曾川の川筋を遠く見渡すこともできる。光る木の葉、その葉の色づいて重なり合つた影は、半蔵らが行く先にあつた。路傍に古い黒ずんだ山石の押し出して来ているのを見つけると、供の六三郎は荷物を背負つたままそこへ腰掛け、額の汗ひたひたをふいて、しばらく足を休めてはまた半蔵と一緒に歩いた。

「おゝ、半蔵さまが歸つて来た。」

その久しぶりの平兵衛の声を半蔵は峠の新茶屋まで行つた時に聞きつけた。このお頭かしらは、諸講中の下げ札や御休おやすみどころ処とした古い看板のかかつた茶屋の軒下を出たりはいつたりして、そこに彼を出迎えてくれたのだ。伏見屋金兵衛の記念として残つた芭蕉ばしやうの句塚くづかまでが、その木曾路の西の入り口に、旅人の目につく路傍の位置に彼を迎えるように見える。伏見屋と言へば、伊之助はその時もはやこの世にいない人であつた。半蔵が飛騨の山の

方で伊之助の亡くなつたのを聞いて来たのはその年の暑いさかりのころに当たる。彼は伏見屋からの通知を受け取って見て、かねて病床にあつた伊之助が養生もかなわず、にわか
に病勢の募つたための惜しい最期であつたことを知つた。享年四十五歳。遺骸は故人の遺
志により神葬にして万福寺境内の墓地に葬る。なお、長男一郎は二代目伊之助を襲名する
ともその通知にあつた。とうとう、半蔵は伊之助の死に目にもあわずじまいだ。馬籠荒町
の村社諏訪分社の前まで帰つて来た時、彼は無事な帰村を告げに参詣したり、禰宜松下
千里の家へも言葉をかけに立ち寄つたりすることを忘れなかつたが、かつて駅路一切の奔
走を共にしたあの伊之助が草葉の陰にあるとは、どうしても彼にはまことのように思われ
もしなかつた。

馬籠の仲町近くまで帰ると、彼はもう幾人かの成人した旧い教え子にあつた。

「お師匠さま。」

と呼んでいち早く彼の姿を見つけながら走り寄る梅屋の三男益穂があり、伏見屋の三男
三郎がある。その辺は飯の戸長役場にも近く、筑摩県と長野県とに分かれた信濃の国の管
轄区域を合併して郡県の名までが彼の留守中に改まつた。これは馬籠というところかの顔
つきで、背中に荷物をつけながら坂になつた町を登つて来る供の六三郎は、どうかすると

彼におくれた。彼は途中で六三郎の追いつくのを待ちうけて、戸長役場の前を往還側に建てられてある標柱のところへ行つて一緒に立った。

その高さ九尺ばかり。表面には改正になつた郡県の名が筆太に記されてあり、側面にやや小さな文字で東西への里程を旅人に教えているのも、その柱だ。

長野県西筑摩郡神坂村 みさか

馬籠ふるの古い宿場も建て直ろうとする最中の時である。二十五人、二十五匹の宿人足と御伝馬とは必ず用意して置くはずの宿場にも、その必要がなくなつてからは、一匹の御伝馬につき買い入れ金十八両ほどずつ、一人ひとりの宿人足につき手当て七両二分ほどずつ受けて来た人たちも、勢い生活の方法を替えないわけには行かない。伊勢いせへ、津島へ、金毘羅こんびらへ、御嶽おんたけへ、あるいは善光寺への参詣者さんけいしやの群れは一新講とか真誠講とかの講中を組んで相変わらずこの街道にやつて来る。ここを通商路とする中津川方面の商人、飯田いいた行きの塩荷その他を積んだ馬、それらの通行にも変わりはない。しかし旧宿場に衣食して来た御伝馬役や宿人足、ないし馬差うまさし、人足差にんそくさしの人たちははやそれのみにたよれない。目証めあかしも

とくに土地を去り、雲助もいつのまにか離散して見ると、中牛馬会社の輸送に従事する以外のもは開墾、殖林、耕作、養蚕、その他の道についた。切り畑焼き畑を開いて稗蕎麦ひえそば等の雑穀を植えるもの、新田を開いて柴草しばくさを運ぶもの、皆元氣いっぱいだ。馬籠は森林と岩石との間であるばかりでなく、傾斜の多い地勢で水利の便もすくなく、荒い笹刈ささがりにハナや藪蚊ぶよを防ぐための火縄ひなわを要し、それも恵那山のすその谷間の方へ一里も二里もの山道を踏まねばならないほど骨の折れる土地柄であるが、多くのものはそれくらいとわなかつた。宿場の行き詰まりは、かえつてこの回生の活気を生んだ。そこへ行くと、新規まき直しの困難はむしろ従来宿役人として上に立った人たち、その分家、その出店でみせなどの家柄を誇るものの方に多い。というのは、今までの生活ぶりも一様ではなく、心がけもまちまちで、それになんと言つても長い間の旦那衆かたぎ氣質から抜け切ることも容易でないからであつた。そういう中で、梅屋のように思い切つて染め物屋を開業したところもある。旧のごとく街道に沿うた軒先すざきに杉の葉まるの円く束にしたものを掛け、それを清酒の看板に代えているのは、二代目伊之助の相続する伏見屋のみである。

半蔵が帰り着いたのはこうしたふるさとだ。彼が飛騨からの若者と共に、変わらずにある青山の家の屋根の下に草鞋わらじの紐ひもを解いたのは午後の三時ごろであつた。もとより新しい

進路を開きたいとの思い立ちからとは言いながら、国を出てからの長い流浪、東京での教部省奉職の日から数えると、足掛け六年ぶりで彼も妻子のところへ帰って来る事ができた。当主としての長男宗太はようやく二十二歳の若さで、よめのお禎^{まき}とてもまだ半分娘のような初々^{ういうい}しい年ごろであり、これまでに雛^{ひな}の夫婦を助けて長い留守を預かったお民がいくらか老いはしても相変わらずの元氣を持ちつづけ、うどんなど打って彼を待ち受けていてくれたと聞いた時は、まず彼も胸が迫った。そのうちに、おまんも杖^{つえ}について裏二階の方から通^{かよ}つて来た。いよいよ輝きを加えたこの継母の髪の毛の白さにも彼の頭はさがる。そばへ集まつて来た三男の森夫はすでに十一歳、末の和助は八歳にもなる。これにも彼は驚かされた。

帰国後の半蔵はいろいろ応接にいとまがないくらいであった。以前彼の飛驒行きを機会に長の暇^{いとま}乞^こいを告げて行つた下男の佐吉は、かみさんとも別れたと言って、また山口村から帰つて来て身を寄せている。旧本陣問屋庄屋時代から長いこと彼の家に通つた清助は、と聞くと、今は隣家伏見屋の手伝いにかわつて、造り酒屋の番頭格として働くかたわら、事あるごとにお民や宗太の相談相手となりに来てくれるという。村の髪結い直次の娘で、幼い和助が子守時代からずっと奉公に来ているお徳は、これも水仕事にぬれた手を拭^ふきふ

き、台所の流しもとから彼のところへお辞儀に来る。その時は飛騨から供の六三郎も重い荷物を背中からおろし、足を洗って上がった。この飛騨の若者はまた、ひどくくたぶれたらしい足を引きずりながらも家のものに案内されて、青山の昔を語る広い玄関先から、古い鎗やりのかかった長押ながし、次の間、仲の間、奥の間、諸大名諸公役らが宿場時代に休息したり寝泊まりしたりして行つた上段の間までも、めずらしそうに見て回るほど元気づいた。

六三郎はお民に言つた。

「奥さま、もうお忘れになつたかもしれませんが、あなたさまが飛騨の方へお越しの節に宮司さまに頼まれまして、久津八幡までお迎えに出ました六三郎でございます。」

日の暮れるころから、旧知親戚しんせきのものは半蔵を見に集まって来た。赤々とした炉の火はさかんに燃えた。串差くしざしにして炙あぶる小鳥のにおいは広い囲炉裏いろりばたにみちあふれたが、その中には半蔵が土産みやげの一つの加子母峠かしもとうげの鶴つぐみもまじっていると知られた。その晩、うどん振舞ふるまいに招かれて来た人たちは半蔵のことを語り合うにも、これまでのように「本陣の旦那だんな」と呼ぶものはない。いずれも「お師匠さま」と呼ぶようになった。

「あい、お師匠さまがお帰りだげなで、お好きな山の芋いもを掘ほってさげて来た。」

尋ねて来る近所の婆ばあさんまでが、その調子だ。やがて客人らは寛くつろぎの間に集まって、い

ろいろなことを半蔵に問い試みた。飛驒の国幣小社水無神社はどのくらいの古さか。神門と拝殿とは諏訪の大社ぐらいあるか。御神馬の彫刻はだれの作か。そこには舞殿があり絵馬殿があり回廊があるか。御神木の拗の木とは何百年ぐらいたっているか。一の宮に特殊な神事という鶏毛打の古楽にはどのくらいの氏子が出て、どんな衣裳をつけて、どんな鉦と太鼓を打ち鳴らすかの類だ。六三郎はおのが郷里の方のうわさをもれききながら、御相伴のうどんを味わった後、玄関の次の間の炬燵に寝た。

翌朝、飛驒の若者も別れを告げて行つた。家に帰つて来た半蔵はもはや青山の主人ではない。でも、彼は母屋の周囲を見て回ることを久しぶりの楽しみにして、思い出の多い旧会所跡の桑畠から土蔵の前につづく裏庭の柿の下へ出た。そこに手ぬぐいをかぶった妻がいた。

「お民、吾家の周囲も変わったなあ。新宅（下隣にある青山の分家、半蔵が異母妹お喜佐の旧居）も貸すことにしたね。変わった人が下隣にできたぞ。あの洒落ものの婆さんは村の旦那衆を相手に、小料理屋などをはじめてるそうじゃないか。」

「お雪婆さんですか。あの人は中津川から越して来ましたよ。」

「だれがああいう人を引ッぱつて来たものかなあ。それに、この土地に不似合いな小女

なぞも置いてるような話だ。そりや目立たないように遊びに行く旦那衆は勝手だが、宗太だつても誘われれば、否いやとは言えない。まあ、おれももう隠居の身だ。一切口を出すまいがね、ああいう隣の女が出入りしても、お前は氣にならないかい。」

「そんなことを言うだけ、あなたも年を取りましたね。」

お民は快活に笑つて、夫の留守中に苦心して築き上げたことの方にその時の立ち話をかえた。過ぐる年月の間、彼女の絶え間なき心づかいは、いかにして夫から預かつたこの旧家を安らかに持ちこたえて行こうかということであつた。それには一切を手造りにして、茶も自分の家で造り、蚕も自分で飼ひ、糸も自分で染め、髪につける油まで庭の椿つばきの実から自分で絞つて、塩と砂糖と藍あゐよりほかになるべく物を買わない方針を取つて来たという。森夫や和助のはく草履ぞうりすら、今は下男の夜なべ仕事に家で手造りにしていてもいう。これはすでに妻籠つまごの旧本陣でも始めている自給自足のやり方で、彼女はその生家きとで見えて来たことを馬籠の家に応用したのであつた。

間もなくお民は古い味噌納屋みそなやの方へ夫を連れて行つて見せた。その納屋はおまんが住む隠居所のすぐ下に当たる。半蔵から言えば、先々代半六をはじめ、先代吉左衛門が余生を送つた裏二階の下でもある。冬季のために野菜を貯えたくわようとする山家らしい営みの光景が

そこに開けた。若いよめのお櫃まきは母屋もやから、下女のお徳は井戸ばたから、下男佐吉は木小屋の方から集まって来て、洗いたての芋いも殻がら（ずいき）が半蔵の眼前に山と積まれた。梅うめ酢ずと唐辛子とうがらしとを入れて漬ける四斗樽しとだるもそこへ持ち運ばれた。色も紅あかく新鮮な芋殻を樽のなかに並べて塩を振る手つきなぞは、お民も慣れたものだ。

母屋の周囲を一回りして来て、おのれの書斎とも寝部屋ともする店座敷の方へ引き返して行こうとした時、半蔵は妻に言った。

「お民、お前ばかりそう働かしちや置かない。」

そう言う彼は、子弟の教育に余生を送ろうとして、この古里に帰って来たことを妻に告げた。彼もいささか感ずるところがあつてその決心に至つたのであつた。

四

飛驒ひだの四年あまりは、半蔵にとって生しょう涯がいの旅の中の最も高い峠というべき時であつた。在職二年にして彼は飛驒の人たちと共に西南戦争に際会した。遠く戦地から離れた山の上にありながらも、迫り来る戦時の空気と地方の動揺とをも経験した。王政復古以来、

「この維新の成就するまでは」とは、心あるものが皆言い合つて来たことで、彼のような旧庄屋風情ふぜいでもそのために一切を忍びつづけたようなものである。多くの街道仲間の不平を排しても、本陣を捨て、問屋を捨て、庄屋を捨てた時。報いらるのすくない戸長の職にも甘んじた時。あの郡県政治が始まつて木曾谷山林事件のために彼なぞは戸長の職を剥はがれる時になつても、まだまだ多くの深い草叢くさむらの中にあるものと共に時節の到来を信じ、新しい太陽の輝く時を待ち受けた。やかましい朝鮮問題をめぐつて全国を震い動かした大臣参議連が大争いに引き続き戊辰ぼしん以来の政府内部に分裂の行なわれたと聞く時になつても、まだそれでも彼なぞは心を許していた。内争の影響するところは、岩倉右大臣の要撃となり、佐賀、熊本くまもとの暴動となり、かつては維新の大業をめがけて進んだ桐野利秋きりのとしあきらのごとき人物が自ら参加した維新に反して、さらに新政の旗をあげ、強い武力をもつてするよりほかに今日を救う道がないとすると聞くようになって、つくづく彼はこの維新の成就する日の遠いことを感じた。

西南戦争を引き起こした實際の中心人物の一人とも目すべき桐野利秋とはどんな人であつたろう。伝うるところによれば、利秋は陸軍少将として明治六年五月ごろまで熊本鎮台の司令長官であつた。熊本鎮台は九州各藩の兵より成り、当時やや一定の法規の下にはあ

つたが、多くは各藩混交のわがまま兵であるところから、その統御もすこぶる困難とされていた。古英雄の風^{ふう}ある利秋はまた、区々たる規則をもつて兵隊を拘束することを好まない人で、多くは放任し、陸軍省の法規なぞには従わなかった。もとより本省の命令が鎮台兵の間に行なわるべくもない。この桐野流をよろこばない本省では、谷^{たに}干城^{たてき}に司令長官を命じ、利秋は干城と位置を換え陸軍裁判長となつたことがある。その時の利秋の不平は絶頂に達して、干城に対し山^{やま}県^{がたいふ}大輔をののしつた。その言葉に、彼山県は土百姓らを集めて人形を造る、はたして何の益があろうかと。大輔をののしるのはすなわち干城をののしるのであつた。元来利秋は農兵を忌みきらつて、兵は士族に限るものと考えた人であつた。これが干城と利秋との永^{なが}の別れであつたともいう。全国徴兵の新制度を是認し大阪鎮台兵の一部を熊本に移してまでも訓練と規律とに重きを置こうとする干城と、その正反対に立つた利秋とは、ついに明治十年には互いに兵火の間に相^{あいまみ}見ゆる人たちであつた。

この戦争は東北戦争よりもつと不幸であつた。なぜかなら、これはそのそもその起こりにおいて味方同志の戦争であるのだから。体内の血が逆に流れ、総身の毛筋^{さかだ}が逆立つような内部の苦しい抗争であるのだから。そして、かつての官武一途も上下一和も徳川幕府を向こうに回しての一途一和であつて、いったん共同の敵たる慶^{よしのぶ}喜の倒れた上は味方同

志の排斥と暗闘もまたやむを得ないとする国内の不一致を世界万国に向かつて示したようなものであるから。よもや起^たつまいと言われた西^{さい}郷^{こう}隆^{たかもり}盛のような人までがたつて、一万五千人からの血気にはやる子弟と運命を共にするようになった。長州の木戸孝允^{きどたかよし}のごとき人はそれを言つて、西郷ありてこそ自分らも薩摩^{さつま}と合力^{ごうりき}し、いささか維新の盛時にも遭遇したものであるのに、と地団駄^{じだんだ}を踏んだ。この隆盛の進退はよくよく孝允にも惜しまれたと見えて、人は短所よりむしろ長所で身を誤る、西郷老人もまた長^{なが}ずるところをもつて一朝の憤りに迷い末路を誤るのは実に残念千万であると言つたという。開戦は十年二月晦日^{みそか}であつた。薩摩方も予想外に強く、官軍は始終大苦戦で、開戦後四十日の間にわずかに三、四里の進軍と聞いて、孝允などはこれを明治の帝^{みかど}が中興^{ちゅうきやう}に大関係ある白骨勝負と見た。そして、今度の隆盛らの動きは無名の暴発であるから、天下の方向も幸いに迷うことはあるまいが、もともと明治維新と言われるものがまるで手品か何かのようにうまくとのつたところから、行政の官吏らがすこしも人世の艱苦^{かんく}をなめないのにただただその手品のようなところのみをまねて、容易に一本の筆頭で数百年にもわたる人民の生活や慣習を破り去り、功名の一方にのみ注目する時弊は言葉にも尽くせない、天下の人心はまだまだ決して楽しんではいない、このありさまを目撃しては血涙のほかはないと言つて、時代を

憂い憂い戦時の空気の中に病み倒れて行ったのも孝允であつた。

これくらいへんぴの艱難がこの国維新の途上に沸いて来るのは当然であつたかもしれない。飛騨の辺鄙な山の中でこの戦争を聞いていた半蔵ごときものでも、西からの戦報を手にするたびに安い心はなかつた。戦争が長引けば長引くほど山の中にはいろいろなことを言う者が出て来て、土州因州あたりは旧土族ばかりでなく一般の人々の気受けも薩摩しょうほうの捷報をよろこぶ色がある、あだかも長州征伐の時のようなど言い触らすものさえある。きうは宵よいの空に西郷星が出たとか、きようは熊本との連絡も絶えて官軍の籠城ろうじょうもおぼつかないとか聞かされたに、ただただ彼は地方の人たちと共に心配をわかつのほかはなかつた。試みに、この戦争に参加した陸軍軍人およそ五万二百余人、屯田兵とんでんへい六百余、巡查隊一万千余人、軍艦十四隻、海軍兵員およそ二千百余人と想像して見るがいい。もしこれが徳川氏の末のような時代の出来事で、一切が国内かぎりの世の中であるなら、おそらくこの戦争の影響は長州征伐のたぐいではなかつたであろう。これほどの出来事も過ぎ去つた後になつて見れば、維新途上の一小波瀾はうらんであつたと考えるものもあるほど、押し寄せる世界の波は大きかつた。戦争も終わりを告げるころには、西郷隆盛らは皆戦死し、その余波は当時政府の大立者おおだてものたる大久保利通おおくぼとしみちの身にまで及んで行つた。

この西南戦争が全国統一の機運を導いたことは、せめて不幸中の幸いであつた。人民の疾苦、下のものの難渋迷惑はもとより言うまでもない。明治の歴史にもこれほどばかばかしく外聞の悪い事はあるまいと言い、惜しげもなく將軍職を辞し江戸城を投げ出した慶喜に対しても恥ずかしいと言って、昨日の国家の元勳が今日の賊臣とは何の事かと嘆息しながら死んで行つた人もある。多くの薩摩隼人^{はやと}らが政府の要路に立つものに詰問の筋があると唱えて、ついに挙兵東上の非常手段に訴えたために、谷干城のごときは決死の敵を熊本城にくいとめ、身をもつて先輩西郷氏の軍に当たつた。この人にして見たら、敵將らの素志がこの社会の皮相なヨーロッパ化を堰^せきとめ、武士道を再興して人心を一新したいと願うところにあつたとしても、四民平等の徴兵制度を無視して今さら封建的な旧士族制を回復するとは何事ぞとなし、たとい武力をもつて国家の進路を改めようとする百の豪傑が生まれて来るとも、自分らは迷うところなく進もうと言つたであらう。ともあれ、この戦争はいろいろなことを教えた。政府が士族の救済も多く失敗に歸し、戊辰^{ぼしん}当時の戦功兵もまた報いらるるところの少なかつたために、ついに悲惨な結果を生むに至つたことを教えたのもこの戦争であつた。西郷隆盛らは古武士の最後のもののように時代から沈んで行つたが、しかし武の道のゆるがせにすべきでないことを教えたのもこの戦争であつた。もし政

府が人民の政府であることを反省しないで威と名の一方にのみ注目するなら、その結果は測りがたいものがあるうことを教えたのもまたこの戦争であつた。まったく、一時はどんな形勢に陥らないとも知りがたかつた。どうやら時勢はあと戻りし、物情は恟々として、半蔵なぞはその間、宮司の職も手につかなかつた。

しかし、半蔵が飛驒での経験はこんな西南戦争の空気の中に行き悩んだというばかりではない。

飛驒の位山くらいやまは、平安朝の婦人が書き残したものにも「山は位山」とあるように、昔から歌枕うたまくらとしても知られたところである。大野郡、久具野の郷が位山のあるところで、この郷は南は美濃の国境へおよそ十六里、北は越中えつちゅうの国境へ十八里、東は信濃の国境へ十一里、西は美濃の国境へ十里あまり。まずこの山が飛驒の国の中央の位置にある。古来帝都に奉り、御笏おんしやくの料とした一位いちいの木（あららぎ）を産するのでも名高い。この山のふもとに置いて考えるのにふさわしいような人を半蔵は四年あまりの飛驒生活の間に見つけた。もつとも、それは現存の人ではなく、深い足跡をのこして行つた故人で、しかも

かなりの老年まで生きた一人の翁おきなではあったが。

まだ半蔵は狩野永岳かのうえいがくの筆になったというこの翁の画像の前に身を置くような気がして
いる。この人の建こんりゆう立した神社の内部に安置してあった木像のそばにも身を置くような
気がしている。彼の胸に描く飛驒の翁とは、いかにも山やまびと人らしい風貌ふうぼうをそなえ、杉すぎの
葉の長くたれ下がったような白い粗い髻あらひげをたくわえ、その広い額や円味まるみのある肉厚にくあつな鼻
から光った目まで、言つて見れば顔の道具の大きい異相の人物であるが、それでいて口も
とはやさしい。白うすのようにどつしりしたところもある。この人が田中大秀おおひでだ。

田中大秀は千種園ちぐさえんのあるじといい、晩年の号を荏野翁じんや、または荏野老人ともいう。本
居宣長の高弟で、宣長の嗣子本居大平おおひらの親しい学友であり、橘曙覧たちばなあけみの師に当たる。
その青年時代には尾張熱田の社司栗田知周あわたともちかについて歌道を修め、京都に上つて冷泉殿れいぜい
の歌会に列したこともあり、その後しばらく伴蒿蹊ばんこうけいに師事したこともあるという閱歴を
持つ人である。半蔵がこの人に心をひかれるようになったのは、自分の先師平田篤胤あつ胤と同
時代にこんな早く古道の真髓に目のさめた人が飛驒あたりの奥山に隠れていたのかと思
つたばかりでなく、幾多の古書の校訂をはじめ物語類解釈の模範とも言うべき『竹取翁物
語解』のごときよい著述をのこしたと知つたばかりでもなく、あの篤胤大人に見るような

熱烈必死な態度で実行に迫って行つた生き方とも違つて、実にこの人がめずらしい「笑」の国学者であつたからで。

荏野の翁が事蹟じせきも多い。飛騨の国内にある古社の頽たい廢はいしたのを再興したり、自らも荏野神社というものを建ててその神主となり郷民に敬神の念をよび起こすことに努めたりした。あるいは美濃の養老の瀑たきの由緒ゆいしよを明らかにした碑を建て、あるいは美濃垂井清水たるいしみずに倭やまとたけるのみこと建けん命めいの旧蹟を考証して、そこに居寤いさめ清水の碑を建て、あるいはまた、継体天皇の御旧居の地を明らかにして、その碑文をえらみ、越前えちぜん足羽あすは神社の境内に碑を建てたのも、この翁だ。そうした敬神家の大秀はもとより仏法の崇拜とは相いれないのを知りながらも、金胎こんたい両部、あるいは神仏同体がこの国人の長い信仰で、人心を導くにはそれよい方法とされたものか、翁が菩提寺ぼだいじはもちろん、郷里にある寺々の由緒をことごとく調査して仏を大切に取り扱い、頽廢したものは興し、衰微したものは助け、各檀家だんかのものをして祖先の霊を祭る誠意をいたすべきことを覺さとらしめた。思いがけないような滑稽こっけいがこの老翁の優しい口もとから飛び出す。郷里に盆踊りでもある晩は、にわか芸づくし拝見と出かける。四番盆、結構、随分おもしろく派手にやれやれと言つた調子であつたらしい。翁のトボケた口ぶりは、ある村の人にあてた手紙の中の文句にもよく残っている。

オドレヤオドレヤ。オドルガ盆ジャ。マケナヨマケナヨ、アスノ夜ハナイゾ。オドレヤオドレヤ。

半蔵が聞きつけたのも、この声だ。かなしみの奥のほほえみ、涙の奥の笑いだ。おそらく新時代に先立つほど早くこの世を歩いて行った人で、その周囲と戦わなかったものはあるまい。そう想つて見ると、翁がかずかずの著書は、いずれも明日のしたくを怠らなかつたもので、まだ肩揚げのとれないような郷里の子弟のために縫い残した裾丈の長い着物でないものはない。

田中大秀のごとき先輩の国学者の笑った生涯にすら、よく探れば涙の隠れたものがある。まして後輩の半蔵風情だ。水無神社宮司としての彼は、神仏分離の行なわれた直後の時に行き合わせた。人も知るごとく飛騨の高山地方は京都風に寺院の多いところで、神仏混淆の長い旧習は容易に脱けがたく、神社はまだまだ事実において仏教の一付属たるがごとき観を有し、五、六十年前までは神官と婚姻を結ぶなら地獄に墮ちるなど言われて、相応身分の者は神官と婚姻を結ぶことさえ忌み避けるほどの土地柄であつた。国幣小社なる水無神社ですら、往時は一の宮八幡とも一の宮大明神とも言い、法師別当らの水無大菩薩など申して齋き奉った両部の跡であつた。彼が赴任して行つて見たころの神社の内部

は、その簾すだれのかげにも、ここの祓はらい戸どにも、仏教経卷などの置かれた跡でないものはな
 かった。なんという不思議な教えが長いことこの国人の信仰的となっていたらう。そこ
 にあつたものは、肉体を苦しめる難行苦行と、肉体的なよろこびの崇拜と、その両極端の
 不思議に結びついたもので、これは明らかに仏教の変遷の歴史を語り、奈良朝以後に唐土とうど
 から伝えられた密教そのものがインド教に影響された証拠だと言つた人もある。多くの偶
 像と、神秘と、そして末の世になればなるほど多い迷信と。一方に易やすく行ける浄土の道を
 説く僧侶そうりよもまた多かつたが、それはまた深く入つて浅く出る宗祖の熱情を失い、いたず
 らに弥陀みだの名をとえ、念仏に夢中になることを教えるようなものばかりで、古代仏教徒
 の純粹で嚴肅な男性的の鍛鍊たんれんからはすこぶる遠かつた。そういうものの支配する世界へ
 飛び込んで行つて、一の宮官司としての半蔵がどれほどの耳を傾ける里人を集め、どれほ
 どの神性を明らかにし得たらう。愚かに生まれついた彼のようなものでも、神に召され、
 高地に住む人々に満足するような道を伝えたいと考え、この世にはまだ古いにしえをあらわす道が
 残つていてと考え、それを天の命とも考えて行つた彼ではあるが、どうして彼は自ら思う
 ことの十が一をも果たせなかつた。維新以来、一切のものの建て直しとはまだまだ名ばか
 り、朝に晩に彼のたたずみながめた神社の回廊の前には石燈籠いしどうろうの立つ齋庭ゆにわがひらけ、よ

く行つた神門のそばには冬青そよぎの赤い実をたれたのが目についたが、薄暗い過去はまだそんなところにも残つて、彼の目の前に息づいているように見えた。

四年あまりの旅の末には教部省の方針も移り変わつて行つた。おそらく祭政一致の行なわれがたいことを知つた政府は、諸外国の例なぞに鑑かんみて、政教分離の方針を執るに至つたのであろう。この現状に平らかでない神官は任意辞職を申しいでよとあつて、全国大半の諸神官が一大交代も行なわれた。元来高山中教地は筑摩ちくま県の管轄区域であつたが、たまにそれが岐阜ぎふ県の管轄に改められる時を迎えて見ると、多くの神官は世襲で土着する僧侶とも違い、その境涯きやうがいに安穩な日も送れなかつた。高山町にある神道事務支局から支給せらるる水無神社神官らが月給の割り当ても心細いものになつて行つた。半蔵としては、本教を振るい興したいにも資力が足らず、宮司の重任をこうむりながらも事があがらないしまいには、名のつけようのない寂寞せきばくが彼の腰や肩に上るばかりでなく、彼の全身に上つて来た。

きのふけふしぐれの雨ともみぢ葉とあらそひふれる山もとの里

こんな歌が宮村の仮寓かぐうでできたのも前年の冬のことであり、同じ年の夏には次ぎのようなものもできた。

おのがうたに憂^うさやなぐさむさみだれの雨の日ぐらし早苗^{さなえ}とるなり

梅雨期の農夫を憐^{あわれ}む心は、やがて彼自ら憐む心であつた。平田篤胤没後の門人として、

どこまでも国学者諸先輩を見失うまいとの願^{いた}いから、彼も細い一筋道をたどつて、日ごろの願^{すまい}いとする神の住居にまで到^{いた}り着いたが、あの木曾の名所図絵にもある園原の里の「帚^は

木」のように、彼の求めるものは追つても追つても遠くなるばかり。半生の間、たまり

にたまつていたような涙が飛驒の山奥の旅に行つて彼のかたくなな胸の底からほとぼしり出るように流れて来た。この涙は人を打ち砕く涙である。どうかすると、彼は六三郎親子のものの住居^{すまい}の隣にあつた仮寓に隠れ、その部屋^{へや}の畳の上に額を押しつけ、平田門人としての誇りをも打ち砕かれたようになって、いくら泣いても足りないほどの涙をそそいだこともあつた。

まだ半蔵は半分旅にあるような氣もしていたが、ふと、恵那山の方で鳴る風の音を聞きつけてわれに歸つた。十月下旬のことで、恵那山へはすでに雪が来、里にも霜が来ていた。母屋^{もや}の西側の廊下の方へ行つて望むと、ふるさとの山はまた彼の目にある。過ぐる四年あ

まり、彼が飛驒の方でながめ暮らして来た位^{くらい}山^{やま}は、あの田中大^{おおひで}秀^{ひで}がほめてもほめてもほめ足りないような調子で書いた物の中にも形容してあるように、大きなかではあつてもはなはだしく高くなく、嶺^{みね}のさまは穏やかでけわしくなく、木立ちもしげり榮えてはあつるが、しかも物すごくなかつた。実に威あつて猛^{たけ}からずと言うべき山の容儀^{かたち}であるとした飛驒の翁の形容も決してほめ過ぎではなかつた。あの位山を見た目で恵那山を見ると、ここにはまた別の山^{さん}嶽^{がく}の趣がある。遠く美濃の平野の方へ落ちてゐる大きな傾斜、北側に山の懷^{ふところ}をひろげて見せてゐるような高く深い谷、山腹にあたつて俗に「鍋^{なべ}づる」の名称のある半円状を描いた地形、蕨^{わらび}平^{だい}、霧ヶ原の高原などから、裾野^{すその}つづきに重なり合つた幾つかの丘の層まで、遠過ぎもせず近過ぎもしない位置からこんなにおもしろくながめられる山麓^{さんろく}は、ちよつと他の里にないものであつた。木立ちのしげり榮えて、しかも物すごくないという形容は、そのままこの山にもあてはまる。山が曇れば里は晴れ、山が晴れば里は降るような変化の多い夏のころともちがつて、物象の明らかな季節もやつて来ている。

「お父^{とつ}さん。」

と声をかけて森夫と和助がそこへ飛んで来た。まだ二人^{ふたり}とも父のそばへ寄るのは飛驒臭

いという顔つきだ。半蔵は子供らの頭をなでながら、

「御覧、恵那山はよい山だねえ。」

と言つて見せた。どうしてこの子供らは久しぶりに旅から歸つて来た父の心なぞを知りようもない。学校通いの余暇には、兄は山歩きに、木登りに。弟はまた弟で、榎の実の落ちた裏の竹藪たけやぶのそばの細道を遊び回るやら、榎鳥かしどりの落としてよこす青い斑ふの入った小さな羽なぞを採さがし回るやら。ちようど村の子供の間には桶おけの箍たがを回して遊び戯れることが流行はやつて来たが、森夫も和助もその箍回しに余念のないような頑がん是ぜない年ごろである。

齋いつきの道を踏もうとするものとして行き、牙城ねじろと頼むものも破壊されたような人として歸つて来た。それが半蔵の幼い子供らのそばに見いだした悄しょう然ぜんとした自分だ。

「復古の道は絶えて、平田一門すでに破滅した。」

それを考えると、深い悲しみが彼の胸にわき上がる。古代の人に見るようなあの素直な心はもう一度この世に求められないものか、どうかして自分らはあの出発点に帰りたい、もう一度この世を見直したいとは、篤胤没後の門人一同が願ひであつて、そこから国学者らの一切の運動ともなったのであるが、過ぐる年月の間の種さまざま々な苦にがい経験は彼一個の失敗にとどまらないように見えて来た。いかなる維新も幻想を伴うものであるのか、物を極

端に持つて行くことは維新の付き物であるのか、そのためにかえつて維新は成就しがたいのであるか、いずれとも彼には言つて見ることはできなかったが、これまで国家のために功労も少なくなかつた主要な人物の多くでさえ西南戦争を一期とする長い大争いの舞台上で、あるいは傷つき、あるいは病み、あるいは自刃し、あるいは無慙な非命の最期を遂げた。思わず出るため息と共に、彼は身に徹えるような冷たい山の空気を胸いっぱい呼吸した。

亡き伊之助の百か日に当たる日も来た。今さら、人の亡くなった跡ばかり悲しいものはなく、月日の早く過ぐるのも似る物がないと言つた昔の人の言葉を取り出すまでもなく、三十日過ぎた四十日過ぎたと半蔵が飛驒の山の方で数えた日もすでに過ぎ去つて、いつのまにかその百か日を迎えた。

「お民、人に惜しまれるくらいのは、早く亡くなるね。おれのようなばかな人間はかえつてあとにのこる。」

「あのお富さんもお気の毒ですよ。早くおよめに来て、早く世の中を済ましてしまつたな

んて、そう言っていましたよ。あの人も、もう後家さんですからねえ——あの女ざかりで
 」。――

こんな言葉を妻とかわした後、半蔵は神祭の古式で行なわれるという上隣への坂になった往還を夢のように踏んだ。

伏見屋へはその日の通知を受けた人たちが、美濃の落合からも中津川からも集まりつつあった。板敷きになった酒店の方から酒の香氣かおりの通つて来る広い囲炉裏いろりばたのところ、しばらく半蔵は遺族の人たちと共に時を送った。喪もにいるお富は半蔵の顔を見るにつけても亡き夫のことを思い出すというふうで、襦袢じゆばんの袖口そでぐちなぞでしきりに涙をふいていたが、どうして酒も強いと聞くこの人が包み切れないほどの残りの色香を喪服に包んでいる風情ふぜいもなかなかにあわれであった。その時、半蔵は二代目伊之助のところへ嫁とついで来ているお須賀すがという若いおよめさんにもあった。伊之助は四人の子をのこしたが、それらの忘れ形見がいずれも父親似である中にも、ことに二代目が色白で面長おもながな倅おもかけをよく伝えていて、起居動作にまであの寛厚な長者の風のあつた人をしのばせる。故人が生前に、自分の子供を枕まくらもとに呼び集め、次郎は目を煩わづらっているからいたし方もないが、三郎とお末とは半蔵を師と頼み、何かと教えを受けて勉強せよ、これからの時世は学問なしにはかなわな

いと、くれぐれも言いのこしたという話も出た。臨終の日も近かったおりに、あの世へ旅立つて帰って来たもののあつたためしのないことを思えば、自分とてもこの命が惜しまれると言ったという話も出た。

「あれで、先の旦那も、『半蔵さんが帰ればいい、半蔵さんが帰ればいい』と言わつせて、どのくらいお前さまにあいたがつていたか知れすかなし。」

手伝いに来ている近所の婆さんまでが、それを半蔵に言つて見せた。

そのうちに村の旦那衆の顔もそろい、その日の祭りを司る村社諏訪分社の禰宜松下千里も荒町からやつて来た。妻籠の寿平次、実蔵（得右衛門の養子）、落合の勝重、山口の

杏庵老、いずれも半蔵には久しぶりに合わせる顔である。伏見屋の二階はこれらの人

々の集まるために用意してあつた二間つづきの広い部屋で、中央の唐紙なども取りはず

してあり、一方の壁の上には故人が遺愛の軸なども掛けてあつた。集まって来た客の中に

万福寺の松雲和尚の顔も見える。当日は和尚には宗旨違いでも、伏見屋の先祖たちが

ら受けた恩顧は忘れられないと言つて、和尚は和尚だけの回向をささげに禅家風な茶色の

袈裟がけなどで来ているところは、いかにもその人らしい。当日の主人側には、長いこと

隣家旧本陣に働いた清助が今は造り酒屋の番頭として、羽織袴の改まった顔つきで、二

代目を助けながらあちこちの客を取り持つているのも人々の目をひいた。やがて質素な式
 がはじまり、神酒、^{みき}白米、野菜などが型のように故人の靈前に供えられると、禰宜の鳴ら
 す柏手^{かしわで}の音は何がなしに半蔵の心をそそった。そこに読まれる千里の祭詞に耳を傾ける
 うちに、半生を通じてのよい道づれを失った思いが先に立って、その衆人の集まっている
 中で彼は周囲^{あたり}がまわす男泣きに泣いた。

五

休息。休息。帰国後の半蔵が願ひは何よりもまずその休息よりほかになかった。飛騨生
 活の形見として残った烏帽子^{えぼし}を片づけたり無紋で袖の括^{くく}つてある直衣^{のうし}などを手に取って打
 ちかえしながめたりするお民と一緒になつて見ると、長く別れていたあとの尽きない寝物
 語はよけいに彼のからだから疲れを引き出すようなものであった。彼は久しぶりに訪ねた^{たず}
 いと思う人も多く、無沙汰^{ぶさた}になつた家々をもおとずれたく、日ごろ彼の家^{みさか}に出入りする百
 姓^{すまい}らの住居をも見て回りたく、自ら創^{はじ}めて立てた敬義学校の後身なる神坂村小学校のこと
 も心にかかつて、現訓導の職にある小倉啓助の仕事をも助けたいとは思っていたが、一切

をあと回しにしてまず休むことにした。万福寺境内に眠っている先祖道斎をはじめ先代吉左衛門の墓、それから伏見屋の金兵衛と伊之助とが新旧の墓なぞの並ぶ墓地の方で感慨の多い時でも送つて帰つて来ると、彼は自分の部屋の畳の上に倒れて死んだようになってゐることもあつた。

店座敷の障子のそばに置いてある彼のきり桐の机もふるくなった。その部屋は表庭つづきの前せんざい栽を前に、押入れ、床の間のついた六畳ほどの広さで、障子の外に見える古い松の枝が堀越へいごしに高く街道の方へ延びているのは、それも旧本陣としての特色の一つである。寛くわんぎの間を宗太若夫婦に譲つてからは、彼はその部屋に退くともなく退いた形で、客でもあればそこへ通し、夜は末の和助だけをお民と自分とのそばに寝かした。

この半蔵はすでに妻に話したように、子弟の教育に余生を送ろうと決心した人で、それにはまず自分の子供から始めようとしていた。彼が普通の父親以上に森夫や和助の教育に熱心であるのは、いささか飛驒の山の方で感じて来たこともあるからであつた。ひどく肩でも凝る晩に、彼は森夫や和助を部屋へ呼びよせてたたかせることを楽しみにするが、それもただはたたかせない。歴代の年号なぞを諳あんしょう誦しょうさせながらたたかせた。

「その調子、その調子。」

と彼が言う、二人の子供はかわるがわる父親のうしろに回って、その肩に取りつきながら、

「貞享、元禄、宝永、正徳……」

お経でもあげるように、子供らはそれをやった。

こうした休息の日を送りながらも、半蔵はその後の木曾地方の人民が山に離れた生活に注意することを忘れなかった。もはや山林にもたよれなくなった人民の中には木曾谷に見切りをつけ、旧い宿場をあきらめ、追いつ追いつと離村するものがある。長く住み慣れた墳墓の地も捨て、都会をめがけて運命の開拓をころざす木曾人もなかなか多い。そうでもないまでも、竹も成長しない奥地の方に住むもので、耕地も少なく、農業も難渋に、山の林にでもするよりほかに立つ瀬のないものは勢い盗伐に流れる。中には全村こぞって嚴重な山林規則に触れ、毎戸かわるがわる一人ずつの犠牲者を長野裁判所の方へ送り出すことにしているような不幸な村もある。こんなに土地の事情に暗く、生民の期待に添おうとしないで、地租改正のおりにも大いに暴威を振るつた筑摩県時代の権中属、本山盛徳とはどんな人かなら、その後の下伊那郡の方で流職の行為があつて終身懲役に処せられ、佐賀の事変後にわずかに特赦の恩典に浴したとのうわさがあるくらいだ。政府は人民の政

府ではないかと言いながらも、こんな行政の官吏が下にある間は、いかんともしがたかった。地方の人民がいかによい政治を慕い、良吏を得た時代の幸福な日を忘れないでいるかは、この木曾谷の支配が尾州藩の手から筑摩県の管轄に移るまでの間に民政権^{ごんはんじ}判事として在任した土屋総藏の名がいまだに人民の口に上るのもわかる。

この郷里のありさまを見かねて、今一度山林事件のために奔走しようとする木曾谷十六か村（三十三か村の併合による）の総代のものが半蔵の前にあらわれて来た。これは新任の長野県令あてに、木曾谷山地官民有の区別の再調査を請願する趣意で、その請願書を作るための参考に、明治四年十二月と同五年二月との二度にわたって半蔵らの作成した嘆願書、および彼の集めた材料の古書類を借り受けたいとの話が今度の発起者側からあった。もとより彼は王滝の旧戸長遠山五平と前に力をあわせ、互いに寝食を忘れるほどの奔走をつづけ、あちこちの村を訪ね^{たず}回って旧戸長らの意見をまとめることに心を砕き、そのために主唱者とにらまれて戸長を免職させられたくらいだから、今度の発起者側からの頼みに異存のあろうはずもなかった。

請願書の草稿はできた。翌明治十三年の二月にはいるころには、各村戸長の意見もまとまって、その草稿の写しが半蔵のもとにも回って来るほどに運んだ。それは十六、七枚からの長い請願書で、木曾谷山地古来の歴史から、維新以来の沿革、今回請願に及ぶまでのことが述べてあるが、筋もよく通り、古来人民の自由になし来たった場所はさらに民有に引き直して明治維新の徳沢に浴するよう寛大の御沙汰^{ごさた}をたまわりたいとしたものであった。旧筑摩県の本山盛徳が権中属時代に調査済みの実際を見ると、全山三十八万町歩あまりのうち、その大部分は官有地となり、余すところの民有地はわずかにその十分の一に過ぎなくなつた。そのため、困窮のあまり、官林にはいつて罪を犯し処刑をこうむるものは明治六、七年以来数えがたく、そのたびに徴せらるる贖罪^{しよくざいきん}金もまた驚くべき額に上つた。これではどうしても山地の人民が立ち行きかねるから、各村に存在する旧記古書類をもつと精密に再調査ありたいとの意味も認^{した}めてある。この請願書の趣意はいかにも時宜に適したものだとして、半蔵なぞもひどくよろこんだ。

ところが、これには異論が出て、いよいよ県庁へ差し出すまでにはところどころに草稿の訂正が加えられた。半蔵はそれを聞いてその訂正されたものを見たいと思い、宗太を通してさらに発起者側から写しの書類を送ってもらつた。

「お父さん、この請願書にはだいぶ貼^はり紙^{がみ}がしてありますよ。」

そういう宗太もはや一人前の若者で、木曾山の前途には関心を持つらしい。半蔵は宗太と一緒にその書類に見入った。享^{きょう}保^{ほう} 保^ほ 検地以来のことを記^{しる}したあたりはことに省いてあつて、そのかわり原案の草稿にない文句が半蔵の目についた。

彼は宗太に言った。

「ホ、ここにも民有の権を継続してとあるナ。この書類はしばらくおれが借りて置く。よく読んで見る。」

ひとりになってからの半蔵は繰り返しその請願書に目を通した。木曾のような辺鄙^{へんぴ}な山の中に住んで、万事がおくれがちな人たちの中にも、いつのまにか世の新しい風潮を受け入れて、こんな山林事件にまで不十分ながらも民有の権利を持ち出すようになったことを想^{おも}つて見た。これが官尊民卑の旧習に気づいた上のことであるなら、とにもかくにも進歩と言わねばならなかった。最初彼が王滝の遠山五平らを語らい合わせて出発した当時の山林事件は、今のうちに官民協力して前途百年の方針を打ち建てて置きたいという趣意にもとづいた。というのは、従来木曾谷山地の処置については享保年度からの名古屋一藩かぎりの御制度であるから、郡県政治の時代となつては本県の管下も他郷一般の処置を下し置

かれたい、それには享保以前の古に復したいと願ったからであつた。言つて見れば、木曾谷の沿革には、およそ三期ある。第一期は享保以前で、山地には御役樽すなわち木租を納めさえすればその余は自由に伐木売買を許された時代、人民が山木と共にあつた時代である。第二期は享保以後から明治維新に至るまで。この時代に巢山、留山、明山の區別ができ、入山伐木を人民の自由に許した明山たりとも五種の禁止木の制を立て、そのかわりに木租の上納は廃された。旧領主と人民との間に紛争の絶えなかつた時代、人民がおもな山木に離れた時代である。それでもなお、五木以外の雑木と下草とは人民の自由で、切り畑焼き畑等の開墾もまた自由になし得た証拠は、諸村山論濟口の古証文、旧尾州領主よりの公認を証すべき山地の古文書、一村また数村の公約と見るべき書類等に残っている。のみならず幕府恩賜の白木六千駄は追い追い切り換えの方法をもつて代金二百三十一両三分銀十匁五分ずつ毎年谷中へ下げ渡されたことは、維新の際まで続いた。第三期は明治以来、木曾山の大部分は官有地と定められた時代、人民は明山の雑木と下草にも離れた時代である。半蔵らが享保以前の古に復したいとの最初の嘆願は、一部の禁止林を立て置かるるには異存がないから、その他の明山の開放を乞ひ、山地住民の義務を堅く約束して今一度山木と共にありたいとの趣意にほかならなかつた。もつとも、多年人民の苦痛と

する五木の禁止が何のためにあったのか。それほどまでにして尾州藩が木曾山を監視したのはどういう趣意にもとづいたのか。それが当時は十露盤そろばんづくで引き合う山でもなく、結局尾州家の財源にもならなかったとすれば、万一の用材に応ずる森林の保護のためにあったのか。それとも東山道中の特別な要害地域を守る封建組織のためにあったのか。あるいはまた、木曾川下流の大きな氾濫はんらんに備えるためにあったのか。そこまでは半蔵かも知るよしがなかった。

明治の御世みよも、西南戦争あたりまでの十年間というものは半蔵には実に混沌こんとんとして暗かった。あれから社会の空気も一転し、これまで諸方に蜂起ほうきしつつあった種々さまざまな性質の暴動もしずまり、だれが言うともない標語は彼の耳にも聞こえて来るようになった。この国のものもつと強くならねばならない、もつと富まねばならないというのがそれだ。言いかえれば、富国と強兵とだ。しかしよく見れば、地方の人心はまだまだ決して楽しんではいない。日ごろ半蔵らの慕い奉る帝みかどが新時代の前途を祝福して万民と共に出発したもうたころのことが、また彼の胸に浮かぶ。あの時に帝の誓われた五つのお言葉と、官武一途はもとより庶民に至るまでのおのその志を遂げよと宣せられたその庶民との間には、いつのまにか天あめの磐戸いわとにたとえたいものができた。その磐戸は目にも見えず、説き明かすこ

ともできないが、しかし深い草叢くさむらの中にあるものはそれを感じすることはできた。それあるがために日の光もあらわれず、大地もほほえまず、君と民とも交わることができなかった。どうして彼がそんな想像を胸に描いて見るかというに、あの東山道軍が江戸をさして街道を進んで来た維新のはじめの際、どんな社会の変革でも人民の支持なしに成し就なとげられたためしのないように、新政府としては何よりもまず人民の厚い信頼に待たねばならないとして、東山道総督の執事がそのために幾度も布告を発し、堅く民意の尊重を約束したころは、そんな磐戸はまだ存在しなかったからであつた。たまたまここに磐戸を開こうとしてあらわれて来た手力男たちからおの命にたえたいような人もあつた。その人の徳望と威力とは天下衆人に卓絶するものとも言われた。けれども、磐屋の前の暗さには変わりはない。力だけでは磐戸も開かれなかつたのだ。

こんな想像は、飛驒の旅の思い出と共に帰つて来る半蔵の夢でしかないが、それほど彼の心はまだ暗かつた。幾多の欠陥の社会に伏在すればこそ、天賦人權の新説も頭を持ち上げ、ヨーロッパ人の中に生まれた自由の理も喧伝けんでんせられ、民約論のたぐいまで紹介せられて、福沢諭吉ふくざわゆきち、板垣退助いたがきたいすけ、植木枝盛えもり、馬場辰猪たつひ、中江篤介とくすけらの人たちが思い思いに、あるいは文明の急務を説き、あるいは民権の思想を鼓吹こすいし、あるいは国会開設の必

要を唱うるに至った。真知なしには権利の説の是非も定めがたく、海の東西にある諸理想の区別をも見きわめがたい。ただただわけもなしに付和雷同する人たちの声は啓蒙^{けいもう}の時にはまぬがれがたいことかもしれないが、それが郷里の山林事件にまで響いて来るので、半蔵なぞはハラハラした。物を教える人がめつきり多くなつて、しかも学ぶに難い世の中になつて来た。良心あるものはその声にきいて道をたどるのほかはなかったのである。

この空気の中だ。今度木曾山を争おうとする人たちに言わせると、

「平田門人は復古を約束しながら、そんな古^{いにしえ}はどこにも帰つて来ないではないか。」

というにあるらしい。

これには半蔵は返す言葉もない。復古が復古であるというのは、その達成せられないところにあると言つたあの暮田正香^{くれたまさか}の言葉なぞを思い出して彼は暗然とした。ともあれ、県庁あての請願書はすでに差し出されたが、その結果もおぼつかなかった。たとい木曾谷の山林事件そのものがどう推し移ろうとも、旧領主時代からの長い紛争の種がこのままに置いて置けるはずもないから、自分らの代にできなければ子の代に伝えても、なんらかの良

い解決を見いだしたいと彼は切に願つた。

その年は木曾地方の人民にとつて記念すべき年であつた。帝には東山道の御巡幸を仰せ出され、木曾路の御通過は来たる六月下旬の若葉のころと定められたからであつた。

この御巡幸は、帝としては地方を巡らせたもう最初の時でもなかつたが、これまで信濃の国の山々も親しくは叡覧えいらんのなかつたのに、初めて木曾川の流るるのを御覧になつたら、西南戦争当時なぞの御心労は言うまでもなく、時の難さにさまざまのことを思召おもされるであらうと、まずそれが半蔵の胸に来る。あの山城やましの皇居を海に近い武蔵むさしの東京に遷し、新しい都を建てられた当初の御志おんこころざしに変わりなく、従来深い玉簾ぎよくれんの内にのみこもらせられた旧習をも打ち破られ、帝自らかく国々に御幸みゆきしたまい、簡易輕便を本として万民を撫育ぶいくせられることは、彼にはありがたかつた。封建君主のごときものと聞くヨーロッパの帝王が行なうところとは違つて、この国の君道の床ゆかしさも彼には想い当たつた。今度の御巡幸について地方官に諭さとされた趣意も、親しく地方の民情しんを知し召されたいのであつて、百般の事務が形容虚飾にわたつては聖旨もとに戻るから、厚く人民の迷惑にならないよう取り計らうことが肝要であると仰せられ、道路橋梁きやうりやう等のやむを得ない部分はあるいは補修を加うことがあらうとも、もとより官費に属すべきことで決して人民に難儀をかけ

まいぞと仰せられ、大臣以下供奉くぶの官員が旅宿はことさらに補修を加うるに及ばず、需要の物品もなるべく有り合わせを用いよと仰せ出されたほどであった。

五月の来るころには、長野県の御用掛りが道路見分に奥筋から出張して来るようになった。馬籠の戸長役場のものはその人を村境まで案内し、絵図の仕立て方なぞを用意することになった。いよいよ御巡幸の御道筋も定まって見ると、馬籠駅御昼食とのことである。

西筑摩ちくまの郡長、郡書記も出張して来て、行在所あんざいしょとなるべき家は馬籠では旧本陣青山方と指定された。これには半蔵はひどく恐縮し、御駐蹕ごちゆうひつを願いたいのは山々であるが、こんな山家にお迎えするのは恐れ多いとして、当主宗太を通して一応は御辞退する旨むね申し上げた。それには脇本陣榑田屋方こそ、二代目惣右衛門そうえもんのような名古屋地方にまで知られた町人の残した家のあとであるから、今の住居すまいは先年の馬籠の大火に焼けかわったものであるにしても、まだしも屋造りに見どころがあるとも申し上げたが、やはり青山の家の方が古い歴史もあり、西にひらけた眺望ちようぼうのある位置としても木曾にはめずらしく、座敷の外に見える遠近の山々も、ごちそうの一つということになった。半蔵としては、日ごろ慕い奉る帝が木曾路の御巡幸と聞くさえあるに、彼ら親子のものの住居すまいにお迎えすることができようなどとは、まったく夢のようであった。

「お民、妻籠つまごの方でも皆目を回しているだろうね。寿平次さんの家じやどうするか。」

「それがですよ。妻籠のお小休みは実蔵さん（得右衛門養子）の家ときまったそうですよ。」

「やつぱり、そうか。寿平次さんも御遠慮申し上げたと思える。」

半蔵夫婦の言葉だ。

そのうちに、御先発としての山岡鉄舟やまおかてつしゅうの一行も到着する。道路の修繕もはじまって、この地方では最初の電信線路建設の工事も施された。御膳水ごぜんすいは伏見屋二代目伊之助方の井戸を用うることに決定したなどと聞くにつけても、半蔵はあの亡き旧友なを思い出し、もし自分が駅長なり里長なりとして在職していて先代伊之助もまだ達者たっしやでいてくれたら、共に手を携えて率先奔走するであろうにと残念がった。亡き吉左衛門や金兵衛らと共にあの和宮様かずのみやさま御降嫁ののりの御通行を経験した彼は、あれほど街道の混雑を見ようとはもとより思わなかったが、それでも多数にお入り込みの場合を予想し、こんなことで人足や馬が足りようかと案じつづけた。

六月二十四日はすでに上諏訪御発輿かみすわごはつよの電報の来るころである。その時になると、木曾谷山地の請願事件も、何もかも、この街道の空気の中に埋め去うずられたようになった。帝行幸

のおうわさがあるのみだった。

この御巡幸の諸準備には、本県より出張した書記官や御用掛りの見分がある上に、御おうま厩課、内匠課たくみの人々も追い追ひ到着して、御道筋警衛の任に当たる警部や巡査の往来も日に日に多くなつた。馬籠でも戸長をはじめとして、それぞれの御用取扱人というものを定めた。だれとだれは調度掛り、だれは御宿掛り、だれは人馬継立つぎたて掛り、だれは御厩掛り、だれは土木掛りというふうに。半蔵は宗太を通して、その役割をしるした帳面を見せてもらふと、旧宿役人の名はほとんどその中に出ている。戊辰ぼしんの際に宿役人に進んだ亀屋かめや栄吉をはじめ、旧問屋九郎兵衛、旧年寄役榊田屋小左衛門ますだやこざえもん、同役蓬萊屋新助ほうらいや、同じく梅屋五助、旧組頭くみがしら笹屋庄助ささや、旧五人組の重立つた人々、それに年若ではあるが旧い家柄ふるとして伏見屋の二代目伊之助からその補助役清助の名まである。しかし、半蔵には何の沙汰たもない。彼も今は隠居の身で、何かにつけてそう口出しもならなかった。ただ宗太が旧本陣の相続者として今度御奉公申し上げるのは、彼にはせめてものなぐさめであつた。

御巡幸に先立つて、臣民はだれでも詩歌の類を献上することは差し許された。その詠進者は県下だけでもかなりの多数で、中には八十余歳の老人もあり、十一歳ぐらいの少年少女もあると聞こえた。半蔵もまたその中に加わつて、心からなる奉祝のまことをわずかに

左の一編の長歌に寄せた。

八隅^{やすみ}ししわが大君、かむながらおもほし召して、大八洲^{おおやしまくに}国の八十国^{やそくに}、よりによりに
 観^みて巡^{めぐ}らし、いちじろき神の社^{やしろ}に、幣^{ぬさ}まつりをろがみまし、御世^{みよ}御世のみおやの御陵^{みはか}、
 きよまはりをろがみまして、西の海東の山路、かなたこなた巡りましつ、明^{あきら}けく治^{おさ}る
 御世の、今年^{ことし}はも十あまり三とせ、瑞枝^{みずえ}さす若葉の夏に、ももしきの大宮人の、人さは
 に御供^{みとも}つかへて、東^{ひんがみ}の京をたたし、なまよみの甲斐^{かい}の国、山梨^{やまなし}の県^{あがた}を過ぎて、信濃^{しなの}路^じ
 に巡^{めぐ}りいでまし、諏訪^{すわ}のうみを見渡したまひ、松本の深志^{ふかし}の里に、大御輿^{おおみこし}めぐらした
 まひ、真木^{まき}立つ木曾のみ山路、岩が根のこごしき道を、かしこくも越えいでますは、古^{いにしえ}
 にたぐひもあらじ。

谷川の川辺^{いわべ}の巖、かむさぶる木々の叢立^{むらだち}、めづらしと見したまはむ、奇^くしともめで
 たまはむ。

我里は木曾の谷^との外、名に負^みふ神坂^{みさか}の村の、嶮^{さか}しき里にはあれど、見霽^{みはら}しの宜^{よろ}しき里、
 美濃^{みのう}の山近江^{おうみ}の山、はろばろに見えくる里、恵那^{えな}の山近く聳^{そび}えて、胆吹^{いぶき}山髣髴^{ほのか}にも見
 ゆ。

ももしきの美濃に往かさば、山をおり国低きかれば、かくばかり遠くは見えじ。しか
あらばここの御憩ひ、恒よりも長くいまさな。

春ならば花さかましを、秋ならば紅葉してむを、花紅葉今は見がてに、常葉木も冬木
もなべて、緑なる時にしあれば、遠近の置なづく山、茂り合ふ八十樹の嫩葉、あはれ
とも看したまはな。

かしこくもわが大君、山深き岐岨にはあれど、ふたたびもいでましあらな。
あなたふと、わが大君、しまらくも長閑にいまして、見霽るかしませ。

反歌

大君の御世とこしへによろづよも南の山と立ち重ねませ
夏山の若葉立ちくぐ霍公鳥なれもなのらな君が御幸に
山のまの家居る民の族まで御幸をろがむことのかしこさ

御順路の日割によると、六月二十六日鳥居峠お野立て、藪原および宮の越お小休み、
木曾福島御一泊。二十七日栈お野立て、寝覚お小休み、三留野御一泊。二十八日妻籠お小

休み、峠お野立て、それから馬籠御昼食とある。帝が群臣を従えてこの辺鄙な山里をも歴訪せらるるすずしい光景は、街道を通して手に取るように伝わって来た。輦路も嶮難なところから木曾路は多く御板輿で、近衛騎兵に前後を護られ、供奉の同勢の中には伏見二品宮、徳大寺宮内卿、三条太政大臣、寺島山田らの参議、三浦陸軍中将、その他伊東岩佐らの侍医、池原文学御用掛りなぞの人々があると云われる。福島が行在所において木曾の産馬を御覧になったことなぞ聞き伝えて、その話を半蔵のところへ持つて来るのは伏見屋の三郎と梅屋の益穂とであった。この二人の少年は帰国後の半蔵について漢籍を学びはじめ「お師匠さま、お師匠さま」と言つては慕つて来て、物心づく年ごろにも達しているの、何か奥筋の方から聞きつけたうわさでもあると、早速半蔵を見にやつて来る。亡き伏見屋の金兵衛にでも言わせたら、それこそ前代未聞の今度の御巡幸には、以前に領主や奉行が通行の際にも人民の土下座した旧い慣例は廃せられ、すべて直札の容に改めさせたというようなことまでが二少年の心を動かすに充分であつた。

いよいよ馬籠御通行という日が来ると、四、五百人からの人足が朝から詰めて御通輦を待ち受けた。半蔵は裏の井戸ばたで水垢離を執り、からだを淨め終わつて、神前にその日のことを告げた後、家の周囲を見て回ると、高さ一丈ばかりの木札に行在所と記したの

が門前に建ててあり、青竹の垣^{かき}も清げにめぐらしてある。

家内一同朝の食事を済ますころには、もう御用掛りの人たちが家へ入り込んで来た。お民は森夫や和助を呼んで羽織袴^{はおりはかま}に着かえさせ、内膳課^{ないぜん}の料理方へ渡す前にわざわざ西から取り寄せたという鮮魚の皿^{さら}に載せたのを子供らにも取り出して見せた。季節がら食膳に上るものと言え、石斑魚^{うぐい}か、たなびらか、それに木ささげ、竹の子、菊豆腐^{たぐい}の類であるが、山家にいてはめずらしくもない河魚や新鮮な野菜よりもやはり遠くから来る海のもの差し上げたら、あるいは都の料理方にもよろこばれようかと彼女は考えたのである。

「御覧、これはサヨリというおさかなだよ。禁庭さまに差し上げるんだよ。」

幼い和助などは半分夢のように母の言葉を聞いて、その心は国旗や提灯^{ちようちん}を掲げつらねた旧い宿場のにぎやかさや、神坂村^{みさか}小学校生徒一同でお出迎えする村はずれの方へ行っていた。

やがて青山の家のもは母屋^{もや}の全部を御用掛りに明け渡すべき時が来た。往時、諸大名が通行のおりには、本陣ではそれらの人たちのために屋敷を用意し、部屋部屋を貸し与え、供の衆何十人前の膳部の用意をも忘れてはならないばかりでなく、家のものが直接に客人をもてなすことに多くの心づかいをしたもので、それでも供の衆には苦情は多く、弊害百

出のありさまであったが、今度は人民に迷惑をかけまいとの御趣意から、ただ部屋部屋をお貸し申すだけで事は足りた。御膳水、御膳米の用意にも、それぞれ御用取扱人があった。半蔵は羽織袴で、準備のできた古い屋根の下をあちこちと見て回った。上段の間は、と見ると、そこは御便殿ごびんでんに当てるところで、純白な紙で四方を張り改め、床の間には相州三浦の山上家から贈られた光琳筆こうりんの記念の軸がかかった。御次ぎの奥の間は侍従室、仲の間は大臣参議の室というふうで、すべて靴くつでも歩まれるように畳の上には敷き物を敷きつめ、玉座、および見晴らしのある西向きの廊下、玄関などは宮内省よりお持ち越しの調度で鋪設ほせつすることにしてあった。どこを内廷課の人たちの部屋に、どこを供進所に、またどこを内膳課の調理場にとしようと、ただただ半蔵は恐縮するばかり。そのうちにお民も改まった顔つきで来て、彼の袖そでを引きながら一緒に裏二階の方にこもるべき時の迫ったことを告げた。

継母おまんをはじめ、よめのお楨まさ、下男佐吉、下女お徳らはいずれも着物を改めて、すでに裏の土蔵の前あたりに集まっていた。そこは井戸の方へ通う細道をへだてて、斜めに裏二階と向かい合った位置にある。土蔵の前に茂る柿かきの若葉は今をさかりの生気を呼吸している。その時は、馬籠の村でも各戸供奉の客人を引き受ける茶のしたくにいいそがしいこ

ろであつたが、そういう中でも麗うるわしい龍顔を拝しに東の村はずれをさして出かけるものは多く、山口村からも飯田方面いいたからも入り込んで来るものは街道の両側に群れ集まるころであつた。しかし、青山の家のものとしては、とどこおりなく御昼食も済んだと聞くまではいつ何時なんどきどういふ御用がないともかぎらなかつたから、いずれも皆その裏二階に近い位置を離れられなかつた。その辺から旧本陣の二つの裏木戸の方へかけては巡査も来て立つて、静肅に屋後の警備についていた。

過ぐる年、東京神田橋外かんたばしでの猷扇けんせん事件は思いがけないところで半蔵の身に響いて来た。千載一遇とも言うべきこの機会に、村のものはまたまた彼が強い衝動にでも駆られることを恐れるからであつた。かつては憂国の過慮から猷扇事件までひき起こし、一時は村でもとかくの評判が立つた彼のことであるから、どんな粗忽そこつな挙動を繰り返さないものでもあるまいと、ただただわけもなしに氣づかうものばかり。先代伊之助が亡なくなつたあとの馬籠では、その点にかけて彼の真意をくむものもない。村で読み書きのできるものはほとんど彼の弟子でしでないものはなく、これまで無知な子供を教え導こうとした彼の熱心を認めないものもなかつたから、その人を軽く扱うではないが、しかしこの際の彼は静かに家族と共にいて、陰ながら奉迎の意を表してほしいというのが村のものの希望らしい。古い

歴史のあるこの地方のことを供奉の人々にも説き明かすような役割は何一つ彼には振り当てられなかった。その相談もなければ、沙汰さたもない。彼は土蔵の前の石垣いしがきのそばに柿の花の落ちている方へ行つて、ひとりですすり泣きの声をのむこともあつた。

恵那山のふもとのことで、もはやお着きを知らせるようなめずらしいラッパの音が遠くから谷の空気に響けて来た。当日一千人分の名物栗強飯くりこわめしをお買い上げになり、随輦ずいれんの臣下のものに賜わるしたくのできていたという峠でのお野立ての時もすでに済まされたらしい。半蔵はあの路傍の杉の木立ちの多い街道を進んで来る御先導を想像し、山坂に響く近衛騎兵このえの馬蹄ばていの音を想像し、美しい天皇旗を想像して、長途の旅の御無事を念じながらしばらくそこに立ち尽くした。

六

明治十四年の来るころには半蔵も五十一歳の声を聞いた。その年の四月には、青山の家では森夫と和助を東京の方へ送り出したので、にわかに家の内もさみしくなった。

二人の子供は東京に遊学させる、木曾谷でも最も古い家族の一つに数えられるところか

ら「本陣の子供」と言つて自然と村の人の敬うにつけてもとかく人目にあまることが多い、二人とも親の膝ひざもと下に置いては将来ろくなことがない、今のうちに先代吉左衛門が残した田畑や本陣林のうちを割さいて二人の教育費にあてる、幸い東京の方には今子供たちの姉の家がある、お糸くめはその夫植松弓夫ゆみおと共に木曾福島を出て東京京橋区鎗屋町やりやちようというところに家を持つているからその方に二人の幼いものを託する、あのお糸ならきつと弟たちのめんどろを見てくれる、この半蔵の考えが宗太をよろこばせた。子供本位のお民もこれには異存がなく、彼女から離れて行く森夫や和助のために東京の方へ持たせてやる羽織を織り、帯を織った。継母のおまんはおまん、孫たちが東京へ立つ前日の朝は裏二階から母屋もやの囲炉裏いろりばたへ通つて来て、自分の膳ぜんの前に二人を並べて置きながら、子供心にわかつてもわからなくても青山の家の昔を懇々と語り聞かせた。ひよつとするとこれが孫たちの見納めにでもなるかのように、七十三歳の春を迎えたおまんはしきりに襦袢じゆばんの袖そでで老いの瞼まぶたをおしぬぐつていたが、いよいよ兄きょうだい弟の子供が東京への初旅に踏み出すという朝は涙も見せなかった。

当時は旅もまだ容易でなかった。木曾の山の中から東京へ出るには、どうしても峠四つは越さねばならない。宗太も大奮発で、二人の弟の遊学には自ら進んで東京まで連れて行

くと言ひ出したばかりでなく、隣家伏見屋二代目のすぐ下の弟に当たる二郎が目の治療のために同行したいというのを一緒に引き受けて行つた。

子供ながらも二人の兄弟の動きは、そのあとにいろいろなものを残した。兄の森夫は、十三歳にもなつてそんな頭をして行つたら東京へ出て笑われると言われ、宗太に手鋏てばさみでジヨキジヨキ髪を短くしてもらい、そのあとがすこしぐらい虎斑とらふになつても頓とん着ちやくなしに出かけるという子供だし、弟の和助も兄たちについて東京の方へ勉強に行かれることを何よりのよろこびにして、お河童頭かつばあたまを振りながら勇んで踏み出すという子供だ。この弟の方はことに幼くて、街道を通る旅の商人からお民が買つてあてがったおもちゃの鞆かばんに金こ米糖んぺいとうを入れ、それをさげるのを楽しみにして行つたほどの年ごろであつた。小さな紐ひものついた足袋たび。小さな草鞋わらじ。その幼いものの旅姿がまだ半蔵夫婦の目にある。下隣のお雪婆さんの家には、兄弟の子供が預けて置いて行つたシヨクノ（地方によりネツキともいう）が残っているというような話も聞こえて来る。

初代伊之助を見送つたあとのお富もはや若夫婦を相手の後家であるが、この人は東京行きの二郎を宗太に託してやつた関係からも、風呂ふろなぞもらいながら隣家から通かよつて来て、よく青山の家に顔を見せる。お富が言うことには、

「そりや、まあ、かわいい子には旅をさせろということもありますがね、よくそれでもお民さんがあんなちいさなものを手離す気におなりなすった。なんですか、わたしはオヤゲナイ（いたいたいしたい）ような気がする。」

囲炉裏まわりばたにはこんな話が尽きない。やれ竹馬だんだかだと言つて森夫や和助が家の周囲を遊び戯れたのも、きのうのことになった。

「でも、妙なものですね。まだわたしは子供がそこいらに遊んでるような気がしますよ。塩の握飯むすびをくれとでも言つて、今にも屋外そとから帰つて来るような気がしますよ——わたしはあの塩の握飯の熱いやつを朴葉ほおばに包んで、よく子供にくれましたからね。」

寄ると触るとお民はそのうわさだ。

「まだお前はそんなことを言つてるのかい。」

口にこそ半蔵はそう答えたが、その実、この妻を笑えなかった。手離してやった子供はどこにでもいた。夕方にでもなると街道から遠く望まれる恵那山すそのの裾野の方によく火が燃えて、それが狐火きつねびだと村のものは言つたものだが、そんな街道に蝙蝠こうもりなぞの飛び回る空の下にも子供がいた。家の裏の木小屋の前から稲荷いなりの祠ほこらのある方へ通うところには古い池があつて、石垣いしがきの間には雪の下が毎年のように可憐かれんな花をつけるところだが、そんな

おとなでもちよつと背の立たないほど深いよどんだ水をたたえた池のほとりにも子供がいた。そればかりではない、子供は彼の部屋へやの座蒲団ざぶとんの上にもいたし、彼の懷ふところの中にもいた。彼の袂たもとの中にもいた。

「この野郎、この野郎。」

と彼が言いかけて、いくら教えても本のきらいな森夫の耳のあたりへ、握りこぶしの一つもくらわせようとすると、いつのまにか本をかかえて逃げ出すような子供は彼の目の前にいた。

「オイ、蠟燭ろうそく、蠟燭。」

と彼が注意でもしてやらなければ、たまに夜おそくまで紙をひろげ、燭しよくだい台を和助に持たせ、その灯ほかげに和歌の一つも大きく書いて見ようとすると、蠟燭もろともそこへころげかかるほど眠がつているような子供は彼のすぐそばにもいた。

山のものとも海のものともまだわからないような兄弟の子供の前途にも半蔵は多くの望みをかけた。彼は読み書きの好きな和助のために座右の銘ともなるべき格言を選び、心をこめた数葉ようの短冊たんざくを書き、それを紙に包んで初旅はなむけの餞はなむけとした。

やよ和助読み書き数へいそしみて心静かに物学びせよ

飛驒にいるころから半蔵はすでにこんな歌を作つて子を思うところを寄せていた。

宗太は弟たちの旅の話を持つて無事に東京から歸つて来た。一行四人のものが、みさやま峠にかかった時は、さすが山歩きに慣れた子供の足も進みかねたと見え、峠で日が暮れかかったこともあつたという。余儀なく彼は和助の帯に手ぬぐいを結びつけ、それで歩けない弟を引きあげたとか。追分^{おいわけ}まで行くと、そこにはもう東京行きの乗合馬車があつた。彼も初めてその馬車に乗つて見た。同乗の客の中にはやはり東京行きの四十格好の婦人もあつたが、弟たちを引率した彼に同情して、和助を引き取り、菓子などを与えたりしたが、昼夜の旅に疲れた子供はその見知らぬ婦人の膝^{ひざ}の上に眠ることもあつた。馬車に揺られながら鶏の鳴き声を聞いて行つて松井田まで出たところに消防夫梯子^{はしご}乗りの試演にあつた時は子供の夢を驚かした。上州^{じょうしゅう}を過ぎ、鳥川^{からすがわ}をも渡つた。四月の日の光はいたところの平野にみちあふれていた。馬車は東京万世橋^{まんせいばし}の広小路^{ひろこうじ}まで行つて、馬丁が柳並み木のかげのところに馬を停^とめたが、それがあの大都会の幼いものの目に映る最初の時であつた。この道中に、彼は郷里から追分まで子供の足に歩かせ、それからはずっと木曾街道

を通しの馬車であつたが、それでも東京へはいるまでに七日かかった。植松夫婦は、名古屋生まれの鼻の隆たかいお婆さんや都育ちの男の子と共に、京橋やりやちよう鎗屋町の住居すまいの方で宗太ら待ち受けていてくれたという。

おまんをはじめ、半蔵夫婦、よめのお榎まきらは宗太のまわりを取りまいて、帰り路みちにもまた追分までは乗合馬車で来たためずらしそうに言う顔をながめながら、この子供らの旅の話を聞いた。下隣に住むお雪婆さんまでそれを聞きにやって来た。下男の佐吉と下女のお徳とが二人ふたりともそれを聞きのがすはずもない。お徳は和助のちいさい時分からあの子供を抱いたり背中こもりうたにのせて子守唄をきかせたりした長いなじみで、勝手の水仕事をするあかぎれの切れた手を出しては家のものの飯を盛ると、そればかりはあの子供にいやがられた仲だ。毎晩の囲炉裏よなべばたを夜業の仕事場とする佐吉はまた、百姓らしい大きな手に唾つばをつけてゴシゴシと藁わらを緋ないながら、狸たぬきの人を化かした話、畠はたけに出る貉むじなの話、おそろしい山犬の話、その他無邪気でおもしろい山の中のお伽とぎばなし噺から、畠の中に赤い舌をぶらさげているものは何なぞの謎なぞなぞ々々を語り聞かせることを楽しみにした子供の友だちだ。

「そう言えば、今度わたしは東京へ行つて見て、姉さん（お糸くめ）の肥ふとったには驚きましたよ。あの姉さんも、いい細君になりましたぜ。」

宗太が思い出したように、そんな話を家のものにして聞かせると、

「ねえ、お母さん^{つか}、色の白い人が肥つたのも、わるかありませんね。」

飯田育ちのお櫃^{まい}もお民のそばにいて言葉を添える。

その晩、半蔵は子供らが上京の模様をやや心を安んじて、お民と共に例の店座敷でおそくまで話した。過ぐる一年ばかりは和助もその部屋^{へや}には寝ないで、年老いた祖母と共に提^ち灯^{ようちん}

つけて裏二階の方へ泊まりに行つたことを彼は思い出し、とにもかくにもその末の子までが都会へ遊学する時を迎えたことを思い出し、先代吉左衛門も彼の年になつてはよく枕もとへ古風な手さげのついた煙草盆^{たばこぼん}を引きよせたことなぞを思い出して、お民と二人の寝物語にまで東京の方のうわさで持ち切つた。

「お民、お糸が結婚してから、もう何年になろう。植松のお婆さんでおれは思い出した。

あの人の連れ合い（植松 莖^{しょうすけ} 助、木曾福島旧関所番）は、お前、維新間ぎわのごたごたの中でさ、他の家中衆^{よそで}から名古屋臭いとにらまれて、あの福島の祭りの晩に斬^きられた武士さ。世の中も暗かつたね。さすがにあのお婆さんは尾州藩でも学問の指南役をする宮谷家から後妻に来たくらいの人だから、自分の旦那^{だんな}の首を夜中に拾いに行つて、木曾川の水でそれを洗つて、風呂敷包^{ふろしきづつ}みにして持つて帰つたという話がある。植松のお婆さんはそうい

う人だ。琴もひけば、歌の話もする。あの人を姑しゅうとめに持つんだから、お糸もなかなか氣骨きぼねが折れようぜ。」

半蔵夫婦のうわさが総領娘のことに落ちて行くころは、やがて夜も深かった。

「ホ、隣の人は返事しなくなった。きようはお民もくたぶれたと見える。」

と半蔵はひとり言つて見て、枕もとの角行燈かくあんどんのかげにちよつと妻の寝顔をのぞいた。四十四歳まで彼と生涯をともにして来たこの氣さくで働くことの好きな人は、夜の眠りまでなるがままに任せている。いつのまにか安らかな高いびきも聞こえて来る。その声が耳について、よけいに彼は目がさえた。

「酒。」

そんなことを夜中に彼が言い出したところで、答える人もない。眠りがたいあまりに、彼は寢床からはい出して、手燭てしよくをとぼしながら囲炉裏いろりばたの勝手の方へ忍んだ。

二合ばかりの酒、冷たくなつた焼き味噌みそ、そんなものが勝手口の戸棚とだなに残つたのを半蔵は探し出して、それを店座敷に持ち帰つた。彼が火鉢ひばちだ炭取りだ鉄瓶てつびんだと妻の枕もとを

歩き回るたびに、深夜の壁に映るひとりぼちの影法師は一緒になって動いた。

物を学ばせに子供を上京させたことから、半蔵はいろいろな心持ちを引き出されていた。お民が何も知らずにいる間に、彼は火鉢の火をおこしたり、鉄瓶をかけたりなぞしながら、そのことを考えた。つまり、それは彼自身に物を学びたいと思う心が熱いからであつた。

あの『勸学篇』^{かんがくへん}などを子供に書いてくれて、和助が七つ八つのころから諳誦^{あんしやう}させた

のも、その半蔵だ。学芸の思慕は彼の天性に近かつた。それはまた親譲りと言つてもよかった。彼が平田入門を志した青年の日、父吉左衛門にその望みを打ち明けたところ、父は馬籠の本陣を継ぐべき彼が寝食も忘れるばかりに平田派の学問に心を傾けて行くのを案じながらも、

「お前の学問好きは、そこまで来たか。」

と言つて、結局彼の願いをいれてくれたというのも、やはり吉左衛門自身にその心が篤^{あつ}かつたからであつた。かくも学ぶに難い時になつて来て、何から何まで西洋の影響を受け、今日の形勢では西洋でなければ夜が明けないとまで言う人間が飛び出す世の中に立つては、彼とても何を自分の子供に学ばせ、自らもまた何を学ぼうと考えずにはいられなかつた。どうして国学に心を寄せるほどのものが枕を高くして眠られる時ではないのだ。

先師平田篤胤の遺著『静しずの岩屋いわや』をあの王滝の宿で読んだ日のことは、また彼の心に帰
 った。あれは文久三年四月のことで、彼が父の病を禱いのるための御嶽おんたけ参籠さんろうを思い立
 ち、弟子でしの勝重かつしげをも伴い、あの山里の中の山里ともいふべきところに身を置いて、さび
 しくきこえて来る王滝川の夜の河音かわおとを耳にした時だった。先師と云えば、外国よりは
 違って来るものを異端邪説として蛇蝎だかつのように憎みきらった人のように普通に思われながら、
 「そもそもなく外国とつくに々より万づの事物ものごとの我が大御国おおみくにに参り来ることは、皇すめらみかみ神かみた
 ちの大御心おおみこころにて、その御神徳の広大なる故に、善よき悪あしきの選えみなく、森羅万象しんらばんしやうの
 ことごとく皇国すめらみくにに御引寄せあそばさるる趣を能く考へ弁わきまへて、外国とつくにより来る事物は
 よく選み採りて用ふべきことで、申すも畏かしこきことなれども、是これすなはち大神等おおみかみたちの御
 心ろおきて掟おきてと思ひ奉られるでござる、」とあるような、あんな広い見方のしてあるのに、彼
 が心から驚いたのも『静の岩屋』を開いた時だった。先師はあの遺著の中で、天保年代てんぽう
 の昔に、すでに今日あることを予言している。こんなに欧米諸国の事物がはいって来て、
 この国のものの長い眠りを許さないというのも、これも測りがたい神の心であるやも知れ
 なかった。

言葉もまた重要な交通の機関である。かく万国交際の世の中になって、一切の学術、工

芸、政治、教育から軍隊の組織まで西洋に学ばねばならないものの多いこの過渡時代に、まず外国の言葉を習得して、自由に彼と我との事情を通じうるものは、その知識があるだけでも今日の役者として立てられる。今や維新と言ひ、日進月歩の時と言つて、国学にとどまる平田門人ごときはあだかも旧習を脱せざるもののように見なさるるのもやむを得なかつた。ただ半蔵としては、たといこの過渡時代がどれほど長く続くとも、これまで大和言葉のために戦つて来た国学諸先輩の骨折りがこのまま水泡に帰するとは彼には考えられもしなかつた。いつか先の方には再び国学の役に立つ時が来ると信じないかぎり、彼なぞの立つ瀬はなかつたのであつた。

先師の書いたものによく引き合ひに出る本居宣長の言葉にもいわく、
「吾にしたがひて物理学ばむともがらも、わが後に、又よき考への出で来らむには、かならずわが説にななづみそ。わがあしき故を言ひて、よき考へを弘めよ。すべておのが人を教ふるは、道を明らかにせむとなれば、とにもかくにも道を明らかにせむぞ、吾を用ふるにはありける。道を思はで、いたづらに吾を尊ま^{とうと}んは、わが心にあらざるぞかし。」

ここにいくらでも国学を新しくすることのできる後進の者の路がある。物理学するほどのともがらは、そう師の説にのみ拘泥するなと教えてある。道を明らかにすることがす

なわち師を用うることだとも教えてある。日に日に新しい道をさらに明らかにせねばならない。そして国学諸先輩の発見した新しい古いにしえをさらに発見して行かねばならない。古を新しくすることは、半蔵らにとつては歴史を新しくすることであつた。

そこまで考えて行くうちに、鉄瓶てつびんの湯もちんちん音がして来た。その中に徳利とくりを差し入れて酒を暖めることもできるほどに沸き立つて来た。冷たくなつた焼き味噌あぶも炙り直せば、それでも夜の酒のさかなになつた。やがて半蔵は好きなものにありついて、だれに遠慮もなく手酌てじやくで盃はいを重ねながら、また平田門人の生くべき道を思いつづけた。仮に、もしあの本居宣長のような人がこの明治の御代みよを歩まれるとしたら、かつてシナインドの思想をその砥石といしとせられたように、今また新しい「知識」としてこの国にはいつて来た西洋思想をもその砥石として、さらに日本的なものを磨きみがあげられるであろう。深くも、柔らかくも、新しくもはいって行かれるあの宣長翁が学者としての素質としたら、洋学にはいつて行くこともさほどの困難を感じられないであろう。おおよそ今の洋学者が説くところは、理に合うということである。あの宣長翁であつたら、おそらく理を知り、理を忘れるところまで行つて、言挙ことあげということもさらさない自然おのずからながらの古の道を一層明らかにされるであらう。

思いつづけて行くと、半蔵は大きな巖いわのような堅い扉とびらに突き当たる。先師篤胤たりとも、西洋の方から起こって来た学風が物の理を考え究めるきわのに賢いことは充分に認めていた。その先師があれほどの博学でも、ついに西洋の学風を受け入れることはできなかった。彼はそう深く学問にもはいれない。これは宣長翁のようなまことの学者らしい学者にして初めて成しうることで、先師ですらそこへ行くとはたして学問に適した素質の人であったかどうかは疑問になって来た。まして後輩の彼のようなものだ。彼は五十年の生涯と、努力と、不断の思慕とをもつてしても、力にも及ばないこの堅い扉をどうすることもできない。彼が子弟の教育に余生を送ろうとしているのも、一つはこの生涯の無才無能を感じくからであった。彼は自分の生涯に成し就げ得ないものをあげて、あとから歩いて来るものにその熱いさびしい思いを寄せたいと願った。それにしても、全国四千人を数えた平田篤胤没後の門人の中に、この時代の大波を乗り越えるものはあらわれないのか、と彼は嘆息した。所詮しよせん、復古は含蓄で、事物に働きかける実際の力にはならないと聞くのもつらく、ひとりで酒を飲めば飲むほど、かえって彼は寝られなかった。

第十四章

一

馬籠まごめにある青山のような旧家の屋台骨が揺るぎかけて来たことは、いつのまにか美濃みのの落合おちあいの方まで知れて行つた。その古さから言えば永祿えいろく、天正てんしょう年代からの長い伝統と正しい系図とが残っていて、馬籠旧本陣と言えば美濃路にまで聞こえた家に、もはややさえきれないほどの強い嵐あらしの襲つて来たことが、同じ街道筋につながる峠の下へ知られずにいるはずもなかった。馬籠を木曾路の西のはずれとするなら、落合は美濃路の東の入り口に当たる。落合から馬籠までは、朝荷物をつけて国境くにぎかいの十曲じつきよく峠とうげを越して行く馬が茶漬ちやつけまでには戻もどつて来るほどの距離にしかない。

落合に住む稲葉屋いなばやの勝重かつしげはすでに明治十七年の三月あたりからその事のあるのを知り、あの半蔵が跡目相続の宗太夫婦とも別居して、一小隠宅の方に移り住むようになった事情をもうすす知っていた。勝重はかつて半蔵の内弟子うちでしとして馬籠旧本陣に三年の月日を送

つたことを忘れない。明治十九年の春が来るころには、彼も四十歳に近い分別盛りの年ごろの人である。いよいよあの古い歴史のある青山の家も傾いて来て、没落の運命は避けがたいかもしれないということは、彼にとつて他事ひとこととも思われなかった。実は彼は他の落合在住者とも語り合い、半蔵の世話になったものだけが集まって、なんらかの方法で師匠を慰めたいと、おりおりその相談もしていた時であつた。これまで半蔵の教えを受けた人たちの中で一番末頼もしく思われていたものも勝重である。今は彼も父祖の家業を継いで醬油しょうゆ醸造に従事する美濃衆の一人であり、先代儀十郎まで落合の宿役人を勤めた関係から何かにつけて村方の相談に引き出される多忙な身ではあるが、久しく見ない師匠のこともしきりに心にかかつて、他に用事を兼ねながら、にわかに馬籠訪問を思い立った。家を出る時の彼は手にさげられるだけの酒を入れた細長い樽たるをもさげていた。かねて大酒のうわさのある師匠のために、陰ながら健康を案じ続けていた彼ではあるが、いざ訪ねて行くたずこうとして、何か手土産てみやげをと探す時になると、やつぱり良い酒を持って行って勧めたかつた。これは落合の酒だが、馬籠の伏見屋あたりで造る酒と飲みくらべて見てもらいたいのでも言つて、それを嗜む半蔵たしなのよろこぶ顔が見たいと思ひながら彼は出かけた。勝重から見ると、元来本陣といやといい問屋といやといい庄屋しょうやといった人たちは祖先以来の習慣によつて諸街

道交通の要路に当たり、村民の上に立つて地方自治の主腦の位置にもあり、もっぱら公共の事業に従つて来たために、一家の經濟を処理する上には欠点の多かつたことは争われな
い。旧藩士族の人たちのためにはとにかくにも救済の方法が立てられ、禄券ろくけんの恩典とい
うものも定められたが、庄屋本陣問屋は何のうるところもない。明治維新の彼らを遇す
ることは薄かつた。今や庄屋の仕事は戸長役場に移り、問屋の仕事は中牛馬会社になつて、
ことに本陣をも兼ねた青山のような家があの往時の武家と公役とのためにあつたよう
な大きな屋敷の修繕にすら苦しむようになって来たことは当然の話であつた。この際、半
蔵の弟子でしとしては、傾いて行く青山の家運をどうすることもできないが、せめて師匠だけ
は、そのあわれな境涯きやうがいの中にも静かな晩年の日を送つてもらいたいと願うのであつた。
というのは、飛驒ひだの寂しい旅以来の半蔵の内部なにかには精神にも肉体にも何かが起こつてい
るに相違ないとは、もっぱら狭い土地での取りざたで、それが勝重の耳にもはいるからであ
つた。

四月上旬の美濃路ともちがい、馬籠峠の上へはまだ春の来ることもおそいような日の午
後に、勝重は霜の溶けた道を踏んで行つたのであるが、半蔵の隠宅を訪ねることは彼にと
つてそれが初めての時でもない。そこは静しずの屋やと名づけてある二階建ての小楼で、青山の

本家からもすこし離れた馬籠の裏側の位置にある。落合方面から馬籠の町にはいるものは、旧本陣の門前まで出ないうちに街道を右に折れ曲がって行くと、共同の水槽すいそうの方から奔はしつて来る細い流れの近くに、その静の屋を見いだすことができる。ちやうど半蔵も隠宅にある時で心ゆくばかり師匠の読書する声が二階から屋外そとまで聞こえて来ているところへ勝重は訪ねて行つた。入り口の壁の外には張り物板も立てかけてあるが、お民のすがたは見えなかった。しばらく勝重は上りあが框がまちのところに腰掛けて、読書の声のやむまで待った。その間に彼は師匠が余生を送ろうとする栖家すみかの壁、柱などにも目をとめて見る時を持った。階下は一部屋と台所としかないような小楼であるが、木材には事を欠かない木曾の山の中のことで木口もがつしりしている上に、すでにほどのいい古びと落ちつきとができて、すべて簡素に住みなしてある。入り口の壁の内側には半はん蓑みののかかっているのも山家らしいようなところだ。やがて半蔵は驚いたように二階から降りて来て勝重を下座敷へ迎え入れた。半蔵ももはや以前のような総そう髪がみを捨てて髪も短かめに、さっぱりと刈っている人である。いつでも勝重が訪ねて来るたびに、同じ顔色と同じ表情とでいたためしのないのも半蔵である。ひどく青ざめた顔をしていることもあれば、また、逆上のぼせたように紅い顔あかをしていることもある。その骨格のたくましいところは先代吉左衛門に似て、膝ひざの上に置い

た手なぞの大きいことは、対坐^{たいざ}するたびに勝重の心を打つ。その日、半蔵はいにく妻が本家の方へ手伝いに行っている留守の時であると言って見せ、手ずから茶などをいれて旧^{ふる}い弟子をもてなそうとした。そこへ勝重が落合からさげて来たものを取り出すと、半蔵は目を円^{まる}くして、

「ホウ、勝重さんは酒を下さるか。」

まるで子供のようなよろこび方だ。そう言う半蔵の周囲には、継母はじめ、宗太夫妻から親戚^{しんせき}一同まで、隠居は隠居らしく飲みたい酒もつつしめと言うものばかり。わざわざそれをさげて来て、日ごろの愁^{うれ}いを忘れよとでも言うような人は、昔を忘れない弟子のほかになかった。

「勝重さん、君の前ですが、この節吾^{うち}家のものは皆で寄つてたかつて、わたしに年を取らせるくふうばかりしていますよ。」

「そりや、お家の方がお師匠さまのためを思うからでしょうに。」

「しかし、勝重さん、こうしてわたしのように、日がな一日山にむかつて黙っていますとね、半生の間のことがだんだん姿を見せて来ましてね、そう静かにばかりしてはいられませんかよ。」

半蔵は勝重から何よりのものを贈られたというふうに座を離れて、台所の方へその土産を置きに行ったが、やがてまたニヤニヤ笑いながら勝重のいるところへ戻^{もど}つて来た。

その静の屋に半蔵が二度目の春を迎えるころは、東京の平田鉄胤^{かねたね}老先生もはやとつくに故人であつた。そればかりではない、彼は中津川の友人香蔵の死をも見送つた。追いつ追いと旧知の亡^なくなつて行くさびしさにつけても、彼は久しぶりの勝重をつかまえて、容易に放そうともしない。他に用事を兼ねて日ごろ無沙汰^{ぶさた}のわびばかりに来たという勝重が師匠の顔を見るだけに満足し、落合の酒を置いて行くだけでも満足して、やがて気軽な調子で辞し去ろうとした時、半蔵はその人を屋外^{そと}まで追いかけた。それほど彼は人なづかしくばかりあつた。

半蔵は勝重に言つた。

「そう言えば、勝重さん、文久三年に君と二人^{ふたり}で御嶽^{おんたけ}参籠^{さんろう}に出かけた時さ。あれは、ちようど今時分じやありませんか。でも、いい陽気になつて来ましたね。この谷^{うぐいす}へも、鶯^{うぐいす}が来るようになりましたよ。」

こんな声を聞いて勝重は師匠のそばから離れて行つた。そして、ひとりになつてから言つた。

「どうして、お師匠さまはまだまだ年寄りの仲間じゃない。」

二

静の屋は別に観山楼とも名づけてある。晴れにもよく雨にもよい恵那山えなさんに連なり続く山々、古代の旅人が越えて行つたという御坂みさかの峠などは東南にそびえて、山の静かさを愛するほどのものは楼にいらがらでもそのながめに親しむことができる。緩慢なだらかではあるが、しかし深い谷が楼のすぐ前にひらけていて、半蔵はそこいらを歩き回るには事を欠かなかつた。清い水草の目を樂しませるものは行く先にある。日あたりのよい田圃たんぼわきの土手は谷間のいたるところに彼を待っている。その谷底まで下って行けば、土地の人にしか知られていない下坂川おりさかがわのような谿流けいりゅうが馬籠おたるやまの男垂山方面から音を立てて流れて来ている。さらにすこし遠く行こうとさえ思えば、谷の向こうにある林の中の深さにはいつて見ることもでき、あるいは山かげを耕して住む懇意な百姓の一軒家まで歩いてそこに時を送つて来ることができる。もういい加減に、枯れてもいい年ごろだと言われる半蔵しょうぞうが生しょう涯えいの奥に見つけたのは、こんな位置にあるところだ。一方は馬籠裏側の細い流れに接し

て、そこへは鍋なべを洗いに来る村の女もある。鶏の声も遠く近く聞こえて来ている。

もし半蔵があゝの落合の勝重の言うように余生の送れる人であつたら、いかに彼はこの閑居を楽しんだであらう。本家の方のことはもはや彼には言うにも忍びなかった。しかし隠居の身として口出しもならない。世にいう漁ぎよ、樵しょう、耕こう、牧ぼくの四隠のうち、彼のはそのいずれでもない。老い衰えて安楽に隠れ栖すむつもりのない彼は、寂しく、悲しく、血のわく思いで、ただただ黙然とおのれら一族の運命に對していた。これがついすみかの栖家か、と考へて、あたりを見回すたびに、彼は無量の感慨に打たれずにはいられなかった——たとい、お民のような多年連れ添う妻がそばにいて、共に余生を送るとしても。なんと云つても旧い馬籠ふるの宿場の跡には彼の少年時代からの記憶が残っている。夕方にでもなると、彼は街道に出て往來ゆききの人にまじりたいと思うような時を迎えることが多かつた。

ある日の午後、彼は突然な狂氣にとらえられた。まっしぐらに馬籠の裏道を東の村はずれの岩田というところまで走つて行つて、そこに水車小屋を営む遠縁のものの家へ寄つた。硯すずりを出させ、墨を磨すらせた。紙をひろげて自作の和歌一首を大きく書いて見た。そしてよろこんだ。その彼の姿は、自分ながらも笑止と言うべきであつた。そこからまた同じ裏道づたいに、共同の水槽すいそのところに集まる水くみの女どもには、目もくれずに、急いで隠

宅へ引き返して来た。

「まあ、きようはどうなすったか。」

とお民はあきれた。

半蔵に言わせると、彼も不具ではない。不具でない以上、時にはこうした狂気も許さるべきであると。

「これがお前、生きているしるしなのさ。」

半蔵の言い草だ。

梅から山ぎくら、山ぎくらから紫つつじと、春を急ぐ木曾路きそじの季節もあわただしい。静の屋の周囲にある雑木などが遠い谷々の草木と呼吸を合わせるように芽を吹きはじめると、日の色からしてなんとなく違って来るさわやかな明るさが一層半蔵の目には悩ましく映った。彼は二部屋ある二階の六畳の方に古い桐きりの机を置いて、青年時代から書きためた自作の『松が枝まつえ』、それに飛驒時代ひだ以来の『常葉集とこわしゅう』などの整理を思い立った時であるが、それらの歌稿を書き改めているうちに、自分の生涯に成し就げ得ないもののいかに多いかにつくづく想おもいいたった。傾きかけた青山の家の運命を見まもるにつけても、いつのまにか彼の心は五人の子の方へ行った。それぞれの道をたどりはじめている五人の姉弟きょうだいの

ことは絶えず彼の心にかかつていたからで。

姉娘のお糸くめがその旦那だんなと連れだつて馬籠たづへ訪ねて来たのは、あれは半蔵らのまだ本家の方に暮らしていた明治十六年の夏に当たる。ちようどお糸夫婦は東京の京橋区やりやちよう 鎗屋町やうやちようの方にあつた世帯しやたいを畳たたみ、半蔵から預かつた二人の弟たちをも東京に残して置いて、一家をあげて郷里の方へ引き揚げて来たころのことであつたが、夫婦の間に生まれた二番目の女の子を供の男に背負おぶわせながら妻籠つまごの方から着いた。お糸は旦那と同年で、年齢の相違したものが知らないような心づかいからか、二十八の年ごろの細君にしては彼女はいくらか若造りに見えた。でも、お糸はお糸らしく、瀟洒せうさとした感じを失つてはいなかつた。たまの里帰りらしい手土産てみやげをそこへ取り出すにも、祖母のおまんをはじめ宗太夫婦に話しかけるにも、彼女は都会生活の間に慣れて来た言葉づかいと郷里の訛なまりとをほどよく混ぜてそれをした。背は高く、面長おもながで、風采ふうさいの立派なことは先代しやうすけ 莒助きよすけに似、起居振舞いきりふりも寛ゆるやかな感じのする働き盛りの人が半蔵らの前に来て寛くつろいだ。その人がお糸の旦那だ。その青年時代には同郷の学友から木曾谷第一の才子として許された植松弓夫だ。

弓夫は半蔵のことを呼ぶにも、「お父さん^{とつ}」と言い、義理ある弟へ話しかけるにも「宗太君、宗太君」と言つて、地方のことが話頭^{はなし}に上れば長崎まで英語を修めに行つたずっと年少^{としわか}なころの話もするし、名古屋で創立当時の師範学校に学んだころの話もする。弓夫は早く志を立てて郷里の家を飛び出し、都会に運命を開拓しようとしたものの一人^{ひとり}であつた。これは先代菖助が横死の刺激によることも、その家出の原因の一つであつたであろう。弓夫は何もかも早かつた。郷党に先んじて文明開化の空氣を呼吸することも早かつた。年若な訓導として東京の小学校に教えたこともあり、大蔵省の収税吏として官員生活を送つたこともあり、政治に興味を持つて改進黨に加盟したこともあり、民間に下つてからは植松家伝の処方によつて謹製する薬を郷里より取り寄せ、その取次販売の路^{みち}をひろげること
を思い立ち、一時は東京池の端^{いけ}の守田宝丹^{もりたほうたん}にも対抗するほどの意気込みで、みごとな薬の看板まで造らせたが、結局それも士族の商法に終わり、郷里をさして引き揚げて来ることもまた早かつた。かつては木曾福島山村氏の家中の武士として関所を預かる主^{おも}な給人であり砲術の指南役でもあつた先代菖助がのこして置いて行つた大きな屋敷と、家伝製薬の業とは、郷里の方にその彼を待つていた。しかし、そこに長い留守居を預かつて来た士族出の大番頭たちは彼がいきなりの帰参^{かえん}を肯じない。毎年福島に立つ毛付け（馬市）のた

めに用意する製薬の心づかいは言うまでもなく、西は美濃尾張から北は越後辺まで行商に出で、数十里の路を往復することもいとわずに、植松の薬というものを護つて来たのもその大番頭たちであつた。文明開化の今日、武家の内職として先祖の始めた時勢おくれの製薬なぞが明日の役に立とうかと言ひ、もつと氣のきいたことをやって見せると言つて家を飛び出して行つた弓夫にも、とうとう辛抱強い薬方くすりかたの前に兜かぶとを脱ぐ時がやつて来た。その帰参のかなうまで、当時妻籠の方に家を借りて、そこから吾妻村小学校へ教えに通つてゐるといふのも弓夫だ。

「やつぱり先祖の仕事は根深い。」

とは、弓夫が高い声を出して笑ひながらの述懐だ。

日本陣奥の間の風通しのよいところに横になつて連れて来た女の子に乳房ちちうきをふくませることも、先年東山道御巡幸のおりには馬籠行在所あんざいしよの御便殿ごびんでんにまで当てられた記念の上段の間の方まで母のお民と共に見て回ることも、お糸には久しぶりで味わう生家の氣安さでないものはなかつたようである。東京の方にお糸夫婦が残して置いて来たという二人の弟たちのことは半蔵もお民も聞きたくしていた。弓夫らの話によると、半蔵の預けた子供は二人ともあの京橋鎗屋町の家から数寄屋橋すきやばしわきの小学校へ通わせて見たが、兄の森夫の方

は学問もそう好きでないらしいところから、いつそ商業で身を立てろと勧めて見たところ、当人もその気になり、日本橋本町の紙問屋に奉公する道が開けて来たのも、かえってあの子の将来のためであろうという。弟の和助の方は、と言うと、これは引き続き学校へ通わせるかたわら、弓夫みずから『詩経』の素読そとくをも授けて来た。幸い美濃岩村の旧藩士で、鎗屋町の跡に碁会所を開きたいという多芸多才な日向照之進ひやうがてるのしんは弓夫が遠縁のものに当たるから、和助はその日向の家族の手に託して置いて来たともいう。

「和助は学問の好きなやつだ。あれはおれの子だ。」

と半蔵が弓夫らに言ったのもその時だった。

弓夫は一晩しか馬籠うまろうに泊まらなかった。家内と乳呑児ちのみごとを置いて一足先ひとあしに妻籠の方へ帰って行つた。そのあとには一層半蔵やお民のそばへ近く来るお糸が残つた。お糸は義理ある妹のお櫛まきにも古疵ふるきずの痕あとを見られるのを気にしてか、すずしそうな単衣ひとえの下に重ねている半襟はんえりをかき合わせることを忘れないような女だ。でも娘時分とは大違いに、からだからしてしまつて来た。さばけた快活な声を出して笑うようにもなった。彼女は物に興じる質たちで、たまの里帰りの間にもお櫛のために髪を直してやったり、お民が家のものを呼び集めて季節がらの真桑瓜まぐわうりでも切ろうと言えば皆まで母親には切らせずに自分でも庖ほうちよ

丁^うを執つて見たりして、東京の方で一年ばかりも弟和助の世話をした時のことなどをそこへ語り出す。あの山家^{やまが}育ちの小学生も生まれて初めて東京魚河岸^{うおがし}の鮮魚を味わい、これがオサシミだとお糸に言われた時は目を^{まる}円くして、やっぱり馬籠の家の囲炉裏^{いろり}ばたで食い慣れた塩辛いさんまや鰯^{いわし}の方が口に合うような顔つきでいたが、その和助がいつのまにか都の空気に慣れ、「君、僕」などという言葉を使うようになったという。遠く修業に出した子供のうわさとなると、半蔵もお民も飽きなかった。もつともつと聞きたかった。よく見ればお糸はそういう調子で母親のそばに笑いころげてばかりいるでもない。自分の女の子を抱いて庭でも見せに奥の廊下を歩いている時の彼女はまるで別人のようであった。彼女は若い日のことを思い出したように、そんなところにいつまでも隠れて、娘時代の記憶のある草木の深い坪庭をながめていたから、思わずもらす低い声がなかったら、半蔵などはその人にがあるとも気づかなかつたくらいだった。その晩、彼女は両親のそばに寝て話したいと言うから、店座敷の狭いところに三人枕^{まくら}を並べたが、おそくまで母親に話しかける彼女の声は尽きることを知らないかのよう。半蔵が一眠りして、目をさますと、ぼそ／＼ぼそ／＼語り合う女の声はまだ隣から聞こえていた。

お糸のいう「寝てからでなければ話せない話」を通して、半蔵が自分の娘の身の上を知

るようになったのも、そんな明けやすい夏の一夜からであつた。もしお糸が旦那の酒の相
 手でもして唄うたの一つも歌うような女であつたらとは、彼女自身の小さな胸の中によく思い
 浮かべることであるとか。旦那は植松のような家に生まれながら、どうしてそんなひそか
 な戯れ事の秘密を知つたろうと思われるほどの人で、そのお糸の驚きは彼女がさげよう
 とする身を無慙むさんにも踏みにじるようなものであり、ただ旦那が情にもろいとかなんとかの
 言葉で片づけてしまえないものであつたという。しかし彼女はそのため旦那一人を責め
 られなかつた。旦那の友だちは皆、当時流行の獵虎ろうこの帽子をかぶり、羽はぶりのよい官員や
 実業家と肩をならべて、権妻ごんさいでも蓄たくわえることを男の見栄みえのように競い合う人たちだから
 であつた。東京の方に暮らした間、旦那はよく名高い作者の手に成つた政治小説や柳橋りゅうき
 新誌ようしんしなどを懷中ふところにして、恋しい風の吹く柳橋やなぎばしの方へと足を向けた。しまいにはお
 糸はそれを旦那の病氣とさえ考えるようになった。あだかも夏の夜の灯ひをめぐけて飛ぶ虫
 のように、たのしみを追うことに打ちこむ旦那のたましいの前には、なにもものもそれをさ
 えぎる力はなかつた。旦那も金につまつた時は、お糸の着物を質屋に預けさせてまでそれ
 をやめなかつた。彼女はやかましい姑しゅうとめには内証で、旦那があるなじみの芸者に生ませた子
 の始末をしたこともある。その時になつてもまだ彼女は男というものを信じ、その誠実を

信じ、やさしい言葉の一つも旦那からかけられれば昨日までのことは忘れて、また永い遠い夫を心あてに尽くす氣になった。ひとりの閨に夜ふけて目をさますおりおりなぞは、彼女は枕の上で旦那の物に誘われやすい氣質を考えて、それを旦那の情のよろさというよりも、むしろ少年時代に早く生みの母親に死に別れたというその氣の毒な生い立ちにまで持つて行つて見ることもある。今の姑は武家育ちの教養に欠けたところのないような婦人で、琴もひけば、謡もうたい、歌の話もするが、なにしろ尾州藩の宮谷家から先代菖助の後妻に來た鼻の隆い人で、その嚴格さがかえつて旦那を放縦な世界へと追いやつたかと想つて見ることもある。あるいはまた、妻としての彼女にもないものは、その旦那が生みの母親のふところかとも想つて見ることもある。この世に一人しかない生みの母親のうつくしい俤に立つものが、媚びを売る水商売の人たちの中なぞに見いだされようか。そんなことは、考えて見ただけでもばからしいことであつた。けれども旦那の前で煙草をふかして見せる手つきのよかつたというだけでも、旦那はもうそれらの女の方へ心を誘われて行くようである。一家をあげて東京から郷里へ引き揚げて來てからも、茶屋酒の味の忘れられないその旦那に變わりはない。ふつつかな彼女のようなものでも旦那の妻に選ばれ、植松の家のやれるものは彼女のほかにないとまで言つてくれた薬方の大番頭が意氣にも感

じ、これまで祖母や両親にさんざん心配をかけたことをも考えて、せめて父半蔵の娘として生きがいある結婚生活をと心がけながら嫁いで行つたお糸ではあるが、その彼女が踏み出して見た知らない世界は娘時代に深い窓で思つたようなものではなかつた。なぜかなら、彼女の新生涯というものは、旦那と彼女とだけの二人きりの世界に限られたものではなくて、実に幾千万の人の生きもし死にもする広い世の中につながっているからであつた。彼女は来し方行く末を考えて、ひとりでさんざん哭いたこともある。そのたびに彼女の心は幼いものの方へ歸つて行つた。今の彼女には、旦那との間に生まれた二人の愛児をよく守り育てて、せめて自分の子供らには旦那の弱いところに似ない生涯を開かせたいと願うより他の念慮も持たないという。旦那もよい人には相違なく、彼女にもやさしく、どこへ出してもはずかしくない器量に生まれ、木曾ぶしの一つも歌わせたらずれはすずしい声の持ち主で、あの病氣さえなかつたらと、ただただそれを旦那のために氣の毒に思うともいう。

「お民、お糸はまだ二十八じゃないか。今からそんなことで、どうなろう。」

妻籠をさして歸つて行く娘のうしろ姿を見送つた後、半蔵はそれをお民に言つて見た。

お民も同じ思いで、その時、彼に言つた。

「ほんとに、お父さん（半蔵）にそっくりなような娘ができてしまいました。あれのする

ことは、あなたに似てますよ。」

長男の宗太がいよいよ青山の家を整理しなければいけないと言い出したのも、その翌年（明治十七年）三月のことである。例の飛騨^{ひだ}行き以来、半蔵は家政一切を宗太に任せ、平素くわしいことも知らない隠居の身であつたが、それから十年の後になって見ると、青山の家にできた大借は元利^{がんり}およそ三千六百円ばかりの惣^{そう}高^{たか}に上つた。ついては、所有の耕地、宅地、山林、家財の大部分を売り払つてそれぞれ弁償すると言い出したのも宗太であつた。

実に急激に青山のような旧家の傾きかけて行つたのもその時からである。いろいろなことが起こつて来た。旧本陣の母屋^{もや}、土蔵を添えて、小島拙齋^{せつさい}という医者に月二円半の屋賃で貸し渡すという相談も起こつて来た。家族のものは継母おまんをはじめ、宗太夫婦は裏二階に住み込み、野菜畑作りのために下男の佐吉一人を残して、下女お徳に暇を出すという相談も起こつて来た。半蔵夫婦は隠宅の方に別居させるといふこともまたその時に起こつて来た。青山所有の田畑屋敷地などを手放す相談も引き続きはじまつた。井の平畠は

梶田屋へ、寺の上畠は伏見屋へ、陣場揭示場跡は戸長役場へというふうに。従来吉左衛門時代からの慣習として本陣所有の土地は、他の金利を見るような地主とは比較にもならないほど寛かな年貢を米で受け取るようになっていたが、どこの裏畠とか、どこの割畠とか、あるいはどこの屋敷地とかも、借財仕法立てのためにそれぞれ安く百姓たちに買ってもらうという話も始まった。そればかりでなく、馬籠旧本陣をこんな状態に導いたものは年来国事その他公共の事業にのみ奔走して家を顧みない半蔵であるとの非難さえ、家の内にも外にも起こって来た。これには半蔵は驚いてしまった。

宗太は、妻籠の正己（寿平次養子、半蔵の次男）および親戚旧知のものを保証人に立てて、父子別居についての一通の誓約書の草稿なるものを半蔵の前に持ち出した時のことであつた。宗太が相談役と頼む栄吉、清助とも合議の上の立案である。それには今後家政上の重大な事について父に異見のある時は親戚からそれを承ろう、父子各自の身上についてはすべてかれこれと互いに異議をいれずに適宜に処置するであらう、神葬墓地の修繕を怠るまじきことはもとより庭園にある記念の古松等はみだりに伐採しないであらう、衣食住の三は寒暑に応じ適當の調進を欠くまいしかつ雜費として毎月一元ずつ必ず差し上げるであらうともしてある。これは必ずしも宗太の意志から出たことではなく、むしろそ

の周囲にいろいろな助言をしたがる親戚のために動かされた結果であるとしても、しかし半蔵はこんな誓約書の草稿を持ち出されたことすら水臭く思つて、母屋もやの寛くわぎの間の方へ行つて見た。宗太もお櫃ますきもいた。見ると、その部屋へやの古い床の間には青光りあひかりのする美しい孔雀くじやくの羽なぞが飾つてある。それは家政を改革して維持の方法でも立てようとする宗太にはふさわしからぬほどのむなしい飾りと半蔵には思われた。塩と砂糖あじと藍あゐよりほかになるべく物を買わない方針を執つて来た自給自足の生活の中で、三千六百円もの大借がどうしてできたろうと思ひ、先代吉左衛門から譲られた記念の屋敷もどうなつて行こうと思つて、もしこの家政維持の方法が一步をあやまるならせつかく東京まで修業に出した子供にも苦学させねばなるまいと思ふと、かずかずの残念なことが一緒になつて半蔵の胸にさし迫つた。もともと青山の家督を跡目相続の宗太に早く譲らせたのも継母おまんの英断に出たことであるが、こんな結果を招いて見ると、義理ある子の半蔵よりも孫の宗太のかわいなおまんまでが、これには一言もない。

「先祖に対しても何の面目がある。」

言おうとして、それを言い得ない半蔵は、顔色も青ざめながら、前後を顧みるいとまもなく腰にした扇子を執つて、父の前に手をついた宗太を打ち励まそうとした。あわてて囲

炬裏ばたからそこへ飛んで来たのはお民だ。先祖の鞭むちを意味するその半蔵が扇子は宗太に当たらないで、身をもつて子をかばおうとするお民の眉間みけんを打った。

「お前たちは、なんでもおれがむやみと金をつかいかすようなことを言う。ない、ないと言ったって、おれが宗太にこの家を譲る時には、七十俵の米はいったはずだ。みんな失くしてしまうのはだれだ。たわけめ。」

かつて宗太を責めたことのない半蔵も、その時ばかりは癩かんしやく癩を破裂させてしまった。ひらめき発する金色な物の象かたちはとらえがたい火花のように、その彼の目の前に入り乱れた。

どうしたはずみからか、と言つて見ることもできなかったが、留め役にはいったお民のさしている細い銀のかんざしが飛んで、彼女が左の眉まゆの下を傷つけたのもその際である。

彼女の顔からは血が流れた。何かの消えないしるしのように、小さな痣あざのような黒い斑はんてが彼女の顔に残ったのも、またその際である。やがて宗太の部屋を出てからも、半蔵

が興奮は容易にやまなかつた。彼は自分ながら、自分とも思われないような声の出たのにもあきれた。そういう一時の憤りや悲しみの沈まって行く時を迎えて見ると、彼は子ばかりをそう責められない。十八歳の若者でしかなかった宗太に跡目相続させたほどの、古い青山の家には用のないような人間であつたその彼自身のつたなさ、愚かさを責めねばなら

ない。彼は妻の前に手をついて、あやまって彼女を傷つけたことのわびを言い、自分で自分の性質を羞^はじなければならぬようなことも起こつて来た。

父子別居の話が追い追いと具体化して来ると、一層隠居のわびしさが半蔵の身にしみた。親戚旧知一同の協議の上、彼の方から宗太あてに差し出すべき誓約書とは、次のような文面のものである。それもまた栄吉や清助の立案によるものである。

誓約書

一、今回大借につき家政改革、永遠維持の方法を設くるについては、左の件々を確守すべき事。

一、家法改革につき隠宅に居住いたすべき事。

一、衣食住のほか、毎月金一円ずつ小使金として相渡さるべき事。

一、隠宅居住の上は、本家家務上につき万事決して助言等申すまじき事。その許^{もと}の存念より出^いづる儀につき、かれこれ異議なきはもちろんの事。

一、隠宅居住の上は、他より金銭借り入れ本家に迷惑相かけ候^{そうろう}ような儀、決していたすまじき事。

一、家のために親戚の諫^{いさ}めを用い我意を主張すべからざる事。

一、飲酒五勺に限る事。

右親族決議によつて我ら隱宅へ居住の上は前記の件々を確守し、後日に至り異議あるまじく候也。^{なり}

明治十七年三月三日

本人

半蔵

保証人

正己

省三

栄吉

又三郎

清助

小左衛門

伊之助

新助

庄助

宗太殿

「お民、これじゃ手も足も出ないじゃないか。酒は五勺以上飲むな、本家への助言もするな、入り用な金も決して他よそから借りるなどいうことになって来た。おれも、どうして年を取ろう。」

半蔵が妻に言つて見せたのも、その時である。

次男正己は妻籠の養家先から訪たずねて来て、木曾谷山林事件の大長咄おながばなしを半蔵のもとに置いて行つたことがある。正己の政治熱はお糸の夫弓夫とおツつ、かつつで、弓夫が改進黨びいきならこれは自由黨びいきであり、二十四歳の身空みそらで正己が日義村ひよしむらの河合定義かわいさだよしと語らい合わせ山林事件なぞを買つて出たのも、その志士もどきの熱情にもとづく。もとよりこの事件は半蔵が生涯の中のある一時期を画したほどであるから、その素志を継続してくれる子があるなら、彼とても心からよろこばないはずはなかった。ただ正己らが地方人民を代表する戸長の位置にあるでもないのに、木曾谷十六か村（旧三十三か村）の総代として起たつたことには、まずすくなくから懸念けねんを誘われた。

長男の宗太も次男の正己も共に若い男ざかりで、氣を負うところは似ていた、公共の事業に尽力しようとするところも似ていた。宗太の方は、もしその性格の弱さを除いたら、すなわち温和勤勉であるが、それに比べると正己は何事にも手強く手強く出る方で、争い戦う心にみち、てきぱきしたことをよろこび、長兄のやり方などはとかく手ぬるいとした。この正己が山林事件に関係し始めたのは、第二回目の人民の請願も「書面の趣、聞き届けがたく候事」として、山林局木曾出張所から却下されたと聞いた明治十四年七月のころからである。そこで正己は日義村の河合定義と共に、当時の農商務卿西郷従道さいこうづぐみちあてに今一度この事件を提出することを思い立ち、「木曾谷山地官民有区別の儀につき嘆願書ふところなるものを懷ふところにして、最初に上京したのは明治十五年の九月であつた。

正己らが用意して行つたその第三回目の嘆願書も、趣意は以前と大同小異で、要するに木曾谷山地の大部分を官有地と改められては人民の生活も立ち行きかねるから従来明山あきやまの分は人民に下げ渡されたいとの意味にほかならない。もつとも第二回目に十六か村の戸長らが連署してこの事件を持ち出した時は、あだかも全国に沸騰する自由民権の議論の最高潮に達したところであるから、したがつて木曾谷人民の総代らも「民有の権」ということを強調したものであつたが、今度はそれを言い立てずに、わざわざ「権利のいかにか

わらず」と書き添えた言葉も目立った。なお、いったん官有地として処分済みの山林も古来の証跡に鑑み、^{かんが}人民の声にもきいて、さらに民有地に引き直された場合は他地方にも聞き及ぶ旨を申し立て、その例として飛驒国、大野、^{よしき}吉城、^{ましだ}益田の三郡共有地、および美濃国は恵那郡、^{えな}付知、川上、^{かしも}加子母の三か村が山地の方のことも引き合いに出したものであった。農商務省まで持ち出して見た今度の嘆願も、結局は聞き届けられなかった。正己らは当局者の説諭を受けてむなく引き下がって来た。その理由とするところは、以前の筑摩県時代に^{ちくま}権中属^{ごんちゅうぞく}としての本山盛徳が行なった失政は政府当局者もそれを認めないではないが、なにぶんにも旧尾州領時代からの長い紛争の続いた木曾山であり、全山三十八万町歩にもわたる名高い大森林地帯をいかに処分すべきかについては、実は政府においてもその方針を定めかねているところであるという。

正己は言葉を改めて心機の一転を半蔵の前に語り出したのもその時であった。彼はこれまで人民が執り来った請願の方法のむだであることを知って来たという。木曾山林支局を主管する官吏は衷心においてはあの本山盛徳が定めたような山林規則の過酷なのを知り、人民の盗伐にも苦しみ、前途百年の計を立てたいと欲しているが、ただ自分らを一平民に過ぎないとし、不平の徒として軽んじているのである。これは不信にもとづくことである

うから、よろしく適当な縁故を求めて彼らと友誼^{ゆうぎ}を結び、それと親通するのが第一である。彼はそう考えて来たが、当時朝鮮方面に大いに風雲の動きつつあることを聞いて、有志のものと共にかの地に渡ることを約束し、遠からず郷里を辞するはずであるという。この朝鮮行きには彼はどれほどの年月を費やすとも言いがたいが、いずれ帰国の上はまた山林事件を取りあげて、新規な方針で素志を貫きたいとの願いであるとか。

半蔵には正己の言うことが一層気にかかつて来た。

「まあ、こういう事はとかく横道へそれたがりがちだ。これから先、どういう方針になつて行こうと、山林事件の出発を忘れないようにしてくれ。おれがお前に言つて置くことは、ただそれだけだ。」

それぎり半蔵は山林事件について口をつぐんでしまった。彼が王滝の戸長遠山五平らと共に出発した最初の単純な心から言えば、水と魚との深い関係にある木曾谷の山林と住民の生活は決して引き放しては考えられないものであった。郡県政治の始まった際に、新しい木曾谷の統治者として来た本山盛徳は深くこの山地に注目することもなく、地方発達のあとを尋ねることもなく、容易に一本の筆先で数百年にもわたる慣習を破り去り、ただただ旧尾州領の山地を官有にする功名の一方にのみ心を向けて、山林と住民の生活とを切り

離してしまった。まことの林政と申すものは、この二つを結びつけて行くところにあるうとの半蔵の意見からも、よりよい世の中を約束する明治維新の改革の趣意が徹底したものとは言いがたく、谷の前途はまだまだ暗かった。

三男の森夫と四男の和助が東京で撮った写真は、時をおいて、二枚ばかり半蔵の手にはいったこともある。遠く都会へ修業に出してやった子供たちのこととて、それを見た時は家じゅう大騒ぎした。一枚は正己が例の山林事件で上京のうちに、弟たちと一緒に撮って携え帰ったもの。ちようど正己の養父寿平次も入れ歯の治療に同行したという時で、その写真には長いまばらな髭ひげをはやした寿平次が妻籠の郵便局長らしく中央に腰掛けて写っている。寿平次も年を取った。その後方うしろに当時流行の襟巻えりまきを首に巻きつけ目を光らせながら立つ正己、髪を五分刈ぶりにして前垂まえだれ掛けの森夫、すこし首をかしげ物に驚いたような目つきをして寿平次の隣に腰掛ける和助――皆、よくとれている。伏見屋未亡人みぼうじんのお富から、下隣の新宅（青山所有の分家）を借りて住むお雪婆さんまでがその写真を見に来て、森夫はもうすっかり東京日本橋本町辺のお店たなものになりすましていることの、和助の方に

はまだ幼^{おさな}顔^がが残っていることのと、兄弟の子供のうわぎが出た。今一枚の写真は、妻籠^{おうぎやとくえもん}の扇屋得右衛門の孫がその父実蔵について上京したおりの土産^{みやげ}である。浅草公園^{あさくさ}での早取り写真で、それには実蔵の一人息子^{ひとりむすこ}と和助とだけ、いたいけな二少年の姿が箱入りのガラス板の中に映っている。

「アレ、これが和助さまかなし。まあこんなに大きくならっせいたか。」

またしても伏見屋未亡人などはそのうわさだ。

半蔵は飛驒の旅から帰って幼いものの頭をなでて見た時のころもちを忘れない。こんな二枚の写真を見るにつけても、彼は都会の方にいる子供らの成長を何よりの楽しみに思った。お糸夫婦の話によると、あの和助のことは旧岩村藩士で碁会所でも開こうという日向照之進方によく頼んで置いて来たと言うが、正己が東京に日向家を訪ねて見た時の様子では長く弟を託して置くべき家庭とも思われなかったという。その力量は立派に二、三段級の棋客の相手になれるが、長く独身でいて、三度三度の食事のしたくするにも物の煮えるのを待てないほど気がせわしく、早く煮て、早く食って、早く片づけて、さらにまた食い直したいと考えるような、せかせかした婦人が弟の世話をしていた。この人が日向の「姉さん」だ。見ると和助は青くなっている。この日向家から弟に暇^{いとま}を告げさせ、銀座四

丁目の裏通りに住む木曾福島出身の旧士族野口寛の家族のもとに少年の身を寄せさせることにしたのも、正己の計らいからであつた。半蔵の耳に入る子供の話はしきりに東京の方の空恋しく思わせるようなことばかり。下隣のお雪婆さんも一度上京のついでに、和助を見た土産話をさげて帰つて来た。山家育ちの和助も今は野口家の玄關番で、訪ねて行つたお雪婆さんが帰りがけに見た時は、彼女の下駄^{げた}まで他の訪問客のと同じように庭の敷石の上に直してあつたと言つて、あのいたずらの好きな子かと思うと、婆さんも涙が出たとか。

明治十七年の四月には半蔵は子供を見にちよつと上京を思い立つた。万事儉約の際ではあつたが、父兄に代わつて子供の世話をしてくれる野口家の人たちが厚意に対しても、それを頼み放しにして置くことは彼の心が許さないからであつた。この東京行きには、彼は^{なかせんどう}中仙道の方を回らないで美濃路から東海道筋へと取り、名古屋まで出て行つた時にあの城下町の床屋で髪を切つた。多年古代紫の色の紐^{ひも}でうしろに結び上げていた総髪の風俗を捨てたのもその時であつた。彼は当時の旅人と同じように、黒い天鵝絨^{びろうど}で造つた頭陀袋^{ずだぶくろ}などを頸^{くび}にかけ、青毛布^{あおげつと}を身にまとい、それを合羽^{かつぱ}の代わりとしたようなおもしろい姿であつたが、短い散髪になつただけでもなんとなく心は改まって、足も軽かつた。当時は西の京都神戸^{こうべ}方面よりする鉄道工事も関ヶ原辺までしか延びて来ていない。東京と京都の

間をつなぐ鉄道幹線も政府の方針は東山道に置いてあったから、東海道筋にはまだその支線の起工も見ない。時には徒歩、時には人力車や乗合馬車などで旅して行って、もう一度彼は以前の東京の新市街とは思われないほど繁華になった町中に彼自身を見いだした。天^て金の横町と聞いて行つて銀座四丁目の裏通りもすぐにわかった。周囲には時計の修繕をする店、大小の箒^{ほうき}の類^{たぐい}を売る店、あるいは鼈^{べつ}甲^{こう}屋^やの看板を掛けた店などの軒を並べた横町に、土蔵造りではあるが見付きの窓や格子戸も「しもたや」らしい家の前には、一人の少年がせつせと手桶^{ておけ}の水をかわいた往来にまいていた。それが和助だった。

この上京には半蔵も多く望みをかけて行つた。野口の人たちにあつて、そこに修業時代を始めたような和助の様子を聞き、今後の世話をもよく依頼したいと思うことはその一つであつた。国を出てもはや足掛け四年にもなる子を見たいと思うことはその一つであつた。明治八年以来見る機会のなかつた東京を再び見たいと思うこともまたその一つであつた。野口の家^への奥^{おく}の部屋^{へや}で、書生を愛する心の深い主人の寛、その養母のお婆さん、お婆さんの実の娘にあたる細君などの気心の置けない人たちが半蔵を迎えてくれた。主人の寛は植松弓夫と同郷で、代言人（今の弁護士）として立とうとする旧士族の一人であり、細君やお婆さんはこの人を助けて都会に運命を開拓しようとする健気^{けなげ}な婦人たちであつた。

その時この家族の人たちはかわるがわる心やすい調子で、和助を引き取ってからこのかたのことを半蔵に話した。なにしろ木曾の山の中の木登りや山歩きに慣れた子供を狭苦しい都会の町中に置いて見ると、いたずらもはげしくて、最初のうちは近所の家々から尻しりの来るのにも困ったという。和助の世話をし始めたばかりのころは、お婆さん霜焼けが痛いと言つて泣き出すほどの子供で、そのたびにそばに寝ているお婆さんが夜中でも起きて、蒲ふ団とんの上から寒さに腫はれた足をたたいてやったこともあるとか。でも、日に日に延びて行く子供の生長は驚くばかり、主人はじめ末頼もしく思っているから、そんなに心配してくれらなという話も出た。そこは普通の住宅としても間取りの具合なぞは割合に奥行き深く造られてある。中央に廊下がある。高い明り窓は土蔵造りの屋内へ光線を導くようになってゐる。飼われている一匹の狢ちんもあつて、田舎いなかからの珍客をさもめずらしがるかのようになっている。ちいさなからだと滑稽こっけいな面貌かおつきとで廊下のところをあちこちと走り回っている。それも和助の友だちかとみて取りながら、半蔵は導かれて奥の二階の部屋に上がり、数日の間、野口方に滞在する旅の身ともなつた。半蔵のそばへ来る和助は父が顔の形の変つたことにも驚かされたというふうで、どこでそんなに髪を短くしたかと尋ね、お父さんも開けて来たと言わないばかりの生意なまいき気きざかりな年ごろになつていた。子供はおかしなもので、半

蔵が外出でもしようとする前に旅行用の小さな鏡の桐きりの箱にはいったのを取り出すと、すぐそれに目をつけ、お父さん、男が鏡を見るんですかと尋ねるから、そりや男だつて見る、ことに旅に来ては鏡を見て容儀を正しくしなければならぬと彼が答えたこともある。彼は和助の通う学校も見たく、その学校友だちをも見たい。子弟の教育に熱心な彼は邪魔にならない程度にその学窓の周囲をも見て行きたい。そこで、ある日、彼は和助に案内させてうわさにのみ聞く数寄屋橋すきやばしわきの小学校へと足を向けた。ちようど休日で、当時の校舎でも高く掲げた校旗も見られず、先生方にもあえず、余念もなく庭に遊び戯るる男女の生徒らが声をも聞かれなかつたが、卒業に近い課程を和助が学び修めているという教場の窓を赤煉瓦あかれんがの建物の二階の一角に望むことはできた。思い出の深い常磐橋ときわばしの下の方まで続いて行っている堀ほりの水は彼の目にある。彼はその河岸かしを往復する生徒らがつまずきそうな石のあるのに気づき、それを堀のなかに捨てなどしながら、しばらく校舎の付近を立ち去りかねた。和助に聞くと、親しい学校友だちの一人が通つて来る三十間堀さんじゅうけんぼりもそこからそう遠くない。その足で彼はそちらの方へも和助に案内させて行つて見た。春先の日のあたたつた三十間堀に面して、こぢんまりとした家がある。亡なき夫の忘れ形見に当たる少年を相手に、寂しい日を送るといふ一人の未亡人がそこに住む。おりから和助の学校友だ

ちは家に見えなかったが、半蔵親子のものが訪ね寄った時はその未亡人をよろこばせた。彼は和助の見ている前で、手土産がわりに町で買い求めた九年母くねんぼを取り出し、未亡人から盆を借りうけて、いきなりツカツカと座をたちながら、そこに見える仏壇の前へ訪問のしるしを供えたというものだ。その時の彼の振る舞いほど和助の顔を紅あからめさせたこともなかった。父のすることはこの子には、率直というよりも奇異に、飄逸ひょういつというよりもとつぴに、いかにも変わった人だという感じを抱いだかせたらしい。彼にして見ればかつて飛驒ひだの宮司ぐうじをもつとめたことのある身で、このくらいの敬意を不幸な家族に表するのは当然で、それに顔を紅らめる和助の子供らしさがむしろ不思議なくらいだった。彼は都会に遊学する和助の身のたよりなさを思つて、東京在住の彼が知人の家々をも子に教えて置きたいと考える。そこで、ある日また、両国方面へと和助を誘い出した。本所横網ほんじよこあみには隅田川すみだがわを前にして別荘風な西洋造りの建物がある。そこには吉左衛門時代から特別に縁故ふるの深い尾州家の老公よしかつ（徳川慶勝）が晩年の日を送っている。老公と半蔵との関係は、旧い木曾谷の大領主と馬籠の本陣問屋庄屋との関係である。半蔵は日ごろ無沙汰ぶさたのわびをかねて老公を訪ね、その人の前へ和助を連れて出た。彼は戊辰前後ぼしんの国事に尽力したことにかけては薩長さつちよう諸侯に劣らない老公のような人をも自分の子に見て置けというつもりで、

当時和助が東京の小学校に在学するよしを老公に告げた。老公が和助の年齢を尋ねるから、半蔵は十三歳と答えながら、和助の鉛筆で写生した築地^{つぎじ}辺の図なぞを老公の笑い草にそなえた。その時も和助は父のそばにいて、ただただありがた迷惑なような顔ばかり。本所横網の屋敷を辞してから、半蔵が和助を案内して行ったのは旧両国広小路を通りぬけて左衛門橋^{さへもんばし}を渡ったところだ。旧い^{ふる}なじみの多吉夫婦が住む左衛門町の家だ。和助はどうして父がそんな下町^{したまち}風の家の人たちと親しくするのか何も知らないから、一別以来の話が出たり、飛驒の山の話が出たり、郷里の方の話まで出たりするのをさも不思議そうにしていた。久しぶりの半蔵が子まで連れて訪ねて行ったことは、亭主^{ていしゅ}の多吉やかみさんのお隅^{すみ}をよろこばせたばかりでなく、ちようどそこへ来合せている多吉夫婦の娘お三輪^{みわ}をも驚かした。お三輪ももううつくしい丸髻^{まるまげ}姿^{すがた}のよく似合うような人だ。

「へえ。青山さんには、こんなお子さんがありなさるの。」

と言いながら、お三輪は膝^{ひざ}を突き合わせないばかり和助の前にすわって、何かこの子をよくこばせるようなものはないかと母親に尋ね、そこへお隅^{すみ}が紙に載せた微塵棒^{みじんぼう}を持ってくる、お三輪はそれを和助のそばに置いて、これは駄菓子^{だがし}のたぐいとは言いながら、いい味の品で、両親の好物であるからと言って見せたりした。

父と共にある時の和助が窮屈にのみ思うらしい様子は、これらの訪問で半蔵にも感じられて来るようになった。この上京には、どんなにか和助もよろこぶであろうと思ひながら出て来た半蔵ではあるが、さて、足掛け四年ばかりもそばに置かない子と一緒にあって見ると、和助はあまり話しもしない。父子の間にはほとほと言葉もない。ただただ父は尊敬すべきもの、畏るべきもの、そして頑固がんこなものとしか子の目には映らないかのよう。この少年には、父のような人を都会に置いて考えることすら何か耐えがたい不調和でもあるかのようで、やはり父は木曾の山の中の方に置いて考えたいもの——あのふるさとの家の囲炉裏いろりばたに、祖母や、母や、あるいは下男の佐吉なぞを相手にして静かな日を送ってほしいとは、それがこの子の注文らしい。どうやら和助は、半蔵が求めるような子でもなく、彼の首ツ玉にかじりついて来るような子でもなく、追つても追つても遠くなるばかりのような子であった。これには彼は嘆息してしまった。どれほどの頼みをかけて、彼もこの子を見に都の空まで来るばると尋ねて来たことか。

再び見る東京の雑然ごたごた紛然とした過渡期の空氣に包まれていたことも、半蔵の想像以上であった。彼も二、三日野口の家から離れてひとりであちこちの旧知を尋ねたり、森夫の奉公する日本橋本町の紙問屋へ礼に寄つたりしたから、その都度つど、大きな都会の深さにはい

つて見る時をも持った。漆絵うるしえの画えがいてある一人乗らないし二人乗りの人力車がどれほど町にふえて来たと云つて見ることもできないくらいで、四、五人ずつ隊を組んだ千金丹せんきんだん売りの白い洋傘こうもりが動いて行くのも彼の目についた。新旧の移動が各自の生活にまで浸つて来たこともはなはだしい。彼は故人となつた師鉄胤くやの弔くやみを言い入れに平田家を訪ねようとして、柳原の長い土手を通つたこともある。そこには糊口ここうの途みちを失つた琴の師匠が恥も外聞も思つていられないように、大道に出て琴をひくものすらあつた。同門の医師金丸恭順のもとに一夜を語り明かして、その翌日今一度旧いなじみの多吉夫婦を見に左衛門町の家の格子戸こうしどをくぐつたこともある。そこには樋口十郎左衛門ひぐちじゅうろうざえもんのような真庭流まにわりゅうの剣客ですらしばらく居候いそろうとして来て、世が世ならと嘆き顔に身を寄せていたという話も出た。剣道はすたれ、刀剣も用うところなく、良心ある刀鍛冶かたなかじは偽作以外に身の立てられないのを恥じて百姓の鋏くわや鎌かまを打つという変わり方だ。一流の家元と言われた能役者が都落ちをして、旅の芸人の中にまじるといふことも不思議はなかった。これらが何を意味するかは、知る人は知る。幾世紀をかけて積み上げ積み上げた自国にある物はすべて価値なき物とされ、かえつてこの国にもすぐれた物のあることを外国人より教えられるような世の中になつて来た。しかし、これには拍車をかける力の追い追いと加わつて来たのを

半蔵も見のがすことはできなかった。外来の強い刺激がそれだ。当時この国の辱とする治外法権を撤廃して東洋に独立する近代国家の形態をそなえたいにも、諸外国公使はわが法律と法廷組織の不備を疑い、容易に条約改正の希望に同意しないと聞くところである。まったく条約改正のことは、欧米諸国のことはおろか、東洋最近の事情にすら疎かつた過去の失策のあとを承けて、この国の前途に横たわる最大の難関であるとは、上下をあげてそれを感じないものもない。岩倉、大久保、木戸らの柱石たる人々が廃藩置県直後の国を留守にし三年の月日を海の外に送つても成し遂げることのできなかつたこの難関を突き破るために、時の政治家はあらゆる手段を取りはじめたとも言われる。法律と法廷組織の改正、法律専攻の人士の養成、調査委員の設置、法律専門の外国人の雇用、法律研究生の海外留学、外国法律書の翻訳などは、皆この氣運を語らないものはない。もとより条約改正の成否は内閣の死活にもかかわるところから、勢力のある政治家はいかなる代償を払つてもこの国家の大事業に当たろうとし、従前司法省にあつた法律編纂局へんさんきよくを外務省に移し、外人を特に優遇し、外人に無礼不法の挙があつてもなるべくそれを問わないような時が、多くのものの目の前にやって来ていた。その修正案の主要な項目なるものも、外人に対して実に譲りに譲つたものであつた。第一、日本法廷の裁判官中に三十人ないし四十人の外国

人判事を入れ、また十一人の外国人検事を入れる事。第二、法律を改正し、法廷用語は日英両国の国語となす事。第三、外国人に選挙権を与える事。これほどの譲歩をしてまでも諸外国公使の同意を得ようとした当局者の焦躁しょうそうから、欧風に模した舞踏会を開き、男女交際法の東西大差ないのを粧よそおおうとすることも起こつて来た。仮装も国家のため、舞踏も国家のため、夜会も国家のため、その他あらゆる文明開化の模倣もまた国家のためであると言われた。交易による世界一統が彼の勇猛な目的を決定するものであるとすれば、我もまた勢いそれを迎えざるを得ない。かつては金銭を卑しみ、今は金銭を崇拜する、それは同じことであつた。この氣運に促されて、多くの氣の鋭いものは駆け足してもヨーロッパに追いつかねばならなかつた。あわれな世ではある、と半蔵は考えた。過ぐる十五、六年の間この国ははたして何を生むことができたろう。遠い昔に漢土の文物を受けいれはじめたころには、人はこれほど無力ではなかつたとも考えた。まことの近ちかつ代よを開くために生まれて来たような本居宣長の生涯なぞがこんな時に顧みられようはずもなかつた。橋本雅邦がほうは海軍省の製図に通うといい、狩野芳崖かのうほうがいも荒物屋の店に隠れた。

おそらくもう一度来て見る機会はあるまいと思ひながら、やがて悄然しょうぜんとした半蔵が東京を去つたのもこの旅である。とにもかくにも彼は二人の子にあい、その世話になる人

々に礼を述べ、知人の家々を訪ねて旧交を温めただけにも満足しようとした。帰路には彼はやはり歩き慣れた木曾街道をえらんで、板橋經由で郷里の方に向かった。旅するものには、いずこの宿場の変遷も時の歩みを思わせるころである。道すがらの彼の心はよく四人の男の子の方へ行つた。庄屋風情ながらに物を学ぶ心の篤かつた先代吉左衛門が彼に呼びかけた心は、やがて彼が宗太にも正己にも森夫にも和助にも呼びかける心で、後の代を待つ熱いさびしい思いをその四人に伝えたいと願うからであつた。ことに彼が未熟な和助を頼みにするというのも、それは彼とお民との間に生まれた末の子というばかりでなく、「和助は学問の好きなやつだで、あれはおれの子だで」とお糸夫婦の前でも言つて見せたくらいだからであつた。せめて末の子だけには学ばせたい、とは彼が心からの願ひであつたのだ。どうだろう、その子もまた父の心を知らないとしたら。子は母親本位のもので、父としての彼はただ子の内部なかを通る赤の他人のような旅人に過ぎないとしたら。

「もうもう東京へ子供を見に行くことは懲りた。」

とは彼が郷里に帰り着いてから家のものに言つて見せた言葉だ。

その年の夏は、いよいよ宗太夫婦との別居の履行された時であつた。半蔵が和助を見に行つて深く落胆して歸つて来たというのも、子を思う心が深ければこそだ。隠宅の方へお

民と共に引き移る日を迎えてからも、彼は郷里の消息を遠く離れている子にあてて書き送ることを忘れなかった。彼はその小楼を和助にも見せたいと書き、二階から見える山々の容かたちの雲に霧に変化して朝夕のながめの尽きないことを書き、伏見屋の三郎と梅屋の益穂ますほとが本を読み、彼のもとへ通かよつて来るたびによく和助のうわさが出ることを書き、以前に伊那南殿村の稲葉家（おまんの生家さと）からもらい受けて来た杏あんずの樹きがその年も本家の庭に花をつけたが、あの樹はまだ和助の記憶にあるだろうかと書いた。時にはまた、本家の宗太も西筑摩ちくまの郡書記を拝命して木曾福島の方へ行くようになったが、交際交際で十円の月給ではなかなか足りそうもないと書き、しかし家の整理も追い追いと目鼻がついて来たことを書き、この家計の骨の折れる中でも和助には修業させたい一同の希望であるからそのつもりで身を立ててくれよと書き、どうかすると姫よめ女のお榎まきが懐妊したから和助もよろこべというようなことまで書いてそばにいるお民に笑われた。

「そんな、あなたのような、お榎の懐妊したことまで東京へ知らせてやるやつがあるもんですかね。」

これには彼も一本参った。しかし古い家族の血統を重く考える彼としては、青山の血を伝えにこれから生まれて来るもののあるその新しいよろこびを和助にまで分けずにはいら

れなかった。そんなおとなの世界をのぞいて見るようなことが、どう少年の心を誘うであらうなぞと想^{おも}つて見る暇もないのであった。和助もあれで手紙を書くことはきらいでないと見えて、追い追いと父のもとへ便^{たよ}りをしてよこす。それが学校の作文でも書くように半紙に書いてあるのを彼は何度も繰り返し読み、お民にもまた読み聞かせるのを何よりの心やりとする。彼は遠く離れていながらも、いろいろと和助を教えることを怠らなかった。手紙はどういうふうに書くものとか、本はどういうものを読むがいいとかいうふうに。

やがて成^{ひとなり}長ざかりの子が東京の方で小学の課程を終わるころのことであつた。半蔵は和助からの長い手紙を受け取つた。それには少年らしい志望^{したた}が認めてあり、築地^{つきじ}に住む教師について英学をはじめたいにより父の許しを得たいということが認^{したた}めてある。かねてそんな日の来ることを憂い、もし来たらどう自分の子を導いたものかと思ひわづらつてもいた矢先だ。とうとう、和助もそこへ出て来た。これまで国学に志して来た彼としては、これは容易ならぬ話で、彼自身にはいれなかつた洋学を子にやらせて見たいは山々ではあつたが、いかに言つても子は憐^{あわれ}むべき未熟なもので、まだ学問の何たるを解しない。彼が東京の旅で驚いて来た過渡期の空気、維新以来ほとほと絶頂に達したかと思われるほど上下の人の心を酔わせるような西洋流行^{ばやり}を考えると、心も柔らかく感じやすい年ごろの和助に

洋学させることは、彼にとつては大きな冒険であつた。この子もまた時代の激しい浪^{なみ}に押し流されて行くであらうか。それを思うと、彼は幾晩も腕組みして考えてしまった。もつとも、結局和助の願いをいれたが。

本家土蔵の二階の上、あの静かな光線が鉄格子を通して西の窓からさし入るところは、中央に置き並べた継母と妻との二つの古い長持を除いたら、名実共に青山文庫であつた。先代吉左衛門と半蔵と父子二代かかつて集めた和漢の書籍は皆そこに置いてある。吉左衛門の残した俳書、岐^き岨^そ古道^{どうき}記をはじめこの駄路に関する記録も多い。半蔵の代になって苦心して書物を集めることは、何十年來の彼の仕事のひとつと言つてもよかつたが、ことに万葉は彼の愛する古い歌集で、それに関する文献は彼の手の届くかぎり集められるだけ集めてある。階上の壁面によせて積み重ねてあるそれらの本箱の前をあちこちと歩き回る時ばかり、彼のたましいの落ちつくこともない。また、古人のいう夏の炉か冬の扇のような、今は顧みるものもなく、用うるところもなく、子にすら読まれないそれらの書物に対する時ばかり、後の代を待つ心を深くすることもない。家法改革のため、土蔵の階^{した}下までも明け渡さねばならない時がやって来てからは、それに気がさして、彼はめつたにあの梯子^{はしこ}を登^{のぼ}つて行^いつて見^みることもない。

三

「おいで。」

呼ぶものは半蔵。呼ばれるものは馬籠まごめの村の子供。もはや旧い街道ふるへも六月下旬の午後
の日のあたって来ているところである。

「さあ、いいものあげるから、おいで。」

とまた半蔵が呼んでも、子供は輪回しの遊びに夢中な年ごろで、容易に彼の方へ飛んで
来ようともしない。おもちゃというおもちゃは多く手造りにしたもので間に合わせる馬籠
の子供のあいだには、桶おけの籬たがを回して遊び戯れることがまた流行はやつて来た。この子供も手
に竹の輪をさげている。

「こんなに呼んでも、来ないところを見ると、あれは賢いものじゃないと見える。」

この「賢いものじゃないと見える」が子供を釣つった。子供は彼のそばへ走り寄った。そ
の時、彼は自分の袂たもとに入れていた巴旦杏はたんきようを取り出して、青い光沢のある色も甘そうに熟
したやつを子供の手に握らせた。そして彼の隠宅の方へとその子供を連れて行った。

こんな調子で、半蔵は『童蒙どうもう入学門にゅうがくもん』や『論語』などを讀ませに村の子供らを誘い誘いした。その時になつても彼は無知な百姓の子供を相手にして、教えて倦うむことを知らなかった。普通教育の義務年限も定められずにあるところで、村には読み書きすることのきらいな少年も多く、彼の周囲はまだ多くの迷信にみたされていた。どうかするとにわかにも顔色も青ざめ、口から泡あわを出す子供なぞがあると、それが幼いものの病氣とは見られずに、狐きつねのついた証拠だと村の人から騒さわがれるくらいの時だ。

静しずの屋やへ通かよつて来る半蔵が教え子はひとり馬籠生まれのものに限らなかつた。一里も二里もある山道を草鞋わらじばきでやつて来るような近村の少年もめずらしくない。湯舟沢からも山口からも、あるいは妻籠つまごからも、馬籠には彼を師と頼んで何かと教えを受けに来る二、三の女の子もある。そういう中に置いて見ると、さすがは伏見屋の三郎と梅屋の益穂との進み方は目立つた。この二人ふたりはすでに漢籍も『通鑑つがん』を讀む。いつのまにか少年期から青年期に移る年ごろにも達している。三郎らに次いでは、村社諏訪すわ分社の禰ね宜松下千里の息子にあたる千春が荒町から通つて来る。和助と同年の千春もすでに十五歳だ。「お師匠さま、お師匠さま」と言つて慕つて来るこれらの教え子の書体までが自分のに似通うのを見るたびに、半蔵は東京の方にある和助のことをよく思い出すのであつた。

彼はお民に言った。

「妙なものだなあ。おれなぞはおまえ、明日を待つような量見じゃだめだというところから出発した。明日は、明日はと言つて見たところで、そんな明日はいつまで待つても来やしない。今日はまた、またたく間に通り過ぎる。過去こそ真だ——それがおまえ、篤胤あつたね先生のおれに教えてくださったことさ。だんだんこの世の旅をして、いろいろな目にあううちに、いつのまにかおれも遠く来てしまったような気がするね。こうして子供のことなぞをよく思い出すところを見ると、やっぱりおれというばかな人間は明日を待つてると見える。」

こんな寝言もちんぷん、かんぷんとしか聞こえないお民の耳には、めずらしくも禁酒を思い立つたという夫の言葉の方が彼女にはうれしかった。

「なあ、お民。どうも酒はよくない。飲み過ぎるとおれは眠られない。こないだは、宗太や親類には内証で堅い誓約を破ってしまった。おれも我慢がしきれなかったからさ。さあ、それから眠られない。五晩も六晩もそんな眠られないことが続くうちに、しまいにはおれも書き置きを書こうかとまで思つたくらい苦しかった。ほんとに、冗談じゃない。いろはにほへと同じことを枕まくらの上で繰り返して見たり、一二三四と何べんとなく数えて見たり

して、どうかしておれは眠りたいと思つた。そのうちに眠られた。もうあんなことは懲り懲りした。ここまで来ないと、酒はやめられないものかもしれないナ。」

「そりや、あなた、できればここでふツつりお断ちなさるがいい。そう思つて、わたしはもうお酒の道具を片づけてしまいましたよ。」

「まあ、ばんしやく晩酌に五勺ばかりやつて見たところでも、すずめ雀が水を浴びるようなものさ。なかなか節酒ということが行なわれるもんじやない。飲むなら飲む、飲まないなら全く飲まない——この二つだ。」

九月の来るころまで、とにかくにも半蔵の禁酒が続いた。その一夏の間、静の屋の二階からは澄んだ笛の音が屋外そとまでもれてよく聞こえた。ひとりいる時の半蔵が吹き鳴らした音だ。木曾特有な深い緑の憂鬱ゆううつが谷や林の間を暗くしたところに、思い屈した彼の胸からは次ぎのような言葉もほとばしり流れて来た。

思国、思君、思家、思郷、思親、思朋友妻子親族。百思千慮胸中鬱結不勝憂嘆。起望西南諸峯。山蒼々。壑悠悠々。皆各有自得之趣。頼斯觀以得慰。彼百憂者、真天公之錫也哉。

思ひ草しげき夏野に置く露の千々にこころをくだくころかな

半蔵ももはや五十六歳だ。人がその年ごろにもなれば、顔の形からして変わらないものもまれである。一人の人の中に二人ぐらいの人の住んでいない場合もまれである。半蔵とてもそのとおり、彼の中に住む二人の人は入れかわり立ちかわり動いて出て来るようになった。あの森夫がまだ上京しない前、お民はいたずらのはげしい森夫にあきれて本家の表玄関のところに子をねじ伏せ、懲らしめのために灸をすえろと言ひ出し、その加勢にお櫃を呼んで、お櫃お前も手伝っておくれ、この子の足を押えていておくれと言った時、じたばたもがき苦しむ子のすがたを見ていられなくて、灸をすえることを許してやってくれとお民に頼んだ人も彼であるし、かつて宗太を責めたことのない彼が扇子を取り出して子の面を打ち励まそうとまでした人も彼である。ある時は静の屋に隠れていて、静かに見れば物皆自得すと言った古人の言葉を味わおうと思ひ、ある時は平田篤胤没後の門人がこんなことでもいいのかと考へ、まだ革新が足りないのだ、破壊も足りないのだと考へるのも、その同じ彼だ。

やがて残った暑さの中にも秋氣が通つて来て、朝夕はそこいらの石垣や草土手で鳴く

蟋蟀こおろぎの声を聞くようになった。ある夜の明けがた、半蔵は隠宅の下座敷にお民と枕まくらをならべていて不思議な心地こころちをたどった。その時の彼は妻にも見られないように家を抜けて、こつそり町へ酒を買いに出た人である。大戸がある。潜り戸くぐりどがある。杉すぎの葉の円まるく束まとにしたのが街道に添うた軒先にかかっている。戸をたたくと内には人が起きていて、彼のために潜り戸をあけてくれる。そこは伏見屋の店先で、二代目伊之助がみずから樽たるの前に立ち、飲み口の栓せんを抜いて、流れ出る酒を榼ますに受け、彼の方から差し出した徳利にそれを移して売ってくれる。それまではよかったが、彼は隠し持つ酒を携え帰る途中でさまざまな恐ろしい思いをした。そして、家まで帰り着かないうちに、目がさめた。

しばらく盃さかずきを手にしらない結果が、こんな夢だ。彼の内部なかにはいろいろなことも起こって来るようになった。妙に気の沈む時は、部屋へやにある襖ふすまの唐草模様からくさなぞの情こころのないものまでが生き動く物の形に見えて来た。男女両性のあろうはずもない器物までが、どうかすると陰と陽との姿になって彼の目に映って来た。小半日暮らした。その彼が周囲を見回したころは夕方に近い。お民は本家の手伝いから帰って来て、隠宅の台所で夕飯のしたくを始める。とにかくにも一夏の間、自ら思い立って守りつづけて来た飲酒の戒も、妙な夢を見たために捨てたくなったことを彼はお民に話し、これでは無理だと思って来たのもその

夢からであつたと彼女の前に白状した。その時、お民は襷たすきがけのまま、実はしばらく見えなかつた落合の勝重かつしげが最近にまた訪ねて来てくれた時に置いて行つた酒のあることを夫に告げた。彼女はそれを夫に隠して置いたことをも告げた。

「ホ、落合の酒をくれたか。勝重さんはこの四月にもおれのところへさげて来てくれたツけが。」

「なんでも、あの人はあなたの禁酒したことを知らなかつたんですとき。どうも失礼した、お師匠さまには内証にしてくれなんて、そう言つて、これは煮ものにでも使うようにツて置いて行きましたよ。」

こんな言葉をかわした後、間もなくお民はしたくのできた膳ぜんを台所から運んで来た。憔悴しょうすいした夫のためにつけた一本の銚子ちようしをその膳の上に置いた。憔悴

「こりや、めずらしい。お民はほんとうにおれに飲ましてくれるのかい。」

半蔵はまるでうそのように好きな物にありついて、盃にあふれるその香氣かおりをかいだ。そして元氣づいた。お民はその夫の顔をながめながら、

「そう言えば、こないだというこないだは、わたしもびっくりしましたよ。」

「うん、あの話か。あんなことは、めつたにないやね。なにしろ、お前、変なやつが来て

この庭のすみに隠れているんだろう。あいつは恐ろしいやつき。このおれをねらっているようなやつき。おれもたまらんから、古い杉ツ葉に火をつけて、^{ほう}投りつけてくれた。もうあんなものはいないから安心するがいい。」

「ほんとに、あなたも気をつけてくださるなけりや……」
実際、半蔵にはそんなことも起こつて来ていた。

つましくはあるが、しかし楽しい山家風な食事のうちに日は暮れて行つた。街道筋に近く住むころともちがい、本家の方ではまだ宵の口^{よい}の時刻に、隠宅の周囲^{まわり}はまことにひっそりとしたものだ。谷の深さを思わせるようなものが、ここには数知れずある。どうかすると里に近く来て啼^なく狐^{きつね}の声もする。食後に、半蔵は二階へも登らずに、燈火^{あかり}のかげで夜業^{よなべ}を始めたお民を相手に書見なぞしていたが、ふと夜の空氣を通して伝わって来る遠い人声を聞きつけて、両方の耳に手をあてがった。

「あ——だれかおれを呼ぶような声がする。」

と彼はお民に言つたが、妻には聞こえないというものも彼には聞こえる。彼はまた耳を澄ましながら、じつとその夜の声に聞き入った。

十五夜には、半蔵も村の万福寺の松雲和尚から月見の客の一人に招かれた。今さらここにことわるまでもなく、青山の家と万福寺との関係は開山のそもそもからで、それほど縁故の深い寺ではあるが、例の神葬改典以来は父祖の位牌も多く持ち帰り、わずかに万福寺の開基と中興の開基との二本の位牌を残したのみで、あの先祖道斎が建立した菩提寺も青山の家からは遠くなった。こんな事情があるにもかかわらず住持の松雲はわざわざ半蔵の隠宅まで案内の徒弟僧をよこすほどの旧を忘れない人である。

招かれて行く時刻が来た。半蔵は隠宅を出た。まだ日も暮れきらないうちであつたが、空には一点の雲もなく、その夜の月はさぞと、小集の楽しさと思われないではない。しかし、彼の足は進まなかつた。妙に心も寒かつた。ためらいがちに、彼はその寺道を踏んで行つた。そして、しばらくぶりで山門の外の石段を登つた。数体の観音の石像の並ぶ高い石垣の斜面に沿うて、万福寺の境内へ出た。そこにひらける本堂の前の表庭は、かつて彼の発起で、この寺に飯の教場を開いたころの記憶の残る場所である。経王石書塔の文字の刻してある石碑が立つあたり、古い银杏の樹のそばにある鐘つき堂の辺、いずれも最初の敬義学校の児童が遊び戯れた當時を語らないものはない。

「おゝ、お師匠さまが見えた。」

という寺男の声を聞いて、勝手を知った半蔵は庫裡くらの囲炉裏みなりばたの方から上がった。彼は松雲が禅僧らしい服装みなりでわざわざその囲炉裏みなりばたまで出て迎えてくれるのにもあつた。

やがて導かれて行つたところは住持の居間である。古い壁に達磨だるまの画像なぞのかかつた方丈である。そこにはすでに招かれて来ている二、三の先着の客もある。旧組くみがしら頭さざやし笹屋さや庄助ようすけ、それから小笹屋こささや勝七の跡を相続した勝之助の手合いだ。馬籠町内でもことに半蔵には氣に入りの人たちだ。こんな顔ぶれを集めての催しである上に、主人の松雲は相変わらずの温顔で、客に親疎を問わず、好悪こうおを選ばずと言つたふうの人だ。

まず寺にも異状はない。そのことに、半蔵はやや心を安んじた。柿かき、栗くり、葡萄ぶどう、枝豆えだまめ、里芋さといもなぞと共に、大いさ三寸ぐらいの大団子おだんごを三方さんぼうに盛り、尾花おばなや女郎花おみなえしの類たぐいを生けて、そして一夕を共に送ろうとするこんな風雅な席に招かれながら、どうして彼は滑こ稽つけいな、しかもまじめな心配に息をはずませ、危害でも加えに来るものを用心するかのようなばかりしくくだらないことを考えて、この寺道を踏んで来たろうと、自分ながらも笑止に思つた。松雲は茶菓ちかなぞを徒弟僧に運ばせ、慇懃いんぎんに彼をもてなした。ふと彼が氣づいて見ると、この寺で出す菓子かしの類にも陰と陽とがある。彼もほほえまずにいらな

った。まだ客の顔はすっかりそろわなかったから、そこに集まったものの中には、庭の見える縁側にすべり出、和尚の意匠になる築^{つきやま}山泉水の趣をながめるものがある。夕やみにほのかな庭のすみの秋萩^{あきはぎ}に目をとめるものもある。その間、半蔵は座を離れて、寺男から手燭^{てしよく}を借りうけ、それに火をとぼし、廊下づたいに暗い本堂の方へ行つて見た。位牌堂に残してある遠い先祖が二本の位牌を拝するためであつた。

間もなく方丈では主客うちくつろいで四方山^{よもやま}の話がはじまつた。点火^{あかり}もわざと暗くした風情^{ふぜい}の中に、おのおの膳^{ぜん}についた。いずれも草庵^{そうあん}相応な黒漆^{くろうるし}を塗つた折敷^{おしき}である。夕顔^{ゆうがわ}、豆腐の寺料理も山家は山家らしく、それに香味を添えるものがあれば、それでもよい酒のさかなになつた。同じ大根おろしでも甘酢^{あまず}にして、すり柚^{ゆず}の入れ加減まで、和尚の注意も行き届いたものであつた。塩ゆでの枝豆、串刺^{くしざ}しにした里芋の味噌焼^{みそや}きなどは半蔵が膳の上にもついた。庄助は半蔵の隣の席にいて、

「へえ、お師匠さまは酒はおやめになつたように聞いていましたが、またおはじめになりましたかい。」

これには半蔵もちよつと挨拶^{あいさつ}に困つた。正直者で聞こえた庄助は、飲めばすこししつこくなる方で、半蔵が様子を黙つて見てはいなかつた。

一同の待ち受ける秋の夜の光が寺の庭に満ちて来たころ、半蔵はまだ盃を重ねていた。いったん、やめて見た酒も、口あたりのよいやつを鼻の先へ持つて来ると、まんざらでもない。それに和尚の款待^{もてなし}ぶりもうれしくて、思わず彼はいい心持ちになるほど酔った。でも、彼のはそう顔へは発しなかった。やがて彼は人々と共に席を離れて縁側へ出て見たが、もはやすこし肌寒^{はださむ}いくらいの冷えびえとした空気がかえって彼に快感を覚えさせた。そここの柱のそばには、あるいはうずくまり、あるいは立ちして、水のように澄み渡つた空をながめるものもある。そこは方丈から客殿へ続く回り縁になっていて、さらに本堂の裏手、位牌堂までも続いて行っている。客殿と位牌堂との間には渡れる橋もある。彼はそんな方丈でも歩いて行つて、昼間のように明るい夜の光の照らしている橋の上にも立つて見た。ふと、庭の暗いすみにうずくまる黒いものの動きが彼の目に映った。そんなところに隠れながら彼を待ち伏せしているようなやつだ。彼はその怪しい人の影をありありと見た。にわか酒の酔いのさめたのもその時であつた。顔色も青ざめながら方丈へ引き返した。

「わたしは失礼する。」

と松雲に断わりを言つて置いて、他の客より一足先に寺を辞し去ろうとしたのも、その

半蔵だ。

庄助は半蔵が飲み過ぎからとも思つたかして、囲炉裏いろりばたまでついて来て、土間に下駄たをさがす時の彼に言つた。

「お師匠さま、お前さまはもうお帰りか。お一人ひとりで大丈夫かなし。門前の石段は暗いで、お寺で提灯ちようちんでも借りてあげずか。」

「なあに、こんな月夜に提灯などはいらん。」

「もうお師匠さまも帰りそうなものだ。」

隠宅では、半蔵の留守に伏見屋の三郎と梅屋の益穂とが遊びに来て、お民と共に主人の帰りを待っている。お民は古い将棋盤でしこまなどを出して来て三郎らにあてがったので、二人の弟子は駒の勝負に余念もない。その古い将棋盤は故吉左衛門の形見として静の屋に残っているものだ。

「さあ、早くさしたり。」

「待った。」

「いつまでそんなに考え込むんだ。」

「手には。」

「角桂に、歩が六枚。」

下座敷の縁側に近く盤を置いて、二人の弟子はそんなことを言い合っている。しばらく縁側に出て月を見ていたお民が二人のいる方へ来て見ると、三郎は相手の長い「待った」に気を腐らして、半分ひとり言のようにお民に言った。

「お師匠さまも、あれで将棋でもなさると、いいがなあ。」

「いいがなあのようなことだ。」とお民は笑って、思わず三郎の言葉に釣り込まれながら、「ほんとに、うちは道楽というもののすくない人ですね。弓をやるじやなし、鳥屋とやに凝るじやなし、暇さえあれば机に向かつて本を読んでばかり。この節は気がふさいでしかたがないと言いますから、どんなふう気分が悪いんですかッて、わたしは聞いて見ました。なんでも、こうすわっていますと、そこいらが暗くなつて来るらしい——暗い、暗いつて、よくそんなことを言いましたね。」

お民は夫の健康が気にかかるというふうに、それを三郎に言ってみせた。じつと盤をにらんだ益穂の長考はまだ続いていた。そこへ月を踏んで来る人の足音がした。お民はその

足音で、すぐそれが夫であることを聞き知った。師匠の帰りと聞いて、益穂も今はこれまでと、手に持つ駒こまを盤の上に投げてしまった。

何げなく半蔵は隠宅に帰って来て二人の弟子にも挨拶あいさつしたが、心の興奮は隠せなかった。お民は夫に近く寄ってまず酒くさい息を感じた。

「お民、二階へ燈火あかりをつけてくれ。それから、毛氈もうせんを敷いてくれ。まだそんなにおそくもないんだろう。こんな晩には何か書いて遊びたい。」

半蔵はその足で二階の梯子はしご段を登った。三郎や益穂をも呼んで、硯筆すずみの類を取り出し、紙をひろげることなぞ手伝わせた。墨も二人の弟子に磨すらせた。

「どれ、一つ三郎さんたちにお目にかけるか。」

と言いながら、半蔵がそこへ取り出したのは、平素めつたに人にも見せたことのない壮年時代の自筆の所感だ。それは、水戸浪士みとろうしがこの木曾街道を通り過ぎて行ったあとあたり、彼が東美濃みのや伊那いなの谷の平田同門の人たちとよく相往来したころにできたものだ。さすがに筆の跡も若々しく、書いてあることもまた若々しい。それを彼は二人の弟子に読み聞かせた。

天地生万物、人為最靈也。人之能為靈、以其有靈於心也。凡物多類。野有千艸、山有万

木。一視則均是艸木也。然艸有蘭菊之芳、而木有松柏之操焉。人亦猶如此也。人之能超群者、其靈之能勝於衆靈也。尋常之物、雖有千百、同此一樣、而猶艸木之無芳操者也。卓出之物、有一則一、十則十、皆有裨益於國家也、猶艸木之於松菊也。惟菊也、松也、一視則直知其為秀英也。人之賢愚以心、不以形、故不可遽見也。蓋心之靈在思。其靈最覺者、思弥遠矣。而愚也非所敢也。然人心不能無思。而吾性所思最多常鬱陶于心胸也。陳之、列之、以熟思其所思、其有所得乎。吾素微軀、惟守其業、仰以事親、俯以養妻子、則能事畢焉。何其媚世求容之為也。雖然、如此而生、如此而死、焉在其為万物之靈也。竊觀昔人之所為。有以文鳴者。有以武知者。有直諫而死者。有忠亮而終始一如者。有信義以自守者。有私淑而自修者。有見危致命者。有良圖建功者。有英斷果決見過則能改者。有苟喪其人則失千載之伝者。有常思四方之遠不忘民之細故者。有善察百世之後憂國家之憂者。有禁暴戡乱能畏服四方者。有歴記百世之事以伝于将来者。凡事如此。則非一身之所能為也。然則從吾所好者乎。

読みかけて、「しからばすなわち、わが好むところのものに従わんか」の最後のくだりになると、五十余年の数奇な生涯しょうがいが半蔵の胸に浮かんで来た。見るものの聞くものの涙の種でないものはなかったようなところすら通り越して、今は涙も流れなかった。

その晩、半蔵は弟子を相手にして、しきりに物を書いた。静の屋ではまだ行燈しか用いなかっただが、その燈火では暗かったから、彼は三郎らに手燭を持たせ、蠟燭の灯に映る紙の上に和歌なぞを大きく、しかもいろいろに書いて遊んだ。あるものは仮名文字、あるものは真名文字というふうに。それを三郎にも益穂にも分けると、二人は大よろこびで持ち帰ったころは夜もおそかった。そのあとにはむさぼるようにまだ何か書きたい半蔵が残った。その興奮には止め度がなかったので、しまいには彼は二階の燈火を吹き消して階下へ休みに降りたくらいだ。

「あなた、また眠られないといけませんよ。すこし召し上がり過ぎたんじゃありませんか。あなたのお酒は顔色に出ないんだから、はたのものにはわからない。」

と言つて、そばへ寄つたのはお民だ。半蔵は下座敷の内を静かに歩き回ったり、また妻のいるところへ近く行つたりして、

「お民、もう何時なんじだろう。お前にはまだ話さなかったが、さつきお寺から帰つて来る時のおれの心持ちはなかった。後方うしろから何かに襲われるような気がして、実に気持ちが悪かつ

た。さつさとおれは逃げて帰った。」

「そりや、あなたの気のせいです。あなたはよくそいらが暗い、暗いなんておっしゃるが、みんな気のせいですよ……平田先生は、こういう時の力にはなりませんかねえ。」

このお民の「平田先生」が半蔵をほほえませた。彼は思いがけないことを妻の口から聞いたように思っていると、お民は言葉をついで、

「でも、あの先生はありがたい人だつて、そのお話がよく出るじやありませんか。」

「それさ。おれもこれで、どうかすると篤胤先生を見失うことがある。篤胤先生ばかりじゃないや、あの本居宣長翁でも、おれの目には見えなくなってしまうこともある。そのたびに、おれは精神こころの力を奮い起こして、ようやくここまでたどりついたようなものさ。そうだ、お糸くめの言い草じやないが、神靈みたまさまと一緒にいれば寂しくない。こりや、おれも路みちに迷ったかしらん。もう一度おれは勇気を出して神を守りに行かにやららん。しかし、今夜は——お前もよいことを言ってくれた。」

その時、お民は思いついたように、下座敷の小襖こふすまから薬箱を取り出して来た。その中には医師の小島拙斎せつさいが調合して置いて行ってくれた薬がある。本家の母屋もやを借りて住む拙斎もちようど名古屋へ出張中のころであつたが、あの拙斎が馬籠を留守にする前に、も

しお師匠さまに眠られないようなことがあつたらあげてくれと言って、お民のもとに残して置いて行つたのがそれだ。彼女は台所の流しもとへくみ置きの清水や湯のみなどをも取りに行つて来て、その薬を夫に勧めた。

翌日からの半蔵は一層不思議な心持ちをたどるようになった。彼は床の上に目をさまして見て、およそ何時間ぐらい眠つたということも知らなかった。夢に夢見る心地で彼があたりを見回した時は、本家の裏二階の方に日を暮らしている継母やお檣まさきはもとより、朝夕連れ添う妻のお民までがなんとなく遠くの方にいる人のような気がして来た。

秋の日のあつた部屋へやの障子には、木曾らしい蠅はえの残つたのが彼の目についた。彼はその光をめぐめながら飛びかう虫の群れをつくづくとながめているうちに、久しく音信たよりもない同門の先輩暮田正香くれたまさかのことを胸に浮かべた。彼はあの正香がそう無造作にできるものが復古ではないと言つた言葉なぞを思い出した。ところが世間の人はそうは思わないから、何が『古事記伝』や『古史伝』を著わした人たちの真意かもよくわからないうちに、みんな素通りだ、いくら昨日の新は今日の旧だというような、こんな潮流の急な時勢でも、これじゃ——まったく、ひどい、とあの正香の言つたことをも思い出した。本居平田の学説も知らないものは人間じゃないようなことまで言われた昨日の勢いは間違いであつたのか、

一切の国学者の考えたこともあやまった熱心からだとされる今日の時が本当であるのか、このはなはだしい変わり方に面とむかつては、ただただ彼なぞは目もくらむばかり。かつての神仏分離の運動が過ぎて行つたあとになつて見ると、昨日まで宗教廓清かくせいの急先鋒きゆうせんぽうと目された平田門人らも今日は頑執がんしゅう盲排のともがら扱いである。ことに、愚かな彼のようなものは、する事、なす事、周囲のものに誤解されるばかりでなく、ややもすると「あんな狂人きちがいはやツつける」ぐらいのことは言いかねないような、そんなあざけりの声さえ耳の底に聞きつけることがある。この周囲のものの誤解から来る敵意ほど、彼の心を悲しませるものもなかった。

「おれには敵がある。」

彼はその考えに落ちて行つた。さてこそ、妻の耳に聞こえないものも彼の耳に聞こえ、妻の目に見えないものも彼の目に見えるのはそのためであつた。

過ぐる年の猷扇事件けんせんの日、大衆は実に圧倒するような勢いで彼の方へ押し寄せて来た。彼はあの東京神田橋見附跡かんたばし みつけあとの外での多勢の混雑を今だに忘れることができない。「訴人だ、訴人だ」と言つて互いに呼びかわした人たちの声はまだ彼の耳にある。何か不敬漢でもあらわれたかのように、争つて彼の方へ押し寄せて来た人たちの目つきはまだ彼の記

憶に新しい。けれどもそういう大衆も彼の敵ではなかった。暗い中世の墓場から飛び出して大衆の中に隠れている幽霊こそ彼の敵だ。明治維新の大きな破壊の中からあらわれて来た仮装者の多くは、彼にとつては百鬼夜行の行列を見るごときものであった。皆、化け物だ、と彼は考えた。

この世の戦いに疲れた半蔵にも、まだひるまないだけの老いた骨はある。彼はわき上がる深い悲しみをしのぐとして、たち上がった。ひらめき発する金色な眼花の光彩は、あだかも空際くうさいを縫って通る火花のように、また彼の前に入り乱れた。彼は何ものかを待ち受けるような態度をとつて震えた。

「さあ、攻めるなら攻めて来い。」

もはや、二百十日もすでに過ぎ去り、彼岸ひがんの前にして、急にはげしい夕立があるかと思うと、そのの谷々を通り過ぎたあとには一層恵那山えなさんも近くあざやかに見えるような日が来た。農家では草刈りや田圃たんぼの稗取りひえとになぞにいそがしいころである。午後一人の百姓が改まった顔つきで半蔵を見に来た。旧本陣時代には青山の家に入りました十三人の百姓の中

の一人だ。

「お師匠さまや先の 大旦那おおだんなには、格別ひいきにしていたで。」

とその百姓は前置きをして、ある別れの心を告げに來た。聞いて見ると、その男は年ねんぐ貢米まい三斗七升に当たる宅地を二年前に宗太から買い取る約束をしたもので、代金二十五円九十錢も一時には支払えないところから、内金としてまず五円九十錢だけを納め、残り二十円も追い追いと支払つて、その年の九月で宅地も完全にその男の所有に歸し、売券をも請け取つたとのこと。隠居の半蔵にそれをことわるのも異なるものだが、一言の挨拶あいさつなしに旧主人と手をわかつには忍びかねるという。

「何か用があつたら、いつでもそう言つてよこしておくれなんしや。兼吉や桑作同様に、おれも手伝いに來てあげる。はい、長々お世話さまになりました。」

との言葉をも残した。その男のいう兼吉や桑作も、薬師道の上の畑とか、あるいは裏畑とかを宗太から買い取つた百姓仲間だ。その時になつて見ると、青山家親類會議の結果として永遠維持の方法を設けた家法改革とは名ばかり、挨拶に來る出入りの百姓が置いて行く言葉まで、半蔵の身に迫らないものはない。

夕方に、半蔵は静の屋の周囲を一回りして歸つて來た。夕飯後、二階に上がつて行つて

見ると、空には星がある。月の出もややおそくなつたころであつたが、青く底光りのするような涼しい光が宵よいの空を流れている。その時の彼は秋らしく澄み渡つて来た物象の威厳に打たれて、長い時の流れの方に心を誘われた。先師篤胤ののこした忘れがたい言葉も、また彼の胸に浮かんで来た。

「一切は神の心であらうでござる。」

彼はおのれら一族の運命をもそこへ持つて行つて見た。空の奥の空、天の奥の天、そこにはあらわれたり隠れたりする星の姿があだかも人間歴史の運行を語るかのように高くかかつている。あそこに梅田雲浜うめだうんびんがあり、橋本左内さないがあり、頼鴨崖らいおうがいがあり、藤田東湖ふじたとうこがあり、真木和泉まきいずみがあり、ここに岩瀬肥後いわせひごがあり、吉田松陰があり、高橋作左衛門さくざえもんがあり、土生玄積はづげんせきがあり、渡辺華山わたなべかざんがあり、高野長英があると指さして数えることができた。攘夷じやういと言いい開港と言いつて時代の悩みを悩んで行つたそれらの諸天にかかる星も、いずれもこの国に高い運命の潜むことを信じないものはなく、一方には西洋を受けいれながら一方には西洋と戦わなかつたものもない。この国維新の途上に倒れて行つた幾多の惜しい犠牲者のことに想おもいくらべたら、彼半蔵なぞの前に横たわる困難は物の数でもなかつた。彼はよく若い時分に、お民の兄の寿平次から、夢の多い人だと言いつてからかわれたものだが、

どうしてこんなことで夢が多いどころか、まだまだそれが足りないのだ、と彼には思われて来た。

月も上った。虫の声は暗い谷に満ちていた。かく万^{よろ}ずの物がしみとおるような力で彼の内部^{なか}までもはいって来るのに、彼は五十余年の生涯をかけても、何一つ本当につかむこともできないそのおのれの愚かさ拙^{つた}なさを思つて、明るい月の前にしばらくしよんぼりと立ち尽くした。

四

「お師匠さま、どちらへ。」

そこは馬籠^{まごめ}の町内から万福寺の方へ通う田圃^{たんぼ}の間の寺道だ。笹屋^{ささや}の庄^{しょうすけ}助と小笹屋の勝之助の二人が半蔵を見かけて、声をかけた。

「おれか。おれはこれからお寺へ行くところさ。」

「お寺へなし。」

「お前さまもまた、おもしろい格好をして行かっせるなし。」

こんな言葉も半蔵と庄助らの間にかわされた。半蔵は以前の敬義学校へ児童を教えに通った時と同じような袴を着け、村夫子らしい草履ばきで、それに青い蓑の葉を頭にかぶっている。

「今、ここへ来る途中で、おれは村の子供たちにあつた。その子供たちが蓑の葉をかぶって遊んでいたんで、おれも一つもらつて、頭へ載せて来たさ。」

と半蔵は至極大まじめだ。さびしさに浮かれる風狂の士か。蓮の葉をかぶって吟じ歩いたという渡辺方壺（木曾福島の故代官山村良由が師事した人）のたぐいか。半蔵のは、そうでもなかった。そんなトボけた格好でもしなければ、寺なぞへ行かれるものではないという調子だった。庄助と勝之助とはふき出さないばかりにおかしさをこらえて、何のための万福寺訪問かと尋ねる。

「ええ、うるさく物をききたがる人たちだ。そんなら言つて聞かせるが、おれはこれから行つて寺を焼き捨てる。あんな寺なぞは無用の物だ。」

との半蔵の答えだ。これには庄助も勝之助も、半蔵が戯れているとしか思えなかった。九月も下旬になったころのことで、ちょうど馬籠は秋の祭りの前日にあたる。荒町にある村社諏訪分社の禰宜松下千里はもとより、この祭りを盛んにすることにかけては神坂村小

学校の訓導小倉啓助が大いに力^{ちからこぶ}瘤^{うしこ}を入れている。というのは、この訓導はもともと禰宜の出身だからであつた。子供にはそろいの半被^{はつび}を着せよ、囃子^{はやし}仲間^なは町を練り歩け、村^{むら}芝居^{しばい}結構、随分おもしろくやれやれと言ひ出したのも啓助だ。こんな熱心家がある上に、一年に一度の祭りの日を迎えようとする氏子^{うしこ}連中の意気込みと来たら、その楽しさは祭礼当日よりも、むしろそれを待ち受ける日にあるかのよう。笛^{ふえ}だ三味線^{しゃみせん}だと町内の若者は囃子のけいこに夢中になっている時で、騒^{さわ}がしくにぎやかな太鼓の音が寺道までも聞こえて来ている。

庄助や勝之助はこんな祭りのしたくを世話するからだではあつたが、しかし半蔵の言葉が気にかかつて、まさか彼が先祖青山道斎のこの村のために建立した由緒^{ゆいしよ}の深い万福寺を焼き捨てに行くとは真^まに受けもしなかつたが、なお二人^{ふたり}してそのあとをつけた。馬籠言葉でいう小山の「そんで」（背後）まで行くと、寺道はそこで折れ曲がって、傾斜^{けいせつ}の地勢を登るようになる。落^{ふき}の葉をかぶつた半蔵の後ろ姿は、いつのまにか古い杉^{すぎ}の木立ちのかげに隠れた。

山門の前の石段を踏んで寺の境内へ出て見た時の庄助らの驚きはなかつた。本堂の正面にある障子の前に立つて袂^{たもと}からマツチを取り出す半蔵をそこに見つけた。

「氣狂^{きちが}い。」

思わず見合わせた庄助らの目がそれを言った。その時、半蔵の放った火が障子に燃え上がったので、驚きあわてた勝之助はそれを消し止めようとして急いで羽織^{はおり}を脱いだ。人を呼ぶ声、手桶^{ておけ}の水を運ぶ音、走り回る寺男や徒弟僧などのにわかな騒ぎの中で、半蔵はいちはやくかけ寄る庄助の手に後方^{うしろ}から抱き止められていた。放火も大事には至らなかつたが、半焼けになった障子は見るかげもなく破られ、本堂の前あたりは水だらけになった。この混雑が静まった時になつても、まだ庄助は半蔵の腕を堅くつかんだまま、その手をゆるめようとはしなかつた。

終の章

一

とりあえず、ささやし笹屋庄助と小こ笹屋勝之助ふたりの二人は青山の本家まで半蔵を連れ戻もどつた。ちやうど旧本陣の母屋もやを借りて住む医師小島拙齋せつさいは名古屋へ出張中の時であり、青山の当主宗太も木曾福島の勤め先の方で馬籠まごめには留守居の家族ばかり残る時であつたが、これは捨て置くべき場合ではないとして、親戚旧知のものがにわかな評定ひょうじやうのために旧本陣に集まつた。ともかくにも宗太に来てもらおうと言つて、木曾福島へ向け夜通しの飛脚に立つものがある。一同は相談の上、半蔵その人をば旧本陣の店座敷に押しとどめ、小用に立つ時でも見張りのものをつけることにした。

西筑摩ちくまの郡書記として勤め先にあつた宗太はこの通知に接し、取るものも取りあえず木曾路を急いで来て、祭りの日の午後に馬籠に着いた。彼は栄吉や清助らの意見に聞き、一方には興奮する半蔵をなだめ、一方にはこれ以上の迷惑を村のものにかけまいとした。一

村の父というべき半蔵にも万福寺の本堂へ火を放とうとするような行ないがあつて見ると、周囲にあるものは皆驚いてしまつて、早速山口村の医師杏庵老人を呼び迎えその意見を求めることに一致した。一同のおそれは、献扇事件以来とかくの評判のある半蔵が平常の様子から推して、いよいよお師匠さまもホンモノかということであつた。

こんな取り込みの中で、秋の祭礼は進行した。青山の家に縁故の深い清助などは半蔵のことを心配して、祭りの前夜は旧本陣に詰めきり、自宅に帰つて寝るころに一番鶏の声をきいたと言つていたが、その清助も祭りの世話人の一人であるところから、町の子供たちが村社の鳥居前から動き出すころには自分で拍子木をさげて行つて行列の音頭をとつた。羽織袴の役人衆の後ろには大太鼓が続き、禰宜の松下千里も烏帽子直垂の礼装で馬にまたがりながらその行列の中にあつた。

馬籠での祭礼復興と聞いて、泊まりがけで近村から入り込んで来る農家の男女もすくなくない。一里二里の山路を通つて来る娘たちなどは、いずれも一年に一度の祭礼狂言を見ることが楽しみにしないものはない。あのいたいけな馬籠の子供たちがそろいの黒い半被

に、白くあらわした大きな定紋じょうもんを背中に着け、黄色な火の用心の巾着きんちゃくを腰にぶらさげながら町を練り歩くなぞは、近年にはないことだと言われた。古い街道ふるの空には笛や三味線の音も起こり、伏見屋の前あたりでは木曾ぶしにつれて踊りの輪を描く若者の群れの「なかのりさん」もはじまるというにぎやかさだ。これで旧本陣のお師匠さまが引き起こしたような思いがけない出来事もなくて、一緒にこの祭りの日を楽しむことができたならと、それを言わないものもなかった。

どうして半蔵のような人が青山の家に縁故の深い万福寺を焼き捨てようと思ひ立つたろう。多くの村民にはどこにもその理由が見いだせなかった。なぜかなら、遠い昔に禪宗ぜんしゅうに帰依きえした青山の先祖道齋が村民のために建立こんりゅうしたのも万福寺であり、今日の住持松雲しゅうん和尚おしょうはまたこんな山村に過ぎたほどの人で、その性質の善良なことや、人を待つのに厚いことなどは半蔵自身ですら日ごろ感謝していいと言っていたくらいだからである。たとえば、彼岸の来るころには中日ふつぎょうまでに村じゅうを托鉢たくはつして回り、仏前には団子菓子だんごを供えて厚く各戸の霊をまつり、弘暁十八声の大鐘、朝課の読経どきょう、同じく法鼓などを欠かしたことの無いのもあの和尚である。またたとえば、観音堂かんのんどうへ念仏に見える町内の婆ばばたちのためには茶や菓子を出し、稻荷大明神いなりだいみょうじんを祭りたいという若い衆のためには寺の

地所を貸し与え、檀家だんかの重立ったところへは礼ごころまでの般若札はんにゃふだ、納豆なつとう、あるいは竹の子などを配ることを忘れないで、およそ村民との親しみを深くすることは何事にかぎらずそれを寺の年中行事のようにして来たのもあの和尚である。こんなに勤行ごんぎょうをおこたらない松雲のよく護まもつている寺を無用な物として、それを焼き捨てねばならないというは、ほとほとだれにも考えられないことであつた。

山口村の杏庵老人は祭りの最中にも旧本陣へ駕籠かごを急がせて来た。半蔵のことを心配して前日以来かわるがわる店座敷に付ききりでいる親類仲間のまちまちな意見も、老人の診断一つで決するはずであつた。万事のみ込み顔な杏庵は早速半蔵の居間へ通り、脈を取つてしらべて見たが、一度や二度の診察ぐらいでそうはつきりしたことも医師には言えないものだとの挨拶あいさつである。ただ杏庵は日ごろ好酒家の半蔵が飲み過ぎの癖をよく承知していたし、それにその人の不眠の症状や顔のようすなぞから推して、すくなくも精神に異状のあるものと認め、病人の手当てを怠らないようにとの注意を与えた。眠り薬を調合して届けるから、それを茶の中へ入れて本人には気づかれないように勧めて見てくれよとの言葉をも残した。ところが、かんじんの本人は一向病氣だとも思っていない様子で、まるで狐きつねにでもつままれるような顔をしながら医師の診察を受けたということが知れわたると、

村のものが騒ぎ出した。もしお師匠さまが看護のものを目を盗んで部屋へやから逃げ出しでもしようものなら、この先どんなむちやをやり出すかしたのではないと言うものがある。あの万福寺での放火の時、もしだれもお師匠さまを抱きとめるものがいなかったとしたら、火はたちまち本堂の障子に燃え上がったであろう、万一その火が五百二十把ばからの萱かやをのせた屋根へでも燃え抜けたが最後、仏壇や位牌いはいどう堂はもとより、故伏見屋金兵衛が記念として本堂の廊下に残った大太鼓も、故蘭溪らんけいの苦心をとどめた絵襖えぶすまも、ことごとく火となったであろう、そうなれば客殿、方丈、庫裏くりの台所も危ない、ひよつとすると寺の土蔵まで焼け落ちたかもしれない、こんな事が公然と真昼間に行なわれて、しかもキ印じるしのする事でないとしたら、自分なぞは首をくくって死んでしまいたいと言うものがある。幸いこの放火は大事に至らなかったようなものの、警察の分署へ聞こえたら必ずやかましかろう、もし青山の親戚しんせき一同にこの事を内済にする意向があるなら、なぜ早くお師匠さまを安全な場所に移し、厳重な見張りをつけ、村のもの一同もまた安心して眠られるような適当な方法を取らないのかと息まくものもある。

半蔵いとこの従兄、栄吉は親類仲間でも決断のある人である。事ここに至っては栄吉も余儀ない場合であるとして、翌朝は早くから下男の佐吉に命じ裏の木小屋の一部を片づけさせ、

そこを半蔵が座敷牢ざしきろうの位置と定めた。早速村の大工をも呼びよせて、急ごしらえの高い窓、湿気を防ぐための床張りゆかばから、その部屋に続いて看護するものが寝泊まりする別室の設備まで、万端手落ちのないように工事を急がせた。栄吉はまた、町の重立った人々にも検分に来てもらつて、木小屋のなかの西のはずれを座敷牢とし、用心よくすべきところには鍵かぎをかけるようにしたことなどを説き明かした。なにしろ背は高く、足袋たびは図ずなしと言われるほど大きなものをはき、腕の力とても相応にある半蔵のような人をいれる場処ばしょとあつて、障子を立てる部分には特にその外側に堅牢な荒い格子こうしを造りつけることにした。

二

座敷牢ざしきろうはできた。そこで栄吉は親戚しんせき旧知のものを旧本陣の一室に呼び集めてそのことを告げ、造り改めた裏の木小屋の一部にはすでに畳を入れるまでの準備もとのつたことを語り、さてそちらの方へ半蔵を導くには、どう彼を説得したものかの難題を一同の前に持ち出した。この説得役には笹屋庄助ささやしやうすけが選ばれた。庄助なら半蔵の氣に入りで、万福寺境内からも彼を連れ戻もどつて来たように、この場合とても彼を言いなだめることができ

ようということだ。

いかな旧組頭くみがしらの庄助もこの役回りには当惑した。庄助が店座敷の方へ行つて見ると、ちようど半蔵はひとりいる時で、円形まるがたの鏡なぞを取り出し、それに息を吹きかけ、しきりに鏡の面をふいているところであつた。それはずっと以前に彼の手に入れた古鏡で、裏面には雲形の彫刻などがしてあり、携帯用の紐ひもの付いたものである。この古い屋敷ふるの母屋もやを医師小島拙齋に貸し渡すようになってからも、上段の間だけは神殿として手をつけずにあつて、その床柱の上に掛けてあつたものである。長いこと磨師とぎしの手にもかけないで、うちやらかしてあつたのもその鏡である。

「庄助さ、お互いに年を取ると顔の形も変わるものさね。なんだかこの節は自分の顔が自分じやないような気がする。」

半蔵はあまり周囲のものが自分を病人扱いにするので、古い鏡なぞを取り出して見る氣になつたというふうに、それを庄助に言つて見せた。彼はよくも映らない自分の姿を見ようとして、しきりにその曇つた鏡に見入つていた。そして、言葉をついで、

「そう言えば、この二、三日はおれも弱つたぞ。恐ろしいやつに襲われるような氣がして、夜もろくろく休めなかつた。」

「お師匠さま、お前さまはよく敵が来るなんて言わっせるが、そんなものがどこにおらるか。」と庄助は言う。

「そりや、お前たちに見えなくても、おれの目には見える。あいつはいろいろな仮面めんをかぶつて来るやつだ。化けて来るやつだ。どうして、油断もすきもあつたもんじやないぞ。恐ろしい、恐ろしい——庄助さ、大きな声じや言えないが、この古い家の縁の下にだつてあの化け物は隠れているよ。」

そう言つて、半蔵はなおも鏡の面を根氣にふきながら、相手の庄助に身をすくめて見せた。

その時まで庄助は栄吉らから頼まれて来たことをそこへ切り出そうとして、しかもそれを言い得ないでいた。庄助は正直一徹で聞こえた男で、こんな場合に一策を案じるというふうの人ではなかったから、うまいことを言つて半蔵を連れ出すつもりはもとよりなかったが、しかし裏の木小屋の方に彼を待ち受けるものが座敷牢ざしきろうとは言いじよう、一面にはそれは病室に相違ないから、その病室での養よう生じやうを言いたてて、それによつて半蔵を動かそうとした。この庄助としては、ただただ半蔵の健康状態について村のもの一同心配していることを告げ、すでに病室の用意のできていることを語り、皆の行けというところへ半

蔵にもおとなしく行ってもらったら、薬には事を欠かさまいし、日ごろお師匠さまの世話になったものがかわるがわる看護に当たろうからと、頼むようにするほかの手はなかった。庄助は幾度か躊躇ちゆうちよしたあとで、そのことを半蔵の前に言い出した。

「ふうん。庄助さ、お前までこのおれを病人扱いにするのかい。そんな話をきくとおれは可笑おかしくなる。」とは半蔵の返事だ。

「でも、お師匠さまは御自分だって、気分が悪いぐらいのことは思わっせるずら。」

「いや、おれはそんな病氣じゃないぞ。」

と答えて、半蔵は聞き入れなかった。

実に急激に、半蔵の運命は窮まっで行った。栄吉らは別室で庄助の返事を待っていたが、その庄助が店座敷からむなしく引き返して行つて、容易には親類仲間の意見に服しそうもない半蔵の様子を伝えると、いずれも顔を見合せて、ほとんど彼一人ひとりの処置にこまっってしまった。旧問屋といやの九郎兵衛をはじめ、町内の重立った旦那衆にも集まってもらつて、広い囲炉裏くつろばたに続いた寛ぎの間ではまたまた一同の評定があつた。何しろ旧い漢法の医術

はすたれ、新しい治療の方法もまだ進まなかった当時で、ことに馬籠のような土地柄では良医の助言も求められないままに、この際半蔵のからだに縄なわをかけるほどの非常手段に訴えてまでも座敷牢に引き立て、一方には彼の脱出を防ぎ、一方には狼ろうばい狽する村の人たちを取りしずめねばならないということになった。これは勢いであつて、その座に集まる人々にはもはや避けがたく思われたことである。ところが、だれもお師匠さまを縛るものがない。その時、旧宿役人仲間でも一番年下に当たる蓬菜屋ほうらいやの新助が進み出て、これは宗太を出すにかぎる、宗太なら現に青山の当主であるからその人にさせるがいい、お師匠さまも自分の相続者までが病氣と認めると聞いたら我を折るようになるだろうと言ひ出した。以前から旧本陣に出入りの百姓らにも手伝わせること、日ごろ二十何貫の大だいひょう兵肥満を誇り腕力のたくましいことにかけては町内に並ぶもののない問屋九郎兵衛のごとき人にはことに見張りに働いてもらうこと、それらはすべて馬籠での知患者と聞こえた新助が考案に出た。

いよいよ一同の評議は一決した。そのうちに秋の日も暮れかかった。栄吉らの勧めとあつて、青山の家族の人々も仲の間に立ち会えという。このことを聞いたお民などは腰を抜かさなばかりに驚いて、よめのお檣まさきに助けられながらかうじて足を運んだ。そこへ半

蔵が店座敷から清助に連れられて来た。

「お父^{とつ}さん、子が親を縛るといふはないはずですが、御病氣ですから堪^{かん}忍^{にん}してください。」

と半蔵の前にひざまずいて言つたのは宗太だ。

今や半蔵を縛りに来たものは現在のわが子、血につながる親戚、かつて彼が学問の手引きした同郷の人々、さもなければ半生を通じて彼の望みをかけた百姓たちである。彼はハツとした。

「お前たちは、おれを狂^{きちがい}人と思つてくれるか。」

彼は皆の前にそれを言つて、思わずハラハラと涙を落とした。その時、栄吉の手から縄を受け取つた宗太が自分の前に来てうやうやしく一礼するのを見ると、彼はなんらの抵抗なしに、自分の手を後方^{うしろ}に回した。そして子の縄を受けた。

九月末の夕やみが迫つて来ている中を母屋^{もや}から木小屋へと引き立てられて行つたのも、この半蔵である。裏の土蔵の前あたりには彼を待ち受ける下男の佐吉もいた。佐吉は暗い柿^{かき}の木の下にしゃがみ、土の上に片膝^{かたひざ}をついて、変わり果てた旧主人が通り過ぎるまではそこに頭をあげ得なかつた。

三

植松の家に嫁^{かたづ}いて行っているお糸^{くめ}がこの報知^{しらせ}に接して、父の見舞いに急いで来たのは、やがて十月の十日過ぎであつた。彼女が夫の弓夫もすでに木曾福島への帰参のこなつたころで、長い留守居を預かつて来た大番頭をはじめ小僧たちにまで迎え入れられ、先代^{しやう}菖^{さう}助^{すけ}がのこした屋敷の大黒柱の下にすわり、大いに心を入れ替えて家伝製薬の業に従事するという時であつた。この馬籠訪問には、彼女はめつたに離れたことのない木曾福島の家を離れ、子供も連れずであつた。ただ商用で美濃^{みの}路^じまで行くという薬^{くすり}方^{かた}の手代に途中を見送つてもらふことにした。

「あゝ、お父^{とつ}さんもうとうとう狂つておしまいなすつたか。」

その考えは、駒^{こま}ヶ嶽^{たけ}も後方^{うしろ}に見て木曾路を西へ急いで来る時の彼女の胸を往^いたり来たりした。彼女はお櫛^みが代筆した母お民からの手紙でも読み、弟宗太も西筑摩^{ちくま}郡書記の身でそう馬籠での長^{なが}逗留^{とうりゆう}は許されないとあつて、木曾福島の勤め先へ引き返した時のじきじきの話にも聞いて、ほぼ父のようすを知っていた。五人ある姉^{きやうだい}弟^{だい}の中でも、彼女は

父のそばに一番長く暮らして見たし、父の感化を受けることも一番多かったから、父のさびしさも彼女にはよくわかった。彼女は父のことを考えるたびに、歩きながらもときどき涙ぐましくなることがあった。

三留野泊まりで、お糸は妻籠つまごに近づいた。ちょうどその村の入り口に当たる木曾川のほとりに一軒の休み茶屋が見えるところまで行くと、賤母しずもの森林地帯に沿うて河づたいに新しい県道を開鑿かいさくしようとする工事も始まっているころであつた。遠くの方で岩壁を爆破させる火薬の音は山々谷々に響き渡つた。古い街道筋をも変えずには置かないようなその岩石の裂ける音は恐ろしげにお糸の耳を打つ。その時、木曾風俗の輕衫かるさんばきでお糸らの方へ河岸を走つて来る二人づれの旦那衆がある。見ると二人とも跣足はだしで土を踏んでいる。両手を振りながら歓呼をもあげている。その一人が伯父おじの寿平次だった。長い痔疾じしつの全治した喜びのあまりに、同病相憐あいあわれんで来た伯父たちは夢中になって河岸をかけ回り、互いに祝意を表し合っているところだった。

お糸と供の手代が着いたのを見ると、寿平次は長い病苦も忘れたように両手をひろげて見せ、大事な入れ歯も吹き出さないばかりに笑って、付近の休み茶屋の方へお糸らを誘つた。

「お糸はこれから馬籠へ行く人か。お前も御苦労さまだ。まあ、おれの家へ寄って休んで行くさ。」

「伯父さん、宗太も福島の方へ戻^{もど}つてまいりましてね、馬籠のお父^{とつ}さんのことはいろいろ彼^{あれ}から聞きましたよ。」

「そうかい。宗太は吾家^{うち}へも寄つて行つた。正己^{まさみ}もね、あれからずっと朝鮮の方だが、おれの出した手紙を見たら彼^{あれ}も驚くだろう。二、三日前に、おれも半蔵さんの見舞いに行つて来た。」

「なんですか、伯父さんの御覧なすつたところじゃ、お父さんのようすはどんなでしょうか。」

「それがね、もうすこし模様を見ないと、おれにはなんとも言えん。ホイ、おれはこんなおもしろい格好で話ばかりしていて、まだ足も洗わなかった。お糸、お前はそこに腰掛け^{こかけ}ていておくれ。」

寿平次は勝手を知つた休み茶屋の奥の方へ足を洗いに行つた。やがて下駄^{げた}ばきになって、お糸らのいるところへ戻^{もど}つて来て、

「やれやれ、おれもこれで活^いき返つたというものだ。きようは久しぶりで木曾^{やまぎ}の山猿^{ざる}に

帰った。お前のお母さん（お民）もあれで痔持ちだが、このおれの清々^{せいせい}したところもちを分けてやりたいようだ。どうも痔持ちというやつは、自分ながらむつかしい顔ばかりして、養子（正己のこと）にはきらわれどおしさ。」

こんなことを言つて戯れる寿平次も、お糸らと連れだつて休み茶屋を離れるころはしみりとした調子になる。その位置から寿平次の家族が住む妻籠の町まではまだ数町ほどの距離にある。大河の勢いで奥筋の方角から流れて来ている木曾川にも別れて、山や丘の多い地勢を次第に登るようになるのも、妻籠からである。

寿平次は言つた。

「まったく、半蔵さんがあんなことになるうとはだれも思わなかった。一寸先のことはわからんね。あれで医者から見ると、気の違った人というものはいくらこちらから呼びかけても反応のないようなものだそうだね。世離れたもの——医者にはそういう感じがするそうだね。そうだろうなあ、全く世の中とは交渉がなくなってしまうからなあ。医者があるという患者を置いて来るのは、墓場に置いて来るような気がするという話だが、それが本当のところだろうね。」

父のことが心にかかつて、お糸はそう長いこと妻籠の伯父の家にも時を送らなかつた。

三、四年ぶりで彼女は妻籠から馬籠への峠道を踏んだ。そこは同じ旧い街道筋ではあるが、白木の番所の跡があるような深い森林の間で、場処によつては追剥の出たといううわさの残つた寂しいところをも通り過ぎなければ、馬籠峠の上に出られない。けれども木曾山らしいのもまたその峠道で、行く先に栗の多い林などがお糸にいろいろなことを思い出させた。旦那が木曾福島への帰参のなかつたころ、彼女は旦那と共に植松の旧い家の方で一度父半蔵を迎えたこともある。彼女はその時の父がいつぱいにねじ込んだ書物でその懐をふくらませながら訪ねて来たことを覚えてゐる。あれからの彼女は旦那を助けて家を整理するかたわら、日夜兄妹二人の子供の養育に心を砕いたが、その兄の方の子がもはや数え歳の十二にもなつた。朝に晩に彼女の言い暮らしたのは、これまで丹精して来た植松の家にゆつくり父を迎えたいことであつた。今となつては残念ながらそれもかなわない。五十余年の涙の多い生涯を送つた父が最後に行きついたところは、そんな座敷牢であるかと思うと、彼女は何かこう自分の内にもある親譲りのさわりたくないものに否でも応でもさわるような気がして、その心から言いあらわしがたい恐怖を誘われた。

馬籠にある彼女の生家さとも変わった。彼女は旧い屋敷ふるの内の裏二階まで行つて、久しぶりで祖母のおまんや嫂あによめのお榎まきと一緒にすることができた。父の看護に余念のないという母お民も、彼女の着いたことを聞いて、木小屋の方から飛んでやつて来た。ちようど父はよく眠つているところだと言つて、木小屋に働いている下男佐吉に氣をつけてもらうよう言い置いて来たと語り聞かせるのもお民だ。父の病室が造られる前後の騒ぎの夢のようであつたことから、村の人がそれぞれ手分けをして看護に来てくれるというのは、これもお師匠さまと言われた徳であろうかと語り聞かせるのもまたお民だ。お糸の見舞いに来たことは、だれよりもこの母を力づけた。というのは、おまんもすでに七十八歳の老婦人ではあるが、日ごろから思つたことを口にするような人ではないから、半蔵の乱心についてはどうあさましく考へているやも測りがたく、お榎はまた前掛けをかけたぐらいでは隠し切れないほどの身重になつていて、肩で息をしているような人にそう働かせることもならないからであつた。そういう中で、半蔵を看護するお民の苦心も一通りではなかつた。

お民は娘に言つた。

「でも、お糸、あれでお父さんとつもそうあばれるようなことはなさらない。最初のうちは村の衆も心配して、二人ぐらいつつ交代で夜も昼も詰め切りに詰めていましたよ。この節だ

つて、お前、毎日のようにだれかしら来てはくれますがね、最初のうちのようなことはなくなりました。お父^{とつ}さんは本を入れてくれるというから、入れてあげると、半日すわって読んでいて、口もおききなさいとあることがある。」

「まあ、半蔵さんがあんなことになるうとはだれも思わなかったって、妻籠の伯父^{おじ}さんもそう言っておいででした。お酒がすこしいき過ぎましたねえ。」

とお糸も答えて、母と共に嘆息した。

隣家伏見屋の酒店に番頭格として働いている清助がそこへ顔を見せた。新酒売り出しのころにもかかわらず、昔を忘れない清助はそのいそがしいなかにわずかの間を見つけ、裏づたいに酒蔵を回つては青山方の木小屋へ見回りに来る。お糸の着いたことも清助は佐吉から聞いて来たという。

「いやはや、今度という今度はわたしも弱りました。糸さまは何も御存じないでしょうが、^{かめや}亀屋（栄吉のこと）と二人で憎まれ役でさ。お師匠さまにはあの隠宅もありますし、これがただの気鬱^{きうつしやう}症か何かなら、だれもあんな暗いところへお師匠さまを入れたかありません。お寺へ火をつけるようなことがあったものですから、それから大やかまし^{おお}。おまけに、ちやうど馬籠の祭礼の最中で、皆あわててしまいましたわい。」

清助は清助らしいことをかき口説いた。藁の力で父がぐつすり眠っているという間、お糸は裏二階に足を休めたが、やがて母や清助に伴われながら木小屋の方への降り口にある深い井戸について、土蔵のそばの石段を降りた。

北と西は木戸だ。三棟ある建物のうしろには竹の大藪がめぐらしてあつて、東南の方角にあたる石垣の上には母屋の屋根が見上げるほど高い位置にある。これが馬籠旧本陣の裏側にあたるところで、石垣のすぐ下に掘つてある池も深い。武家と公役との宿泊や休息の場処に当てられた昔は、いざと言えば裏口へ抜けられる後方の設備の用心深さを語ることのような、古い陣屋風の意匠がそこに残っている。

三棟ある建物のうち、その二棟は米倉として使用し来たったところであり、それに連なる一棟が木小屋である。小屋とは言いながら、そこは二階建ての古い建物で、間口も広く造つてある。中央の土間もかなり広く取つてある。下男の佐吉が長いこと自分の世界として働いて来たのもそこで、山から背負つて来る薪、松葉の類は皆その小屋に積まれ、藁もそこにたくわえられた。父半蔵の座敷牢はそんな竹の大藪を背後にしたところに隠れてい

た。

お糸は母と共に、清助が隣家の方へ裏づたいに帰って行くのにも別れ、小屋の入り口に鎌^{かま}を研^といでいた佐吉にも声をかけて置いて、まず付き添いのもののある別室の方に父が目をさますまで待った。持つて生まれた濃情が半蔵のからだからこんな気の鬱^{うつ}する病を引き出したのか、あるいは病ゆえにこんなに人恋しく思うのであるか、いずれともお民には言えないとのことであつたが、彼女は夫が遠く離れている子にもしきりにあいたがつて、東京の和助のうわさの出ない日もないことなどを娘に語り聞かせる。お民はまた、この木小屋に移つてからの半蔵に部屋のなかを人知れず歩き回る癖のついたことを言つて、あちこち、あちこちと往^いつたり来たりする夫の姿を見かけるのは実に気の毒だと語るから、それは父の運動不足からであらうとお糸が母に答えて見せた。そのうちに裏の竹藪へ来る風の音にでも目をさましたかして、半蔵の呼ぶ声がする。お糸は母について父の臥^ねたり起きたりする部屋にはいった。親子のものが久しぶりで対面はその座敷牢の内であつた。

その時、お糸は考えて、言葉にも挙動にもなるべく父を病人扱いにしないようにした。それが半蔵の心をよろこばせた。彼は物憂^{ものう}い幽閉の身を忘れたかのように、お民やお糸に向かつて何か物を書いて見たいと言ひ、筆紙^{たぐい}の類を入れてくれと頼んだ。

「それがいい。」とお糸も言った。「何か書いてごらんなさるがいい。紙や筆ぐらいは入れてあげますよ。お父^{とつ}さんの気が晴れるようになさるのが何よりですからね。」

お糸は人手を借りるまでもなく、自分自身に父の頼むものを整えようとして木小屋を出た。彼女は祖母たちのいる裏二階へ行つてそのことを話して見ると、そういうたぐいのは皆隠宅（静^{しず}の屋^や）の方にしまひ込んであつた。その足で彼女は隣家の伏見屋まで頼みに行つて、父の氣に入りそうな紙の類を分けてもらうことにした。伏見屋には未亡^{みぼうじん}人のお富^{とみ}がある。この人は先代伊之助が生前に愛用したという形見の筆などをも探^{さが}し出して貸してくれたので、お糸はそれらの筆紙を小脇^{こわき}にかかえながら木小屋へ引き返して来た。硯^{すずり}や墨は裏二階にあるもので間に合わせた。彼女は父のためにその墨を磨^すつて、次第に濃くなつて行く墨のにおいをかきながら、多くの楽しい日を父と共に送つた娘の昔をお民のそばに思い出していた。

半蔵がそのさびしい境^{きようがい}涯^{がい}の中で、古歌などを紙の上に書きつけ、忍ぶにあまる昔の人の述懐を忍んでわずかに幽閉中の慰めとするようになったのも、その時からであつた。お糸が伏見屋から分けてもらつて来た紙の中には、めずらしいものもある。越前^{えちぜん}産の大^お高檀紙^{おたかだんし}と呼ぶものである。先代伊之助あたりののこして置いて行つたものと見えて、ち

よつとこの山家で手に入りそうもない品であるが、ほどのよい古びと共に、しばの手ざわりとてもなかなかにゆかしい料紙である。半蔵は思うところをその紙の上に書きつけたのであった。

以不勝憂國之情濺慷慨之淚之士、

為癡狂之人。豈其不悲乎。無識人之

眼亦已甚矣。

觀齋とは、静の屋あるいは觀山楼にちなんだ彼が晩年の号である。お糸の目には、父が筆のはこびにすこしの狂いも見いだされなかった。墨痕淋漓ぼつこんりんりとしたその真剣さはかえって彼女の胸に迫った。

お糸も実はそう長く馬籠にとどまれないで、二、三日の予定で父を見舞いに来た人であった。めったにひとりで家を離れたためしのない彼女はその方のことも心にかかり、それに馬籠と木曾福島との間は途中一晚は泊まらねばならなかったから、この往復だけでも女の足には四日かかった。そこで生家さとに着いた三日目の午後には彼女は父にも暇乞いしまぎいして、せめて妻籠泊まりで帰りの路みちにつこうとしたが、この暇乞いしまぎする機会をとらえることがまた容易でなかった。というのは、父の見舞いに来る人も、来る人も、しまいには皆隠れる

ように消えて行くというふうで、その父のさびしがりようがお糸にも暇を告げさせないからであつた。

結局、お糸もまた隠れるようにして父から隠れて行くのほかはなかつたのである。彼女はそれとなく暇乞いのつもりで、しばらく座敷牢の外に時を送った。秋はもはや木小屋の周囲にも深い。父の回復を^{いの}禱ろうとして裏の稲荷^{いなり}へ願掛けした母お民は露にぬれたお百度の道を踏むに余念もなく、畠^{はたけ}へ通う下男の佐吉も病める旧主人を思い顔である。その辺はお糸が弟たちにとつても幼い時分のよい隠れ場処であつたところで、木小屋の前の空地^{あきち}、池をおおう葡萄^{ぶどう}棚^{だな}、玉すだれや雪の下なぞの葉をたれる苔^{こけ}蒸^むした石垣^{いしがき}から、熟した栗^{くり}の落ちる西の木戸の外の稲荷の祠^{ほくら}のあたりへかけて、かつて森夫や和助の遊び戯れた少年の日の姿をお糸の胸によび起こさないものはいくらいのところである。まったく外界との交渉を絶たれた父が閉じこもつた座敷牢からつくづくときき入るのは、この古い池へ来る村^{むら}雨^{さめ}の音であらうかなぞと彼女は思ひやつた。彼女は木小屋の内にある中央の土間を通り抜けて裏口の方へも出て見た。そこに薄日のもれた竹^{たけ}敷^{やぶ}は父の心をしずめるところを通り越して、北側の窓へおおいかぶさつたような陰気なところだ。どうかするとはげしい風雨にねて木小屋の屋根板ぐらいははね飛ばすほどの力を持った青々とした竹の幹が近

くにすすくと群がり茂つているところだ。彼女はそこいらに落ち重なる竹の枯れ葉にも目をやって、父のいる座敷牢の南側の前まで引き返した。その時だ。半蔵は大きく紙に書いた一文字を出して、荒い格子越しにそれをお糸に示した。

「熊^{くま}。」

現在の境涯をたどて見せたその滑稽^{こっけい}に、半蔵は自分ながらもおかしく言い当てたというふうで、やがておのれを笑おうとするのか、それとも世をあざけろうとするのか、ほとんどその区別もつけられないような声で笑い出した。笑った。笑った。彼は娘の見ている前で、さんざん腹をかかえて笑った。驚くべきことには、その笑いがいつのまにか深い悲しみに変わって行つた。

きりぎりす啼^なくや霜夜のさむしろにころも片敷き独^{ひと}りかも寝む

この古歌を口ずさむ時の彼が青ざめた頬^ほからは留め度のない涙が流れて来た。彼は暗い座敷牢の格子に取りすがりながら、さめざめと泣いた。お糸はただただその周囲をめぐりにめぐつて、そこを立ち去るに忍びなかったのである。

十一月にはいつて、美濃みのおちあい落合の勝重かつしげは旧ふるい師匠を見舞うため西から十曲じつきよくとうげ峠とげを登つて来た。駅路時代のなごりともいうべき石を敷きつめた坂道を踏んで、美濃しなのと信濃しなのの国境にぎかいにあたる木曾路きそじの西の入り口に出た。路傍の両側に立つ一里塚づかえのきの榎えも、それを見返らずには通り過ぎられないほど彼には親しみの深いものになっていた。

半蔵乱心のうわさが美濃路の方へも知れて行った時、だれよりも先に馬籠へかけつけたのは勝重であつたが、その後の半蔵が容体も心にかかつて、また彼はこの道を踏んで来たのであつた。その彼が峠の上の新茶屋で足を休めて行こうとするころはかれこれもう昼時分に近い。彼は茶屋の軒をくぐつて、何か有り合わせのもので茶漬ちやづけを出してもらおうとすると、亭主ていしゅが季節きせうがらの老茸らうじでも焼こうと言っているところへ、ちやうど馬籠の方からやつて来る中津川の浅見老人（半蔵の旧友、景蔵のこと）にあつた。この人も半蔵の病んでいると聞くのに心を痛めて、久しぶりで馬籠旧本陣たすを訪ね来たその帰りがけであるとのこと。

勝重は景蔵を茶屋に誘い入れて、さしむかに腰掛けた。景蔵ももはや杖つえをそこに置いて馬籠の方のことを語り出すほどの年配である。さすがに景蔵はあの木小屋のわびしいと

ころに旧友を見る気にはなれなかったと言って、裏二階に住む青山の家の人たちに見舞いを言い入れ、病人の容体を尋ねるだけにとどめて来たという。そういう景蔵は中津川をさして帰って行く人、勝重は落合からやって来た人であるが、この二人は美濃ふたりの方で顔を合わせる機会もすくなくはなく、そのたびに半蔵のうわさの出ないこともなかったくらいの間がらだ。発狂の人として片づけてしまえばそれまでだが、どうしてもあの半蔵が馬籠にも由緒のある万福寺のようなところを焼き捨てる心になったろうとは、これまでとても二人の間に語られ来た謎なぞであった。

勝重は今さらのように心の驚きを繰り返すというふうで、やがて茶屋の亭主がそこへ持ち運んで来た焼きたての老茸ろうじを景蔵にすすめ、自分でも昼じたくをしながら話した。勝重にして見ると、あの「馬籠のお師匠さまが」と思うと、そんなところへ落ちて行つた半蔵が運命の激しさを考えるたびに、まるでうそのような気もすると思うのであった。まったく思いがけないことが彼の目の前に起こつて来たのだ。彼は少年期から青年期へかけての三年をあつた馬籠旧本陣に送つた日のことを思い出し、その旧主人を暗い座敷牢にすわらせるまでの家人の驚きを思いやって、おそらくその中でも一番驚いたのはお師匠さまの奥さんであつたろうと想像するのであった。彼も、日ごろの多忙にかまけて、たまにしかあ

の静しずの屋やを訪たずねることもしなかった。でも、半蔵の顔を見るたびに、旧師も年を取れば取るほどよいところへ出て行つたように想おもい見ていた。こんな乱心が青山半蔵の最期とは彼には考えられもしなかった。

勝重は言つた。

「浅見さん、あなたの前ですが、あなたがあの平田先生のあとを追いかけたようには、あたしどもはお師匠さまのあとを追いかけることもしませんでしたね。その熱心がわたしどもには欠けていたんです。もつとわたしどもがお師匠さまと一緒に歩いたら、こんな過あやまちはさせずに済んだかもしれません。」

そういう彼はさも残念なというところもちを顔に表わしていたが、しかも衷心の狼ろう狽ばいは隠そうとして隠せなかった。岩崎長世、あるいは宮川寛斎なぞの先輩について、はじめて国学というものに目をあけた半蔵が旧ふるい学友のうち、中津川の香蔵もすでに故人となつて、今は半蔵より十年ほども早く生まれた景蔵だけが残つた。この平田門人は代々中津川の本陣で、もつぱら人馬郵伝の事を管掌し、東山道中十七駅もとじめの元締に任じて来た人で、維新聞ぎわまでは同郷の香蔵と相携えて国事に奔走し、あるいは京都まで出て幾多の政変の渦うずの中にも立ち、あるいは長州人士を引いていわゆる中津川会議を自宅に開かせ、ある

いはまた幕府の注意人物であつた多くの志士を自宅にかばい置くなど、百方周旋していたらないところのないくらいであつたが、いよいよ王政復古の日を迎えると共に全く草叢くさむらの中に身を隠してしまつたのもこの景蔵である。当年の手記、奏議、書翰しょかん等の類に至るまで深くしまい込んでしまつて、かつてそれを人に示したこともない。明治元年に権令ごんれい林左門が笠松かさまつ県出仕を命じたが、景蔵は病となえて固く辞退した。それでも許されなかつたので、三日事をみたぎり、ぶらりと京都の方へ出かけて行つて、また仕えなかつた。同じく二年に太政官たじょうかんは彼を弾正台だんじょうだい内監ないかん察さつに任じた。それもおのれの志ではないとして、拜命後数か月で辞し去つてしまつた。明治九年から十二年まで、彼は特に選ばれて岐阜ぎふ県権区けんく長の職にあつたが、その時ばかりは郷党子弟のためであるとして大いに努めることをいとわなかつた。すべてこのたぐいだ。この人から見ると、故寛斎老人が生前によく半蔵のことを言つて、半蔵の一本氣と正直さと来たら、一度これが自分らの行く道だと思さだめをつけたら、それを改めることも変えることもできないのがあの半蔵だと評した言葉も想いおも当たる。景蔵、半蔵、この二人は維新後互いを取る途みちも異なつていた、あれほど祖先を大切にする半蔵がその祖先の形見とも言うべき万福寺本堂に火を放とうとしたというは、その実、何を焼こうとしたのか、平田同門の旧い友人ふるにすらこの謎なぞばかりは解け

なかった。

しかし、座敷牢へ落ちて行くまでの半蔵が心持ちをたどって見ようとするものも、この旧い友人のほかにはない。景蔵は勝重のような後進の者を前に置いて、何もおおい隠そうとする人ではなかった。彼に言わせると、古代復帰の夢想を抱いて明治維新の成じようじゆ就しゆを期した国学者仲間の動き——平田鉄胤かねたね翁おきなをはじめ、篤胤あつたね没後の門人と言われる多くの同門の人たちがなしたことも考えたことも、結局大きな失敗に終わったのであった。半蔵のような純情の人が狂いもするはずではなからうかと。

平素まことに言葉もすくなく、口に往時を語ろうともせず、ただただあわれ深くこの世を見まもつて来たような景蔵からこんな胸をひろげて見せられたことは、ちよつと勝重には意外なくらいだった。年老いたとは言いながらもまだ記憶の確かなのも景蔵だ。勝重はこの老人をつかまえて種々さまざまなことを問い試みようとした。たとえば、民間にいて維新に直面した景蔵のような人は実際この大きな変革をどう思っているかの類たぐいだ。その時の景蔵の答えに、維新の見方も人々の立場立場によっていろいろに分かれるが、多くの同時代

の人たちが手本となったものはなんとと言っても大化たいかいにしえの古であつた。王政復古の日を迎えると共に太政官を置き、その上に神祇官じんぎかんを置いたのも、大化の古制に帰ろうとしたものである。人も知るごとく、この国のものが維新早々まッ先に聞きつけたのは武家の領土返上という声であつたが、そればかりでなく、僧侶そうりよの勢力もまた覆くつがえさなければならぬと言われた。この二つの声はほとんど同時に起こつた。というのは、彼ら僧侶が遠く藤原氏ふじわら時代以来の朝野の保護に慣れて、不相応な寺領を所有するに至つたためである。廃藩といひ、廃仏ということも、その真相は土地と人民との問題であつた。この景蔵の見地よりすれば、維新の成就をめがけ新国家建設の大業に向かおうとした人たちが互いに呼吸を合わせながら出発した当時の人の心はすくなくも純粹であつた。彼景蔵のような草叢くさむらの中にあるものでも平田一門の有志と合力し、いささかこの盛時に遭遇したものであるが、しかし維新の純粹性はそう長く続かなかつた。きびしい意味から言えば、それが三年とは続かなかつた。武家と僧侶との二つの大きな勢力が覆くつがえされて行くころは、やがて出発当時の新鮮な気象もまた失われて行く時であつた。そこには勝利があるだけだつた。

それぎり景蔵は口をつぐんで、同門の人たちのことについてもあまり多くを語ろうとはしなかつた。勝重は思い出したように、

「そう言えば、浅見さん、わたしどもが明治維新の成り立ったことを知ったのは、馬籠のお師匠さまより一日ほど早かったんです。今になってわたしもいろいろなことを考えますが、あの時分はまだ子供でした。一晚寝て、目がさめて見たら、もう王政復古が来ていた。——そんなことを言つて、あの蜂谷^{はちや}さん（故香蔵のこと）には笑われるくらいの子供でした。蜂谷さんはあんたからの手紙を受け取つて、まだ馬籠じゃこんな復古の来たことも知らずにいるんじゃないか、この手紙は早く半蔵さんにも読ませたいと言つて、その途中にわたしをも誘つてくださつたんです。忘れもしません、あれは慶応二年の十二月でした。街道は雪でまっ白でした。わたしは蜂谷さんと二人でさくさく音のする雪を踏んで、この峠を登つて来たものでした。」

「そうでしたよ。ちょうど、わたしは京都の方でしたよ。あの手紙は伊勢^{いせきゅう}久の店のものに頼んで、飛脚で出したように覚えています。」と景蔵が言う。

「まあ、聞いてください。馬籠のお師匠さまも虫が知らせたと見えて、荒町の方からやつておいでなさる。行きあつて尋ねて見ますと、これから中津川へ京都の方の様子をききに行くつもりで家を出て来たところだとおっしゃる。そんならちようどいい、お師匠さまも中津川まで行かずに済むし、わたしどもも馬籠まで行かずに済む、峠の上で話そうじやな

いかということになりました、それから三人で大いに話したのも、この茶屋でした。」

「あれから足掛け二十年の月日がたちますものね。」

御休^{おやすみどころ}処^{ところ}とした古い看板、あるものは青くあるものは茶色に諸^{こうじゅう}講^{こう}中のしるしを染

め出した下げ札、それらのものの軒にかかった新茶屋で、美濃から来たもの同志こんなことを語り合った。気まぐれな秋風は来て旧い街道を吹きぬけて行つた。

中津川をさして帰つて行く景蔵にもその十曲峠の上で別れて、やがて勝重は新茶屋を出た。路傍の右側に立つ芭蕉^{ばしやう}の句碑の前あたりには、石に腰掛け、猿^{さる}を背中からおろして休んで行く旅の渡り者なでもある。もはや木曾路經由で東京と京都の間を往復する普通の旅客も至つてすくなかったが、中央の交通路としてはこの深い森林地帯を貫く一筋道のほかにない。勝重は中のかやから、荒町の出はずれまで歩いて行つて、飯田^{いいた}通いの塩の俵をつけた荷馬の群れに追いついた。

その辺まで行くと、かなたの山腹に倚^よるこんもりとした杉^{すぎ}の木立ちの光景が勝重の目の前にひらけて来る。万福寺はそこに隠れているのだ。本堂の屋根も杜^{もり}のかげになって見ることとはかなわなかったが、しかし彼は馬籠の村社諏訪^{すわ}分社のみすばらしさに思い比べて、山腹に墳墓の地を抱^{いだ}くあの古い寺が長い間の村の中心の一つであったことを容易に想像す

ることはできた。あだかも、遠い中世の昔はまだそんなところにも残って、朝晩の鐘に響きを伝えているかのように。

馬籠峠の上は幾層かの丘より成る順登りの地勢で、美濃よりする勝重には一つの坂を越したかと思うと、また一つの坂を登らねばならないところだ。浅い谷がある。土橋がある。谷川も走り流れて来ている。その水を渡って、岩石の多い耕地が道の左右に見られるところへ出ると、彼は新茶屋での景蔵の話を思い出して深いため息をついた。さらに石を敷きつめた坂を登って馬籠の町はずれへ出ると、彼はこれから見舞おうとする旧い師匠が前途のことを想い見て、これにもまた深いため息をついた。

その日、勝重はかねて懇意にする伏見屋に一晚泊してもらうつもりであったから、旧本陣をあと回しにして、まず二代目伊之助の家族を訪ねた。そこには先代の遺志をついでなにくれとなくお民らの力になる二代目夫婦があり、これまで半蔵の教えを受けて来た三郎やお末のような師匠思いの兄きょうだい妹があり、今となって見れば先代伊之助を先立ててよかつたと言つて、もしあの先代がいまだに達者たっしゃでいたら、どんなに今ごろは心を傷いためたる

うと言つて見る未亡人のお富があり、日に一度は必ず隣家の木小屋を見回ることを怠らない番頭格の清助もある。季節がら、木曾の焼き米でも造ったおりは、まずお師匠さまへと言つて、日ごろその青い香のするやつを好物にする半蔵がもとへ重詰めにして届けることを忘れないのもこの家族だ。

その足で勝重は旧本陣の方に見舞いを言い入れに行った。裏の木小屋まで行かないうちに、彼はお民にあつて、師匠のことをたずねると、お民の答えには、この二、三日ひどく瘡かの起こっているようであるとのこと。彼女は病人の看護も容易でないと言つて、村の人たちへは気の毒でならないとの意味を通わせる。

「奥さん、」と勝重は言つた。「酒はお師匠さまには禁物きんもつでしようが、ああして置いたら自然とおからだがり弱りはしましますまいか。いくら御謹慎中でも、すこしはお勧めした方がいい。そう思ひましてね、今日はほんのすこしばかり落合の酒を持参して見ました。これは人には話さずに置いてください。あとで奥さんにお預けしてまいりますから、すこしずつ内証であげて見ていただきたい。」

そういう勝重が羽織のかげに隠し腰に着けている一つの瓢箪ひくべをお民に出して見せ、それから勝手を知つた木小屋の方へ行こうとしたので、お民はちよつと勝重の袖そでを引きとめて

言った。

「勝重さん、うっかりうちのそばへは行かれません。ほんとに病人というものは油断がないとわたしも思いましたよ。こないだも、うちがしきりに呼ぶものですから、何の気なしにわたしは格子の前へ行って立ったことがありました。お民、ちよっとおいで、ちよっとおいで、そんなことを言つて、あの格子の内から手招きするじゃありませんか。どうでしょう、そのわたしの手をつかまえて力任せになかへ引きずり込もうとしました。あの時は、もうすこしでこの腕がちぎれるかと思いました。勝重さん、あなたも気をつけてくださいよ。」

座敷牢での朝夕はこんなに半蔵をさびしがらせるのだ。勝重は、さもあろうというふうにお民の話をきいた後、やがて木小屋の周囲に人のないのを見すまして、例の荒い格子の前まで近づいた。

「敵が来る。」

師匠の声だ。それは全く外界との交渉も絶え果てたような人の声だ。その声がまず勝重の胸を騒がせる。

「お師匠さま、わたしでございます。勝重でございます。」

思いがけない弟子でしの訪れに、格子の内の半蔵もややわれに帰ったというふうではあった。苦髪くがみらくつめ樂爪らくづめとやら、先の日に勝重が見に来た時よりも師匠ひげが髭の延び、髪は鶉うずらのようになつて、めつきり顔色も青ざめていることは驚かれるばかり。でも、師匠は全く本性を失つてはいない。ややしばらく沈黙のつづいた後、

「勝重さん、わたしもこんなところへ来てしまった。わたしは、おてんとうさまも見ずに死ぬ。」

半蔵は荒い格子につかまりながらそれを言つて、愛する弟子の顔をつくづくとながめた。「そんなお師匠さまのようなことを言わないで……御氣分が治まりさえすれば、いつでもあの静の屋の方へお帰りになれますぞ。その時は勝重がまたお迎えにあがります。みんな首を長くしてその日の来るのをお待ち申しています。時に、お師匠さま、ちようど昔で言えは菊の酒を祝う季節もまいっておりますから、実は瓢箪ふくべにお好きな落合の酒を入れまして、腰にさげてまいりました。しばらくお師匠さまも盃さかずきを手にはなさいますまい。」

勝重が半蔵の見ている前で、腰につけて来た瓢箪せんの栓を抜いて、小さな木盃に酒をつごうとした時、半蔵はじつと耳を澄ましながら細い口から流れ出る酒の音をきいていた。そして、コツ、コツ、コツ、コツというその音を聞いただけでも口中に唾つばを感じるかのよう

な喜び方だ。弟子の勧めるまま、半蔵は格子越しにそれをうけて、ほんの一、二献^{こん}しか盃を重ねなかったが、しかし彼はさもうまそうにそのわずかな冷酒を飲みほした。甘露^{かんろ}、甘露というふうに。かつてこんなうまい酒を味わったことはないというふうにも。

看護するものが詰める別室の方には人の来るけはいもしたので、それぎり勝重は半蔵のそばを離れた。師匠と二人^{ふたり}ぎりの時でもなければ、こんな話も勝重にはかわされなかったのである。しばらく別室に時を送った後、また勝重は半蔵を見に行こうとして、思わず師匠がひとり言を聞いた。

「勝重さんはどうした。勝重さんはいないか。いや、もういない……こんなところにおれを置き去りにして、落合の方へ帰って行つた……師匠の気も知らないで、体裁のよいことばかり言つて、あの男も化け物かもしれんぞ。」

その声を聞きつけると、勝重は木小屋の土間にもいたたまれなかった。彼は裏の竹藪^{たけやぶ}の方に出て、ひとりで激しく泣いた。

恵那山^{えなさん}へは雪の来ることも早い。十月下旬のはじめには山にはすでに初雪を見る。十一月にはいつてからは山家の子供の中には早くも猿羽織^{さるばおり}を着るものがある。百姓が手につかむ霜にも、水仕事するものが皮膚に切れる皸^{ひび}あかぎれにも、やがて来る長い冬を思わせないものはない。

落合の勝重が帰って行つたあとの木小屋には、一層の寂しさが残つた。朝晩もまさに寒かつた。木小屋の位置は裏山を背にする方が北に当たつたから、水の底にでも見るような薄日しか深い竹藪^{たけやぶ}をもれて来ない。夜なぞ、ことにそちらの方面は暗く、物すごかつた。こんな日の続いて行く中で、座敷牢にいる人が火いじりの危^{あぶな}さを考えると、炬燵^{こたつ}一つ入れやつて凍えたからだを温め^{あた}させる術^{すべ}もないとしたら。そう思つて震えるものは、ひとり夫の看護に余念のないお民ばかりではなかつた。

しかし、もうそろそろ半蔵にその部屋^{へや}から出て来てもらつてもよからうと言ひ出すものは一人^{ひとり}もない。お師匠さまには、できるだけ長くその部屋にいてももらいたいと言ふものばかり。木小屋の戸締まりは一層厳重になり、見張りのものは交代で別室に詰め、夜番は火の用心の拍子木^{ひょうしぎ}を鳴らして、伏見屋寄りの木戸の方から裏の稲荷^{いなり}の辺までも回つて歩いた。

ある日の午後、馬籠峠の上へはまれにしか来ないような猛烈な電ひようが来た。にわかにかき曇った晩秋の空からは重い灰色の雲がたれさがって、雷雨の時などに降る霰あられよりも大粒なやつを木小屋の板屋根の上へも落とした。やがて氷雨ひさめの通り過ぎて空も明るくなったところ、笹屋庄助ささやしょうすけと小笹屋勝之助の両名が連れだつてそこいらの見回りに出たが、二人の足は何かにつけて気にかかる半蔵の座敷牢の方へ向いた。途中で二人の行きあう百姓仲間のもに驚き顔でないものはない。あるものは牛蒡ごぼうを掘りに行ってこの電にあつたといい、あるものは桑くわ畠ばたけを掘る最中であつたといい、あるものは引きかけた大根の始末をするいとまもなく馬だけ連れて逃げ帰つたという。すこしの天変地異でもすぐそれを何かの暗示に結びつけて言いたがるのは昔からの村の人たちの癖だ。

こんな空気の中で、庄助らが半蔵を見に行くと、どうもお師匠さまのようすがよくないという清助と落ち合つた。半蔵の方でもだえればもだえるほど、今ここでそんな人に木小屋から飛び出されては困るという腹は庄助らにだつてある。近年まれなものが降つて陽気もまた非常に寒くなつたが、お師匠さまもどうしているか、その見舞いを言い入れに來た庄助らは何よりもまず半蔵が格子の内から呼ぶ荒々しい声に驚かされた。

「さあ、攻めるなら攻めて來い。矢でも鉄砲でも持つて來い。」

血相を変えている半蔵がようすの尋常でないことは、電ひようどころの騒ぎではなかった。もはや半蔵は敵と敵でないものとの区別をすら見定めかぬるかのよう。そして、この世の戦いに力は尽き矢は折れてもなおも屈せずに最後の抵抗を試みようとするかのように、自分で自分の尿くそをつかんでいて、それを格子の内から投げてよこした。庄助の方へも、勝之助の方へも、清助の方へも。

「お師匠さま、何をなさる。」

庄助はあさましく思うというよりも、仰天してしまった。その時、声を励まして、半蔵を制するように言つたのも庄助だ。

「や、また敵が襲つて来るそうな。おれは楠くすのき正成まささしげの故知を学んでいるんだ。尿合くそがっ戦だ。」

旧組頭なぞの制することも半蔵の耳に入らばこそだ。これまで幽閉の苦しみを忍びに忍んで来た彼は手をすり足をすりして泣いても足りなかったというふうで、なおも残りの尿を投げてよこそうとする。木小屋の土間にいてあちこちと避け惑うものの中には、どうかするとそこへすべつてころびそうになった。ぷんとした臭気は激しく庄助らの鼻をついた。

「これはたまらん。」

と言ひ出した清助をはじめ、庄助も、勝之助も、その土間の片すみに壁によせて置いてある^{むしろ}蓆の類を見つけ、あり合うものを引きかぶつて逃げた。

六

万事終わった。半蔵がわびしい木小屋に病み倒れて行つたのはそれから数日の後であつたが、月の末にはついに再びたてなかつた。旧本陣の母屋^{もや}を借りうけている医師小島拙齋も名古屋の出張先から歸つて来ていて、最後まで半蔵の病床に付き添い、脚氣^{かつけしやうしん}衝心の診断を下した。夜のひき明けに半蔵が息を引き取る前、一度大きく目を見開いたが、その時はもはや物を見る力もなかつた。もとよりお民らに呼ばれても答える人ではなかつた。享年五十六。五人もある子の中で彼の枕^{まくら}もとにいたものは長男の宗太ばかり。お糸^{くめ}ですら父の臨終には間に合わなかつた。

その暁から降り出した雨はやみそうもない。裏藪^{うらやぶ}の竹の葉にそそぐ音だけでも、一雨ごとにこの山里へ冬のやつて来ることを思わせる。お民らが半蔵の枕もとに付いていてほのかな鶏の声をきいたところに、彼はすでにこの世の人ではなかつたのであるが、時を置い

て彼の顔をのぞきに行くたびに、雨に暗い空も明けて行き、青白い光線は東南の間にあたる高い窓からその部屋へさし入って来た。やがて皆のものがうち寄って半蔵のからだをぬぐい浄めるころは、そこいらはもう朝だ。遺骸は青い蔭の上に横たわり、枕の位置も変わって見ると、病床もすでに死の床ではあったが、しかしお民らの目にはまだ半蔵がそこに眠っているかのようにであった。

栄吉、清助、庄助、勝之助らは前後して木小屋に集まりつつあった。隣家からは二代目伊之助の顔も見えた。半蔵が二人の若い弟子、伏見屋の三郎と梅屋の益穂とがこんな時の役に立とうとして皆の間に立ちまじっているさまも可憐であった。一刻も早く遺骸は他へ移したい、こんな忌まわしい座敷牢の中には置きたくない、とは一同のものの願いであったが、さて母屋の方へ移すべきか、隠宅の静の屋の方へ移すべきかの話になると、各自意見もまちまちで相談は容易にまとまらなかった。母屋をえらびたいのは山々だが、現在医師の開業しているところを明け渡させるのはたとい二、三日でも故人の本意ではなからうと言うものがある。そうかと言って、あの静の屋のような狭い小楼からお師匠さまの葬式が出せるかと言うものがある。この事は、拙斎自身の申し出で母屋と一決した。馬籠の庄屋と本陣問屋とを兼ねた最後の人を見送る意味からも、古い歴史のある記念の家をここ

ろよく使用してもらいたいとは、拙齋が申し出であつた。

雨は降ったりやんだりしているような日であつたが、すこし小降りになつた時を見て、半蔵の遺骸いがいには蓑みのをかけ、やがて木小屋から運び出されることになつた。多感な光景がそこにひらけた。生前古い青山の家にはもはや用のないような人間だとよく言い言ひしたその半蔵も変わり果てた姿となつて、もう一度旧本陣の屋根の下へと帰つて行つたのである。その旧主人の死体を蒲団ふとんぐるみ抱きかかえながら木小屋から母屋もやへと持ち運んだのは、おもに下男佐吉の力であつた。それには以前に出入りした百姓仲間の兼吉や桑作の手伝いもあつた。宗太はじめ、三郎、益穂らはいずれも雨傘あまがさをさしかけて、その前後を護まもつて行つた。

半蔵の死が馬籠以外の土地へも通知されて行くころには、近在から弔くやみを言い入れに集まる旧い弟子たちもすくなくなつたが、その中でだれよりも先に急いで来たものは落合の勝重であつた。

勝重が思い出の深い本陣屋敷に来て見た時は、師匠の遺骸はすでに奥の上段の間の隣り

座敷に安置してあつた。彼はまず青山の家族にあつて、長い看護に疲れ顔なお民にも、七十八歳の高齢で義理ある子を先立てたおまんにも、それから宗太夫婦にも厚く弔みを述べた。奥座敷の方へも進んで行つて、神葬の古式による清げな白木の壇の前にひざまずき、畳の上に額をすりつけて、もはやこの世の一切の悲しいや苦しいも越えているように厳^{おごそ}かな師匠^かの死顔を拝した。まだ棺もできては来ず、荒町の禰^ね宜^ぎの顔も見えなかったが、そこいらには馬籠町内の重立った人たちも集まつていた。埋葬の場処は、と勝重が宗太に尋ねると、家政改革後は儉約第一の場合でもあるから、万福寺山腹に古くからある墓地の片すみをえらむことにして、そのことはすでに寺へも通じてあるという。これには勝重はひどく残念がつて、なんとかしてもつと適当な場処を求めなるべく手厚く師匠を葬りたいと言ひ、墓地続きの寺の畠^{はたけ}でも譲り受けられるなら、及ばずながらその費用等は自分ら弟子仲間で心配するとの意見をそこへ持ち出した。というのは、青山家の墓地も先祖代々のたくさんな墓石で埋^{うづ}められ、ほとほと割り込むすきもないことを勝重もよく知つていたからであつた。

「どうも、お弟子が来て厄^{やっ}介^{かい}なことを言い出したぞ。」

宗太の目がそれを言つた。でも、こんなに父の死を惜しんでくれる人たちもあるという

その熱い情に動かされて、宗太も儉約一方の説を覆し、結局勝重の意見をいれた。栄吉や清助は宗太の意を受けて、改めて埋葬の地を相するため雨の中を出かけた。

悲しい夜が来た。霊前には親戚旧知のものが集まったが、一同待ち受ける妻籠からの寿平次、実蔵、それに木曾福島からのお糸夫婦はまだ見えなかった。なんと言つても旧本陣のことで、以前から縁故の深かった十三人の百姓の家のもの、大工、畳屋から髪結いまでがそこへ来て、半蔵生前の話が尽きない。あるものは子供の時分、本陣の裏庭へ巴旦杏を盗みに忍び入って、うしろからうんと一つどやしつけられたが、その人がお師匠さまであったことは今だに忘れられないとの話をはじめ。その話をはじめたものはまた、半蔵が袂の中にいっぱい蜜柑を入れていてよく村の児童に分け与えるような幼いものの友だちであったと言い、自分もまたその蜜柑に誘われてお師匠さまの家に通いはじめ、その時から読み書きの道を覚えたことも忘れられないなどと語り出す。

明治十九年十一月二十九日の夜のこと、戸の外へはまた深い山の雨が来た。勝重はその初冬らしい雨の音をききながら、互いに膝をまじえている村の人たちの思い出に耳を傾けて、そんな些細な巴旦杏や蜜柑の話に残る師匠が人柄のゆかしさを思った。

翌日の午後、勝重は伏見屋の主人（二代目伊之助）と連れだつて万福寺の門前に出た。寺より譲り受ける墓地の交渉もまとまつたので、勝重らはその挨拶あいさつを兼ね、ついでに師匠を葬るべき場所を見回りたいためであつた。なお、師匠の葬儀は十二月朔日ついたちと定まつたので、寺の境内を式場に借りうけるため、宗太から頼まれて来た打ち合わせの用事もあつた。この事は青山小竹両家が神葬改典の当時に、半蔵や初代伊之助と松雲和尚との間にかわされた口約束による。勝重もほとんど不眠の一夜を師匠の霊前に送つたあとなので、懇意な伏見屋方で二時間ばかり寝かしてもらつたが、またその日には妻籠の連中やお糸夫婦を迎えて今夜師匠の棺の前に語り明かすはずである。おまけに、次ぎの日の葬儀を控えている。でも、男ざかりの彼は、どんな無理してもこの激しい疲労に打ち勝ち、生前格別の世話になつた師匠の温情にむくいようとした。

ちようど松雲和尚は、万福寺建立以来の青山家代々が恩誼おんぎを思い、ことに半蔵とは敬義学校時代のよしみもあるので、和尚は和尚だけのころざしを受けてもらいに、旧本陣まで今々行つて来たというところであつた。松雲は勝重らを方丈に迎え入れ、寺の境内を今度の式場にあてるための準備もすでにほぼ整えてあること、墓地の譲り渡し等にも寺とし

てはできるだけの便宜を払ったことを勝重らに告げ、茶菓など取り出していんぎんに二人の客をもてなした。そして、例の禅僧らしい沈着な調子で、勝重らに聞いてもらいたいことがあると言いつ出した。半蔵があんな放火を企てたのは全くの狂^{きちがい}気^きだと考えるかと二人に尋ね、和尚にはそうばかりとも思われないと言うのであった。どうして松雲がそんな疑いを抱^{いだ}くかというに、平田門人としての半蔵が寺院ももはや無用な物であるとの口^{こう}吻^{ふん}をもらしたのは晩年にはじまったことでもなく、上は諸大名から下は本陣、問屋、庄屋、組頭、それから五人組の廃された当時、すでにすでに半蔵はその考えを起こしていて、僧^そ侶^{りょ}もまた同じように廃さるべきものとしたろうと松雲には想^{おも}い当たるからであった。松雲は半蔵の創立した敬義学校に事を共にして見て、この寺の本堂を児童教育の仮教場にあつた際に、早くも半蔵の意のあるところを感知したのであつたという。これは全く廃仏を意味する。また、全くの白紙に帰つて行くことを意味する。信教自由の認められて来た今日、こんな山の上の寺を焼き払うような挙動は、子供らしいと言えはそれまでだが、しかしその道徳上の効果はちいさいとは言いがたい。半蔵のはそれをねらつたものではなからうか。もともと心ある仏徒が今日目をさますようになったというのも、平田諸門人が復古運動の刺激によることであつて、もしあの強い衝動を受けることがなかったなら、おそら

く多くの仏徒は徳川時代の末と同じような頽^{たい}廃^{はい}と墮落とのどん底に沈んでいたであろう。半蔵は例の持ち前の凝り性と感情とに駆られて、教部省のやり口に安んじられず、信教自由をも不徹底なりとして、ついにこんな結果を招いたものと思われぬ。これが松雲一流のにらみ方であつた。そういう和尚は半蔵のために、もうすこしでこの寺の本堂を焼かれようとした当面の人であるだけに、半蔵の不思議な行為^{なぞ}を謎としてのみ看過^{みす}ごすことはできなかったと訴えるのであつた。もつとも、松雲は今までだれにもこんなことを口外する人ではなかつた。半蔵の死にあつて見て、勝重らにこれを告げるのであるという。その時、勝重は眉^{まゆ}の白い和尚の顔をしげしげと見つめて、

「和尚さま、そういうあなたのお考えでしたら、なぜもつと早くそれを言い出して、お師匠さまを救つてはくださらなかつたんです。」

と言つた。松雲にして見ると、一切は勢いであつて、和尚の力にもどうすることもできなかった。もし半蔵が勢いに逆らおうとしなかつたなら、あんなに衆のために圧倒されるようなことはなかつたであろう。松雲はそれを勝重らに言つて、見殺しにするつもりもなく半蔵を見殺しにしたと嘆息した。

「しかし、お二人の前ですが、今度という今度はつくづくわたしも世の無常を思い知りま

した。」

とまた松雲は静かに言い添えて、小さな葛籠つづらの風呂敷ふろしき包みにしてあるのを取り出して来た。あだかも、和尚の本心はそこにこめてあるというふうに。驚くべきことには、遠からず和尚にやつて来る七十の齡よわいを期して、長途の旅に上る心じたくがそこにしてあつた。

松雲には日ごろからたたかうまいとしていたことが四つある。命とたたかわず、法とたたかわず、理とたたかわず、勢とたたかわずというのがそれだ。その時、和尚は半蔵が焼こうとした寺にも決してなんらの執着を持たないおのれの立場を明らかにして、それをもつて故人への回向えこうに替えようとしていた。ただ法務と寺用とをこのままに放棄するのは師恩に報ゆべき道でないとなし、それには安心して住持の職を譲って行けるまでもつと跡目相続の弟子を養い、雨漏りのする本堂の屋根の修繕をも成し遂げ、一切心残りのないようにして置いて、七十の声を聞いたならばその時こそは全国行脚あんぎゃをこころざし、一本の錫杖しゃくじょうを力に、風雲に身を任せ、古聖も何人なんびとぞと発憤して、戦場に向かうがごとくに住み慣れた馬籠の地を離れて行きたいことなどを勝重らの前に打ち明けた。和尚はあとの住持のために万福寺年中行事なるものの草稿を作り、弟子の心得となるべき禅門の教訓をもいろいろと認しためて、仏世の値あいがたく、正法の聞きがたく、善心の起こしがたく、人身

の得がたく、諸根のそなえがたいことを教えて置いて行こうとしてあつた。手回しのいいこの和尚はすでに旅の守り袋を用意したと言つて、青地の錦の切地で造つたものをそこへ取り出して見せた。梵文の経の一節を刻んであるインド渡来の貝陀羅樹葉、それを二つ折りにして水天宮の守り札と合わせたものがその袋の中から出て来た。古人も多く旅に死せるありとやら。いずこに露命は果てるとも測りがたいおもんばかりから、この寺に残し置くべき辞世までも和尚は用意してある。それには紙の上に一つの円が力をこめて書きあらわしてあり、その奥には禪家らしい偈も書き添えてある。前途幾百里、もしその老年の出発の日が来て、西は長崎の果てまでも道をたどりうるようであつたら、遠く故郷の空を振り返つて見る一人の雲水僧のあることを記憶して置いてくれよとの話も出た。やがて勝重は伏見屋主人と共に和尚のもとを辞した。万福寺の山門を出てから、彼は連れを顧みて言つた。

「まあ、お師匠さまもあんな最後をなすつたんじゃ、だれだつて寝ざめがよありません。厚く葬つてあげるんですね。」

二代目もうなずいた。

幸い雨もあがつて、どうかと天候の気づかわれた次ぎの日の葬儀もまずこの調子では無事に済まされそうであつた。勝重らは半蔵埋葬の場所を見回るため万福寺の山腹について古い墓石の並び立つ墓地の間の細道を進んで行つた。そこは杉の木立ちの間である。半蔵の祖父半六、父吉左衛門、それから今の伏見屋主人には祖父に当たる金兵衛、先代伊之助、それらの故人となつた人たちが永く眠つているところである。ゆうべの雨にぬれて、ある墓石はまだ湿り、ある墓石はかわきかけていたが、そのそばを通り過ぎて杉の木立ちも尽きたところまで行くと、新開の墓地から立ちのぼる焚火たきびの烟けむりが目につく。旧本陣の下男佐吉は百姓の兼吉や桑作を墓掘りの相手にして、そこに働いていた。

ちようど勝重らがその位置に行つて立つて見た時は、一歩ひとあし先に見回りに来ている清助とも一緒になつた。寺から譲られたその畠の地所もすでにあらかた地ならしを済まし、周囲やぶの藪も切り開いてあつて、なだらかな傾斜の地勢から谷の向こうに恵那山麓えなさんろくの馬籠の村を望むこともできる。この眺望ちようぼうのある位置はいかにも師匠にふさわしいと言つて、よい場所が手に入つたとよろこぶものは、ひとり勝重ばかりではなかつた。兼吉や桑作までときどき鋤くわを休めに焚火のそばへ来て、お師匠さまの墓掃除そうじにはまた皆で来てあげるなど

と語り合うのであった。鰻頭まんじゆうのかたちに土を盛り上げた新しい塚つか、「青山半蔵之奥津おく城つぎ」とでもした平田門人らしい白木の墓標なぞが、もはやそこに集まるものの胸に浮かんだ。時が来れば、その塚の上をおおう青い芝草の想像までも。

「清助さ、遠方の通知はもうすつかり出したろうか。」

「さあ、もれたところはないつもりですがね。」

「東京の平田家へは。」

「それを落とすようなことはしません。熱田あつたの暮田正香先生くれたまさかのところへも。」

「そう言えば、森夫さまや和助さまはどうなさるだろう。お父さんのお葬式とつに、お二人ともお帰りにはなるまいか。」

「それがです。中津川から父上死去の電報は打ちましたがね、お帰りになるがいいともなるとも言つてあげたわけじゃない。宗太さまからもその話はありません。たぶん、和助さまたちは、お見えにはなりますまい。」

清助と伏見屋主人や勝重との間には、しばらくこんな立ち話がはずんだ。そこへ三郎と益穂の二人も勝重らを探しに杉の枯れ葉の落ちた細道を踏んで、お糸夫婦が妻籠の連中と共に旧本陣の方へ着いたことを告げ知らせに來た。

こうして一同が集まって見ると、いずれもようやく重荷をおろしたような顔ばかり。その人の晩年にはとかくの評判のあつた青山半蔵ではあるが、しかし亡^なくなつた後になって見ると、やっぱりお師匠さまはお師匠さまであつたという話が出る。星移り、街道は変わつて、今後お師匠さまのような人はこの山の中には生まれて来まいとの話も出る。お糸らの到着と聞いても、一同はすぐ墓地を離れようとしなかつた。その中でも清助は深いため息をついて、

「あのお師匠さまも、しまいにはずいぶん人をてこずらせた。楠正成の屎合戦^{くそがつせん}だなんて言い出して——からだを洗つてあげたいにも、手のつけようもない。あんな困つたこともなかつた。よくあれでなんともなかつたものだと思う……今になっておれも考えて見ると、あのお師匠さまの疝^{かん}の起こつてゐる時には、何をなすつてもからだに障^{さわ}らなかつた。すこし気分も静まつて来たかと思うと、今度はからだの方が弱つていらした……」

と清助は清助らしいことを言い出す。年若な三郎はその話を引き取つて、

「でも、お師匠さまも惜しいことをした。もうすこしからだが続いたら、あんな木小屋から出してあげられたんだ。そりやだれがなんと言つたつて、お師匠さまのような清い人はめつたにない——あんな人をおれは見たことがない。」

「そうだ、三郎さんの言うとおりだ。せめてもう十年お師匠さまを生かして置きたかったよ。」

勝重の嘆息だ。

その日には奥筋の方から着いたお衆らを迎えて半蔵の霊前に今夜語り明かそうという手はずも定めてある。やがて墓地には一人去り、二人去りして、伏見屋主人や清助から若い弟子たちまでもと来た細道を引き返して行つたが、勝重のみはまだそこに残つて、佐吉らが墓穴を掘るさまをながめたはずんだ。

その時になつて見ると、旧庄屋として、また旧本陣問屋としての半蔵が生涯もすべて後方になつた。すべて、すべて後方になつた。ひとり彼の生涯が終わりを告げたばかりでなく、維新以来の明治の舞台もその十九年あたりまでを一つの過渡期として大きく回りかけていた。人々は進歩をはらんだ昨日の保守に疲れ、保守をはらんだ昨日の進歩にも疲れた。新しい日本を求める心はようやく多くの若者の胸にきざして来たが、しかし封建時代を葬ることばかりを知つて、まだまことの維新の成就する日を望むこともできないような不幸な薄暗さがあたりを支配していた。その間にあつて、東山道工事中の鉄道幹線建設に對する政府の方針はにわかに東海道に改められ、私設鉄道の計画も各地に興り、時間と距離と

を短縮する交通の変革は、あだかも押し寄せて来る世紀の洪水こうすいのように、各自の生活に浸ろうとしていた。勝重は師匠の口からわずかにもれて来た忘れたい言葉、「わたしはおてんとうさまも見ずに死ぬ」というあの言葉を思い出して悲しく思った。

「さあ、もう一息だ。」

その声が墓掘りの男たちの間に起こる。続いて「フム、ヨウ」の掛け声も起こる。半蔵を葬るためには、寝棺を横たえるだけのかなりの広さ深さもいるとあつて、掘り起こされる土はそのあたりに山と積まれる。強いにおいを放つ土中をめがけて佐吉らが鍬くわを打ち込むたびに、その鍬の響きが重く勝重のはらわたに徹こたえた。一つの音のあとには、また他の音が続いた。

青空文庫情報

底本：「夜明け前 第二部（下）」岩波文庫、岩波書店

1969（昭和44）年2月17日第1刷発行

1995（平成7）年12月15日第26刷発行

底本の親本：「改版本『夜明け前』」新潮社

1936（昭和11）年7月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：大野晋、小林繁雄

校正：砂場清隆

2001年7月4日公開

2009年11月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜明け前

第二部下

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 島崎藤村

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>